

SD

9705 | Space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第392号 1997年5月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

アフラ+トビア・スカルパと 「ベネトン」

Afra and Tobia Scarpa and BENETTON

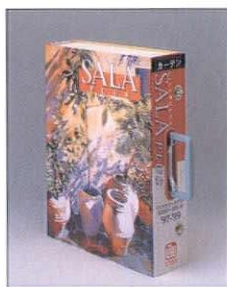
都市ピサとカルマッシの仕事
Pisa and the Works of Carmassi



サーラプラス '97-'99

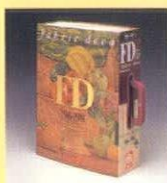
SALA PLUS
新発売

- サーラ……3,000円/㎡までの商品
- エクセ……5,200円/㎡までの商品

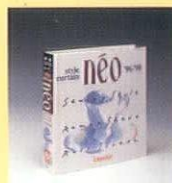


色に、柄に、素材に、時代をビビッドに映す
リリカラのカーテンコレクション“サーラ”。
インテリアの多様化、高級化にいち早くお応えするために、
今回、従来よりもワンランク上の
上質なクラス“エクセ”を加え、
見本帳を“SALA”から“SALA PLUS”にバージョンアップ。
クオリティとボリュームの両面からいっそうの充実を図りました。

リリカラ
カーテン見本帳
ラインナップ



カーテン総合
ファブリックデコ



スタイルカーテン
ネオ



コントラクト
カーテン Vol.5

新インテリアイズムを創造する

リリカラ

本社：〒160東京都新宿区西新宿7-5-20 Tel.03-3366-7865

OSAKI 

集中管理 だけじゃ物足りない。

かゆいところに手が届く、ビル管理システム

OSMAC-mini

中央監視装置オスマック・ミニ

いまやビルは集中管理の時代。照明や空調も定時にON、OFF。無駄な手間も経費もかけず、ビルを一括して制御できるようになりました。しかしビルの機能は様々。テナントや企業、そこで働く人の事情も多様化しています。OSAKIは、ビル設備の制御を画一的ではなく、ビルの利用者一人ひとりのニーズに対応できるものであるべきだと考えています。中央監視装置OSMAC-miniは従来の設備機器のスケジュール運転に加え、各テナントからのコントロールで、スケジュール時間外の運転を可能にし、各テナントごとに料金算出のためのデータを集計できるシステム。ビルをもっと生き生きと活動させるための、隅々にまで神経が行き届いた管理を実現します。



特 長

- 基本スケジュール運転の他に各テナントから時間外操作が可能。
- 時間外運転時間は各テナント単位に積算され、1ヶ月毎に料金管理データとして印字。
- 登録された機器の運転時間を積算し、表示・記録。
- 全全停点数に対してスケジュールを任意に設定、年間の休日指定も可能。
- 全全停点数最大48点、負荷監視点数最大96点と豊富な管理点数。
- 故障および警報信号を外部に取り出せるので、無人管理が可能。
- 設定操作は画面との対話設定メニュー方式で、使い易いシステム。
- 筐内のケーブルレス化により小形・軽量・低価格。

主な仕様

- 定格電圧/100V±10% ●定格周波数/50Hz、60Hz共用 ●管理点数/運転監視入力…48点(増設タイプ96点)、故障・警報監視入力…48点(増設タイプ96点)、テナント操作入力…20点、発停制御出力…48点、警報移報出力(電力)…4点、警報移報出力(一般)…8点 ●表示/5×7ドット モノグリーン蛍光表示管 40字×4行、運転時間表示、時間外運転時間表示、カレンダー表示、当日プログラム表示、システムテーブル内容表示 ●設定操作部/シートフラットキー、蛍光表示管との対話方式 ●記録/停電記録、状態変化記録、故障・警報記録、日変わり記録、時間外運転記録(日報、月報)、個別発停操作記録、運転時間記録、カレンダー設定変更記録 ●停電補償/240時間 ●外形寸法/壁掛形48点タイプ…600(W)×1100(H)×230(D)mm、壁掛形96点タイプ…600(W)×1350(H)×230(D)mm、自立形…600(W)×2000(H)×400(D)mm

大崎電気工業株式会社

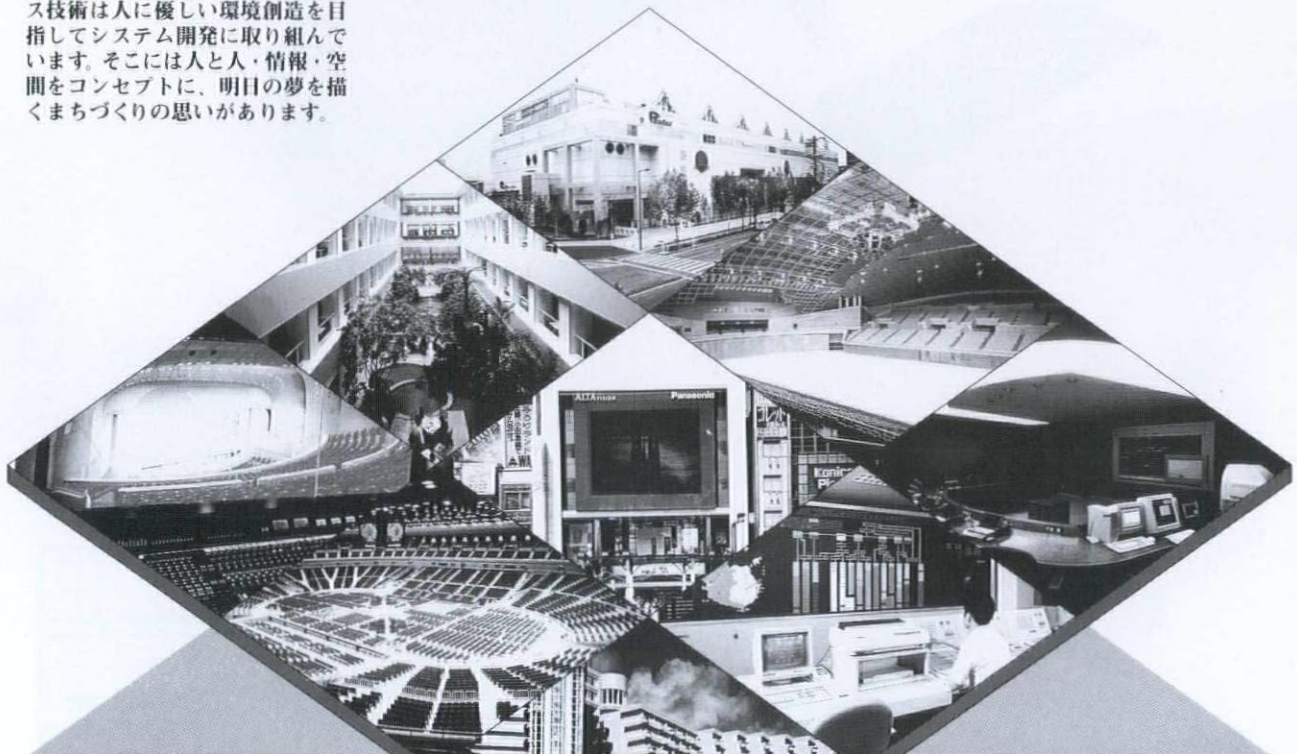
本社/〒141 東京都品川区東五反田2-2-7
システム機器営業部第2課 ☎03(3443)7176

大阪支店 ☎06(373)2556 仙台営業所 ☎022(223)3747 千葉営業所 ☎043(221)5714
札幌営業所 ☎011(251)6622 広島営業所 ☎082(243)1611 沖縄営業所 ☎098(832)7406

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター

空調設備事業 空調、換気、消火設備

電気設備事業 中央監視設備、受配電、

水回り設備事業 水回り設備等の

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

の提案、設計、施工、メンテナンス

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めています。



松下電器産業株式会社

建設システム営業本部 ☎03-5500-7504

北海道支店 ☎011-207-7722

東北支店 ☎022-711-3551

新潟支店 ☎025-246-1031

関東支店 ☎0286-37-2241

神奈川支店 ☎045-651-5051

建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010

長野支店 ☎0262-26-3990

北陸支店 ☎0762-23-1121

静岡支店 ☎054-247-5155

建設システム営業本部関西支店 ☎06-949-2111

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0878-26-1711

九州支店 ☎092-431-1100

沖縄支店 ☎098-869-2926

AV & CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

日本アス仕様

それぞれの味を生かし

防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ベストロン

NS防水

カナート



総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 ■103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京	☎03(5644)7221 (代表)	福岡	☎092(451)1095 (代表)
千葉	☎043(227)9971 (代表)	札幌	☎011(281)6328 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	仙台	☎022(263)0315 (代表)
大阪	☎048(642)5811 (代表)	広島	☎082(294)6006 (代表)
名古屋	☎06 (533)3191 (代表)	高松	☎0878(34)0336 (代表)
	☎052(933)4761 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)



広告についてのお問合せの際は<SDを見て>と御明記願います

SとLを兼ねたMです。

大きなアリーナ。いいですねえ。夢がありますよね。世界大会、大コンサート、何万人もの観衆、沸き上がる歓声…。大空間はやっぱり建築の醍醐味です。でも、最近、空間の巨大さが気になることが、ときどきあるんですよね。というのは、大きな空間になればなるほど、「本来の目的」以外の使い方が、必ず増えてくることははっきりしてきたからなんです。（プロ野球の本拠地になっているところでさえ、ほかの目的で利用される回数の方が圧倒的に多いそうです。）ところが、いままでのやり方だと、たとえばアリーナ全面を使う必要のない場合でも、無理して全面使ってしまったら、あるいは仮設スタンドを入れても、実は天井から跳ね返ってくる音のことを我慢していたり。人が気持ち良く過ごすことを目指した場所で、結果としてまずその気持ち良さが犠牲にされている。おかしいことだと思いませんか。

長野に世界一のスピードスケートリンクをつくろう、ということになったときは、だから、大イベントだけでなく、他の目的で空間を小さく使うこともほんとに真剣に考えたらどうなるか、初めてやってみたいと思ったわけです。全世界に向け、日本をアピールできる大空間であることと、その後何十年も何百年にも渡り、少しでも多くの地元の方に気持ち良く使っていただけることの両立…。いわば、ほんとの意味で「大は小を兼ねる」といったところでしょうか。

この建物の愛称『M wave（エムウェーブ）』の由来になっている、ドームとは逆に真ん中の下がった「木造吊り屋根構造」は、そんなわけで、「前代未聞の形」とか「日本らしさ」とかそういうこと以上に、アリーナの大きさをいろいろ変えても、気持ちいい空間規模をつくれることが狙いなんです。スタンドだけでなく、照明も音響も含めた全体を可変式にしたのも同じ意図です。その結果、アメフトとママさんバレーが、一流の大コンサートと一流の小コンサートが、じっさい両方できるようになりました。（もちろん、この空間、空調がしやすいので氷の状態がベストに保てるし、木だと結露にくいのでリンクに露がたれてこないし…と、世界一のスピードスケート競技を実現するたくさんのメリットが集約されているのは、いうまでもありません。ご心配なく。）

ところで、いろいろな仕事で、このようにいろいろな疑問にぶつかり、答えを探していくうち、わたしたちは、こんな考えを持つようになりました。「技術やスケールだけで建築を語る時代は、そろそろ終わりにしよう」。どんなにすごい建物でも、できただけでは、まだ未完成。これからの建築は、そこで人間が様々なドラマを繰り広げて、初めて完成したというべきなんじゃないかな。そう思うんです。

以上、わたしたち鹿島は、そんな視点で、新しい仕事に取り組んでいることを、ここにご報告いたします。

ある日、
その発想に
人は集まる。

い 鹿島

〒107東京都港区元赤坂1-2-7 tel.03-3404-3311（代表）
http://www.kajima.co.jp

四季会宴

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢

ホテル 鹿島/森

ホテルオークラチェーン

ご予約お問い合わせ:

ホテル鹿島/森予約係

☎03(3478)6220

現地☎0267(42)3535(代)

FAX:0267(42)5335



Classical Elegance in Tokyo

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、あなたの新しい物語がはじまります。

■ モダンを楽しみ、ヨーロッパを想う ■

東京都現代美術館宿泊プラン

■ 期間 1998年3月31日まで

※ただし12月28日～1月4日を除く※美術館の休館日は、毎週月曜日(祝日の場合は翌日)となっております。

ホテルから東京都現代美術館へ、徒歩10分。現代美術をゆったりと楽しみホテルで優雅に憩う、そんな心の贅沢を十分に満喫できるプランです。

お一人様料金

1室1名様利用(シングル).....	¥16,500
1室2名様利用(ツイン).....	¥13,000
1室3名様利用(トリプル).....	¥11,500

※一泊朝食付・美術館入場券(常設展)・お土産・サービス料込み、税別。



株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3 TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

大興物産の海外建材シリーズ

No.5 ツーバイフォー



新検見川マンション販売事務所

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネートを行います。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。

〒107 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL03-5474-6054 FAX03-5474-6386

建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

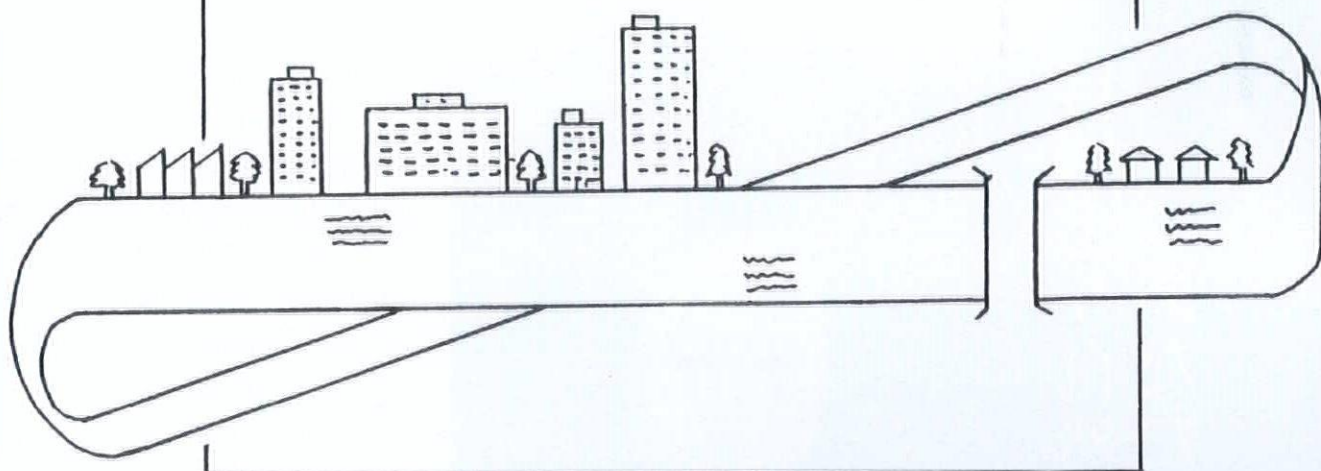
本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

水環境を

クリエイトする



株式会社
西原
衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18
TEL.(03) 3452-7441 大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋

建築設備の一役を担う

電気設備工事

最新の技術と信頼される施工



大栄電気株式会社

代表取締役社長 伊藤 赳

本社 東京都中央区銀座3-7-10 TEL 03(3562)0311(大代表)

支店営業所 大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、
浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

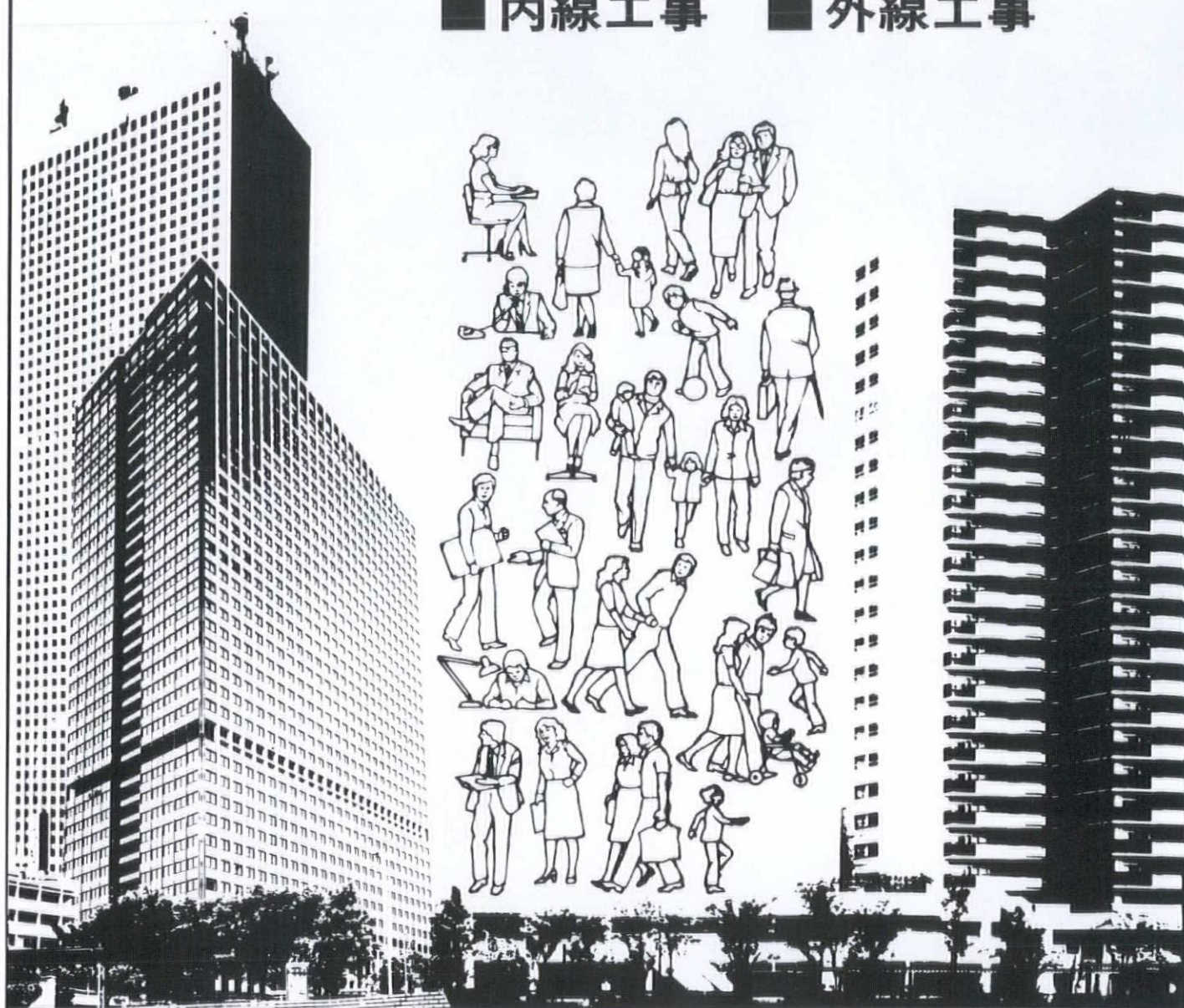
いつもあなたのそばに、ダイダンは。

Always With You.



技術と伝統の…

■ 内線工事 ■ 外線工事



東光電気工事株式会社

取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1 - 4 - 5 千101 電話/東京 3292-2111

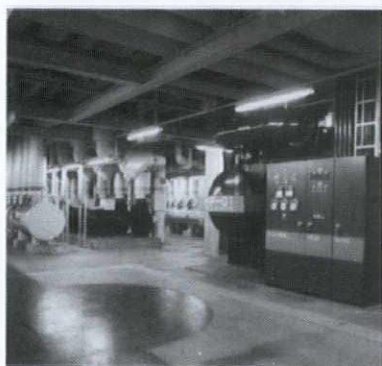
支社所在地/札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

KANDENKO



快適な環境をお届けするのも ——関電工の技術です。

個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…
…人々の営みの場で、いま求められているのが、
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快
適な環境の場をお届けしています。

関電工

お問い合わせは/環境設備部

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎:NTT 03(5476)2111 TNet (4431)2111

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13

電話 03-5561-2111(代)

振替 00160-2-180883

Home Page Address: http://www.kajima.co.jp/kajima_mail/publish/index.htm

年間定期購読料

25,000円(特別定価号十消費税、送料込み)

SDバックナンバー常備店

[東京]

八重洲ブックセンター

03-3281-8203

三省堂本店(神田)

03-3233-3314

書泉ブックマート

03-3294-0011

紀伊国屋本店 03-3354-0131

大盛堂書店 03-3463-0511

[大阪]

旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167

[札幌]

旭屋書店 011-241-3007

[横浜]

有隣堂本店 045-261-1231

[京都]

大隆堂書店 075-231-3036

[大学生協内書店]

東北工業大学 東京工業大学

法政大学工学部 早稲田大学理

工学部 関東学院大学

9505 メガ・アーキテクチャ

1988円

巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作紹介。シャル・ド・ゴール空港、TGV-REX駅、他。対談：安藤忠雄+P.アンドルー。
[神戸外国人居留地の形成とその展開] 文+構成：坂本龍比古

9506 デジタル・アーキテクチャの可能性

1988円

インタビュー：原広司、伊東豊雄、N.M.ディナーリ、他。CAD研究室将来の可能性：笠田研究室、両角・位寄研究室、他。[自然と共存する家具] 写真：浅川敏

9507 柳澤孝彦／美術館の空間とディテール

2752円

作品：東京都現代美術館、富岡市立美術館、郡山市立美術館、他。文：鈴木博之、内藤廣、青木淳、大野秀敏。座談会：宇佐美主司+柏木博+柳澤孝彦。写真：村井修

9508 まちのパブリックスペース

1988円

人々の日常生活と密着した公共施設である交番・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリエ作家の近作からみる。作品21点。文：中川理、仙田満。オンライン座談会：青木淳+中川理+花田佳明

9509 丹下健三

3673円

最新作シンガポールの超高層ビル(UOBプラザ)、新宿の新たなスカイラインを構成する(新宿パークタワー)を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。

9510 環境に呼応する建築：シーザー・ペリの最新作

1988円

近年、海外での活躍が目立つペリの最新作を紹介。[ランドマーク・グラフィティ——「タワー・アート in 通天閣」：ヴァナキュラーな電脳都市展」より]

9511 長谷川逸子：1985-95

3059円

過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介。作品：山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館他、全30作品。論文：ピーター・クック、他。対談：多木浩二×長谷川逸子

9512 SDレビュー1995

1988円

第14回SDレビュー誌上発表。由田徹、岡本美穂、李維男、トム・ヘネガン・アーキテクチャ・ファクトリー [Villa Romana: ローマのヴィラと庭園] [水戸岡鋭治のトランスポート・デザイン]

9601 都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践

2854円

地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス

9602 建築のメモリア：イタリアの合理主義の流れ

1988円

イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネステローリ、フランコ・ステラ、他。

9603 ベトナム建築大博覧

2548円

ベトナムの都市と建築：ハノイ、フエ、ホイアン、チャンバ遺跡、ホーチミン。ベトナムの工業団地、ベトナム現代建築事情、他。文：重枝豊、中沢信一郎、村松伸、他

9604 大地と光の変様 オーストラリア建築1788-1988円

1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。[ネクストジェネレーション in New York: スミスマニラ+ホーキンソンとジョエル・サンダース]



9605

多様性と調和の建築

ゲルカン+マルクの最新作

コンペの秀作で知られる大規模設計事務所の'90年代の新作を紹介。
[海と建築——鈴木了二の最新作]
物質試行：佐木島プロジェクト、佐木島の住宅

1988円



9606

建築家の椅子111脚

19世紀後半から現在に至るまでの建築家がデザインした椅子を111脚紹介。C.R. マッキントッシュ、A. ガウディ、Q. ワグナー、ル・コルビュジエ、M. van D. ローエ、C. イームズ、A. ロッシ、他

3059円



9607

再考 建築家土浦亀城

戦前、戦後の作品を紹介しながら、昭和初期モダニズムにおける土浦の再評価を試みる。作品：土浦邸(第1、2) [スタジオ建築計画の集住考] 最新作 FH-HOYA-IIを取りあげながら彼らの設計思想を紹介

1988円



9608

マイケル・ホプキンス

「構造上の表現がクリアな」主要作品を紹介。ホプキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、ブラッケン・ハウス、他 [光と空間の夢を訪ねて：ドナルド・ジャッドとウォルター・デ・マリア] 文：南條史生

2447円



9609

デンマーク・モダンハウスの最盛期

デンマークの50-60年代の住宅を紹介。キンゴー・ハウス、ヨーン・ウッブゾン、他 [山上の都市と塔の家——イエメン：都市と住居の形態学] 文+写真：齊川研究室

1988円



9610

中世の光と空間：フランス中南部のロマネスク建築

ル・トロネ修道院、他。写真：堀内広治、文：羽生修二、他 [ふたつの都市考(近代都市と芸術展)「未来都市の考古学展」] [97の椅子プロジェクト]

1988円



9611

栗生明

彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎市美術館、植村直巳冒険館、カーニバル・ショーケース、他。[田窪義治のサン・ヴィゴール・ミューリ祥雲プロジェクト3]

2548円



9612

SDレビュー1996

第15回SDレビュー誌上発表。ユスト・スビザール+パートナーズ(Pysall Ruge Architekten)、高橋昌巳(シティ環境建築設計)、城戸崎和佳建築設計事務所 [伊丹潤の近作より：石影の教会、木の教会、土の教会]

1988円



9701

葉 祥栄：カリステニクス

柔らかい建築のための12の柔軟体操
キーワード「柔軟体操」をもとに12のカテゴリーに分けて、全主要作品を紹介。老人保健施設サンダイヤル、他。

3059円



9702

木を生かした架構と空間

木の性質を生かした国内外の25例を紹介。金山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝川口徹、今川憲英 [アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議より] アジアの都市・建築の現在、未来を問う。

1988円



9703

ミニマル・スペース・アーキテクチャ

ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ボーソン、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他 [東京国際フォーラム] 写真＝堀内広治

1988円



9704

拡張するデジタル・デザイン

コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を造り出すプロジェクトを紹介。文＝田島剛行、山口重之、桂 英史、マイケル・ベネディクト、藤村正樹、久保田晃弘、坂村健、奥出直人、両角光男、他

3059円

SDレビュー1997

第16回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 1997

The 16th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

[主催]

鹿島出版会SD編集部

[審査員]

香山壽夫（建築家）

渡辺邦夫（構造家）

岸 和郎（建築家、京都工芸繊維大学助教授）

團 紀彦（建築家）

[応募の受付]

開始 1997年6月24日（火）

締切 1997年7月1日（火）

[SDレビュー1997入選展]

東京展

期間：1997年9月10日—9月21日（予定）

会場：東京都渋谷区猿楽町18—8代官山ヒルサイドテラスF棟 ヒルサイドフォーラム

大阪展

期間：1996年9月26日—10月2日（予定）

会場：大阪府南河内郡河南町東山 大阪芸術大学芸術情報センター

●詳細はp.62をご覧ください

5 特集 アフラ+トビア・スカルパと 「ベネトン」 編集・取材協力=豊田博之					
22 カーザ・ベネトン		24 バラツェット・ カラジョーレの改修	26 ヴィラ・リアの改修	31 生産地域 「超自動化倉庫」	36 生産地域 「毛織物工場」
48 ベネトン ショップコンセプト		49 ユナイテッド・カラース・ オブ・ベネトン、ロンドン	52 ユナイテッド・カラース・ オブ・ベネトン、東京	53 マイ・マーケット	53 メルチェリア
56 012、東京		57 012 (ファーストバージョン)	57 012 (セカンドバージョン)	58 ジーンズ・ウエスト	58 トマト
65 都市ピサと マッシモ・カルマッシの仕事			66 記憶と現代建築 マッシモ・カルマッシ 監=黒田泰介	68 歴史的都市ピサの 近代化に挑戦した男 野口昌夫	70 ピサの都市形成史と 歴史的建築 黒田泰介
73 サン・ミケーレ・イン・ ボルゴ地区の再生計画		76 サン・ビエトロ・ア・ グラードの公共墓地 拡張計画	78 チザネッロの集合住宅	80 ヴェルディ劇場の レストアウロ	82 ムーティ邸
86 ヴィルゴ計画					84 ビエロッティ邸
62 SDレビュー1997 募集要項					
92 ニュース： クレーン再生電話ボックス 岡河 貢					
94 連載：apple tomology COLOR MAGIC CUBE 戸村 浩					
97 連載：サイバートーク トムの時空形象学 20 5. SOHOワールドのメガインパクト 馬場正尊					
101 隔月連載：ポーランドのアヴァンギャルド 1 ハンスベルツィヒの工場建築/長谷川 章 構成= 長谷川 章					
109 ニュース： 第2回リビングデザイン賞「自分で組み立てられる家」グランプリ案：「TUBE-HOUSE」					
110 書評					
112 新刊紹介					
112 お知らせ					
113 海外建築情報リミック ス：12 Architects 5. アーキグラム					

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
山田良 大野由美
飯塚りえ 高森和志
制作協力：久世健
アドバイザー：伊藤公文

発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page：
http://www.kajima.co.jp/kajima_mall/publish/index.htm

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
東田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円
[本体1,905円]

年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料+消費税込み

表紙：
生産地域「毛織物工場」
表紙デザイン：小原均

5 Special Feature:

Afra and Tobia Scarpa, and BENETTON

Editing/ Research: Hiroyuki Toyoda

28
Interview with
Tobia Scarpa

30
Questions and Answers:
President
Luciano Benetton

47
The Patrons of
Contemporary
Architects
Hiroyuki Toyoda

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

6
Knitting Factory and
Office Building

8
Repair of the Villa Minelli
Headquarters and
Restoration of
Grain Warehouse

12
Knitting Factory and
the Extension and
Remodeling of the
Office Building due to
Changes in Its Usage

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page :
http://www.kajima.co.jp/kajima_mail/publish/index.htm

22
Casa Benetton

24
Restoration of
Palazzetto Calaggiore

26
Restoration of Villa Lia

31
Production Area,
"Super-automated
Warehouse"

36
Production Area,
"Textile Factory"

40
Production Area,
"Jeans and Coat Factory"

Printed in Japan
This Copy: ¥ 2,000
¥ 30,000 a year
¥ 50,000 two years

Order Form: Page 124

Cover: Production Area,
"Textile Factory"

Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

48
Concept of
Benetton Shop

49
United Colors of
Benetton, London

52
United Colors of
Benetton, Tokyo

53
My Market

53
Merceria

54
Sisley

56
012, Tokyo

57
012 (First version)

57
012 (Second version)

58
Jean's West

58
Tomato

59
TipTap

65 Pisa and the Works of Massimo Carmassi

66
Memory and
Contemporary
Architecture
Massimo Carmassi
Translation by David Mount

68
The Modernization
Challenge in
Historical Pisa
Masao Noguchi

70
The Dialogue Between
Past and Present in
Italian Urban
Development
Taisuke Kuroda

87
The Emergence of
the City of Pisa and
Historical Architecture
Hidenobu Jinnai

73
Reconstruction of
San Michele in Borgo

76
Addition to the cemetery
of San Piero a Grado

78
Housing Project
at Cisanello

80
Restoration of the
Teatro G. Verdi

82
Casa Muti

84
Casa Pierotti

86
VIRGO project

62
Guidelines for Entrants:
SD Review 1997

92
News:
Crane Remodeled As a Telephone Booth

Mitsugu Okagawa

94
Series:
apple tomology 20
COLOR MAGIC CUBE

Hiroshi Tomura

97
Cybertalk: Reports from the Frontiers of Electronic Media
5. The Mega-Impact of SOHO World: The Parallel World of SOHO Harajuku

Masataka Baba

101
Bimonthly series:
Poland's Avant Garde 1
Hans Poelzig Factory Architecture / Akira Hasegawa
Bruno Taut's Garden City Dream / Manfred Speidel

Presentation by
Akira Hasegawa

109
News:
The 2nd Living Design Prize: "The Assemble-Yourself House" First Prize: Tube House
Book Review

112
Book Information

112
Announcements

113
Eminent Works Abroad: 12 Architects
5. Archigram

特集

アフラ+トビア・スカルパと「ベネトン」

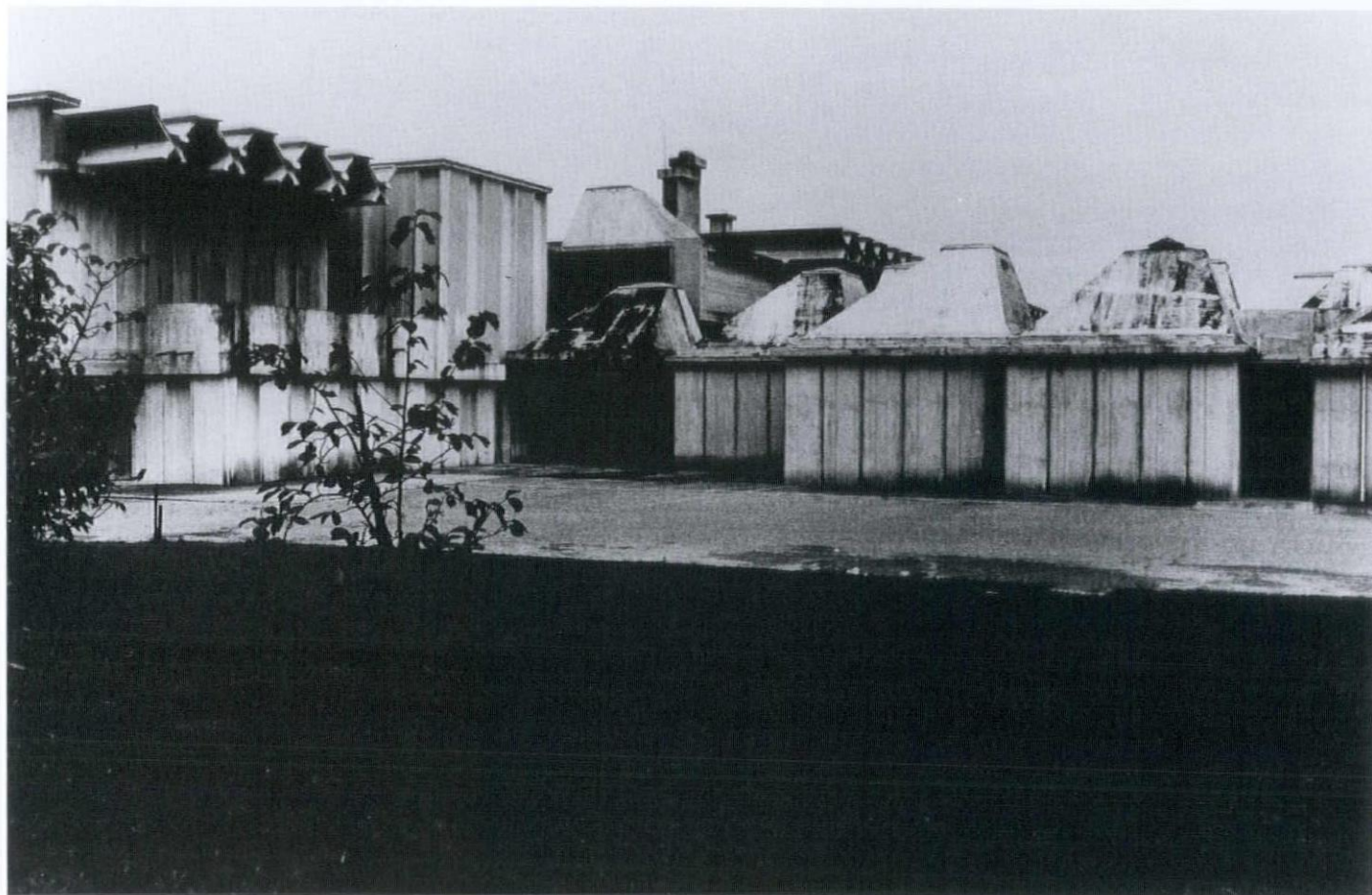


Special Feature

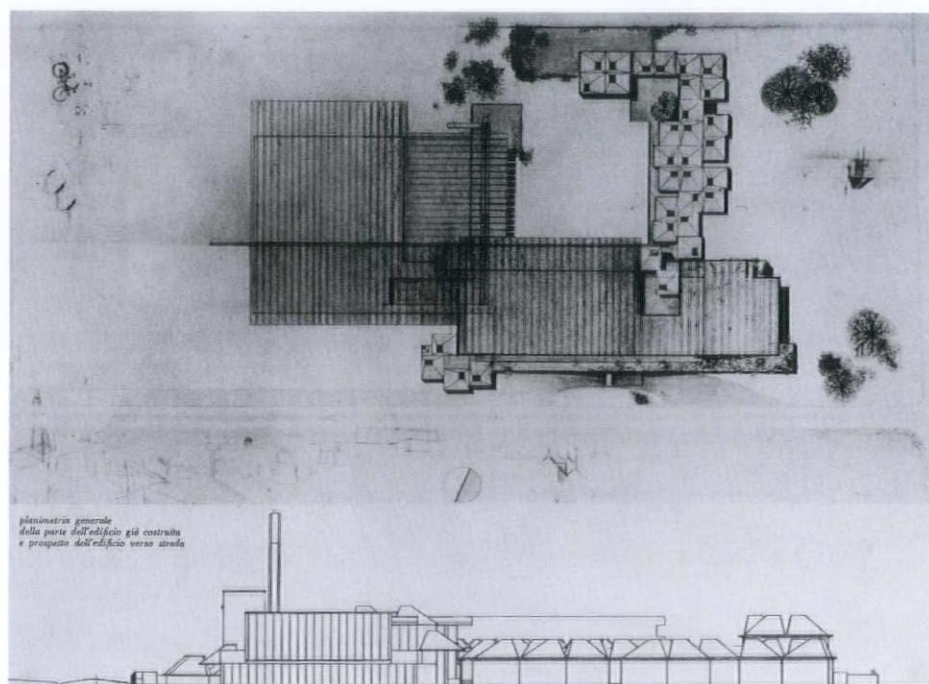
Afra and Tobia Scarpa, and BENETTON

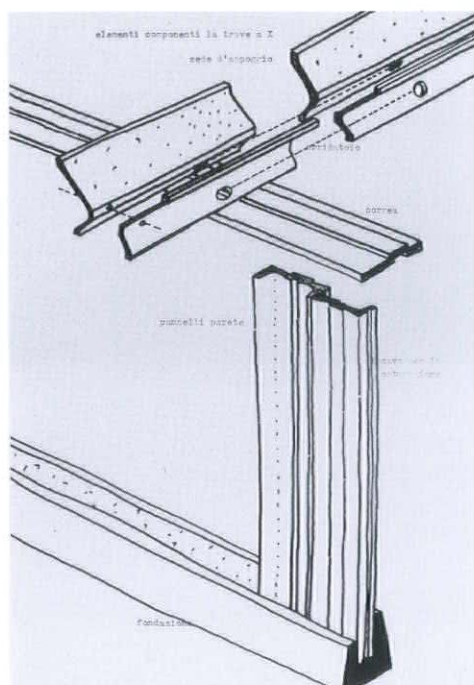
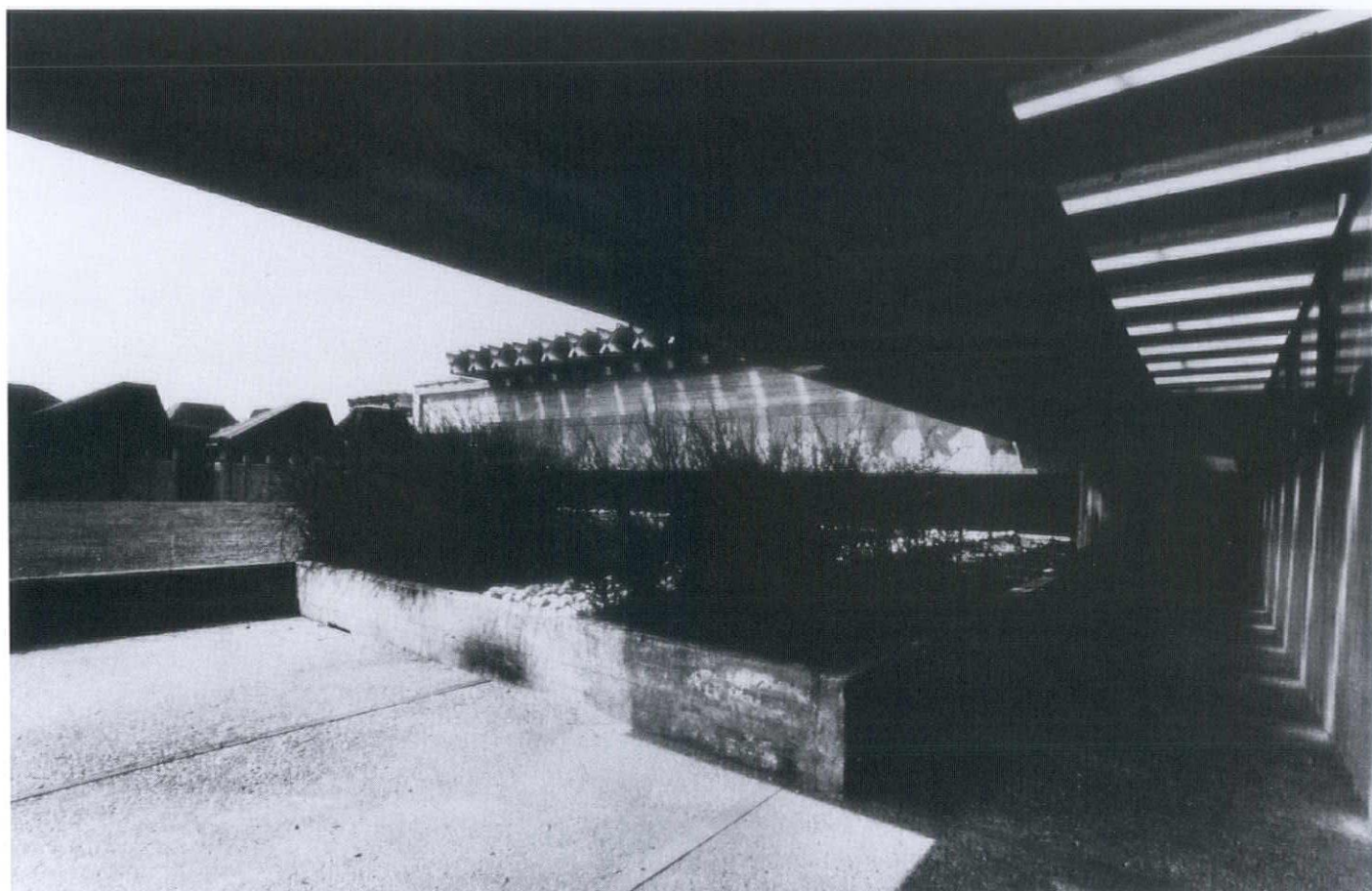
ニット工場および、オフィス社屋

Knitting Factory and Office Building
Ponzano (Treviso, Italy), 1964



この工場はふたつの建築群で構成されている。ひとつは巨大なX型のプレキャストコンクリート梁によって作りだされた、スパン24mの自由な明るい空間を持った工場。もうひとつは、ピラミッド型の先端部分を切り落とした上面部分をガラスで塞ぎトップライトとした屋根を載せた立方体の集合で構成したオフィス部分の建築群である。間には、ふたつの建築群によってできたコの字型の庭があり、働く人がどこからでも緑を眺められるようになっている。また空調設備も完備され、1960年代始めのヴェネット地方においては初めての労働環境を考慮した施設となっている。この工場は、2000年を見越して計画されていたが、工事期間中にもベネトン社は急激な成長を続け、結局竣工前にもう一棟の工場を追加することになった。この時点からベネトン社は、神話とも言える発展を遂げ、世界企業へと成長していったのである。

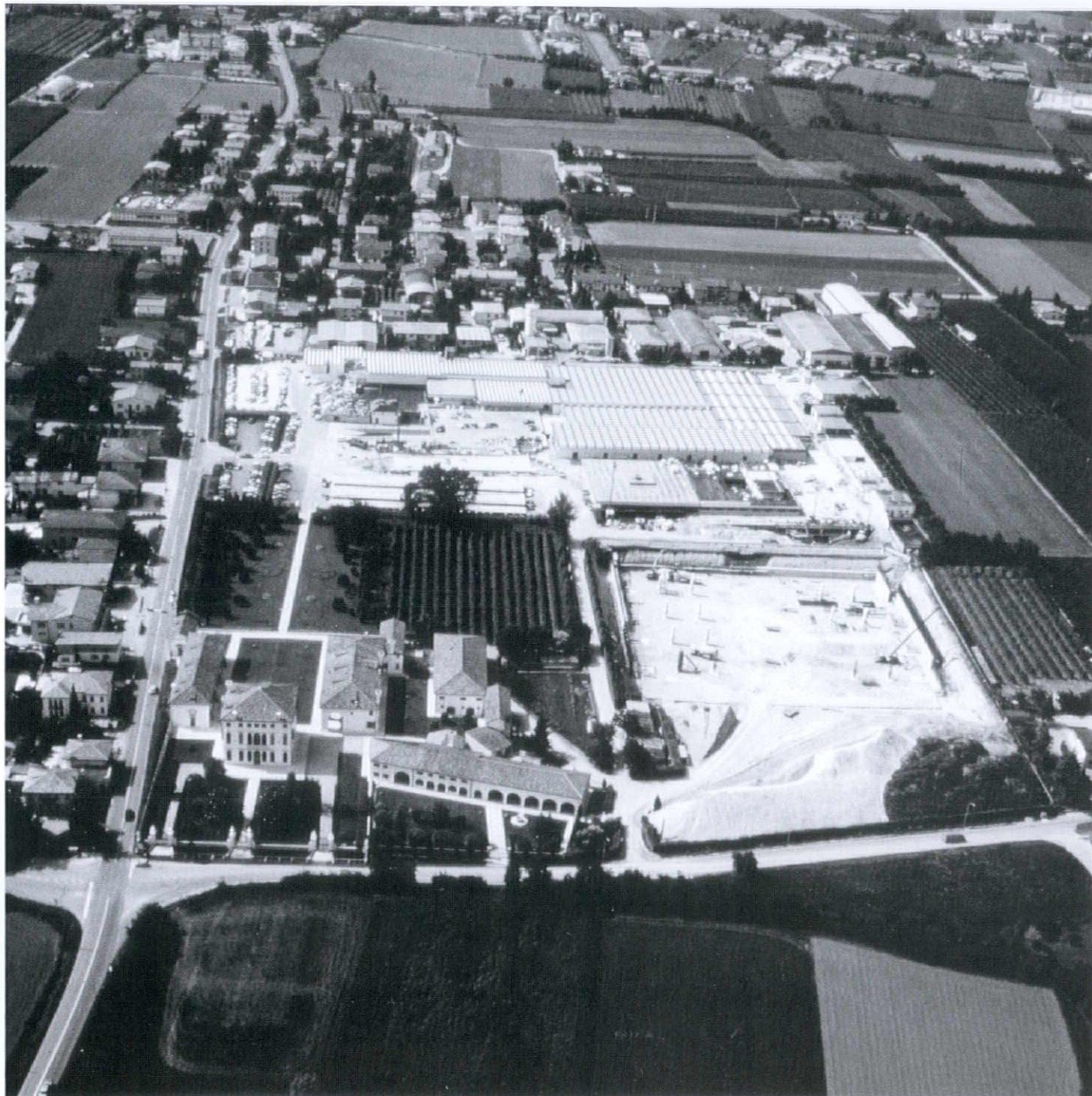




従業員の休憩室は1972年の改修の際にもそのままの形で残された

ヴィラ・ミネリ本館の修復および穀物倉庫群の改修

Repair of the Villa Minelli Headquarters and Restoration
of Grain Warehouse
Ponzano (Treviso), 1972



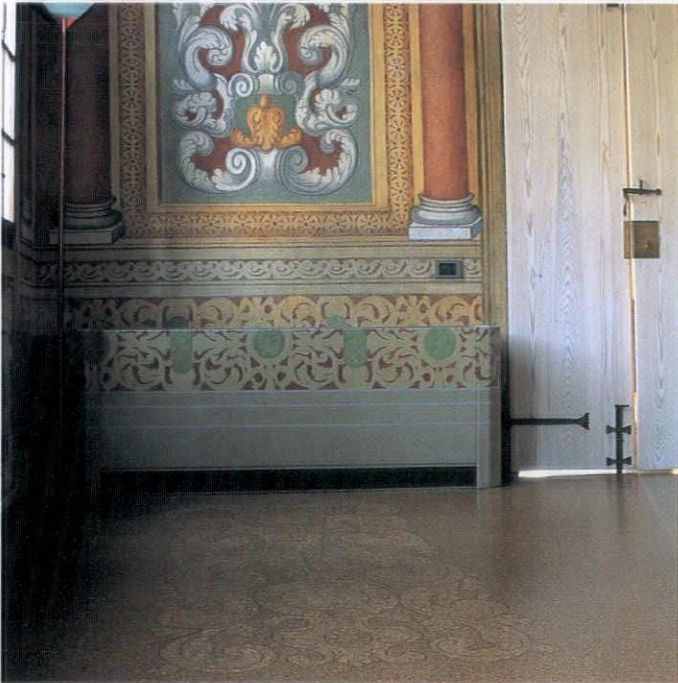
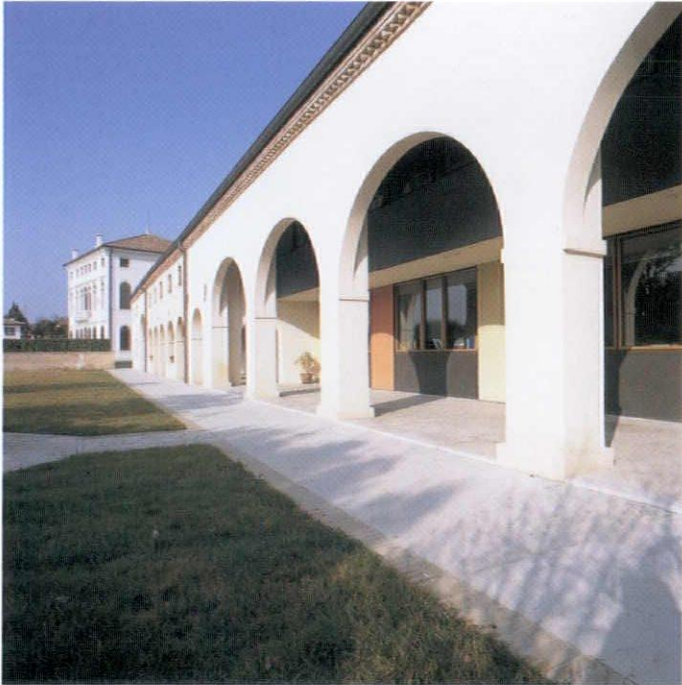
ボンツァーノの敷地全景。左下から時計回りに、本部などの置かれたヴィラ・ミネリ、広線、経理など事務系のオフィス群、デザイン試作部門、工事中の敷地は地下駐車場

17世紀、ヴェネツィア貴族、ミネリ家によって建てられたバラディオ様式の夏用のヴィラである。このヴィラ敷地内、200メートルの所にベネトン・ボンツァーノ工場がある。1969年、ベネトン社はこのヴィラに本社機能を置くことにし、修復をスカルバに依頼した。スカルバは建物の復元に努め、本館部分は17世紀当時のフレスコ画で埋め尽くされた。本館の両脇にある厩と穀物倉(バルケッサ)および使用人の舎は、管理部門、秘書部門、広報部門を設置するべく改築が行われた。

SD9705



この改修に際してトピアは周辺に池を配した



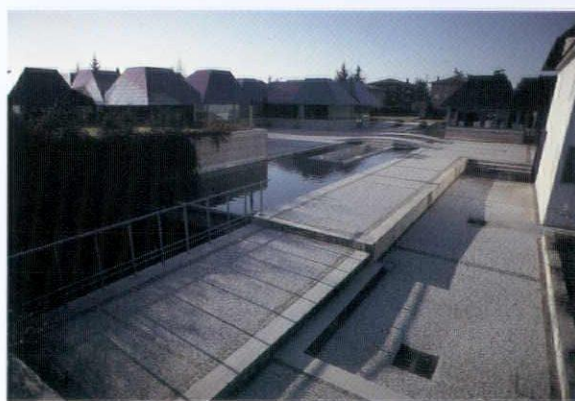
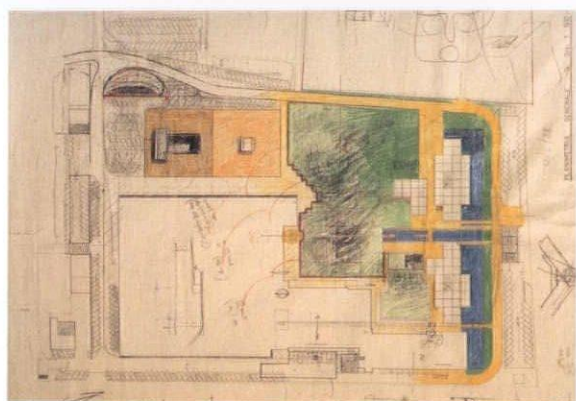


ニット工場および、オフィス社屋の用途変更のための増改築

Knitting Factory and the Extension and Remodeling
of the Office Building due to Changes in Its Usage,
Ponzano (Treviso), 1986





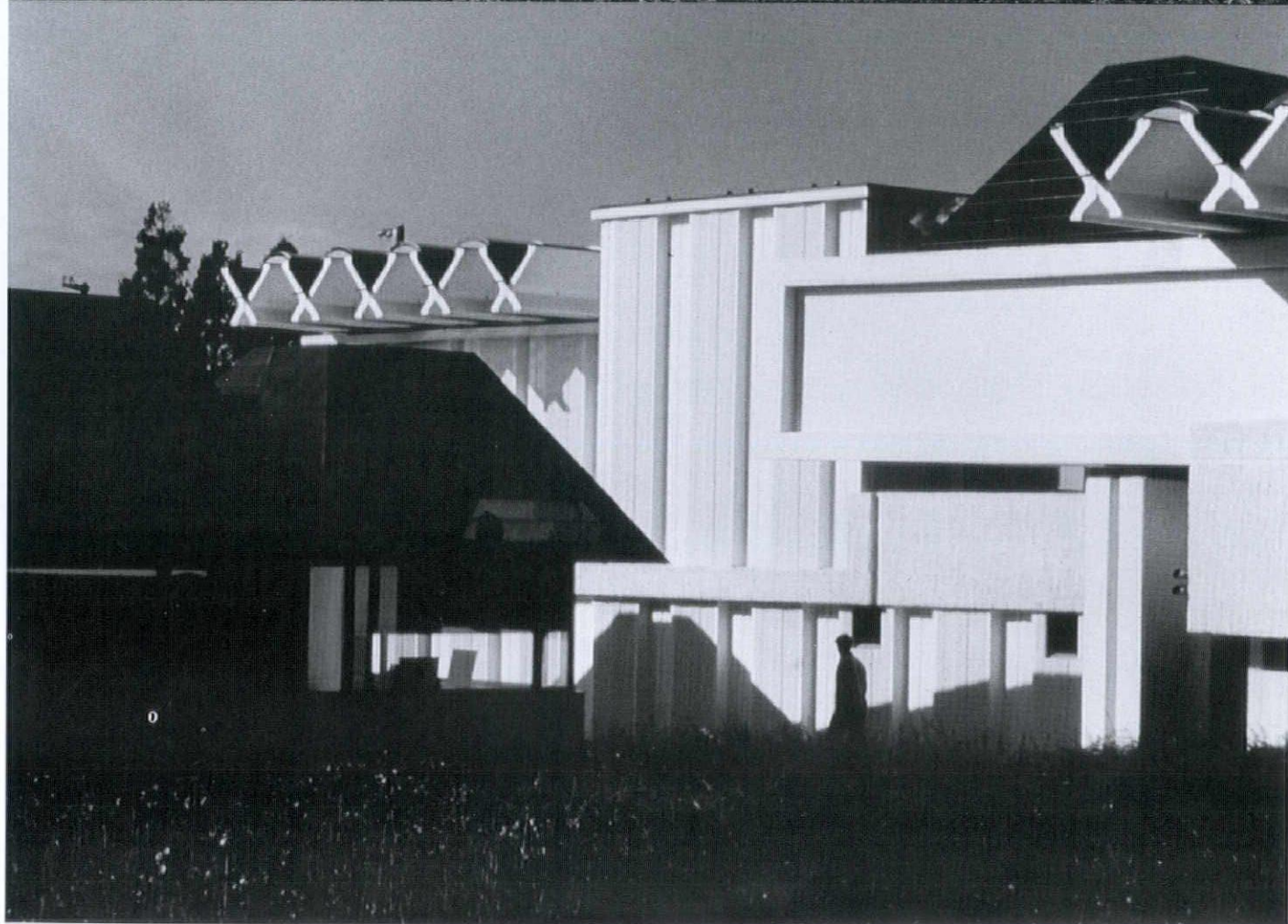


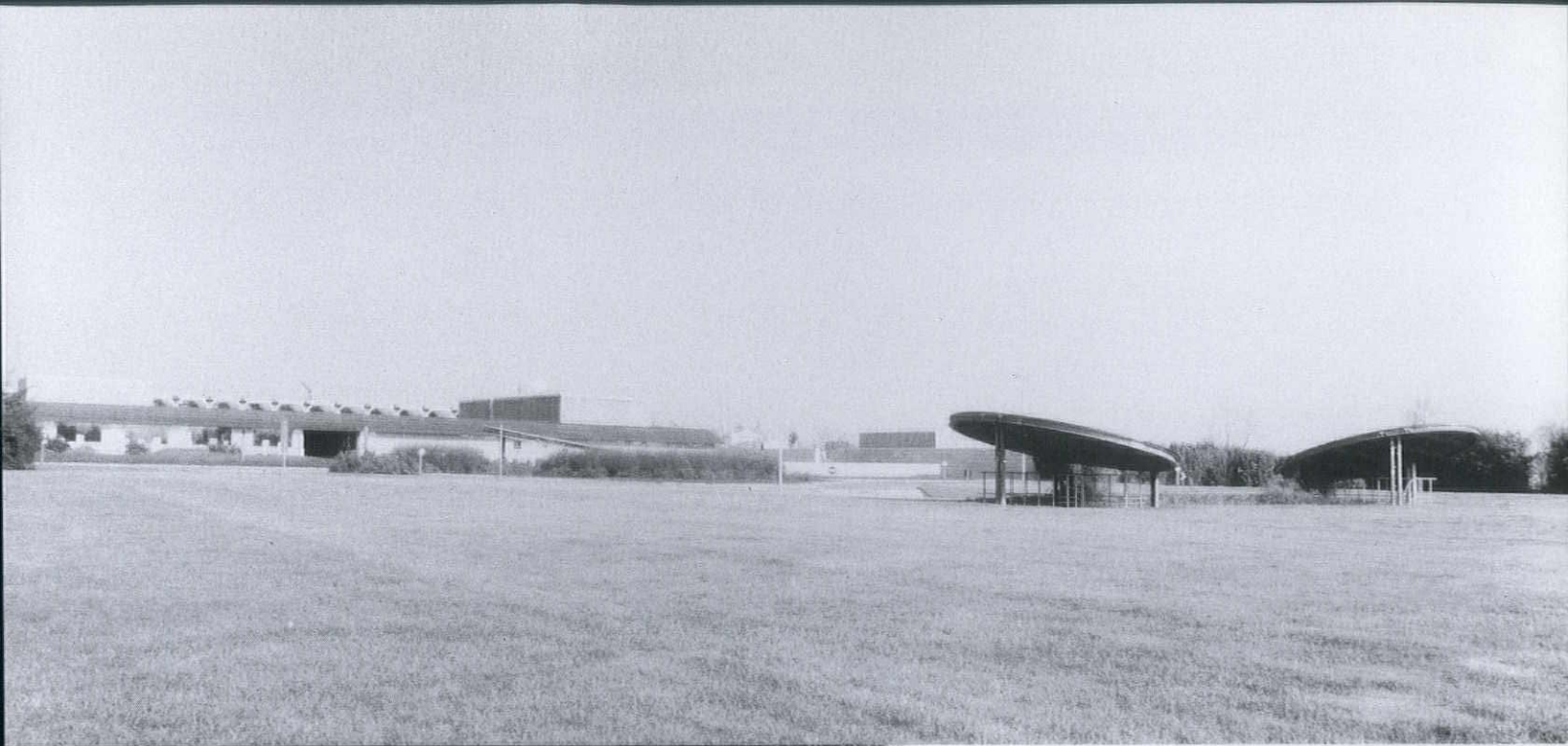


ベネトン社の急成長により、当初予定していたポンツァーノの敷地内においての施設拡張が不可能になってしまった。そのためポンツァーノ近郊のカストレッテに生産地域を移し、このポンツァーノ工場は本社、経営、デザイン・試作工場とすることになった。ピラミッド型の頂点を切り落とした屋根をもつ事務所部分を倍に増築して、その屋根は特殊電解に着色、玉虫色に輝かせた。そして、その屋根がつくる立方体の集落群

を水で囲むことで、まるでヴェネツィアのブラノ島のような風景を、ヴェネト地方の田園風景に取り込んだ。植彩についても専門家をイギリスから招いて細かな計画が成されている。また地上におけるランドスケープをなるべく自然に見せるため、600台収容の駐車場は地下に収めている。各建物の連絡は地下通路を利用する。その通路のひとつには「ベネトンショップ」のショールームが並んでいる。床下にはステージが収めら

れており、何の変哲もない通りの中央に突如ステージが迫りだし、ファッションショーを催すこともできる。まるで小さな地下都市といったところだが、この街は地下の暗闇を人工照明で照らしているだけでなく、多くの場所に自然光が取り入れられ、明るい地下都市となっている。





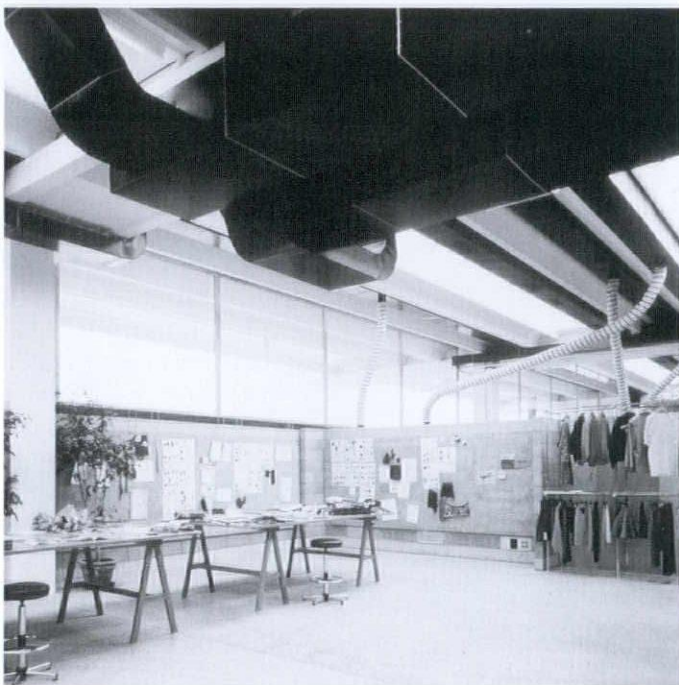




見える彫刻的なものは排気管

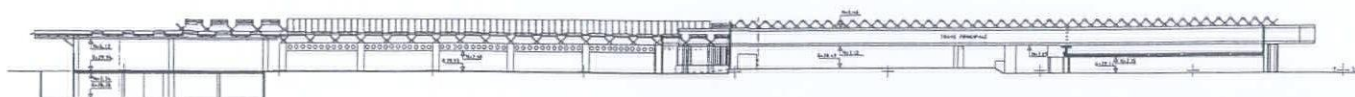


奥に見えるパイプは排気口

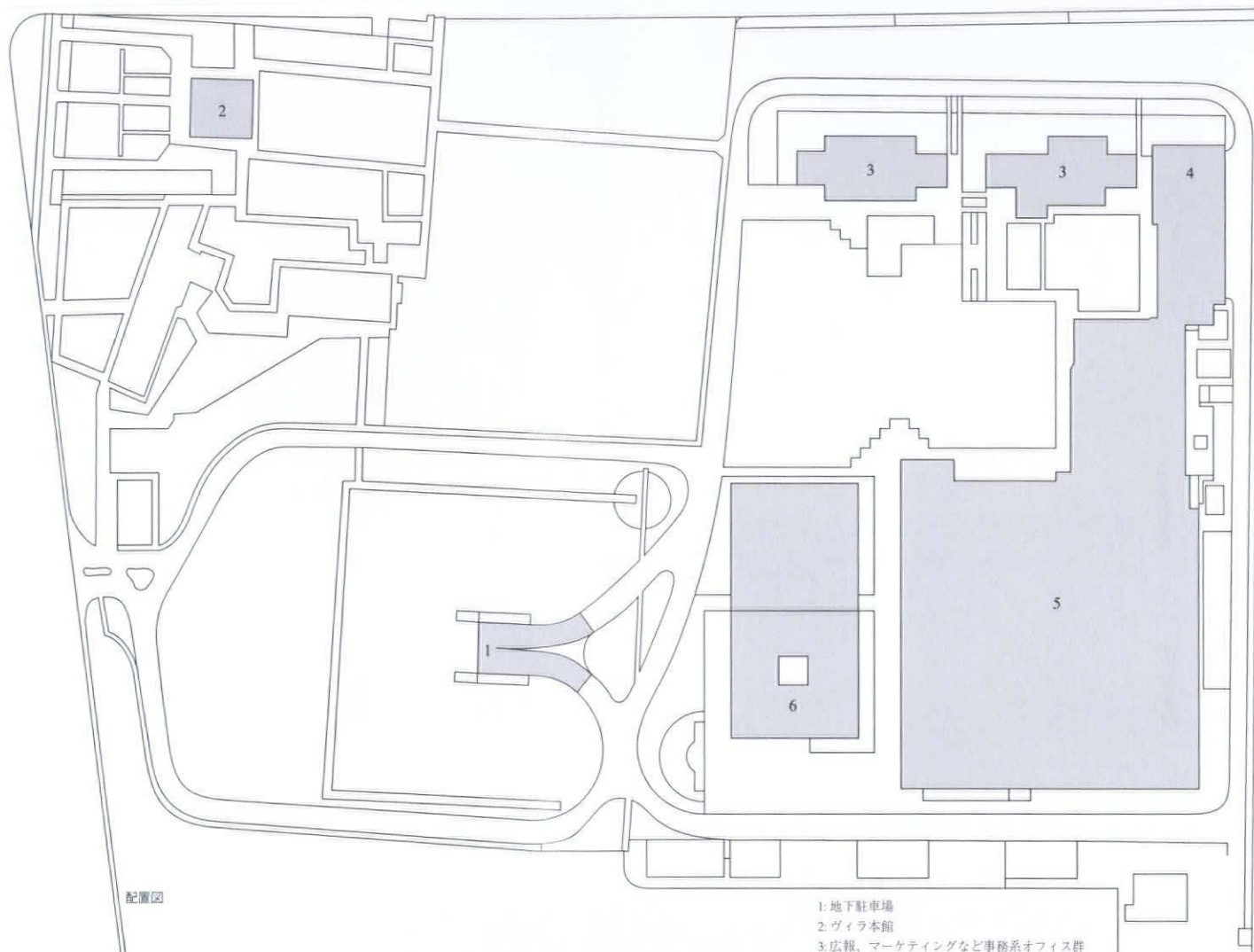




北西立面图

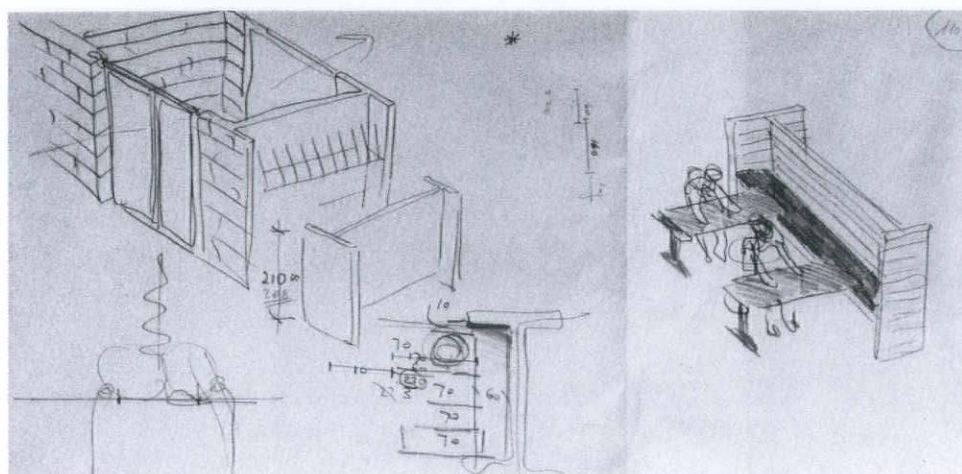


北西断面图



配置图

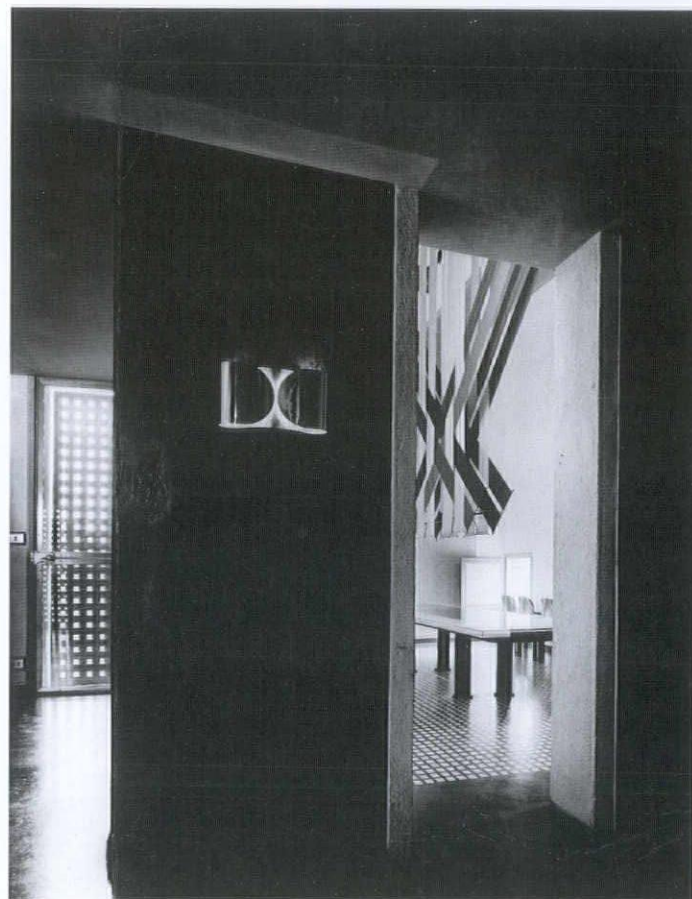
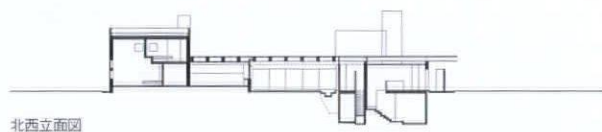
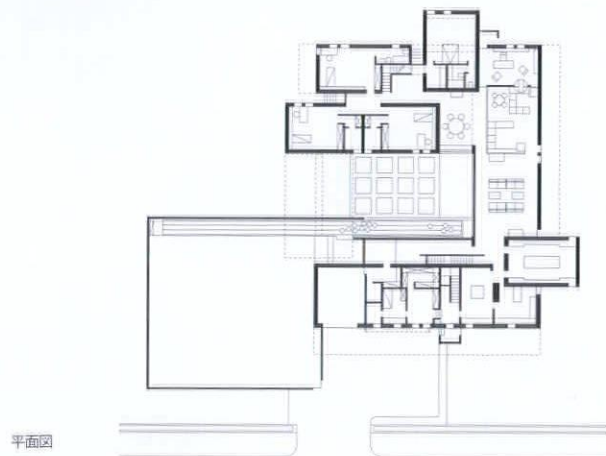
- 1: 地下駐車場
- 2: ヴィラ本館
- 3: 広報、マーケティングなど事務系オフィス群
- 4: 管理部門
- 5: コンピュータ・システム管理棟



カーザ・ベネトン

Casa Benetton,
Ponzano (Treviso), 1966

中庭に面した居間を中心に、来客用のゾーンとして玄関側に大食堂、応接室および、客室を備え、その奥に家族の部屋を配している。中庭はコの字型で、開いた部分が広い敷地へと続き、半ば開かれた空間となっている。もうひとつの庭は中庭から続く水路の軸線により結ばれてはいるが、建物と塀によって囲まれた閉ざされた空間である。水路を辿り足を踏み込むと、そこは天にのみ向かって開放された空間である。外観はいくつかの立方体が組み合わされたような形をしており、屋根は波形のプレキャストコンクリートで軒を張り出した部分とパラベットで囲み草木を植え込んだ陸屋根とから成っている。あたかも平野にさまざまな大きさの立方体を転がしたような不思議な風景をつくっている。

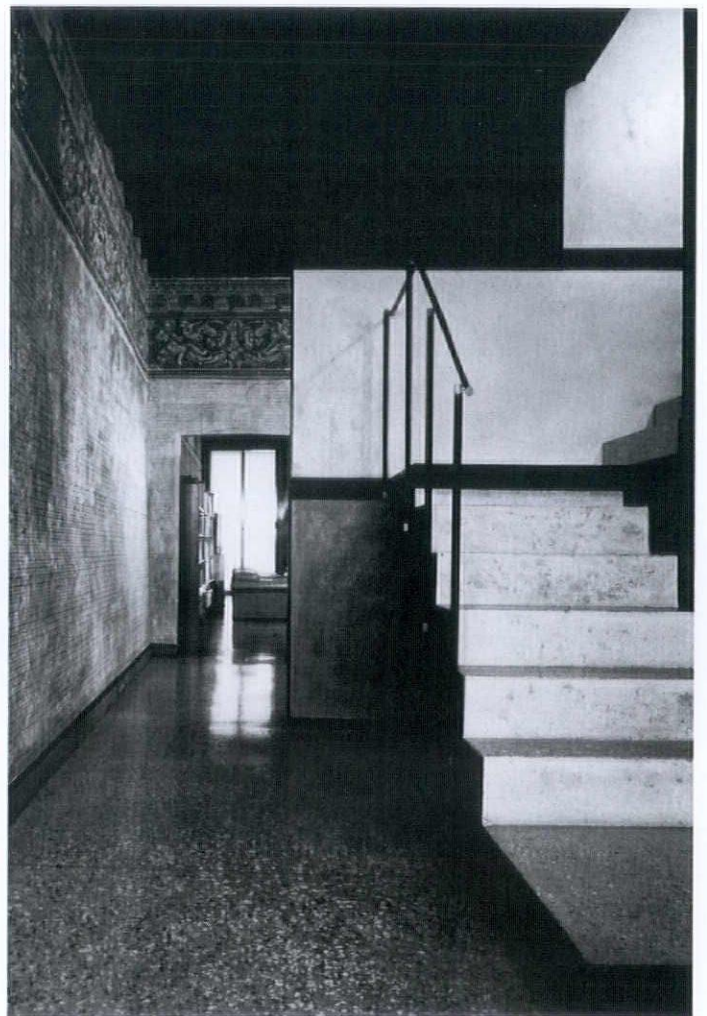
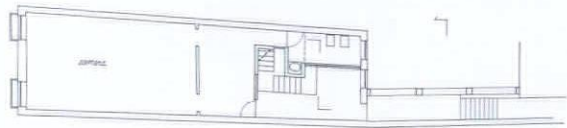
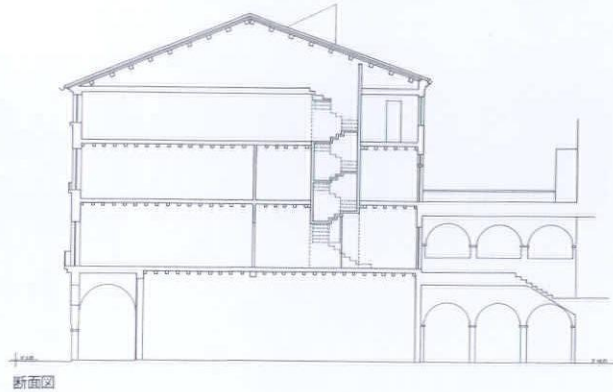


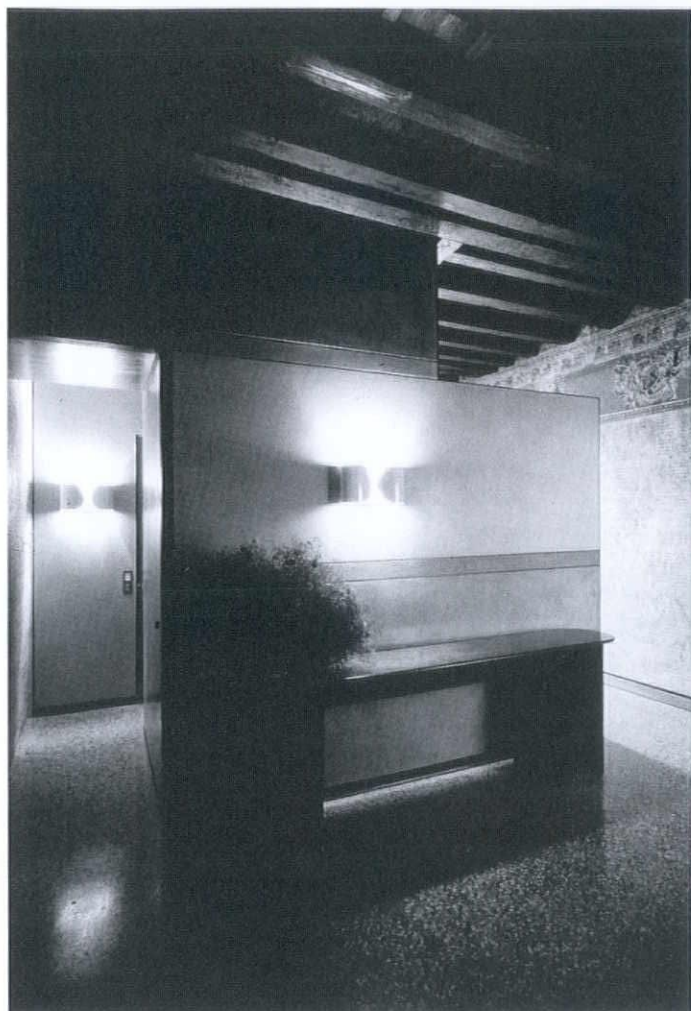


パラツェット・カラジョーレの改修

Restoration of Palazzetto Calaggiore
Treviso, 1980

ルチアーノ・ベネトン会長の住まいは、すべてスカルパの手によって新築、改修が行われている。この改修工事においては、建物の状態が良かったため、本来の床、天井および天井に続く壁のフレスコ画を完全に修復し、その他の部分においてスカルパの手が加えられた。この小さなパラツェットを広く見せるため、各階をつなぐ階段室を排除し、2階から4階までの階段を最小限の壁で構成して上下階の仕切りを極力抑えている。また、不必要な扉を廃して空間にさらに一体感を持たせた。壁はスカルパ独特のマルモリーノで仕上げられ、古典の空間と現代の空間とがうまく融合している。

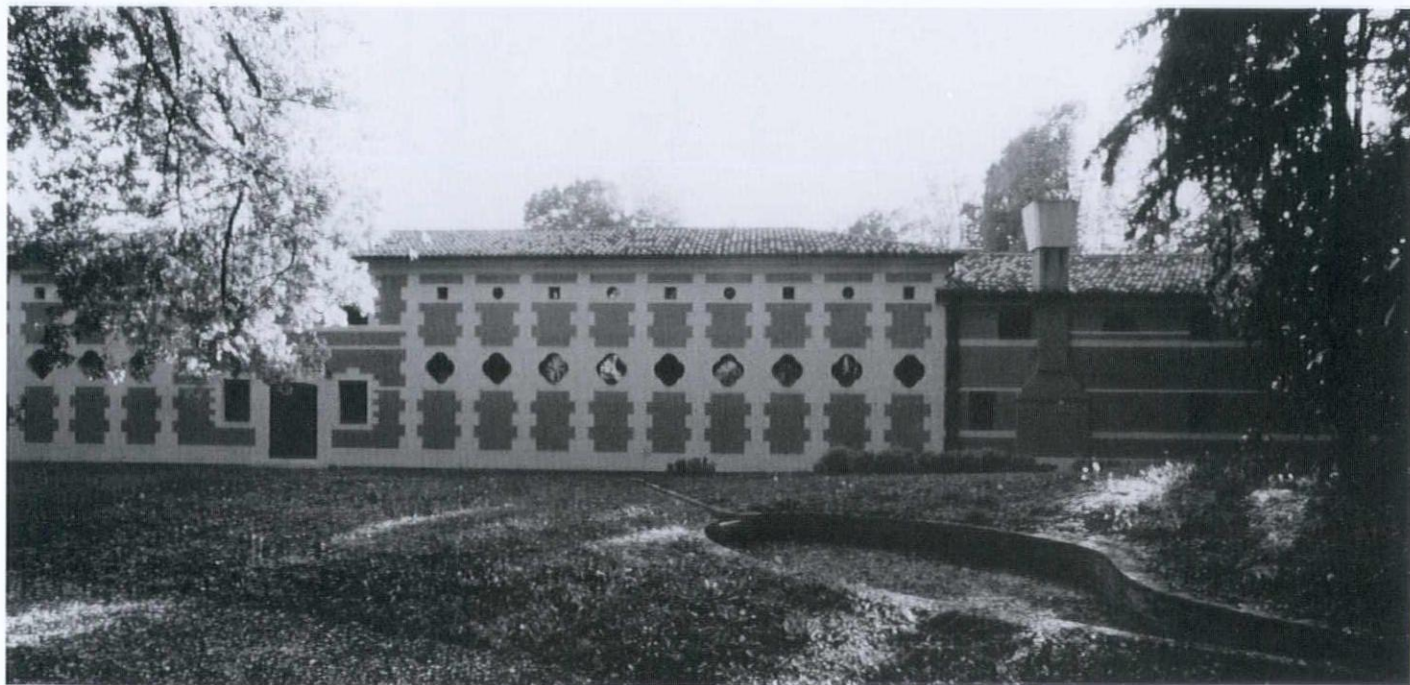


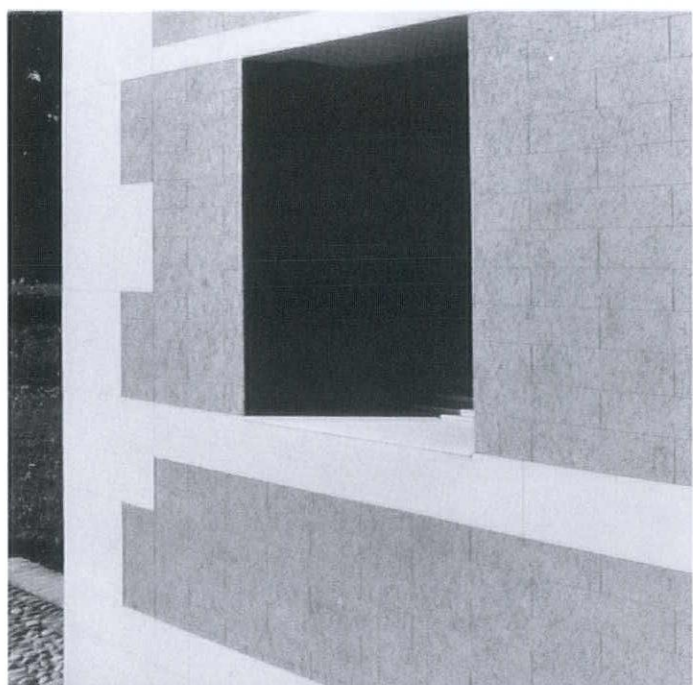
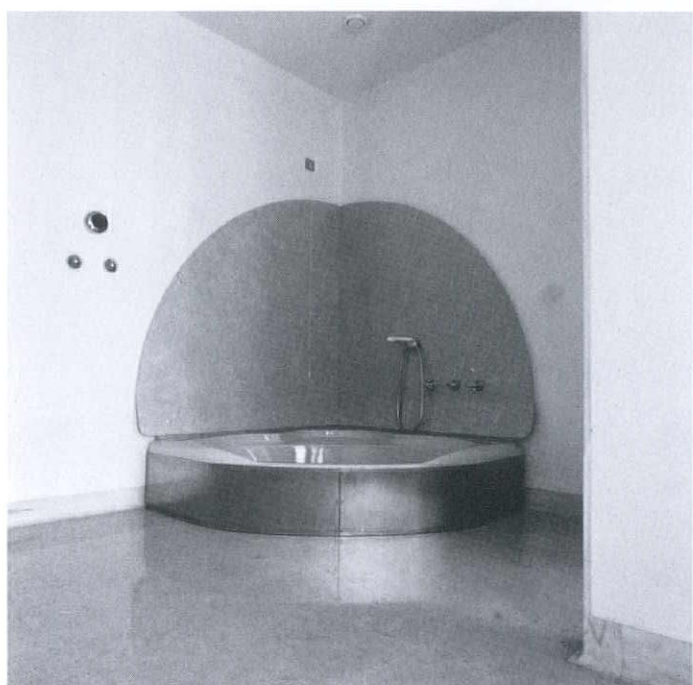


ヴィラ・リアの改修

Restoration of Villa Lia, Treviso

トレヴィゾにあるこのヴィラは、ヴェネト地方の典型的な様式を持ったものであるが、このような古いヴィラを改修するにあたって、問題は冷暖房や給排水設備、バスルームなど現代生活をするための設備をどのように設置するかである。如何にして古い建物の構造を壊さず、古き良き時代のオリジナリティを残すかが求められるのである。スカルバは、本館部分は保存にのみ努め、付属の納屋部分をゲストハウスとして自由に改修した。このゲストハウスは、こうした小さな介入においてもスカルバの手が入ったという印象を強く残している。





ベネトンの仕事について

トビア・スカルパ

インタビュー＝豊田博之

◆ベネトンショップのプロジェクトはどのような概念から生まれるのですか。

西洋の世界では、倫理観と商業観とは全く別のものである。商業には市場を支配するという掟があり、モラルを含んだ関係というものとはほとんど存在しない。これは日本や他の東洋の地域においても変わりつつあるが、世界観と商業観は違う動きをするものなのである。そこで我々の店のアイデアについて振り返ってみる。我々は終始、売り手と買い手が全く新しい関係を持った店をつくるという意志をもっていた。60年代初め、当時の一般的な店構えは紙人形の芝居のごとく美しく豪華であった。商品と売り手が一方にいて、客がもう一方にいてという構成は、戦後のイタリアの経済が贅沢品を買えるエリート階級のためにあるかのように見えて憤慨したものだ。カウンターとショーウィンドウは、この区別を象徴的に表しているものだ。

初期のベネトンのプロジェクトは、約40㎡と大変小規模なものであった。そのためまず始めにカウンターを取り払い、売り手と買い手が対抗するような形をなくした。次にわずかな商品しか展示できないショーウィンドウや飾り窓をはずし、地面まで届く大きなガラスのショーウィンドウを配した。店の中までのぞくことができるくらい光が散乱し、店内は強い個性をもった生き生きとした店となった。また商品はパッケージから取り出して棚に陳列し、客が自由に手にとって触れるという斬新な方法を採用した。店内での客の動線については深く注意を払った。迷路に入って方向を失ったり拘束されているような感じを客に与えないように注意しながらも、商品の陳列棚にはすぐに辿りつけられないようにして、多くの商品が客の目に入るように取り計らった。

また初期の想定では、商品の回転が早く、なおかつ素早い商品の補給が可能であり、さらに製品は標準サイズを揃えたので試着の必要がないため、倉庫と試着室は不要であると考えた。

◆ショップデザインの構成と街並みとの間にはそのような関係にありますか。

ベネトンショップの成功の本質的な要素のひとつとして、常に選ばれた場所に開いたことではないだろうか。我々はいつも街の中心街に適当な場所、つまり人通りが多く、若者が溢れている場所を探していた。結果として、ベネトンショップは歴史的な中心街のあらゆる場所に並ぶことになった。店構えは存在感があり、街のどこからでも簡単に見つけることができるように照明を非常に明るくした。60年代、70年代当時は、ベネトンショップは目立つ存在であり、イタリアの普

通の商店街の風景の中では、不思議で一風変わったこの店舗に通行人の目が引きつけられていた。詳細部分にも気を遣っており、すでにベネトンショップを知っている人達は、「あそこにもベネトンのショップがある」とベネトンに対しての印象をさらに強くする。このように工夫されたベネトンショップでも、けばけばした街に入り込むことはできない。また歴史的建築の中にショップが開かれる場合がしばしばあるが、その時は、建物のオリジナリティを損なうようなことはしない。そんなことをしなくても、そこにショップがあるということはすぐに認識してもらえるからだ。また行き過ぎた外観規制がなく、自由なデザインが可能な時期でも、常に注意深くバラツォの正面を綺麗に整えるだけに留めた。特に後に人為的に開けられた窓は埋め戻して元の壁にし、無駄と思われるものはすべて取り払った。商業の理論に従うと、歴史構成のアイデンティティも歪めてしまうことになる。正面は看板をなくし、その代わりガラスの内側に小さく店名を表示した。あらゆる法律に照らして許される材料のみで、特別なものも使わなかった。年を経るに連れてベネトンショップが通りを構成する一部となった。地面にまで届くショーウィンドウはまるで公道から浮かんでいるようである。時には街を構成するエレメントが店の中に入り込み、すべてを取り込んだ連続的な空間を創り出すのである。

◆どのようにして会社のイメージをショップに投影するのでしょうか。それともこちらから発信するのですか。

ショップが会社のイメージを創る。今日のベネトンはショップなしには有り得なかった。コルチナ、ペッルーノ、パドヴァの店の成功が会社の発展の足掛かりとなり、ベネトンの新鮮なスタイルと若さ、躍動感、アイデンティティを創り出した。私は成功者の武器は、強引さかあるいは単純さだと思っている。ショップは、イメージ戦略という面からも、また当然商品を販売する具体的な面からも要となるものだ。設立から30年が経過し、ベネトンショップは世界中の多くの街で、エレメントのひとつとして確立されている。つまり、ベネトンショップがなければ繁華街とは言えないくらいの認識になっているのだ。これは、媒体を使わずに宣伝する方法としてまったく新しい手段だろう。

◆ベネトンが外国に市場を拡大していったことは、ショップのコンセプトにも影響を与えましたか。

会社が成長する上で強力な推進力となったのは、外国への拡大戦略と

成功への大きな自信だが、まずこの拡大戦略がショップのコンセプトに影響を与えたということはほとんどない。実現されたプロジェクトは、各国の事情に合わせて導入できるように、建築構造的な要素は少なく、インテリアが中心になっている。イタリアン・デザインの要素も少ない、普遍的価値をもったものにしたので、言ってみれば空いている空間にはめ込むことができる。世界中で新たにショップを開きたいという要望が多くなる中で、どの場所にも適したデザインを実現するのは時間がかかった。ただルチアーノ・ベネトンを初めとしてベネトンのトップの人々は、まったく白紙の状態から私に仕事をやらせてくれたので、それは成功に結びついていると思う。

◆ベネトンショップの未来をどのようにイメージしますか。

ベネトンは現在の商業形態を30年間続けている。こうした成功を続けるには、外部の変化に対応して、内部の新陳代謝が必要だった。言い換えれば、外の市場の変化が私達の発展をもたらすことになる。また市場で生き残っていくためには、すばやい対応も必要だと思う。個人的には、数年前からあたためているショップ・イメージがある。当時はあまりに未来的なイメージが強すぎたので、保留していたが、これからのショップは郊外型になっていくと思う。そこでは、ショップだけでなく、街並み自体を形成していく必要もあるだろう。

団地の広場で人々が集まり出会う今日、それと同じようにきちんと管理され、憎むべき発砲騒ぎのあるようなカオスの街ではなく、若者たちが健全に出会える場所である。通りには、カフェ、アイスクリーム屋、ローラースケート場などが並び、若者たちはそこで出会い、共に時を過ごす理想の空間なのである。この場に、非常に控えめにディスプレイされたショップ・エリアがある。これに似た「コミュニティ」の概念は、商店街と広場を結び付けたようなアメリカのショッピングモールに見られる。

ところで、情報化社会の今は、店でカタログを見せたりするのではなく、コーディネートシミュレーションを画面で行ってさらに、細かい着こなしのデータも提供する。コンピュータを通してオーダーを取ることによって、世界各地の販売状況や地域的な好みも把握しやすい。商品の納品も短時間でできる。今は、インターネットによってそれが現実のものとなりつつある。しかしこのようなプログラムに1社だけで取り組むのが無理だということははっきりしている。とてつもないコストとエネルギーがかかるものの、それに見合う利益は得られない。このプロジェクトには多くの会社の協力が必要であり、周囲の変化を見越した経営計画を立ててきちんとした投資をする。実現するに

は、後多少の要素が満たされればよく、商業面以外の、例えば学校の午後の授業に対しても解放できる場を創りたい。これは近い将来に実現できるだろう。

◆あなたにとってルチアーノ・ベネトンとは、どういう人ですか。

ルチアーノ氏はなんと言っても「カッポ（親分）」であることを示した人だろう。つまりフィアット社のアニエリ会長言うところの、「ボス」だ。本当の「カッポ」である彼は長所に溢れ、思考力、意志力などを持ち合わせた、大変に尊敬のできる人物だ。今までにこれほどの人物には会ったことがない。我々が彼と出会い、親友となることができたのは非常に幸運なことだ。彼は私達にいつも友情をもって応えてくれる。

彼は、誰かと一緒に仕事をするとき、彼は相手に絶対の信頼を置いて、一旦相手に仕事を任せたら最後までその人の決断に委ねて口を出すことはない。例えば、建築家、あるいは詩人でもよいが、こうした職業の人々の立場というものは非常に脆い。つまり、建築家は自分の仕事について、材料やコストの弁護はできるが、いわゆる「勘」について弁護することはできない。それは作品ができあがった時に初めて結論のでることだからだ。だから制作過程においては、直感だけで突き進むのには勇気がいる。そんな時、彼は自分の直感をもって私達の直感を信じてくれるのだ。彼は今では私達に最高の信頼を置いてくれている。これこそ、最高のインテリジェンスと呼べるのだろう。

於：1997年3月11日トレヴィニャーノ、トビア・スカルバ自邸



左からアフラ・スカルバ、トビア・スカルバ、ルチアーノ・ベネトン

ルチアーノ・ベネトン会長への一問一答

質問者＝豊田博之 訳＝櫻井義夫

◆アフラ、トビア・スカルパと知り合ったのはいつのことですか。

——1963年に共通の友人を通じて知り合いました。後にベネトン・グループの本部が置かれることになったボンツァーノで出会いました。我々兄弟は若く、仕事を始めたばかりでしたから、やる気満々ではあったも資本に乏しく、一方アフラとトビア・スカルパは大きな将来性を持って建築学科を卒業したところでした。アフラ、トビアと我々は、それぞれ仕事は異なっているけれども、各々の職能において何か新しいことをやろうという強い欲求を持っていました。こんな訳で我々はすぐに最も重要な計画であるボンツァーノにおける最初の工場を依頼したのです。

◆こんなに長く仕事を続けていくような関係に発展することになった訳ですが、初めてお会いになったときの印象を覚えておいでですか。

——初めからひらめきを感じましたし、根本的な相性の良さを感じました。互いにまったく同じ言葉で語っているという感覚でしたから、完璧な相互理解ができました。ボンツァーノの最初の工場は、こうした印象を確認し、さらに一層強めるものとなりました。当時としては空調や天空光の調光システムが非常に先進的であり、この工場は機能的で前衛的なものになりました。でもそれ以上にこの工場は、前向きであらゆる意味で革新的な企業の構築という我々の要望を正確に解釈したものとなったのです。ヨーロッパ中から建築家達が、それこそ列をなしてこの新しい工場を自分の目で見ようと集まってきたのです。

◆アフラとトビアのベネトンのための建築をどう思われますか。

——研究と進化に支えられたベネトンの文化ともいえるべき企業活動に、大変調和したものとなっていると思います。実際、最初の工場以来すべての工場と店舗を、アフラとトビアがデザインしているのです。彼らの、未知の材料を使用してゆくといった革新の能力や、建築することによってつくられる環境に細心の注意を払うことなどに、私は強い印象を受けています。それは彼らの最新の作品であるカストレッテの工場建築を見るだけでもご理解いただけると思います。この作品は橋のような特殊な吊り構造によるものであり、世界的に見ても先端的な工場ですが、そうした技術的な部分以上に、何かひととき優れたものを感じました。遠くから見ると、ヴェネト平野の中にかっちり組み込まれ、まさに未来に向けて突き出た橋のように見えるのです。

◆アフラとトビアはルチアーノ・ベネトンのために何を表現しているのでしょうか。

——今日ではアフラとトビアは大変に成功した建築家であり、一家に伝わる偉大な伝統を表現し続けています。私達の間には、初めて会っ

たときのように、単なる仕事上の協同を超えた関係があります。ほとんど直感的と言える、最高の信頼感と、強力な友情関係でのみ獲得することのできる真の敬意があるのです。

◆ボンツァーノに関してはどう思っていますか。

——ボンツァーノ、そしてトレヴィゾの全域が私の本拠地であり、私の家族と会社のルーツなのです。私は仕事としても個人的な関心事としても、遠い国外へと飛び出して行って、何か新しいものを発見したりするのが好きなのですが、それは商人や旅行者が東方航路を開拓していったヴェネツィアの偉大なる伝統でもあるのです。ただそれと同じくらいに、私は家に帰るのも好きなのです。そう、ボンツァーノは私にとって帰宅したいと思うような場所なのです。

◆日本についてはどう思われますか。

——私は日本に正真正銘の愛着を持っています。年に少なくとも4、5回は好んで訪れています。日本についてはほとんど何でも評価しているのです。経済、料理、建築から医学まで。生活スタイルにも大変親近感を抱いています。それは歴史的な過去の蓄積と、近代化や先端技術への素晴らしい緊張感の間にあるものです。こうした日本文化に対する気持ちが、全世界の若者に開かれた情報学校の実現という特別な計画に、安藤忠雄氏を起用させることとなったのです。

◆ベネトンの世界とは何でしょうか。

——終わりのない物語です。最初の日と同じように、今日でも私や兄弟を巻き込む冒険です。確かに今ではビジネスの幅も大きく広がってきました。テキスタイルや洋服のみならず、様々な活動の複合体として工業からスポーツ、食料品、あるいはフォーミュラ1からアルゼンチンの農業開発までの広がりを持っています。ただ我々を鼓舞する精神は変わるところがありません。それはすなわち努力と情熱をもって自己改革を続けること、我々のアイディアや直感が実現するのを見続けることでしょうか。

生産地域「超自動化倉庫」

Production Area, "Super-automated Warehouse"
Castrette (Treviso), 1980

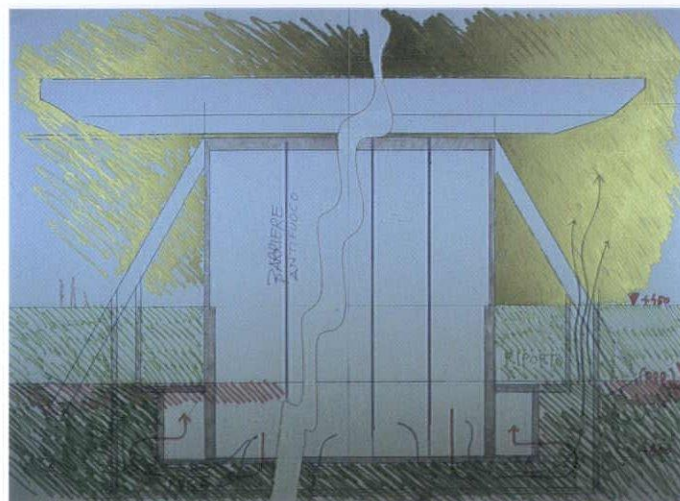
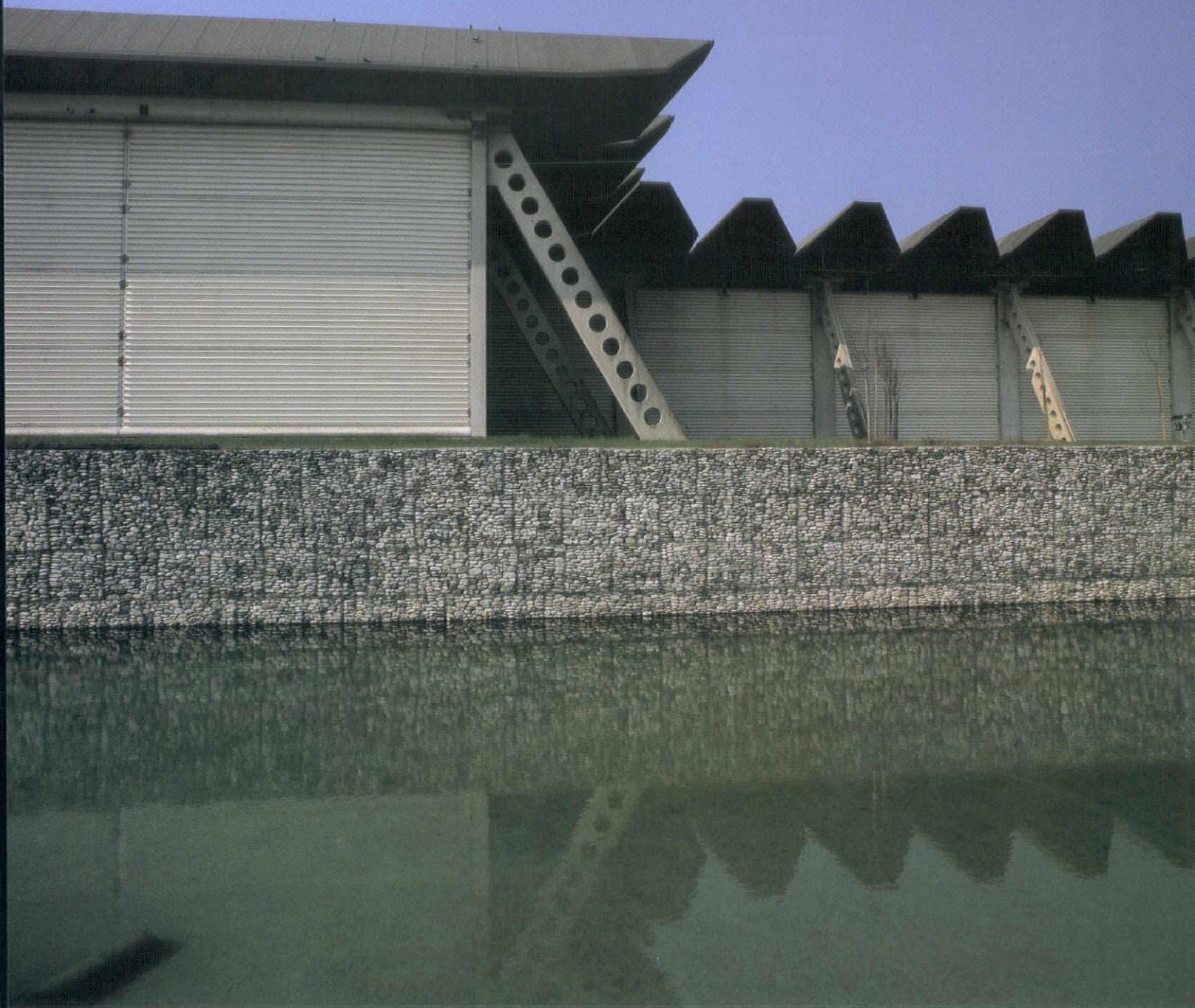


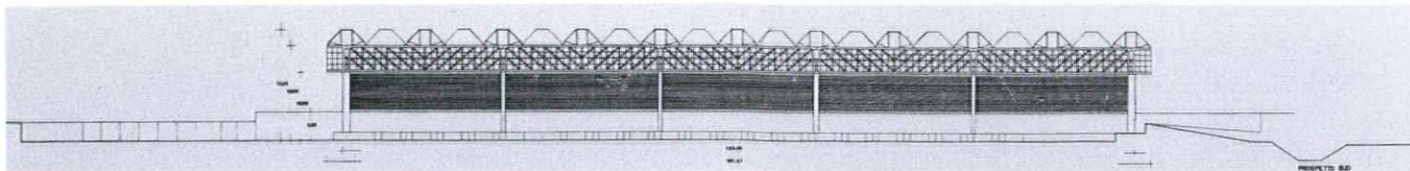
ベネトン生産地域、カストレットに建てられたこの倉庫は、世界120カ国、7000のベネトンショップ各店に商品を配送する集配倉庫である。1年間に5000万ケースの商品が運び込まれ、1日8時間に7500個口の荷物となって世界中に配送される。にもかかわらず倉庫で働く作業員の数は10人足らずと、超自動化された管理システムを採用している。建築面積25000m²、

天井高18.25メートルの巨大空間を持つ倉庫の3分の1は地中に収められ、カストレットの田園風景を損なわないよう配慮されている。また倉庫脇には玉石を長方体の金網に納めてつくったブロックを用いた貯水湖を配し、より風景に溶け込むようにしている。構造の壁面部は、地下部分が鉄筋コンクリート造、地上部分はプレキャストコンクリートにより造られ

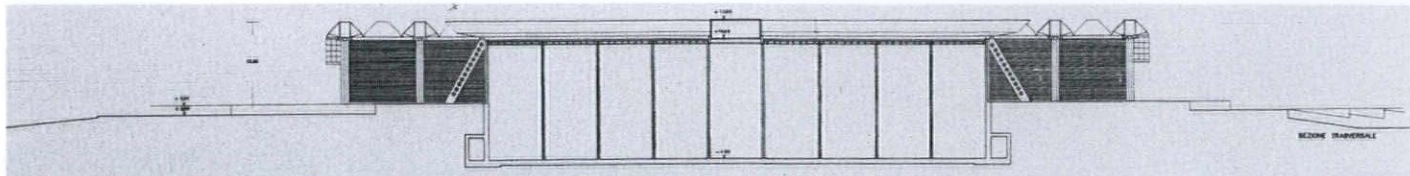
ているが、壁が自立するように、外部に、やはりプレキャストで丸い穴の開いた控え柱が出た構造となっていて、その上に鉄骨トラスが架けられ、折り屋根が迫り出している。製品の搬出入は、同地域内にある各工場を結ぶ地下通路網を利用して行われる。



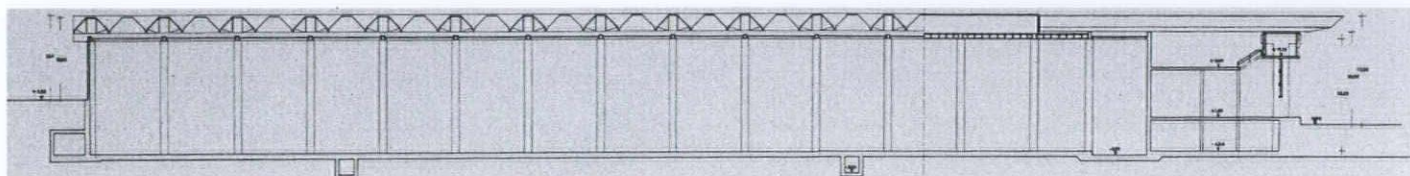




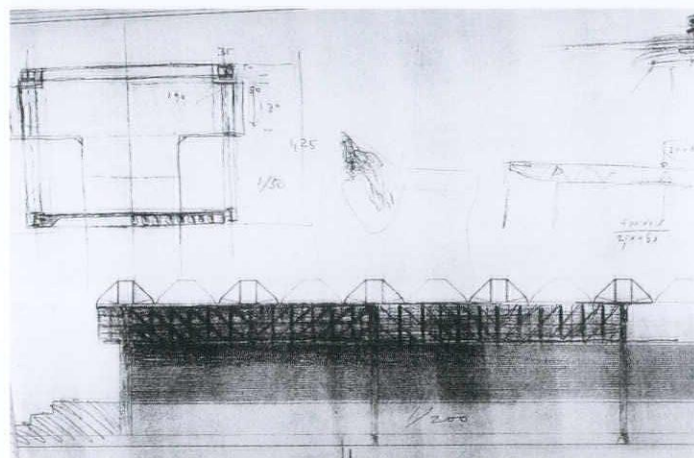
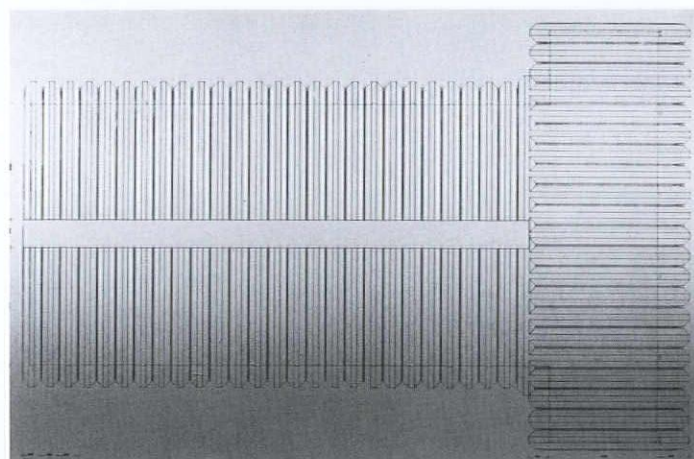
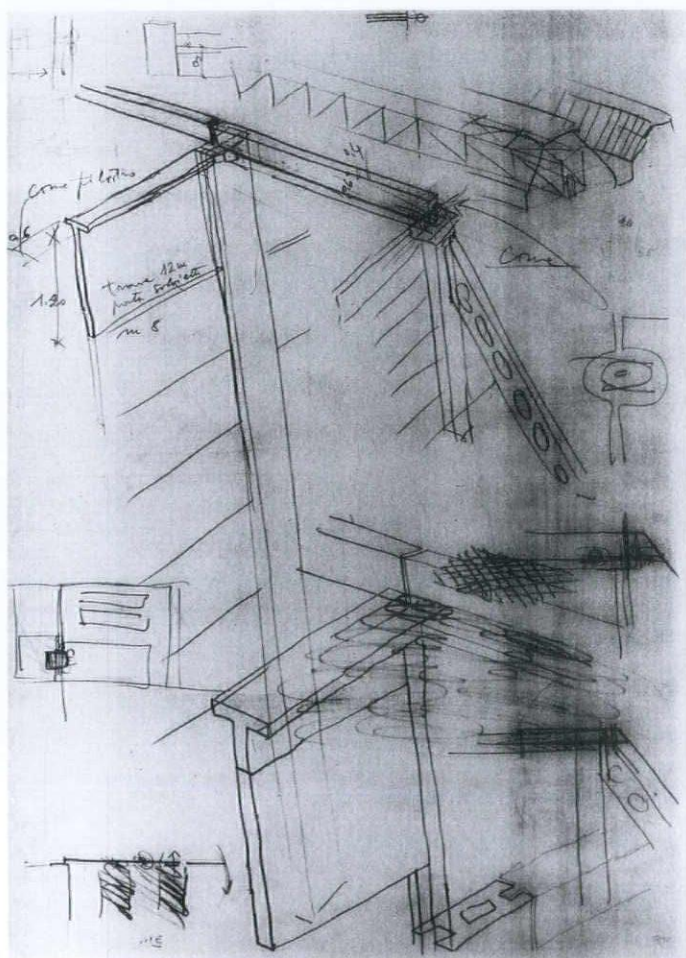
南立面图

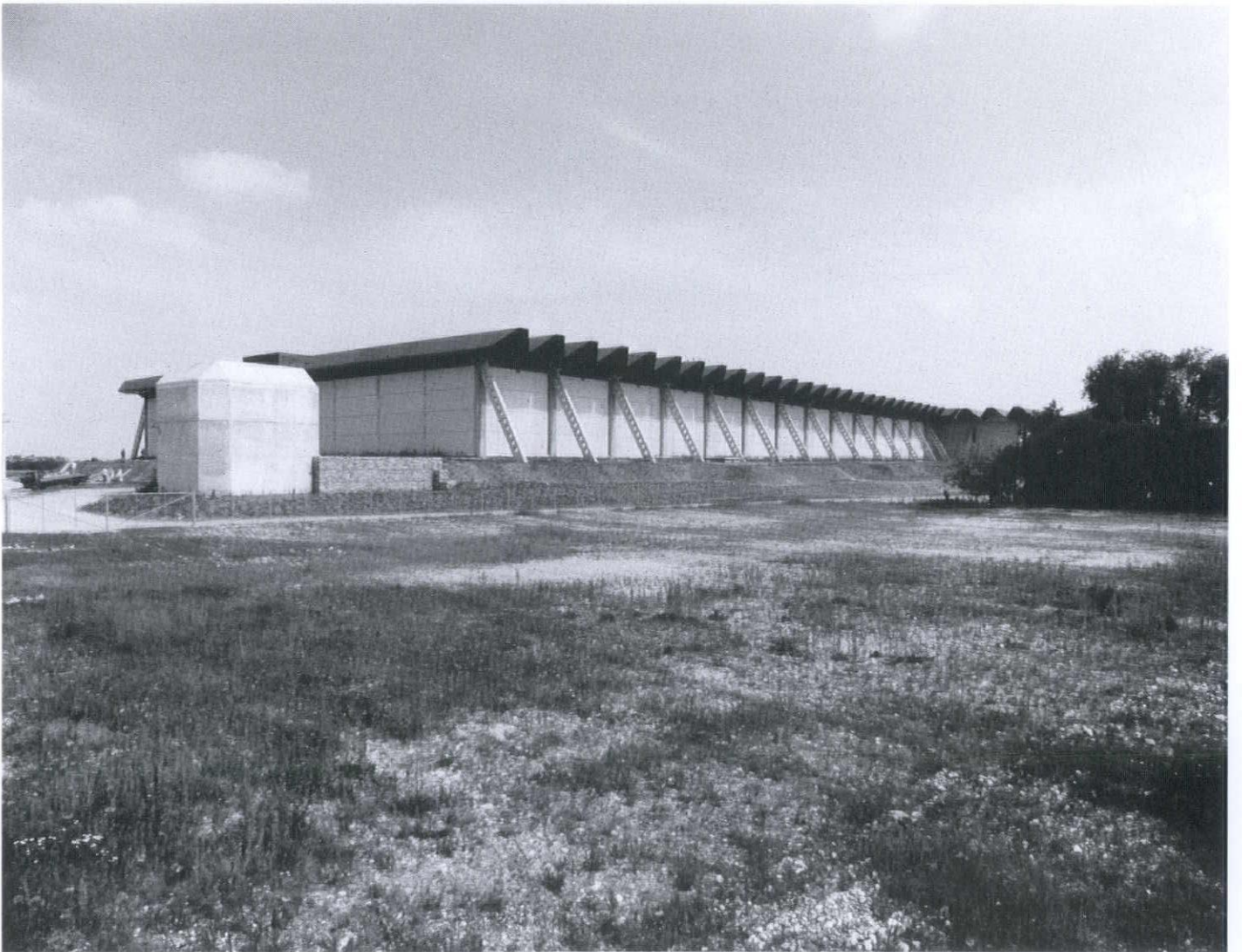


南断面图



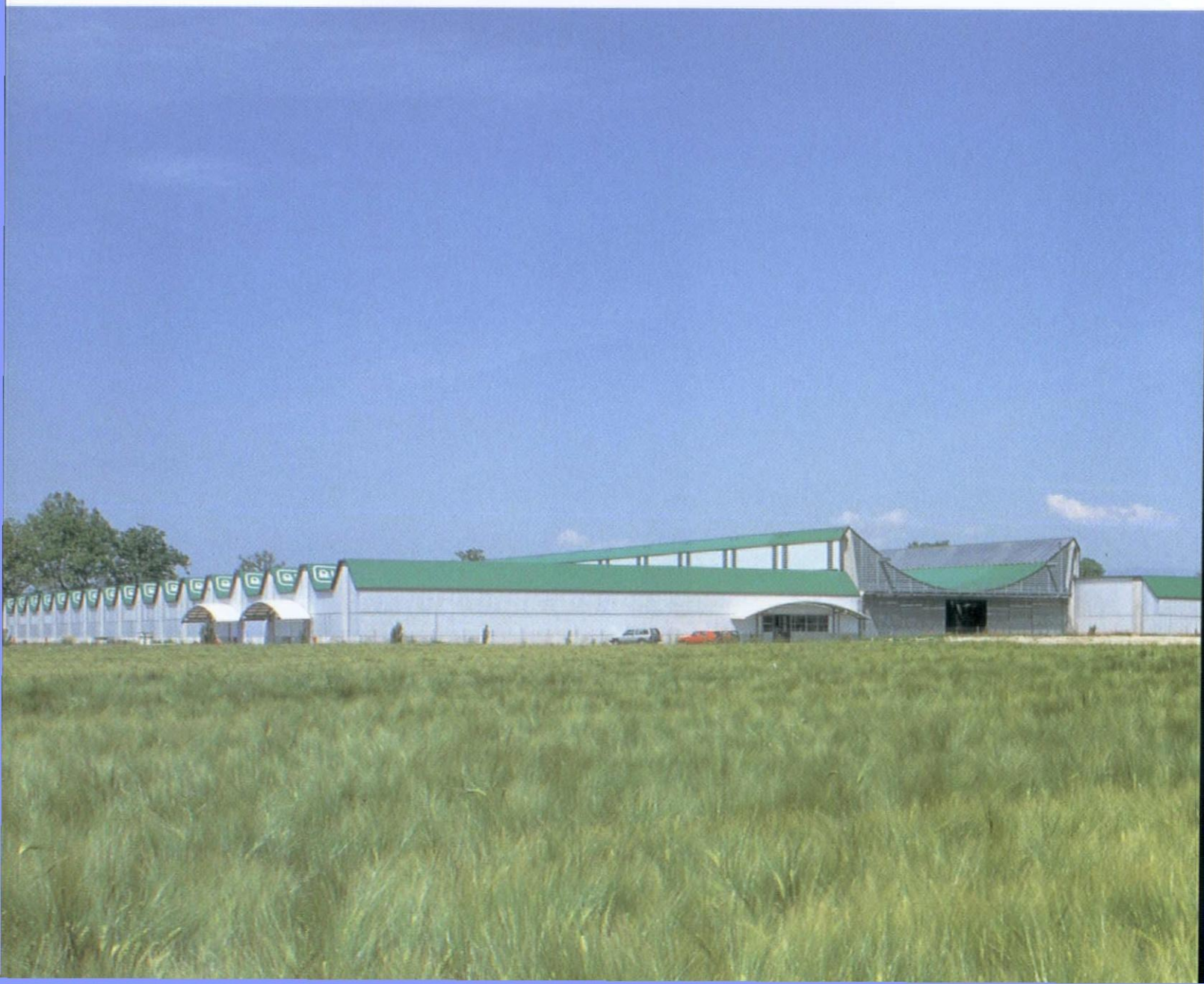
西断面图



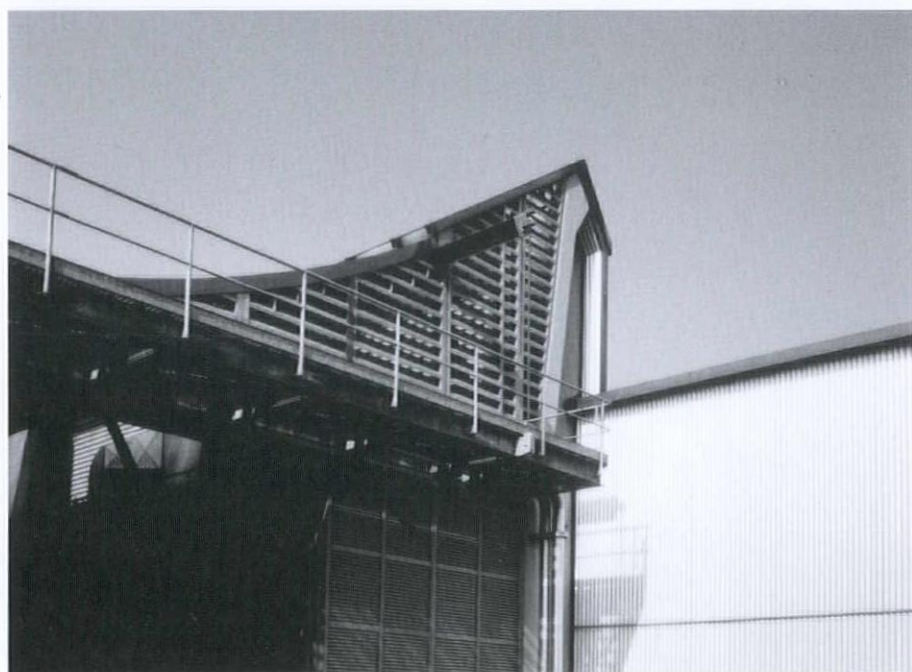


生産地域「毛織物工場」

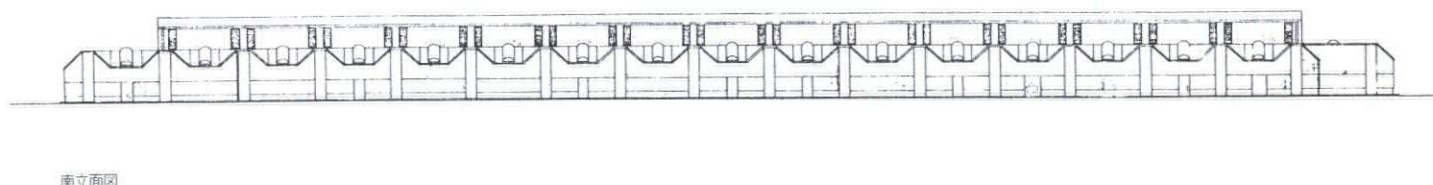
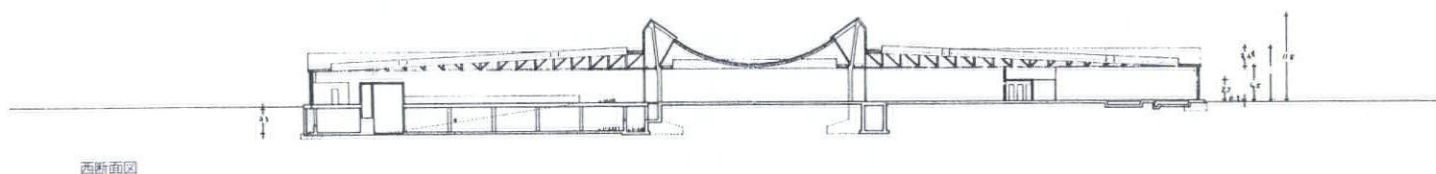
Production Area, "Textile Factory"
Castrette (Treviso), 1985







この敷地には、工場だけでなく、生産地域周辺の多くの協力工場から納品される半製品を完成させて梱包する設備と、各工場に素材を供給する集配センターを備えねばならなかった。当初、工場はふたつの棟で構成され、間にオープン集配ヤードを収める計画であったが、集配作業中の天候による影響を避け、終業時の片づけを省くこともできるようにベネトン社から要求があった。そこでスカルバは、吊り構造でふたつの棟の間に大屋根を掛けた。屋根の重量は土台の躯体部分で支えられており、コスト面も考慮されている。大屋根に覆われた空間は「自然換気法」を採用しており、特殊な換気システムを備えている。この工場では、ニットに仕上げた状態で保管し、注文に応じて染色を行う「後染め製法」を行っている。



生産地域「ジーンズ・上着工場」

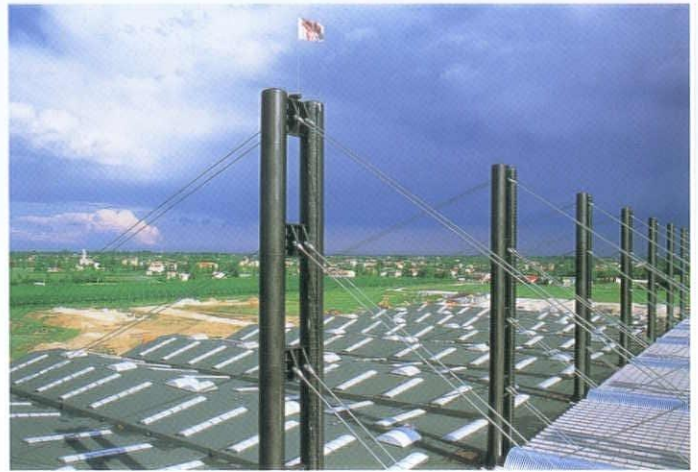
Production Area, "Jeans and Coat Factory "
Castrette (Treviso), 1972

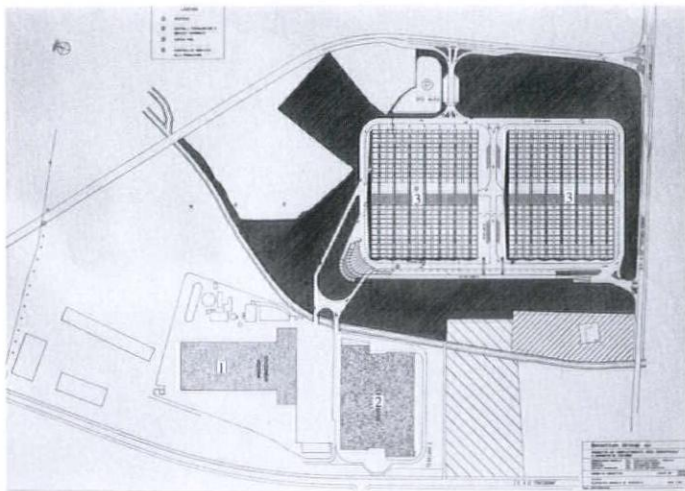


ジーンズ・上着工場もカストレットの生産地域に集約することを決めたベネトン社からの条件は、9ヵ月という短期間と72000m²という広大な建築面積であった。スカルバは前回の毛織物工場同様吊り構造を採用し、吊りケーブルの上に屋根を架ける案を進めたが、内部空間のボリュームが大きすぎて空調が問題となるため、必要な天井高が取れる位置に梁を吊り、その上に屋根を架ける案に変えた。工場はふたつの

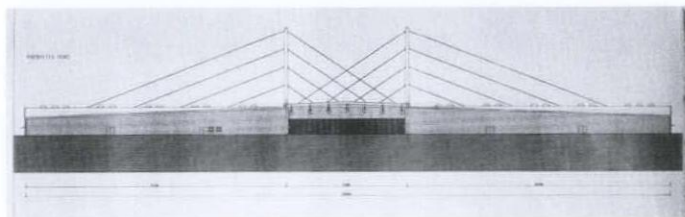
棟から成り、それぞれ208×175mと大きなものである。各棟は、工場内中央に37.5m幅の集配用ヤードがあり、その両側は80×175mの柱のない空間となっている。これまでの工場はプレキャストコンクリート造であったが、この建築は新しい吊り構造と、溝付けの波型亜鉛鉄板を横張りした軽い表情の建物となった。屋根から25m突き出た2本一對の黒い支柱に黄色ケーブルの枝が連なる未来的な姿は、ベネトン社

が21世紀に向けて着々と準備を整えているという印象を与える。この生産地域もまた、全駐車場が地下に収められ、各工場と地下通路で結ばれている。この生産地域入口の守衛所はスカルバが常にモチーフとして使っている傾いた平らな丸屋根からなり、それを支える躯体部はコンクリートをさまざまに着色した、斑模様のような美しい仕上がりとなっている。

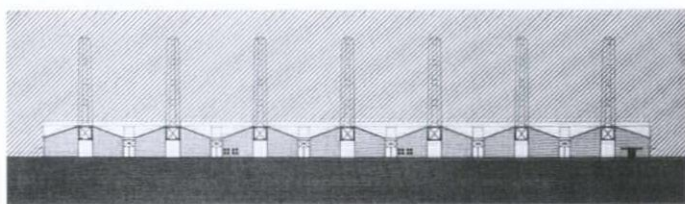




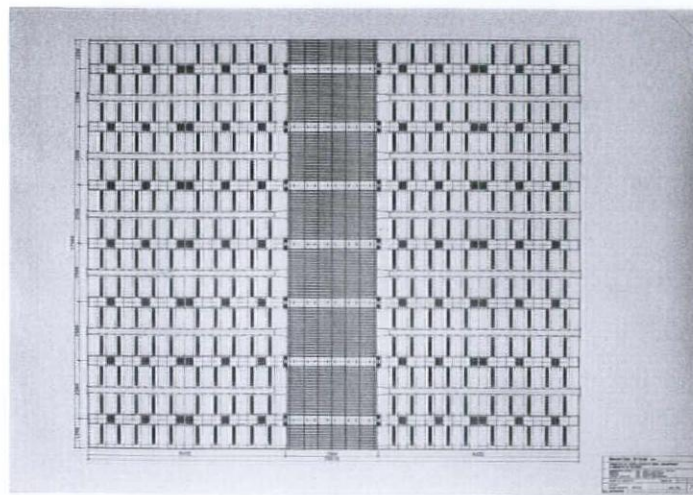
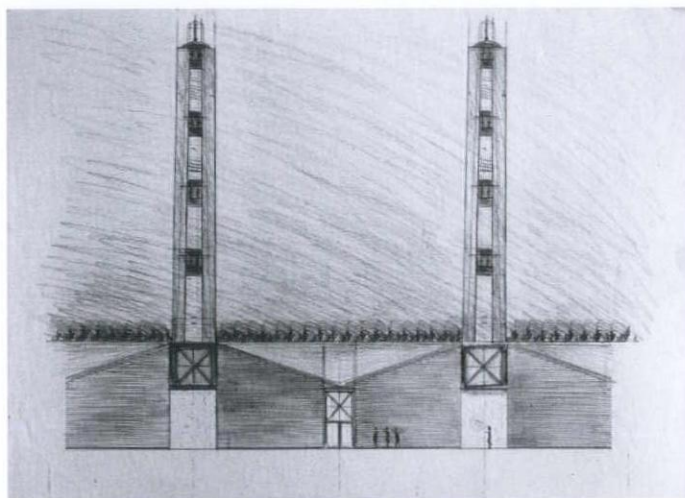
1: 超自動倉庫、2: 毛織物工場、3: ジーンズ・上着工場



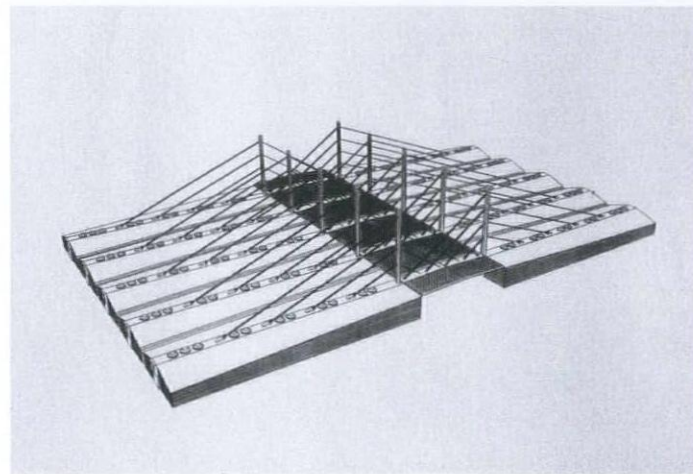
北立面図



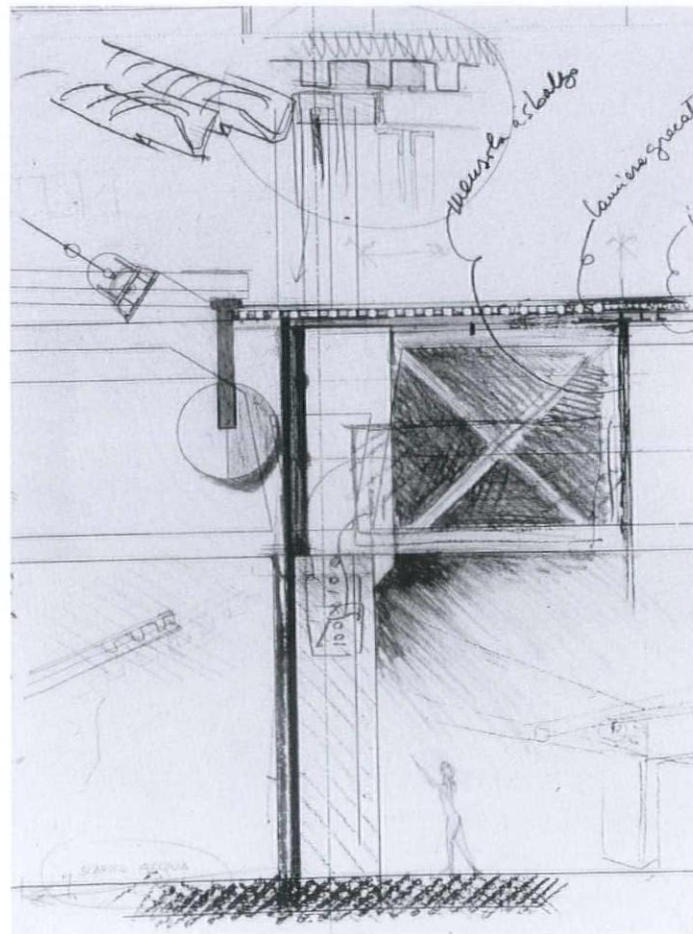
西立面図

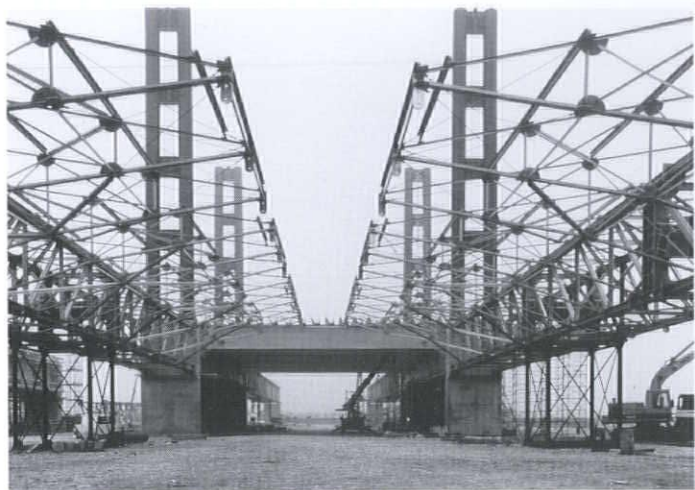


屋根伏せ図。黒い部分が採光部



アクソメ図



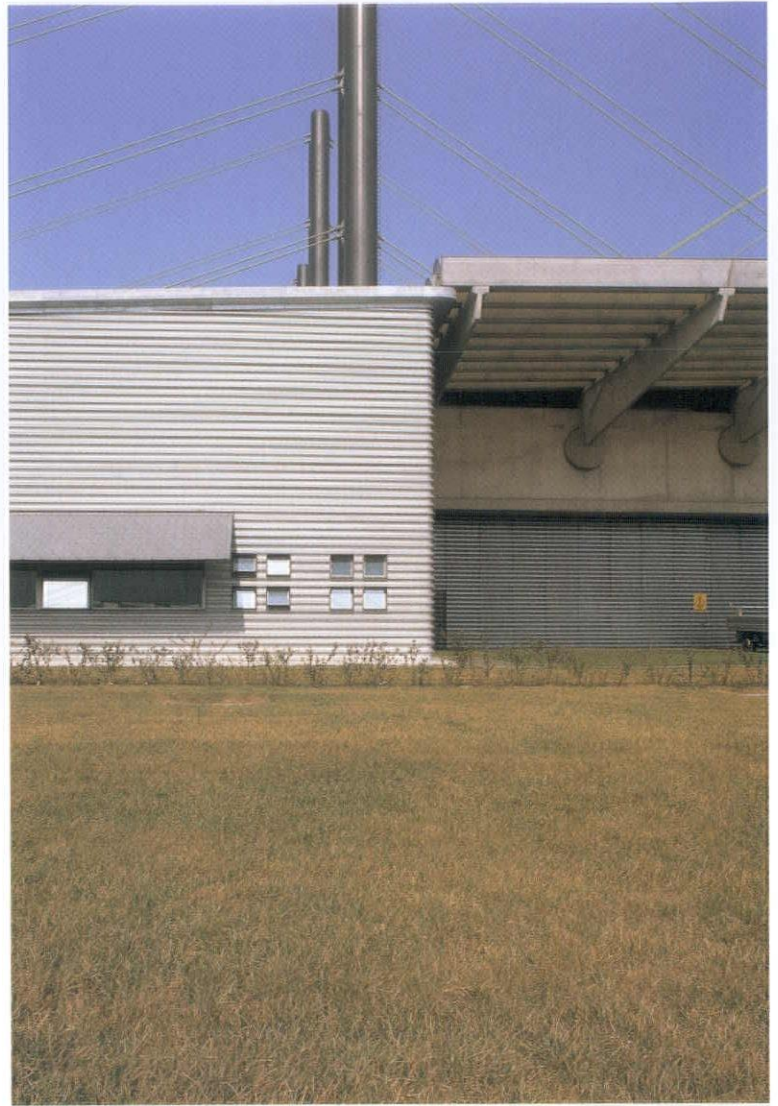


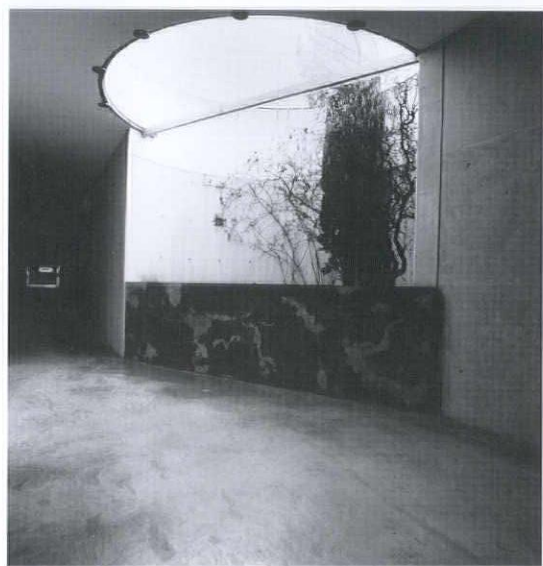
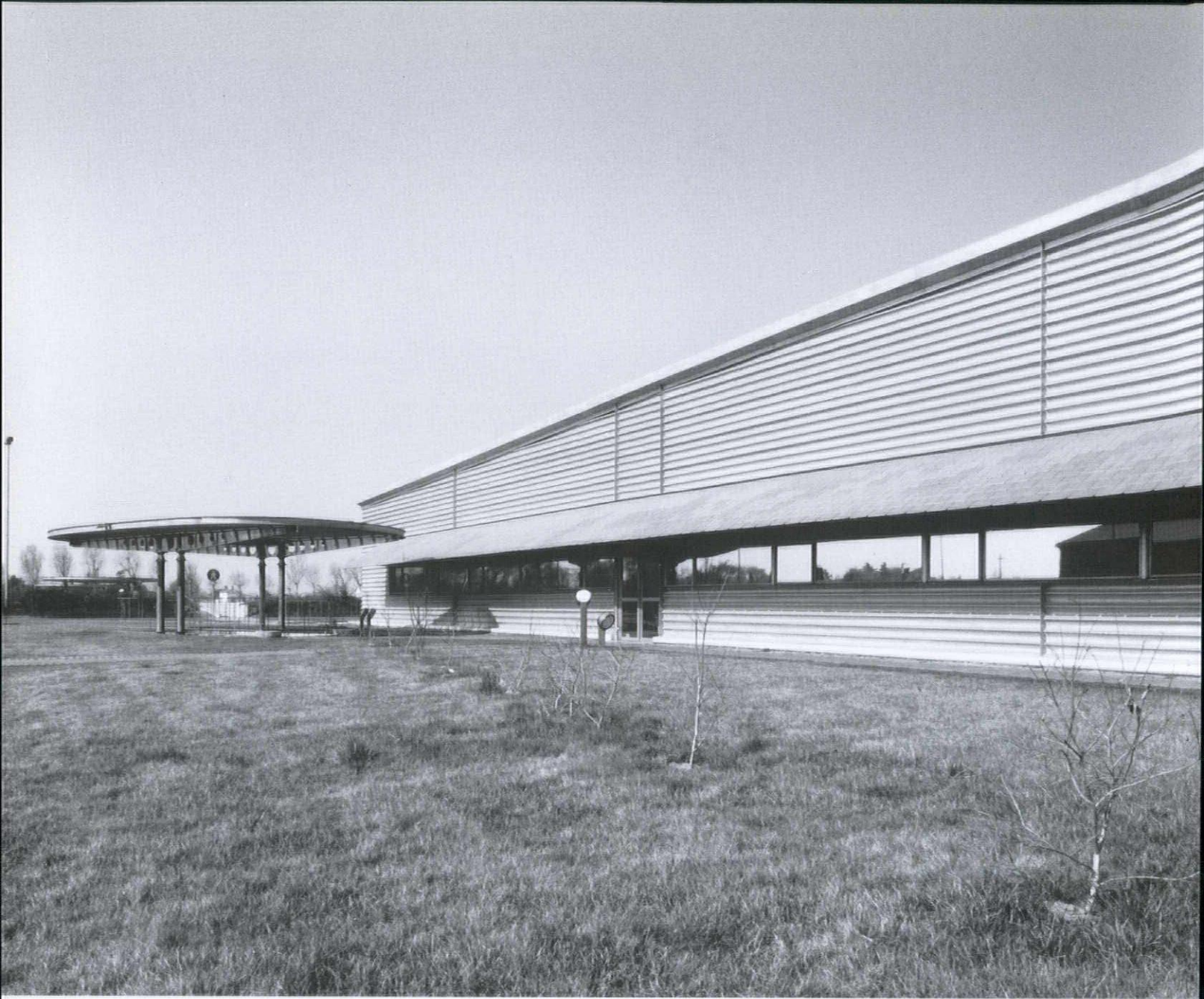
地下駐車場内部。この駐車場は敷地の中央に位置している

に続く道路。後ろに見えるのが工場群









現代の建築家とパトロン

豊田博之

恐らく日本では、トビア・スカルバの名は建築家としてではなく、家具や照明器具のデザイナーとして知られているのではないか。

実際にも、彼は父カルロ・スカルバがそうであったように、ガラスのデザイナーとして出発したのである。ヴェネツィア建築大学に入ったときにはすでに、ムラノのヴェニート社でガラス器のデザインを手掛けていたのだ。処女作を発表したのは1957年、22歳のときで、それが彼のデザイン活動の始まりであった。

さらに在学中、1960年にはGavina社（当時）から家具を、翌年にはFlos社から照明器具、C&B社とCassina社（当時）から家具をという具合に、多くの作品をたて続けに発表して、60年代半ばにはイタリアを代表するデザイナーの地位を確立し、それから現在まで第一線の座を維持し続けているのである。トビア自身は幼時より父から手ほどきを受けていたこともあり、強いて大学に進む必要を感じていなかったようだが、父の勧めもあって結局10年の在籍期間をもって卒業している。60年代半ば、スカルバという名を聞けばトビアのことで、カルロ・スカルバではなかった。父の方は大学や知識人のサークル内では知られた存在だったが、世間的には無名と言えた。その父をはるかに上回る知名度をトビアは若くして獲得してしまったのだ。

希有の才能はすばやく開花した。しかしその順調な歩みの過程で、トビアの心から父の存在が薄れていくことはなかった。デザイナーあるいは建築家として、父は師であり、多大の尊敬の対象であった。それだけに一層、偉大な父からの距離を保ちたいという気持ちも強くなっていったようだ。どんなに自分の作品が世に出て、常にカルロの息子という呼称から免れないことに苛立ちを覚えてもいたようである。

トビアは自分を育ててくれたヴェネツィアの地を離れることにした。それが仕事においても精神的な面においても父から距離を置く、最上にして唯一の方策と考えたからである。

居を移したのはトレヴィンゾ郊外のトレヴィニャーノの村。その隣村のボンツァーノ村にはベネトン家のルチアーノが住んでいた。共通の友人を通してふたりは知り合い、以降、

友人として、仕事上のパートナーとしての関係は今日まで30余年にわたって続いている。ベネトン社は急成長を遂げているが、それに伴い、トビアは工場、倉庫、家具など、管理・生産施設の物理的な環境のほとんどすべてに携わっているのだ。

そして同時にベネトン・ショップのデザインも手掛けてきた。ここでトビアが行ったのは、ショップの形式自体から考え直してみることだった。そこで編み出された形式は他のアパレル・ショップにまで影響を及ぼし、今日も有効なものとして捉えられている。

父カルロは家具デザイナーとして古典的なマエストロの枠組みの中で発想し、手仕事の範囲の中で仕事をした。それに対してトビアは、60年代に入り、家具の世界でも大量生産的な発想が求められた時勢に合わせ、工場の生産ラインにのるような家具デザインの分野に挑戦し、その分野の先駆者として比類ない成果を納めた。

トビアによるベネトン・ショップの形式とデザインのもとになったのは、建築的な発想というよりは、このような家具作りからの発想である。

ショップが置かれる空間の与条件はさまざまである。だが、旧来のショップ・デザインの常套では、異なるショップの間に統一したイメージを与えることが難しくなってしまう。そこでトビアは常識に逆らって、建築的な要素をできるだけ少なくし、家具的な要素によって空間を構成することにしたのである。可能な限りの多くの部材を部品化し、短時間で組み立てられるようにしたのだ。プレファブ形式と言っても良い。この形式の採用がベネトン・ショップの拡大に果たした功績は計り知れない。ショップ自体が置かれている環境や面積にかかわらず、短時間に、効率的にベネトンのイメージを備えた空間を作り出すことが可能になったからである。世界120ヶ国への広がりはこれを抜きには考えられない。

トビアは建築においても、こうしたプレファブ工法に強い関心を持ち、初めて手掛けたベネトン社の工場では、プレキャスト・コンクリートの梁が用いられている。X状の断面形

をもった美しい梁である。外観にはその梁の断面が連続して現れ、ユニークな表情を呈し、一方、内部空間は大スパンの明るい自由な空間が作り出されている。この工場は、既成の工場のイメージを打ち破る画期的なものとして高い評価を得たのである。

ベネトン社を率いるルチアーノは、ベネトンのイメージは製品そのものや広告宣伝活動だけでなく、またショップのデザインに限らず、工場やオフィスまでを含んだ活動全体にわたって一貫した考え方があり、その反映として得られるべきものだと考えていた。今で言うコーポレート・アイデンティティ（CI）である。そうした考えのもと、施設の増設のたびに新しい建築型が要求されたが、トビアはその都度、プレファブ技術を含め新しい技術を積極的に取り込んで対処してきたのである。構造や設備のエンジニアは、その過程においてトビアの共同設計者として重要な役割を占めた。

ベネトンに限らずトビアが関係しているクライアントの大半は世界を市場として活動している企業でCIに深い関心を持ち、多くの場合、トビアは照明器具や家具のデザインばかりでなく建築やインテリア、さらにはオーナー自身の住まいまで関わっている。トビアはオーナーだけのためではなく、その企業を通して広く社会に影響を及ぼす場面に身を置いてデザイン活動を行っているのだ。父カルロは、ルネッサンス以来の、王侯貴族のパトロネージを受け、彼らのために役割を果たすという古典的な建築家のスタイルをとり続けたが、トビアはそこから脱し、建築家とパトロンとの関係の現代の型を自ら実践してみせたと言えるのではないだろうか。形あるものはすべて建築家が携わるべきものだというのはイタリアに特有の古き良き伝統である。そうした文化的風土に生まれ育ったトビア・スカルバが示してみせてくれた、オーナー、企業、社会と建築家との新たな関係の結び方は、われわれにとっても繰り返し参照するに値する事柄に違いない。

●とよだ・ひろゆき／建築家

ベネトン・ショップコンセプト

Concept of Benetton Shop

ベネトンショップについて

ベネトン社の初期のブランドは、「Tres Jolie (トレ・ジョリ)」というフランス語に由来している。その頃のベネトン社は卸専門のアパレルメーカーだったが、1966年に「My Market」の名前で直営店をオープンした。ベネトン社は、直営店をもつことによって生産から販売まで一貫した流通の体制を取り入れ、また新しいデザインや製法をも開発していった。ルチアーノ・ベネトン氏とその兄弟は、こうした新しい仕組みによって、ベネトン社を世界的な企業にしていっただのである。

トビア・スカルバがショップデザインを手掛けるようになったのは1968年からである。このパドヴァの店舗こそ、現在まで続くベネトンショップの基本となっている。概念までを含んだトビアのこのデザインは、イタリアの従来の店舗の形態を変えるものだった。

ベネトン社は、企業の成長や時代の変化に伴ってカメレオンのごとく新しいブランドを打ち出してきたが、その度にスカルバは、店の基本概念を変えることなく、内外装すべてについて、それぞれのブランドのコンセプトに応じた斬新なデザインをつくりだしている。

ショップの開店を希望する経営者は店舗を予め用意した上で、ベネトン社に許可を求める。その後出店ブランドを選び（「ユナイテッド・カラーズ・オブ・ベネトン」「012」「シスレー」など）、その販売権を取得するために、プレファブ化した壁、床、天井および什器、ハンガー、照明器具などの内装用のパーツを購入しなければならない。パーツはトレヴィゾにある工場から現場に直送され、組み立てた後に経営者に引き渡される。これはフランチャイズとは異なるベネトン独自の方式である。現在では新しい商標「United Colors of Benetton」の名のもとに世界120カ国に広がっている。

My Market

最初の店舗は1966年にコルチナに出店されたが、スカルバが手掛けたのは1968年のパドヴァ中心街の店舗からである。出店は繁華街で、面積40～60m²とし、

商品構成は、若者を対象とした比較的低価格のセーター、シャツ等を揃えている。こうしたショップコンセプトに対し、スカルバは、当時の店舗概念を覆す構成を行っている。まず、店の中央に矩形のテーブルを配し、店員と客とを仕切るカウンターを排除してオープンな接客が行えるようにした。さらに棚を店一杯に配し、客が商品を直接手にとって見られるようにした。店内が隈無く照らされるように照明を施し、あたかも様々な色が散乱して溢れているかのように見せた。この陳列方法は今では世界中のブティックの形態として広がっているが、当時のイタリアにおいては初めての試みであった。この1号店から現在では、7000件を超える店舗が世界中につくられた。それらの店舗デザインはすべてスカルバのものである。

Tip Tap

この店は、数多くあるベネトン社のショップの中でも、シンプルなおしゃれな仕上がりとなっている。ベネトン社が本格的に靴専門店を展開するにあたってノウハウを蓄積するために、スカルバはふたつのタイプの店舗を用意した。そのひとつとして、靴を箱に入れたまま展示するという斬新なディスプレイ方法を採用した。天井と壁はパンチングメタルで仕上げている。この経験を経て、次の靴専門店シリーズ「Di Varese」が生まれたのである。

012

1972年、ベネトン社は0～12歳までを対象とする子供服の製造販売を開始した。店舗の規模は40～50m²で、当初のバージョンでは、床と天井以外を「My Market」から流用し、ファサードはイメージカラーの黄色で着色した鉄骨枠を用いた。1981年にはセカンドバージョンが開店し、樺の木が家具や床など内装全般に用いられている。天井は35cm幅の樺合板と、照明が組み込まれた65cm幅のプラスチック板がはめられている。

Merceria

1972年、他のシリーズよりもより洗練された若者を対象としたショップが展開された。これは、ひとつの街にさまざまなベネトンショップを構えるというベネトン社の戦略の一環であった。スカルバは、内装をマホガニーで統一し、金具に真鍮を施し、落ち着きと暖かさをもった居心地の良い大人の感覚のショップに仕上げた。「United Colors of Benetton」のショップデザインは、このMerceriaが発展したものである。

Jean's West

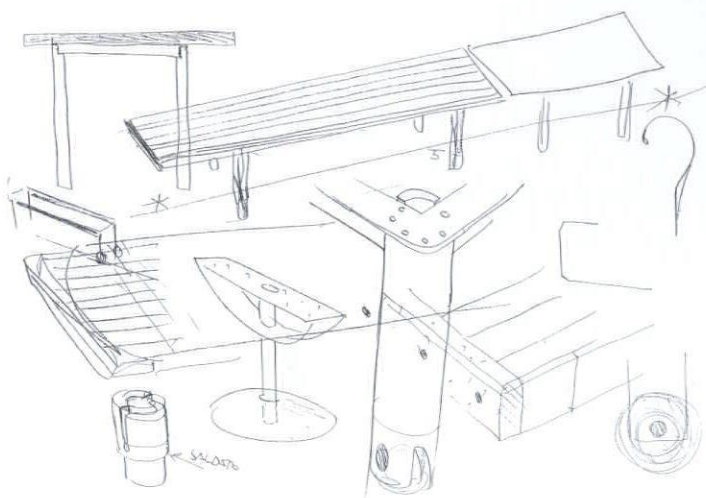
70年代初めには、イタリアでもニットウェアとジーンズの組み合わせがひとつのスタイルとして確立し、ベネトン社でもジーンズの製造販売に乗り出した。74年ルチアーノ・ベネトン会長が米国旅行中に考案した「Jean's West」の誕生である。規模は50～70m²、「形式にとらわれない思考をもった人」をターゲットとして、ジーンズ、パンツ、シャツなどを展開した。これに対してスカルバは、明るく輝く箱をコンセプトにショップデザインの現代性と客の自由意志という本質を突いたものを提案し、他の商店建築デザインに大いなる影響を与えることになった。

United Colors of Benetton

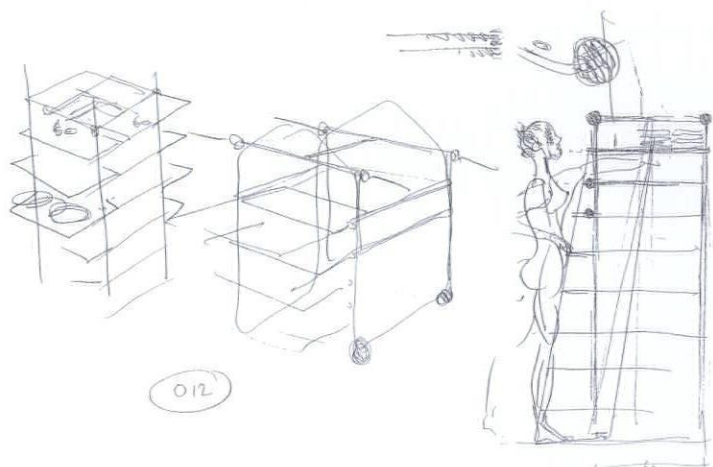
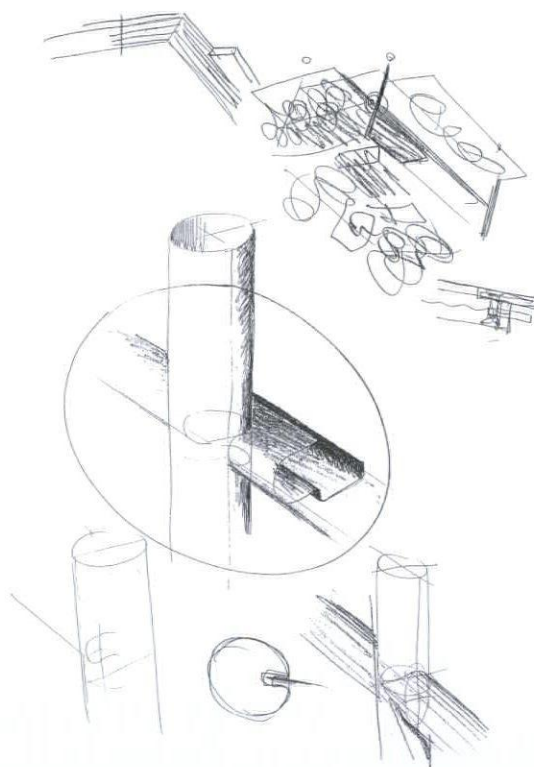
80年代後半になるとベネトンショップの立地条件が変化してくる。それまでは面積40～60m²の小規模な店舗だったが、百貨店などこれまでベネトンの出店に興味を示さなかった大規模店が、ショップの出店を希望するようになってきた。そのため店舗面積も広がり、なかには400m²以上のものも現れた。そうしたショップでは、ベネトンのいくつかのシリーズを集めた複合店として商品を展開することとなった。「United Colors of Benetton」の名称とそのショップイメージは、複合店という新しい店舗形態のために生まれたものである。このような形態の店舗は内装の寿命が短いため、エレメントはごく簡単に構成された。

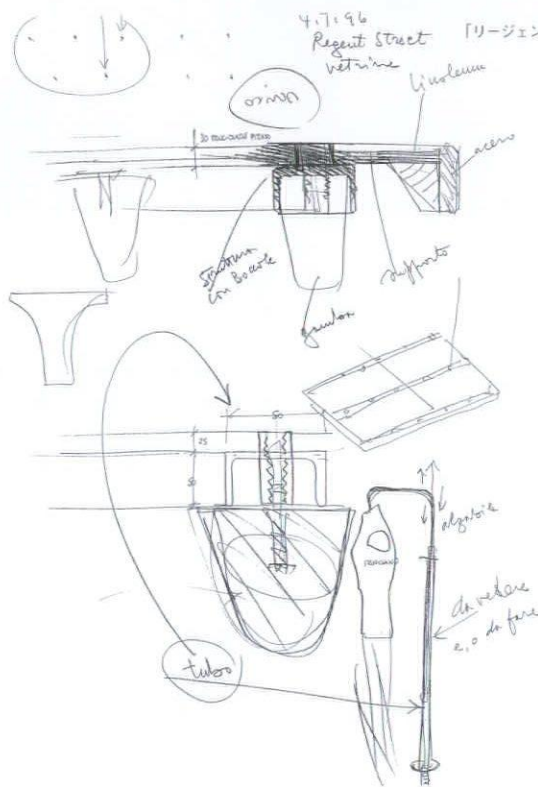
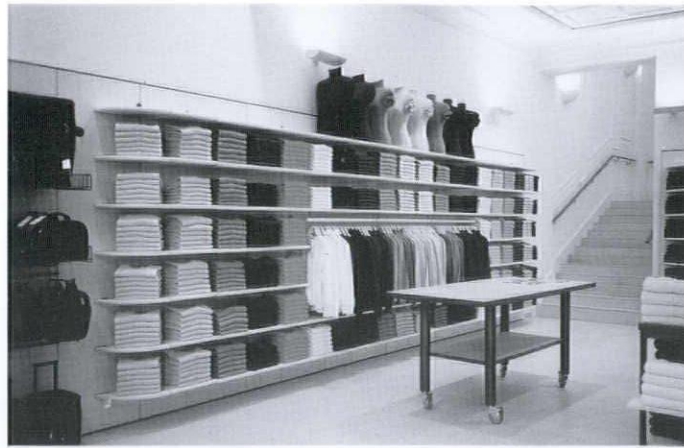
ユナイテッド・カラース・オブ・ベネトン

United colors of Benetton
London, 1996



「溶接する」





「パイプ」「マネキン」「上下に可動」「見てから決める」

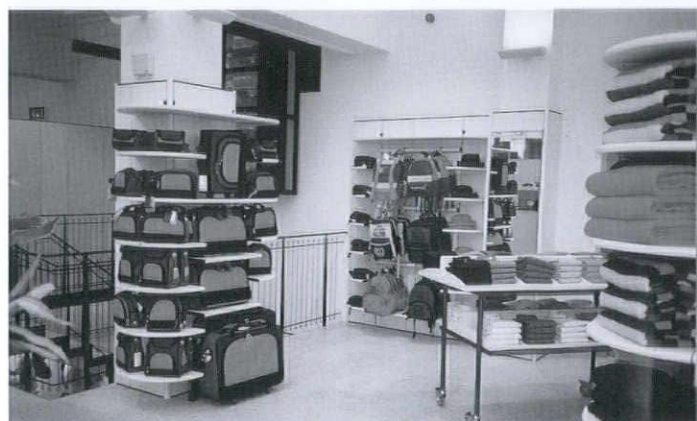
「リージェント・ストリートのショーウィンドウ」

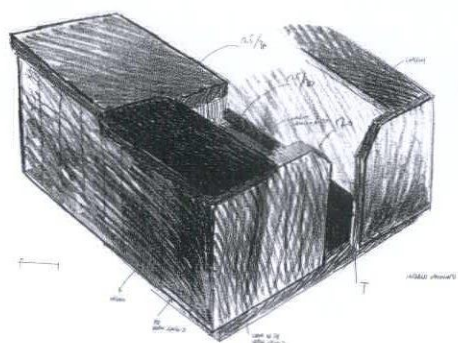
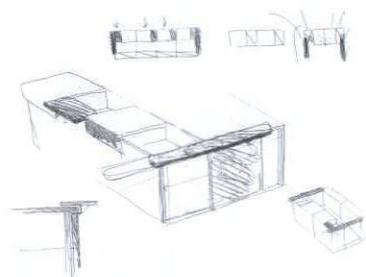
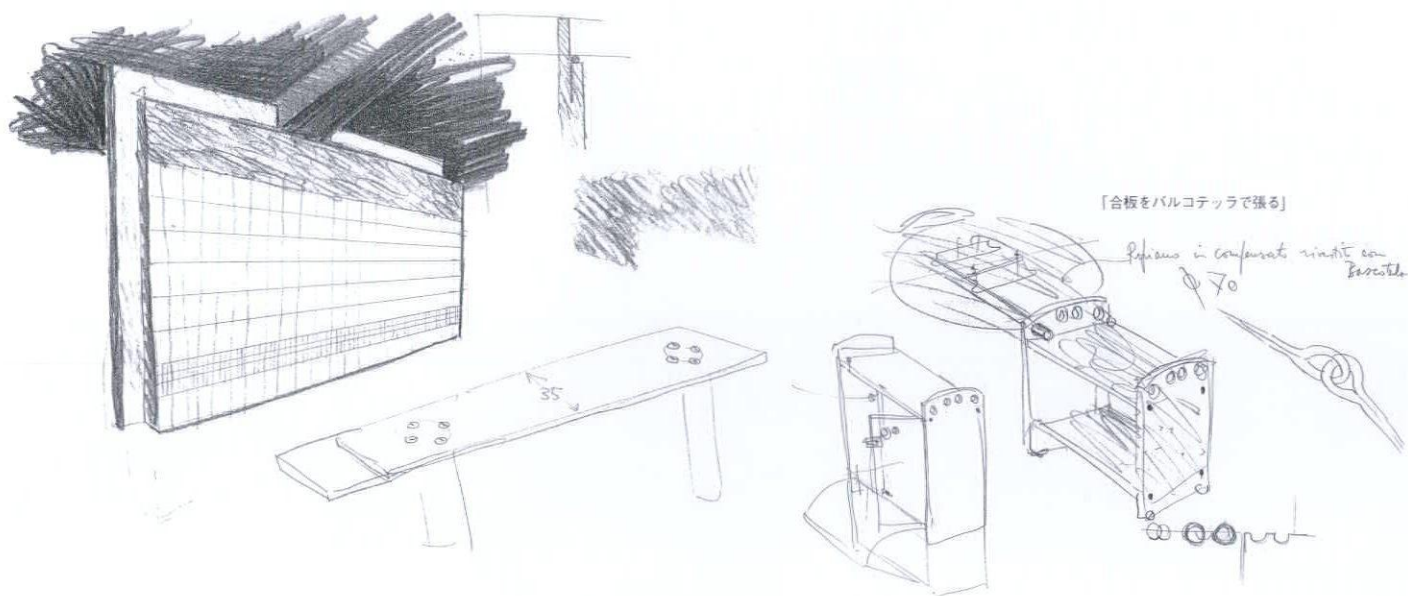
「アクリル」

「3mm厚のパーティクルボード」

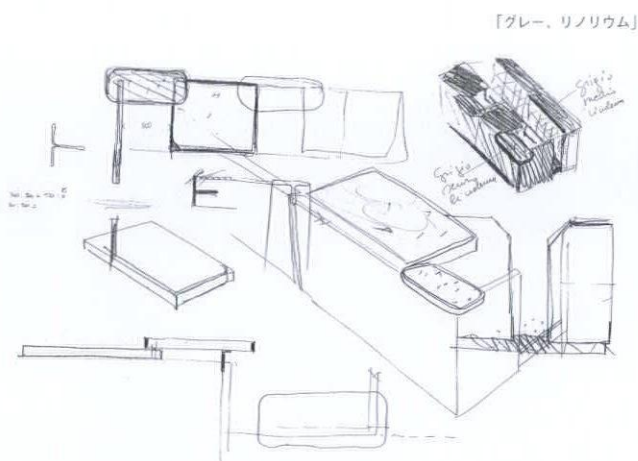
「リノリウム」「カエデ」「骨組みに穴を空ける」

「脚」「支える」





「リノリウム」「リノリウム、グレー」「内側はメラミン張り」「木」
 「鉄をグレーに」
 「鉄の平板」「鉄の平板、グレーに」「T型」



ユナイテッド・カラース・オブ・ベネトン

United colors of Benetton
Tokyo, 1996



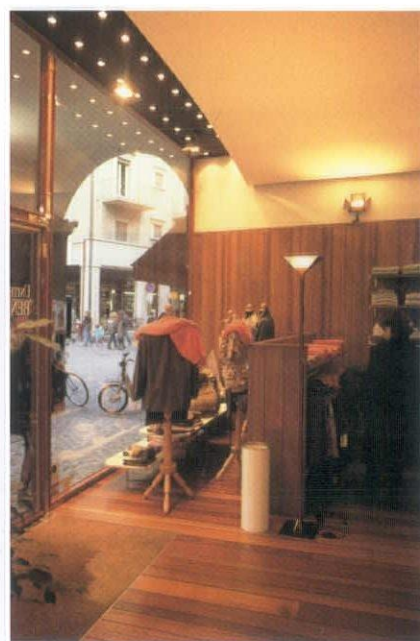
マイ・マーケット

My Market, 1968



メルチェリア

Merceria



シスレー

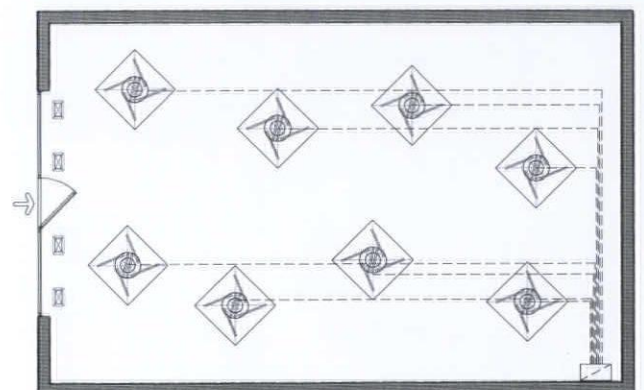
Sisley



カタログより



「サインを貼る
窓枠、鉄に黒を塗りその上に透明ニスを塗る。押し縁はイロコの木」



「配電盤、シスレーランプ、HQIランプ埋め込み
「シスレーランプ」の配置は商品のディスプレイによるが、10m²ご
とに一律の割合で設置する



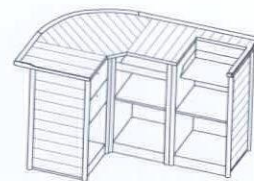
中央、ハンガー掛け



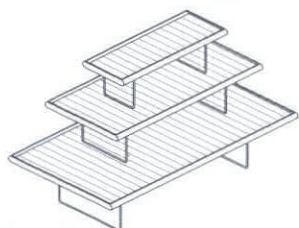
ディスプレイテーブル 1500×700



ディスプレイテーブル 1150×700



会計カウンター



3段式ディスプレイ棚



傘立て



灰皿



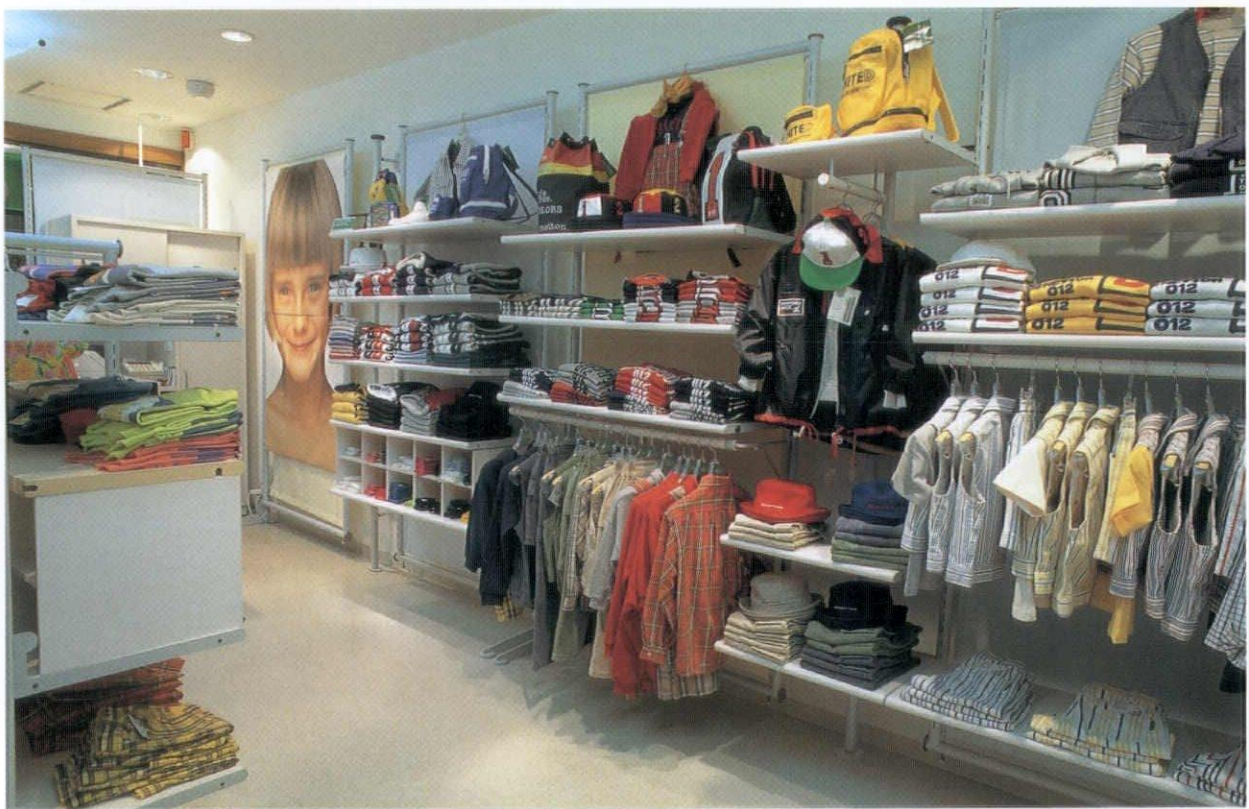
ゴミ箱



傾斜可能ディスプレイ棚

012

012, Tokyo, 1996



012 (ファーストバージョン)

012 (First version)



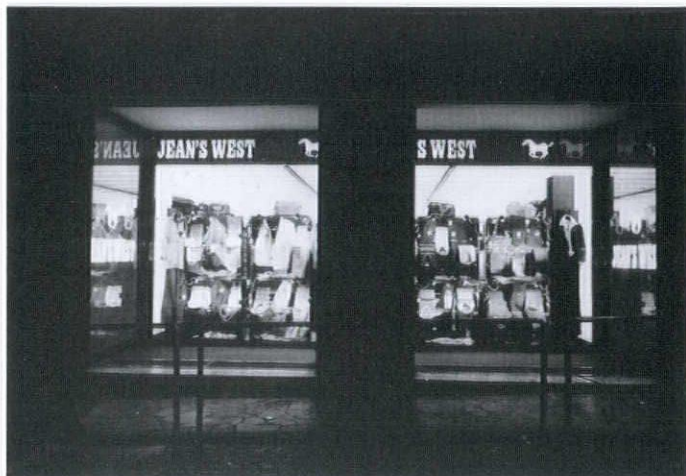
012 (セカンドバージョン)

012 (Second version)



ジーンズ・ウエスト

Jean's West, 1974



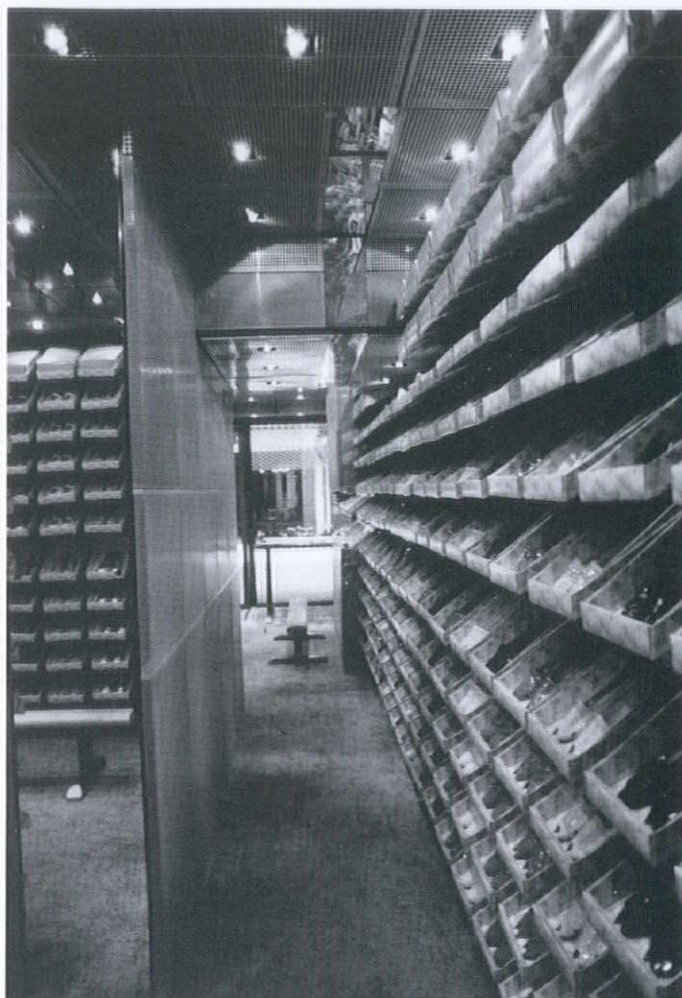
トマト

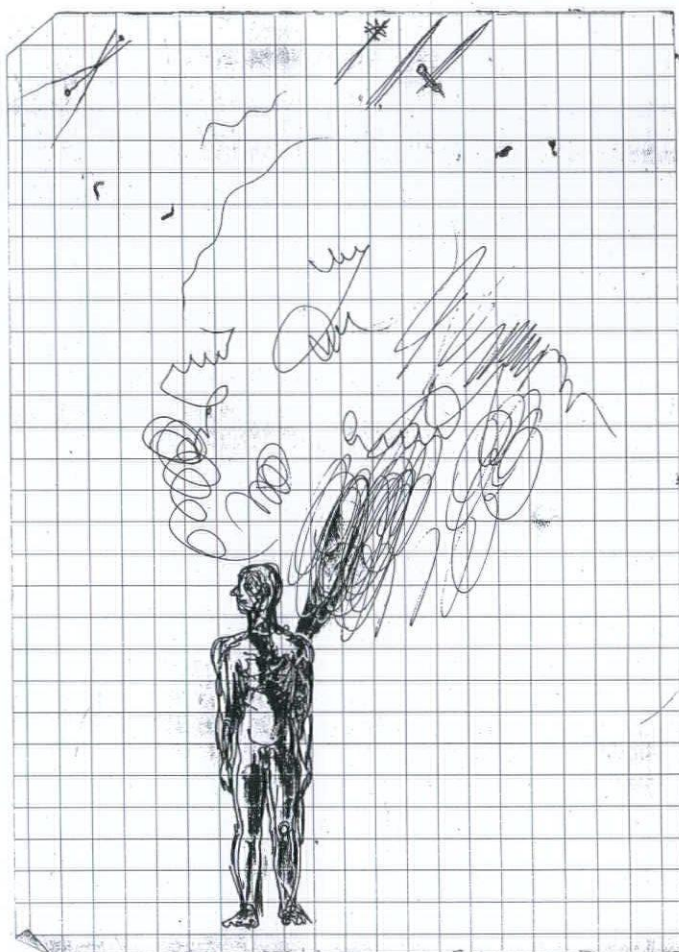
Tomato, 1975



ティップ・タップ

TipTap

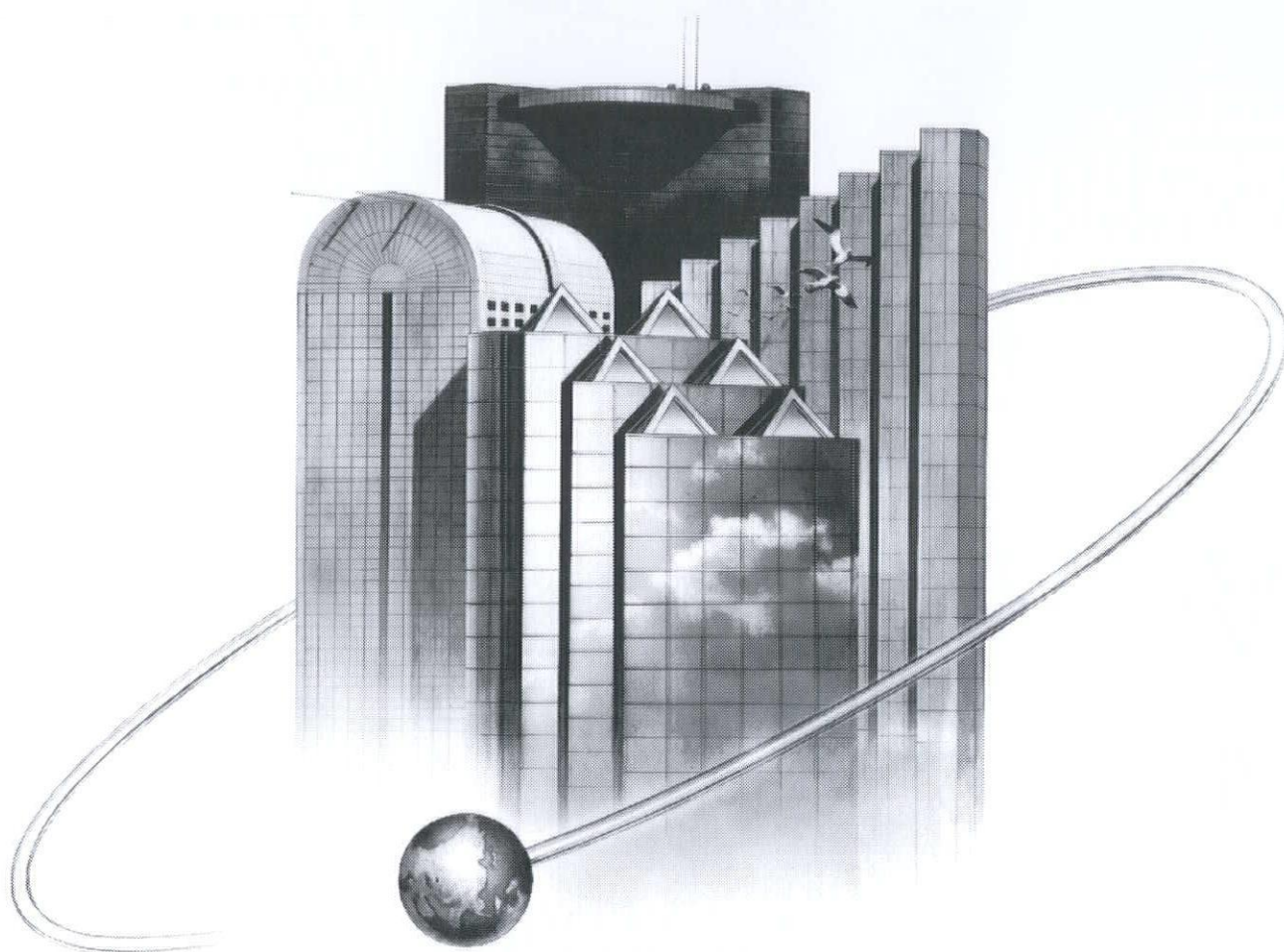




作品解説
豊田博之

写真・資料提供
豊田博之
アフラ+トビア・スカルパ、Benetton Group Spa
金子昌弘 p.52、p.56

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03 (3502) 6111

S

D

SDレビュー1997作品募集

第16回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

募集要項

R

e

V

[応募者の資格]

特に必要なし。

[提出物]

プレゼンテーション:

1. 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等、特に制約はなく、各自選択すること。表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査に当たっての主要な評価の対象とはされない。
2. プロジェクト名、建築用途、施主名(事業主体名)、工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、建築面積、延床面積。
3. 400字以内の設計趣旨文(省略してもよい)
以上をA3判用紙(420×297mm)4枚以内に

まとめたもの、パネル化は不可(クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します)。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。2, 3は添付書類に含めず1と共にA3判用紙に記述することに注意。

添付書類:

プロジェクト名、応募者(=設計者)名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所(以上、組織の場合は、その担当者について明記)、応募者への連絡先(自宅か勤務先か明記のうえ、郵便番号、住所、電話番号、FAX番号)、共同設計者名、設計者略歴(入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします)。以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

[応募の受付]

●開始 1997年6月24日(火)

●締切 7月1日(火)

郵送または持参のこと。(持参の場合は平日の午前11時から午後5時まで。郵送は当日消印有効)受付後、受領通知を発送いたします。提出後7日以内に通知が届かない時は、SD編集部へお問い合わせください。

[提出先]

〒107 東京都港区赤坂6-5-13
鹿島出版会SD編集部 SDレビュー係
TEL.03-5561-2555 FAX.03-5561-2565
(地下鉄千代田線赤坂駅より徒歩5分
鹿島建設赤坂別館4F)

1

9

9

SD

[募集対象]

実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア 国外に建つものも含める。
但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、
実施の見込みが全く無いもの、コンペの応募作品(公開、指名、入選、落選を問わず)は対象外とする。
応募作品点数は原則として一人一点に限る。

[主催]

鹿島出版会SD編集部

[審査員]

香山壽夫(建築家)
渡辺邦夫(構造家)
岸 和郎(建築家、京都工芸繊維大学助教授)
園 紀彦(建築家)

SD Review 1997

The 16th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

i

e

w

[結果通知]

前記の審査員により15点前後が選抜された後、
入選者のみに7月下旬までに書類にて通知する。

[提出物の返却]

提出物(図面、添付書類等)は、1997年8月19日(火)から
9月24日(水)までの平日午前11時から午後5時までの
間に、鹿島出版会SD編集部まで直接受取りに
来られた場合に限り、返却します。但し、
梱包材、クリアファイルなどはお返しできません。

[入選者の出展]

入選者は通知後、指定期間(約40日間)以内に、
展覧会に出展するための図面、模型、その他の
プレゼンテーションを製作し、後日指定の

日時、場所に搬入する。

この作品は、SD1997年12月号に掲載され、
誌上発表される。入選者には製作費用として、
一律5万円が支払われる。

[SDレビュー1997入選展]

東京展

期間: 1997年9月10日—9月21日(予定)

会場: 東京都渋谷区猿楽町18-8

代官山ヒルサイドテラスF棟
ヒルサイドフォーラム

大阪展

期間: 1997年9月26日—10月2日(予定)

会場: 大阪府南河内郡河南町東山

大阪芸術大学芸術情報センター

[誌上発表]

SD1997年12月号(予定)

[鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞]

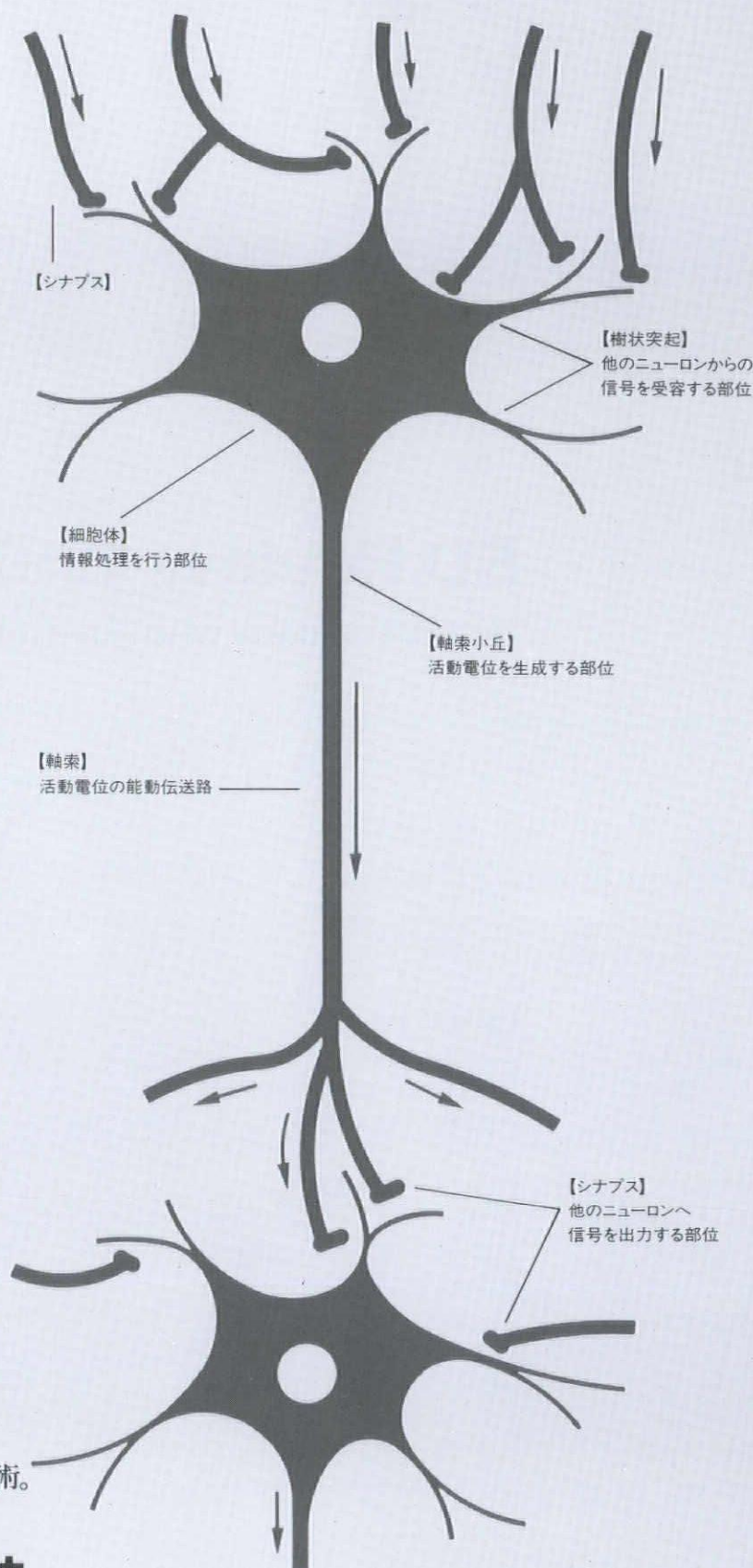
入選展に展示された作品の中から、
鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞を選び記念品を贈呈
します。発表はSD1997年12月号誌上にて行う予定。

[お問い合わせ]

SDレビュー1997についての御質問は、
SD編集部へハガキまたはFAXにて
お問い合わせ下さい。宛先は提出覧参照のこと。

7

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



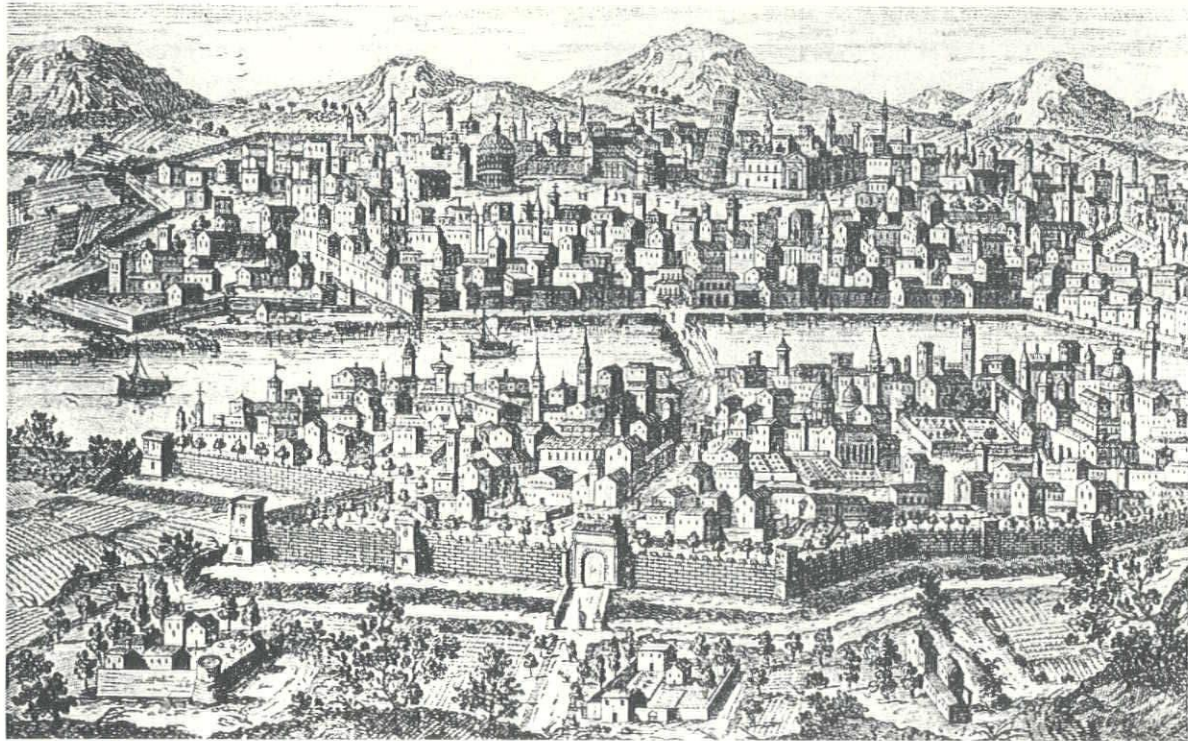
私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もともと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマに込めるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-35562135

時代の呼吸に応える技術。



都市ピサとマッシモ・カルマッシの仕事



首都ピサのながめ (Salmon, 1787年)

Pisa and the Works of Massimo Carmassi

記憶と現代建築

マッシモ・カルマッシ／訳＝黒田泰介

イタリアは、都市と建築が複雑な歴史的積層をもつ、非常に特異な国である。長い歴史を誇るこの国の都市と建築は、その多くが二千年も昔の古代ローマ期に起源をもつ。中世期に荒廃しながらも復興を遂げ、その後ルネッサンス期から19世紀の終わりに至る数世紀の間、都市と建築は改変され続けてきた。第二次世界大戦は大破壊を引き起こしたものの、結果として過去との調和において再建することを学ぶ必要性をもたらした。

各時代における建設行為は、今日数多くの改変の跡を残す建物の構造材と初源的な空間の中に、蓄積された価値を残している。このことは、長い歳月をかけて多くの建築家たちによってつくられた、大聖堂、洗礼堂、カン

ポサント(聖墓所)、斜塔によって構成されるピサのピアッツァ・ディ・ミラコリのような、最も重要な記念建造物についても同様である。このような古い建造物は数世紀にわたり、破壊されることなく、また自身の文化的・物質的な歴史の記憶を失うことなく、異なった利用法に従った改造を受け入れるキャパシティを維持し続けてきた。実際、これらの建造物の美しさは、その複合した建造の歴史に由来するものである。このようなことから必然的に私は、イタリアの現代建築家達は近代の建築文化の基礎を、歴史的都市に対する知識と理解に置くべきだと思っている。

フィレンツェ大学建築学部で建築を学び始めて以来、「記念碑的な聖墓所」のごとき建物とモニュメントの実測調査を通じて、私は多くのエネルギーを自分の都市・ピサの研究に傾けてきた。こうした実測調査によってつくられた1/50の巨大な図面群は、多大な作業時間を要する真の芸術作品といえる。

私の建築は、歴史的建造物のように強固で堅牢でありながらも、同時に現代文化に深く結

びついている。これらは古代ローマ期のレンガ壁のような伝統的技術によってつくられているが、一方でその壁体は鋼材で補強され、また現代建築の最も主要な特質のひとつである空間の流動性を得るために、鉄やガラスといった現代の建築材料が用いられている。

〈サン・ミケーレ・イン・ボルゴ地区の再生計画〉のような、古い建築物との隣接が要求される事例では、シンプルでニュートラルな、時間を超越した建築が必要とされる。新たに挿入された建築は、既存の中世期の石造・レンガ造の構造体を取り込むことによって、より豊かなものとなった。外観のシンプルさに対し、軽いパーテーションで仕切られた、現代のかつ機能的で住み心地のよい内部空間は、複雑な空間と機能をもつ。レストア(修復、再生)は私の仕事の中で、重要な部分を成している。レストアの作業において、私はより洗練された設計姿勢が要求されるインテリア・デザインに対して非常な注意を払っている。

修復作業中に再発見された過去の装飾や構造体をもつ内部空間の独特の美しさは、職人的手法と現代技術を用いて厳密に保存され、

Memory and Contemporary Architecture

Massimo Carmassi / Translation by David Mount

Italy is a country very unique for the complex layering of its cities and its building fabric. Here the cities and the architecture have a long history; many were born in the Roman era, fell to decay in medieval times and rose again, a thousand years ago. Then they were transformed during the Renaissance and the following centuries until the end of the 19th century. The war caused enormous destruction, consequently, it became necessary to learn to rebuild in harmony with the past.

The construction of every period has sedimentary value in its original space and structure, today what remains is the result of hundreds of interventions. Even the most important monuments, like the Piazza dei Miracoli in Pisa with its cathedral, baptistery, holy cemetery, and leaning tower, were created and built over several generations by the work of many architects. These antique buildings have had for centuries, and continue to have, the capacity to be transformed for different uses without being destroyed and without losing the record of

their cultural and material history. In fact, the beauty of these buildings comes from this complex building history. Consequently I believe that contemporary Italian architects must base their modern design culture on the knowledge and understanding of the ancient city.

From the beginning of my studies at the Faculty of Architecture at the University of Florence I have dedicated much energy to the study of my city, above all through drawn architectural surveys of buildings and monuments like the Camposanto Monumentale. In this example the large 1:50 scale drawings are actual works of art that required thousands of hours of work.

My buildings are strong and lasting like the historic ones, and at the same time they are deeply tied to contemporary culture. They are built with traditional techniques like the ancient roman walls made of brick, reinforced with steel, and contemporary materials such as steel and glass which allow for the necessary

spatial fluidity, one of the prevalent qualities of contemporary architecture.

The adjacency to antique buildings, as in the case of the reconstruction of the Convent of San Michele in Borgo, forces the use of a timeless architecture, simple and neutral, enriched from the stone and brick of the medieval structure. The complex space and function is contained within the interiors, functionally modern and pleasing to live in, created with the use of light partitions.

An important part of my work is restoration where I dedicate much attention to the interiors and which requires a more sophisticated design attitude.

It is necessary to respect the delicacy and uniqueness of the interior spaces with their decorations and the archeological structure uncovered during the work, rigorously conserving them with traditional artisan methods and contemporary technology. Clearly this requires a profound knowledge of the building, achieved through the drawn surveys which help to

尊重されるべきである。このためには、建物に対する深い知識が必要とされる。このような知識は、修復された建築の基本的特質を形成する隠れた要素や建築的積層の知覚・抽出を助けてくれる、綿密な実測作業を通して得られるものである。

現代のデザインは、歴史的建造物の再生を進めるにあたり問題となる、採光、垂直動線、機械設備、サービスといった機能的な課題の解決を手助けしてくれる。鉄やガラス、集成材といった現代の材料の綿密かつ軽妙な利用は、レストアウロにおいて優れた効果をもたらす。

最終的に私のレストアウロの作品は、過去の姿を完璧に保存・修復したように見えると同時に、現代的であり、より豊かで、住み心地の良いものとなる。このような手法によって、数世紀に渡る歴史的記憶と建築的積層の保存、また現代的習慣にのっとった生活という住民の要求双方が同時に尊重される。

イタリア都市の郊外は、醜悪で無秩序な状況を呈している。この混乱を整理し住民の生活

を改善するためには、レストアウロとはまた異なった計画手法が必要とされる。そこには、強固なアイデンティティをもって、座標となる場を創出しなくてはならない。混沌に立ち向かうためには、その確かなモニュメンタルな性格によって場の文脈の中ではっきりきわだつ、シンプルで力強い形態を使う必要がある。レンガの〈チザネッロの集合住宅〉は、その形態は歴史的建築に想を得たものであるが、その実は完全な現代建築である。そのわかりやすい形態は、この建物の通称である歴史的な建築類型、「水道橋」の記憶を連想させる。

しかしながらより強い効果を得るためには、〈ヴィルゴ〉計画のような、広大なスケールで作業する必要がある。ヴィルゴはイタリア国立核物理学研究所のために計画された重力波測定施設である。総延長 6 km にわたるトンネルをもつ並外れた計画の規模は、風景の再構成を要する。洗練された現代技術の使用は、新たな建築と周辺の農業環境との調和のとれた共存を可能とした。

イタリアの美しい田園風景はとても繊細かつ貴重な存在であり、最大限の保護と配慮を

払われるべきものである。しかしながら、〈サン・ピエロ・ア・グラードの公共墓地拡張計画〉の小さな事例のように、私は環境の中のいくつかの部分改善しつつ、その中に建築を加えていくことは可能であると考え。サン・ピエロの墓地では、ゆるい円弧を描く外壁は既存建物の醜い側面を隠し、また季節ごとに変化する農業風景の背景をかたちづくり、ニュートラルな視界を生み出す。湾曲した外壁は同時に、死者への黙禱に適した、静謐で抽象的な内部空間を囲い込む。

ここで簡潔にあげたような私の考えは、フェラーラ大学建築学部における指導の基礎となっている。私はこの数年間、フェラーラで建築計画を講じている。私の教える計画手法は、我々の国独自の要求に敏感で、歴史的遺産の巨大な複雑さを解釈し得るイタリア人建築家の新世代の形成に影響を与えるものと信じる。

perceive and expose the hidden elements and layers that form the fundamental character of the restored architecture.

Contemporary design helps to resolve some problems of restoration, such as lighting, vertical circulation, mechanical systems, services, etc. using materials like steel, glass and timber with care and lightness.

At the end my restored buildings result completely conserved and at the same time modern, richer, and more pleasant to live in. Consequently, the need to conserve the memories and the materials of many centuries and provide for the requirements of the new inhabitants to live according to contemporary customs are both respected and achieved.

In the periphery of Italian cities, unpleasant and disorganized, it is necessary to adopt different design methods to remedy the disorder and to improve the life of the inhabitants, such as attempting to create places of reference with a strong identity. To oppose the chaos, I use strong and simple

forms, that are distinguished in the context with a certain sense of monumentality, as demonstrated in the brick apartment building of Cisanello, the form while inspired by classical architecture is perfectly modern. It is immediately recognized by its adopted name, the 'Aqueduct', in memory of the antique building type.

To obtain a stronger result it is necessary nevertheless to work in a larger scale as in the project Virgo, a scientific installation for the measurement of gravitational waves, designed for the National Institute of Nuclear Physics. In this project the sheer dimension of the intervention, 6km in length, requires the recreation of the landscape, where the use of sophisticated modern technology allows the joining together harmoniously of the new architecture and the surrounding agrarian environment.

The Italian rural landscape is very delicate and valuable requiring great respect. However, I believe it is possible to

add architecture perfecting some of the environment's elements, as in the small cemetery of San Piero. Here the confining semicircular wall creates a neutral horizon that hides the deteriorated sides of the existing structure, forms a backdrop to the fields that transform with the changing seasons and at the same time closes a peaceful, abstract interior space, adapt for contemplation.

The principles summarized here are the base of my work at the Faculty of Architecture at the University of Ferrara, where I have been teaching for some years, perpetuating a design method that I believe could influence the formation of a new generation of Italian architects more sensitive to the specific needs of our country and able to interpret the great complexity of our historic patrimony.

歴史的都市ピサの近代化に挑戦した男

野口昌夫

私が初めてマッシモ・カルマッシに会ったのは1985年、ピサ西方のアルノ川北岸にあるアルセナーレ・メディチエオ（メディチ家の造船所）（図1）で開かれた彼の展覧会“Progetti per Una Città（ひとつの都市のためのプロジェクト）：Pisa 1975～1985”のオープニング・レセプションの席上であった。フィレンツェからはアドルフォ・ナタリーニ、ランフランコ・ベンヴェヌーティ、ミラノからはジャンカルロ・デ・カルロなどが顔を見せていた。私の師匠であったベンヴェヌーティから紹介を受け、カルマッシと向き合う。当時40歳になったばかりのその男は、黒々としたあご髭を頬まではやし、眼光は異様に鋭かった。何かをこれから成し遂げようとする気迫と情熱がそこには感じられ、こちらはある種の緊張を強いられる。歴史的都市ピサの近代化を一手に引き受けてしまった建築家は、口を開くやいなやピサに対するインテルヴェント（介入）

の新しい方法論について語り続けた。

1943年、ピサに生まれたカルマッシは、フィレンツェ大学建築学部を1970年に卒業した。その後、わずか4年にしてピサ市のUfficio Progetto（都市計画部）を設立し、ディレクター（建設監）としてのスタートを切る。当時はまだ31歳の若さとその大胆な挑戦に対し、トスカーナの建築界は、猜疑と嫉妬が入り混じった目で見ていた。ほとんどの人は彼をambizioso（野心家）と評した。

歴史的街区内の最初の大仕事は〈パラッツォ・ランフランキの修復〉（1976～1980年）（図2）だった。ピサ東方のアルノ川南岸に建つこの16世紀のパラッツォは、もとは中世のカサ・ドッレ（塔状住宅）4つとスキエラ型住宅ひとつが合体して一棟をつくっている（図3）ため、特にファサードの復元についてピサ市民の間に大きな議論を巻き起こした。つまり、現状を16世紀に戻すのか、中世のある

時期に戻すのか、あるいは変化が顕著な複数の時期を少しずつ残して見せるのかといった問題である。結局、カサ・ドッレの骨組が16世紀のパラッツォのファサードに浮かび上がるような復元の表現をカルマッシは採用した（図2）。これについては彼が著した“Un Palazzo Una Città: il Palazzo Lanfranchi in Pisa（ひとつのパラッツォとひとつの都市：ピサのパラッツォ・ランフランキ）”に詳しい。この1980年の出版によってほとんどのピサ市民は納得したようだが、復元の理念と方法について異論を唱えていた。というより以前からの論敵であったピサ大学教授ジャンカルロ・ヌーティからは“Tutto da Rifare（全部やり直せ）”という題の論説が突きつけられ、激しい批判が浴びせられた。

その後、1979年、カルマッシはふたつの大事業に着手した。ひとつはポンテ・ディ・メッツォという都市中央部の橋を北岸にわたっ

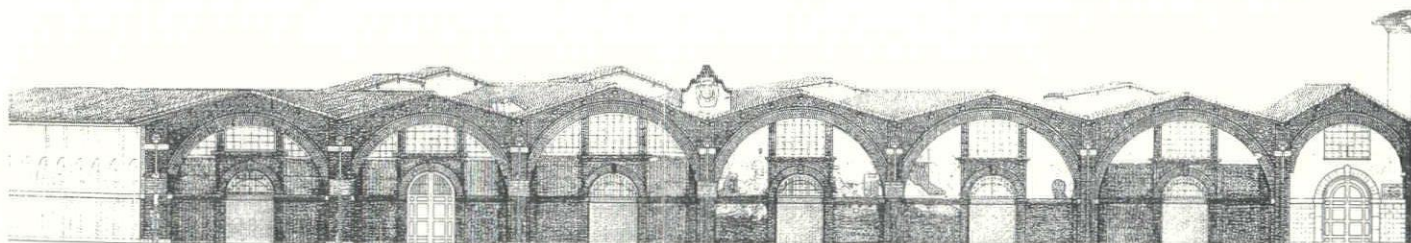


図1 アルセナーレ・メディチエオ（メディチ家の造船所）のアルノ川側立面図

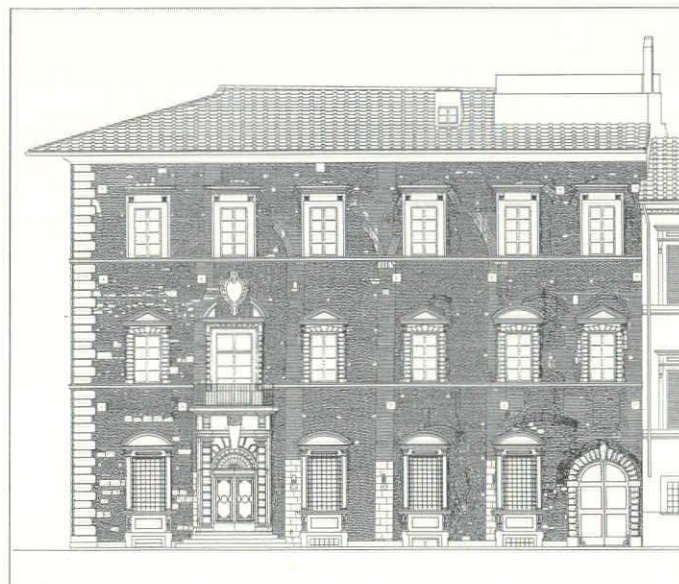


図2 パラッツォ・ランフランキのアルノ川側立面図：カサ・ドッレの骨格が16世紀の立面に浮かび上がる

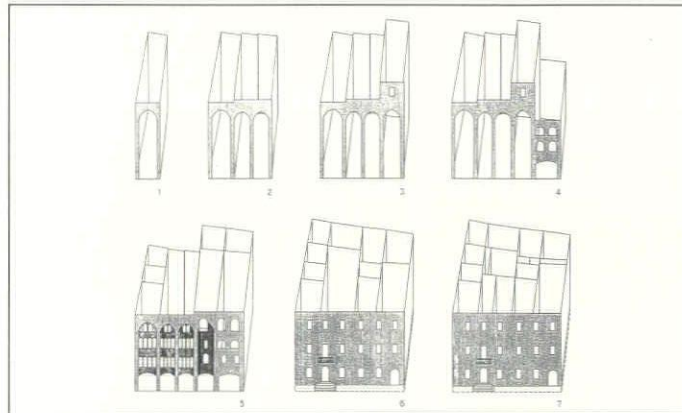


図3 隣接した4つのカサ・ドッレとひとつのスキエラ型住宅が合体して16世紀のパラッツォになる過程

てすぐ右側にある〈サン・ミケーレ・イン・ホルゴ地区の再生計画〉(1979~1991年)、他はピサの〈中世市壁沿いの復興計画〉(1979~1990年)である。前者は12世紀のカサ・トッレ、13世紀の聖堂と16世紀のクロイスターが積層した地区に、さらに第二次大戦の爆弾という外的圧力が加わって時間の軸がばらばらに飛び散ってしまった状況にあった。歴史的街区内でも最も難しいケースであり、考古学的調査から最終提案に至るまで膨大な時間が費やされた(P.73~P.75を参照)。

後者の市壁沿いの復興計画はふたつの目的を持っていた。ひとつは、市壁自体を復元するだけでなく、市壁内と市壁外の田園との伝統的な関係性を取り戻すこと。もうひとつは、オープン・スペース、モニュメント、産業施設を公共緑地の中に配置し、市壁沿いの歩行者道路で連結することであった。西側市壁沿いのチッタデッラ・スタンパーチェ地区(図

4)では初めにふれたアルセナーレ・メディチェオやグェルフィの塔などの重要な建造物と現代の機能と動線をからめた総合的な提案がなされた。また東側市壁沿いでは、アルノ川南岸に16世紀初頭、フィレンツェがアントニオ・ダ・サンガッロに再建させた要塞フォルテツァ・デル・サンガッロの再生も含まれている(図5)。この市壁沿いの総合的な復興計画は部分的に実践され、今なお進行中である。

以上のように、パラッツォ・ランフランキという都市の「点」から出発し、サン・ミケーレ・イン・ホルゴ地区という「面」、市壁という都市の境界を決定していた「線」の内側と外側を再生させる事業を遂行してきたカルマッシは戦後、本格的にピサの都市再生計画を実行に移した初めての人物であった。ピアノ・レゴラトラー・ジェネラーレ(都市基本計画)の策定にも参加しているカルマッシは、

都市フィレンツェの戦後の都市計画を正しい方向に導いた師エドアルド・デッティの啓示を踏まえて、それをピサの文脈の中に実践しようとして奮闘してきたといえる。

1990年、彼はUfficio Progettoのディレクターを辞め、1974年以来16年間続けたピサへのインテルヴェントの最前線から退いた。だがこの間に育てた後進たちが彼の理念を受け継いでいることはいうまでもない。私が初めて会った1985年は、今から考えるとカルマッシが最も充実していた時期で、歴史的都市ピサの近代化に挑戦していたその男の姿が今でも忘れられないのである。

●のぐち・まさお／東京芸術大学助教授

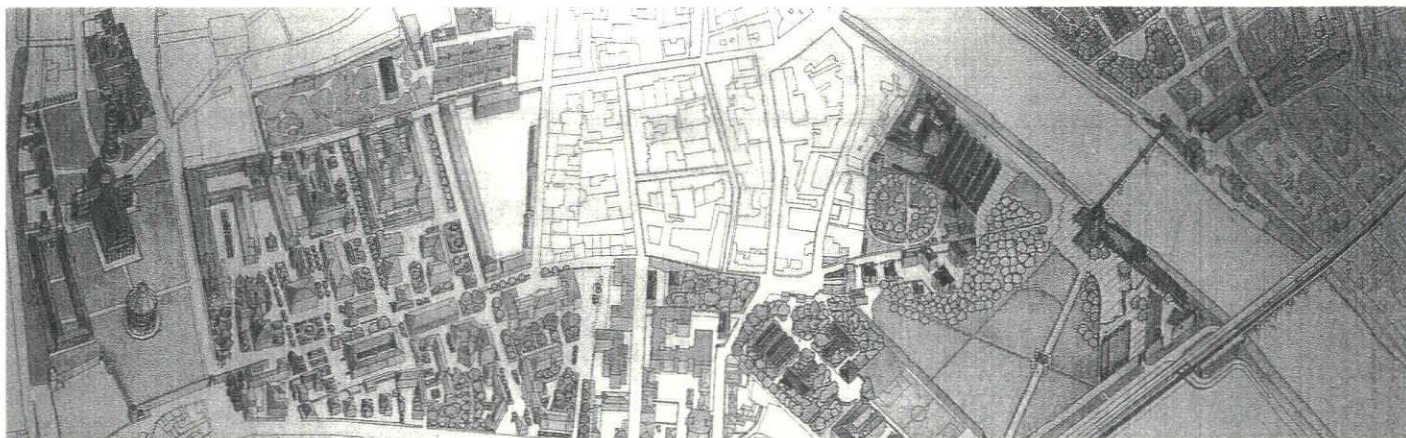


図4 中世市壁沿いの復興計画(西側のチッタデッラ・スタンパーチェ地区)

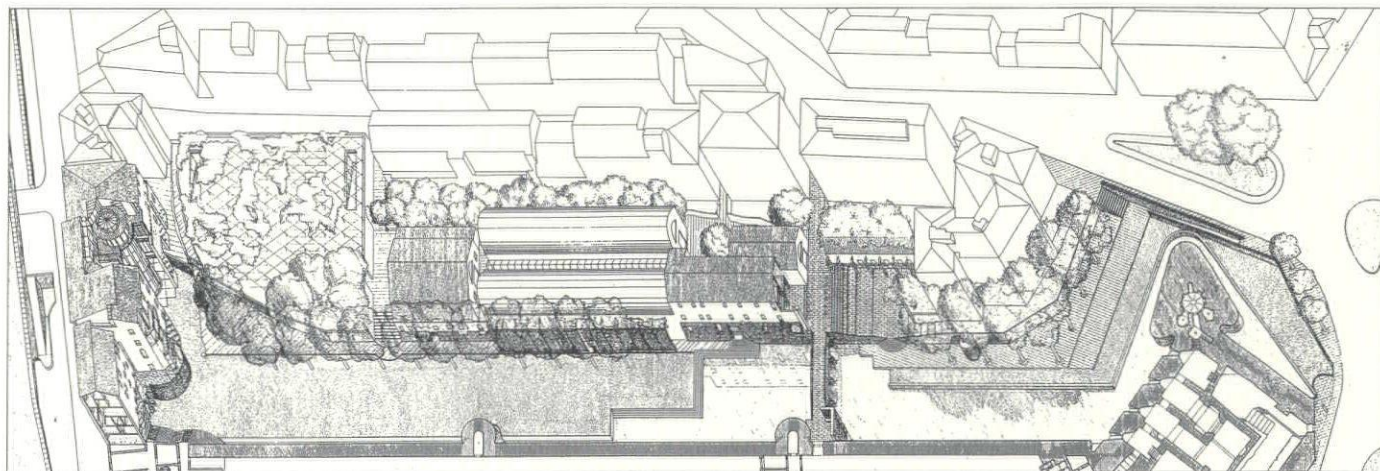


図5 中世市壁沿いの復興計画(東側のフォルテツァ・デル・サンガッロ周辺)

ピサの都市形成史と歴史的建築

黒田泰介

トスカーナ州の、ティレニア海岸近くに位置し、人口10万4千人、プロヴィンチャ（日本の県に相当する）の首都であるピサは、過去
の海運共和国の威光を今に伝える数々の美しい記念建造物を残す司教座都市である。ピサ・ロマネスク様式の大聖堂、斜塔（鐘楼）、洗礼堂、カンポサント（墓所）が一同に会するピ
アッツァ・ディ・ミラコリ（奇跡の広場）の存在によって世界的な観光地である一方、中
世からの歴史を誇る著名な大学「サンピエンツァ」を擁する学問都市という一面をもつ。
プロヴィンチャの首都として商・工業（ガラス、金属、化学薬品）の中心地であり、都市
の拡張は現在も続いている。

ピサの起源は紀元前5世紀にティレニア海沿岸北部に進出した、エトルリア人^{*1}の居住地に始まるといわれる。ピサは第二次ポエニ戦争よりローマ帝国と同盟を結び、後にその軍事植民都市となった。地中海西部における戦略上、ローマ帝国末期に至るまでピサは重要な海軍基地として機能した。歴史的な中心地区やその周辺で発掘された数多くの石棺、石碑と、北部の市壁近くに現存するローマ公衆浴場の遺跡を除き、現在の都市に、学術的に立証されるローマ期の遺構は残されていない。ローマ期のピサは今日も中央部を流れるアルノ川に加え、中世期まで北部に存在したアウセル川^{*2}との2本の河川にはさまれた中州という、防衛・軍事的に有利な位置にあった。ロ

ーマ期の都市平面はフィレンツェのように現在の都市組織の中に引き継がれてはいないものの、典型的な碁盤目状の平面をもつローマ植民都市がアルノ川北岸、現在の歴史的な中心地区の中央部にあったものと考えられている^{*3}。北部に位置する前述の公共浴場の他、ローマ植民都市に不可欠な都市施設である円形闘技場もしくは劇場が、ローマ都市の北東部に存在したとされる^{*4}。

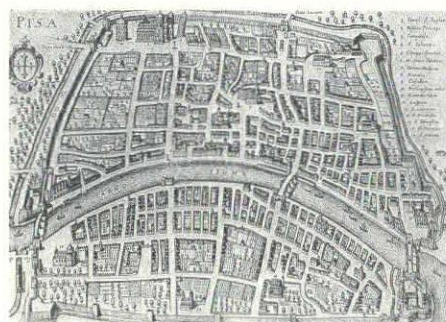
ローマ帝国崩壊後、ゴート、ランゴバルド族といった異民族によるイタリア支配期においても、ピサは海運交易に重要な都市として存続し、後に続くカロリング朝期にはジェノヴァ、ヴェネツィアと共に、地中海交易の中心都市として栄えた。中世初期、ピサの都市域はローマ期よりも大きく縮小し、不規則な路地の道路網に支配される不定形な平面をもった。海運交易に活動の重心が置かれたため、この都市核はアルノ川寄りにその重心を移動した。この調密な中世期の街区は、現在も歴史的な中心地区の都市平面内に観察される。

11世紀にピサはコムーネ体制（都市国家）を確立、地中海交易に根ざした独立共和国となった。第一次十字軍の際には大量の艦船をもって参加し、東方に数多くの植民都市をつくり交易を広げ、莫大な商業的利益をあげた。続く12世紀、海運都市国家ピサの繁栄は頂点に達した。このギベリーニ（皇帝派）都市が数々の記念建造物を建設し、市壁を拡張し、

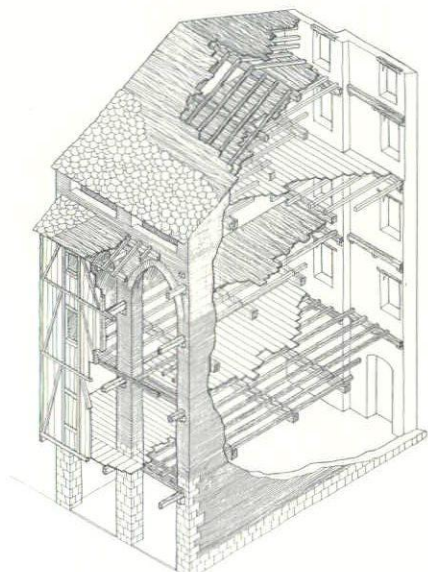
また由緒ある大学を創設したのもこの時代であった。海運共和国として経済的、商業的な発展をとげたピサは、その都市域も驚異的な拡張・発展を見せた。

ピサの市壁は12世紀半ばに、前述の中世期の都市核を中心として、都市外の北東部に建設された大聖堂、また商工業の活発化に伴い東部とアルノ川南岸に発展していたボルゴ（市壁外部につくられた新居住区）らを取り囲んで、大規模に拡張された。市壁の建造は都市国家にとって防衛上の面からも、また都市の権勢を諸国に示すためにも最重要課題であった。この市壁建造以前には都市防衛施設として、旧都市核を囲む、一部にローマ期の壁体を転用した市壁と、ボルゴ周囲につくられた堀・木製の垣根が存在していた。将来の都市の発展と拡張を見越して、広大な地域が市壁に内包されることとなった。市壁の建造は大聖堂の周辺から始まり（1155年）、都市活動の中心地であるアルノ川北岸の旧都市核がまず最初に囲み込まれた。行政の中心は古い都市核内部のセッテ・ヴィエ（七本の道）広場（後のカヴァリエーレ広場）とその周辺に置かれた。アルノ川を挟んだ南岸のボルゴ^{*5}は後に12世紀後半になって市壁に囲まれ（1184年）、ピサの都市域は同時代のトスカーナの近隣都市間において最大のものとなった^{*6}。

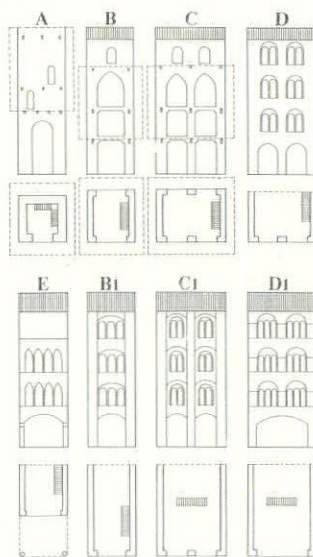
建築と彫刻に優れた中世ピサ芸術は、共和国の趨勢と時期を同じくして、11世紀から14



ピサ都市図(M. Merian, 1640年)



アルノ川沿いの塔状住居(Casa-Torre)復元図。道路に面して木造のはり出しバルコニーが付着する(Fabio Redi, 1991年)



塔状住居の各形式。左より建設年代順に並ぶ——最も古い形式Aは11～12C前半(G. Fanelli, 1991年)

世紀終わりにかけて大きく花開いた。特徴的なピサ・ロマネスク建築は、初期キリスト教建築を基礎として、ロンバルディア地方の建築^{*7}と、また東方との活発な交易によってもたらされたイスラム建築の要素とが、有機的に組み合わせられたものである。市内には数多くのロマネスク教会が残るが、最大かつ最良の事例は大聖堂の建築（1064～1118年、ブスケートおよびライナルドによる）である。ファサード上部に数層にわたって並ぶ小円柱のアーケード、色大理石を交互に組み合わせた外部壁面の幾何学紋様、東方の影響を示すモザイク装飾は、この様式の特徴を雄弁に物語る。ルッカの建築と同時期に始まったこの建築様式は後に、土地の名を冠したピサ・ルッカ様式の名で、トスカーナ、コルシカ、サルデーニャ、またイタリア南部のプーリアにまで広く影響を及ぼした。13世紀後半以降、ピサ建築はサン・ミケーレ・イン・ボルゴ聖堂^{*8}、サンタ・マリア・デラ・スピナ聖堂に見られるような、特色あるイタリア風ゴシック装飾をともなうようになる。

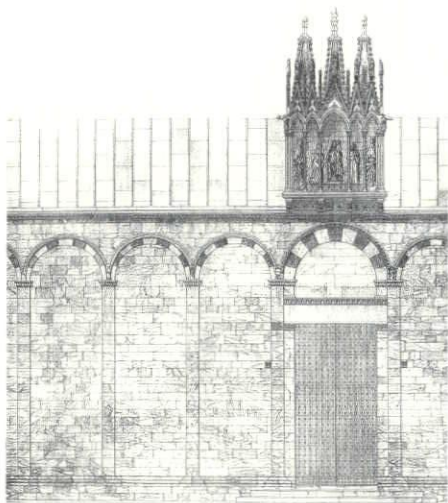
ピサの中世期の密な都市組織は、この都市の代表的な建築類型である塔状住居（カーサ・トッレ：casa-torre）群によって形作られた^{*9}。一般にイタリア・トスカーナ地方で塔状住居というと、都市内抗争に備えたマッシブな石造の塔を中核とした一族用の住居建築の複合体を示すが、ピサにおける塔状住居はこれを基礎として発展した、構造体の一定のモジュールが連続する、中世期の一般市民用の高層住宅を指す^{*10}。この建築類型は道路に面して配置された石造・レンガ造の角柱と、これを連結する石材の梁やレンガのアーチによる開放的な構造を特徴とする。角柱背部には床を支える構造壁が道路に対して垂直に設けられる。角柱のスパンは4～5mであり、

床を支持する木造梁のスパンに従う。道路に面しては角柱上のほぞ穴と石の片持ち梁を利用して、木造の張り出しバルコニーが築かれた。これは上階（居住階）の床面積を増やすと共に、有事の際には石落としなど建物の防衛に役立てられた。塔状住居の初期の建築類型は単室の平面をもつが、人口増加と都市の高密度・複合化に伴い、後には中世イタリア都市の一般的な建築類型であるスキエラ型住居に類似した、奥行きが深い複数の部屋をもつ矩形の平面をとるようになった。ピサの塔状住居は基本的に一般市民用の住居建築であり、地上階は店舗や倉庫、上階は居住空間として使われた。ピサの歴史的な中心地区には、この特徴的な塔状住居が数多く現存する。オリジナルの塔状住居の他、後に複数の塔状住居が統合され、ルネサンス期のパラッツォ（邸宅）に改装された事例も数多く見られる^{*11}。

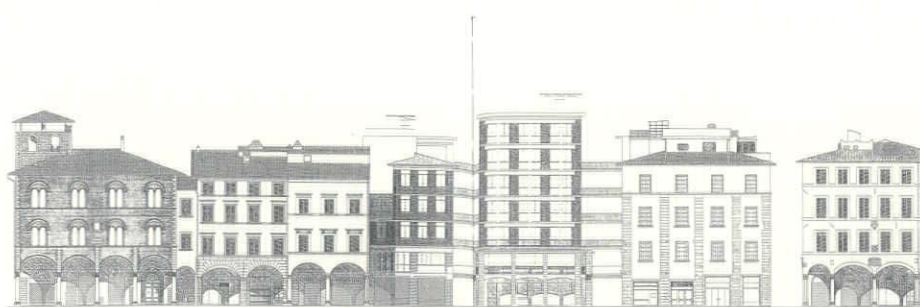
12世紀は海運都市国家ピサが最も繁栄した時期であるが、その栄光は長くは続かなかった。内陸におけるルッカ、フィレンツェとの争い、地中海での商業的優位を巡るジェノヴァとの確執は、都市内部での政治的抗争と共に、共和国の凋落をもたらすこととなった。特にフィレンツェは地中海に進出するための港を確保すべく、ピサ攻略に熱意を注いでいた。1284年8月6日のメローリアの海戦における敗北は、ピサに回復不可能な打撃を与えた。ピサの艦隊はそのほとんど全てが失われ、11世紀より支配下にあったコルシカ、サルデーニャに対する権利をジェノヴァに委譲することとなった。艦隊による護衛のなくなった植民地はこなごなになった。軍事力の低下、ペストによる人口の激減、有力氏族による都市支配とコムーネの無力化^{*12}、相次ぐ都市内における政治的抗争に疲労困憊したピサは、1406年フィレンツェ軍との長期にわたる包圍

戦の後、その支配下におかれることとなった。メディチ家はピサに特別の配慮を見せ、多くの建造物をこの町に残した。ロレンツォ・イル・マニフィコは歴史ある大学を復興した。ヴァザーリのデザインにより、古くからの都市の中心であるカヴァリエーリ広場がサント・ステファノ騎士団の本拠として整備され（16世紀半ば）^{*13}、同時に行政はここからアルノ左岸へ移転された。都市の南東には新たにメディチ家により都市の保護というよりも反乱鎮圧を目的とした要塞が築かれた他（アントニオ・ダ・サンガッロ、1512年）、都市施設として食料品市場が開かれるヴェットヴァリエ広場、絹・毛織物市場が開かれるアルノ岸辺のロッジエ・ディ・バンキ（ベルナルド・ブオンタレンティ、1603-05年）が置かれた。またアルノ沿いには数多くのパラッツォが建設された。トスカーナ大公、特にコジモ1世とフェルナンド1世はピサに非常に関心を向け、大学を援助し、ピサの都市交通の要である主要な橋ポンテ・ディ・メッツォとリヴォルノの新港につながる運河を再建し、田園地域の干拓工事を推進した。

1800年代後半、鉄道の開通（ピサーフィレンツェ路線）と経済の復興、統一イタリア王国への併合により、都市は新たな拡張をはじめた。鉄道駅建設のために南部の市壁は撤去され、駅から都市中心部に向けて広い街路と広場（ヴィットリオ・エマヌエーレ2世広場）が建設された。東部のサン・フランチェスコ地区では中世期の街区を取り壊しつつ大規模な区画整理が行われ、警察署（1859年）や新王立劇場（現在のヴェルディ劇場、1865-67年）等の公共施設がつくられた。周囲に残る中世以来の曲がりくねった路地と、19世紀の計画的な街路とは、今日も対照的な都市景観を見せている。都市郊外の北部（チザネッロ地区）



カンポサント南側立面詳細(ピサ市都市設計局、1987年)



ボルゴ・ストレット通り連続立面図(ピサ市都市設計局、1985年)

と南部には住宅地、工業地区が設けられた。都市経済の発展と共に、周辺地域の都市化は現在も続いている。

ピサには今日に至るまで重要な軍事基地が置かれていることから、歴史的な中心地区は第二次大戦中、連合軍・ドイツ軍双方からの爆撃により重大な被害を被った。カンポサント、サン・ミケーレ・イン・ボルゴ聖堂等のモニュメント、アルノ川沿いの塔状住居、パラッツォ群らは大被害を受けた（特にアルノ川の南部）。戦後の再建によって、戦争による破壊の痕跡は現在ほとんど消し去られたが、今日では別種の問題が都市を蝕んでいる。歴史的な中心地区は状態が非常に悪化しつつも放置されており、また大聖堂周辺の醜悪な観光施設群、美観保全事業の停滞は、都市景観を損ない続けている。1970～80年代におけるカルマッシを中心としたピサ市都市設計局の活動と適切なレスタウロ計画は、ピサの歴史的・建築的積層を生かして、都市とモニュメントに時代に即した新たな生命を与えようと努力してきた。都市設計局による市内の重要な歴史的建造物、歴史的な中心地区の実測調査および1/50の図面作成は、計画に先立って必須とされた事業であった。市壁周辺の再生計画は、都市自身の歴史と現代ピサとの対話を目的としたものであった。P.R.G.ピアノ・レゴラトール・ジェネラール（都市基本計画）による都市の再構築は歴史的な中心地区の建築的本質を尊重するにもかかわらず、歴史的な都市ピサの外観は今日、著しく変化し続けている。

●くろだ・たいすけ／東京芸術大学野口研究室、在ピサ

参考文献

- Emilio Tolaini, "Forma Pisarum. Storia urbanistica della città di Pisa - problemi e ricerche", Nistri-Lischi editori, Pisa 1979.
Emilio Tolaini, "Le città nella storia d'Italia; PISA", Laterza, Bari 1992.
Fabio Redi, "Pisa com'era: archeologia, urbanistica e strutture materiali (secoli V-XIV)", GISEM Liguori Editore, Napoli 1991.
L. Frattarelli Fisher, C. Nucara Dani, "Il quartiere di San Francesco", Tacchi Editore, Pisa 1989.
Touring Club Italiano, "Guida d'Italia; TOSCANA", Milano 1974.

註

- *1 エトルリア人は、古代ローマ人以前に現在のトスカーナ地方を支配していた先住民族である。鉄器の製造に優れ、ギリシャとの交易によりローマに先だって繁栄した。彼らの都市、文化は後に、ローマによる占領によってこれに吸収・合併されていった。
*2 北東に位置するピサーノ山を隔てて対峙する都市、ルッカに向けて流れるセルキオ川の支流である。
*3 Fabio Redi, "Pisa com'era: archeologia, urbanistica e strutture materiali (secoli V-XIV)", GISEM Liguori Editore, Napoli 1991, p.142-3.
*4 かつてはこの歴史的な中心地区の中央部がローマ期の都市に相当するものと考えられていた(Pisae, Forma Italiae, regio VII, Roma 1953)。後の研究により、この地域は中世初期からの都市核の名残であり、ローマ期の都市は周辺地域のチェントゥリアツィオーネ（ローマ期の土地区画単位）に沿った、中世初期の都市核より東にそれた位置にあったものと考えられている。
*5 フィレンツェに至る街道（via Fiorentina）が通り、港が置かれたアルノ川南岸のボルゴ(Kinzika)は、古くから海運交易に伴う外国人居住地として発展していた。Emilio Tolaini, "Pisa", Laterza, Bari 1992, p.18.
*6 フィレンツェの第二市壁（1172年）との対比。トスカーナにおける他の主要都市であるルッカ、ピストイアにおいても同様に、ローマ期以来の都市核を中心として市壁の拡張が行われたが（13世紀）、ピサ・フィレンツェに比べてより小規模な都市域であった。

*7 イタリアのロマネスク建築は、各地方に流入したロンバルディアの都市コモ出身の石工達の活躍により発展したといわれている。

*8 ボルゴ・ストレット（「狭いボルゴ」の意。道路両側にポルティコがつくられたことに由来する。中世期の旧都市核はこの道路にあたる位置を市壁にかこまれた都市域との境界としていた。）内のロマネスク教会。起源は古く（990年）、建物内部はロマネスク様式、過渡期を示すゴシック様式のファサードをもつ。

第二次大戦中、特に教会背部の修道院部分に大きな被害を受けたが、長い間放置されていた。現在、カルマッシによるレスタウロ計画が進行中である（1987年～）。

*9 ピサ型の塔状住居はロマネスク教会における「ピサールッカ」様式と同様に、ライバル関係にありながら建築文化的に多くの関連を見いだせる近隣都市、ルッカにも数多く存在する。

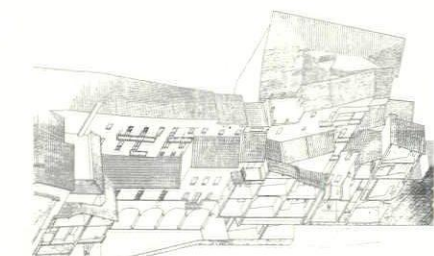
*10 中世期のイタリアでは、田園地域の軍事施設である見張り塔が、有力氏族間の抗争にともない、軍事的な目的に加えて一族の権勢を他に示す目的で、都市内に持ち込まれた。フィレンツェ市内や、他のトスカーナ都市に数多く現存する塔状住居は、この塔を中心として形成された建築類型である。ピサではこの塔状住居が、都市の高密度・複合化に伴い、一般市民用の高層住宅として類型学的に進化・発展した（ピサ市内にも初期型の塔状住居は多く存在する）。
*11 塔状住居を起源とするパラッツォの一部は、近年のレスタウロ（修復・保存事業）によって、その建築組織の形成過程が保存・表層化されている。マッシモ・カルマッシによるパラッツォ・ランフランキのレスタウロ（1976～80年）では、建物の徹底的な科学的・考古学的研究にのっとり、単なる修復・保存にとどまらず、建築組織の個性を生かした改装が行われた。

*12 ウグッチョーネ・デッラ・ファッジュオーラ（1314～15年）、デッラ・ゲラルデスカ（1316～41年）家、ガンバコルタ家らによるシニョーリア支配。伝統的なギベリーニ都市の政治形態は、その時々の支配者の思惑により変質を余儀なくされた。

*13 サント・ステファノ騎士団はコジモ1世の命により、地中海沿岸を荒らす海賊と戦う軍事力として創設された。ヴァザーリは広場に面したサン・ステファノ・デイ・カヴァリエーリ教会（1565～69年）、パラッツォ・デイ・カヴァリエーリのファサードデザイン（1562年）などを手がけた。



ヴェット・ヴァリエ広場(食品市場)全体平面図



ヴェット・ヴァリエ広場(食品市場)断面アクソメ図(ピサ市都市設計局、1977年)

SD9705
72



都市ピサの形成過程

破線(細):ローマ期の都市
破線(太):中世初期の都市
太線:ローマ前期(12C)の都市

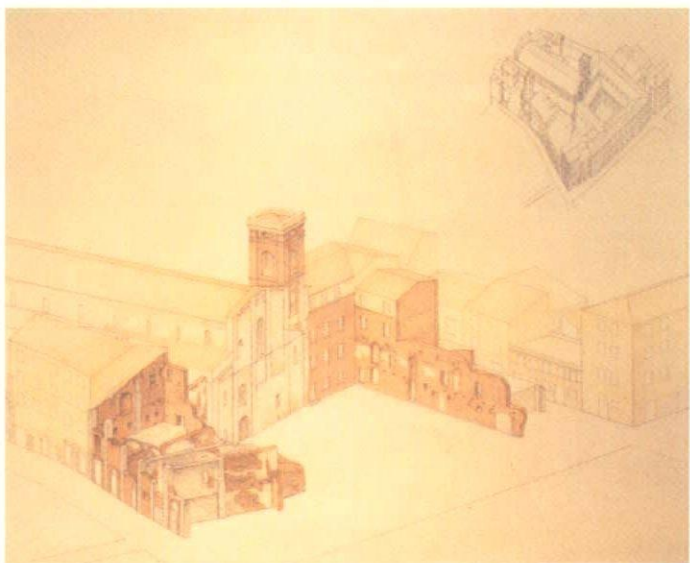
サン・ミケーレ・イン・ボルゴ地区の再生計画
Reconstruction of S. Michele in Borgo, 1979-91



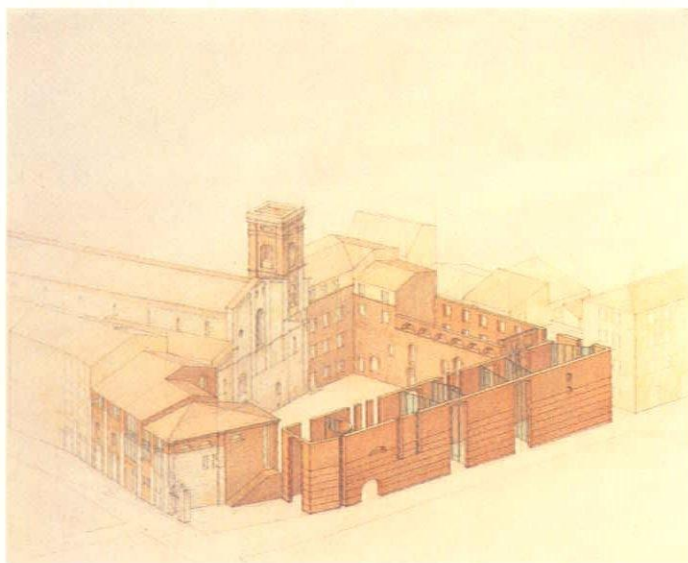
建物外観（東部）。歴史的な中心地区に挿入されたレンガのマス。



建物外観（北部）



アクソメ図 レスタウロ前の状態。



アクソメ図 レスタウロ計画。

13世紀に起源をもつサン・ミケーレ・イン・ボルゴ聖堂の背後に集中していた中世の塔状住居(カーサ・トッレ)と16世紀のクロイスターは、第二次大戦中に重大な被害を被った。文化財監督局は再建計画に伴い、数世紀の間建物を覆われていた聖堂のアプスを表に現すため、倒壊の危険のある中世期の遺構の破壊を決定した。

駐車場として使われていた、偶発的に生まれた不定形な広場の北・南側には、いくつかの12~13世紀の石造・レンガ造の遺構が残されていた。徹底した歴史的研究と考古学的発掘、様々な提案を試みた長期にわたる設計活動の後、最終的な再建案が選択された。

実施案は、敷地内の遺構の修復と東部における建物の新築を提示した。これは引き裂かれた都市組織を縫い、頑強かつ簡潔な新たな建築的形態により、定形の新たな広場を生み出すことを意図している。広場はサン・ミケーレ聖堂のアプスの象徴的存在により特徴づけられる。石造の白いアプスは新たに挿入された建築の均質なレンガの外壁と拮抗する。

このようにレスタウロ計画は、都市的文脈を特に重視して、断片的な遺構の補完と接ぎ木を行う。過去の回廊は、断片的に提案された広場の空間によってあがなわれた。広場の孤立と目的外の利用を避けるべく、また南部のヴェルナガッリ通りと内部広場との間に浸透性と透過性をもたらすため、建物南東部の角には小広場と大きな縦長の開口が置かれた。

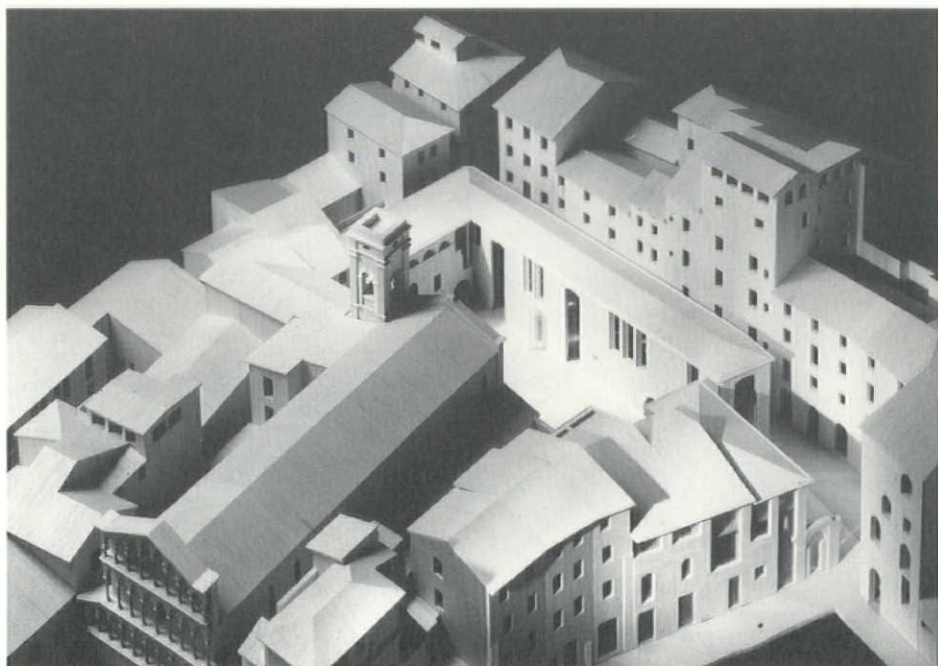
サン・ミケーレ・イン・ボルゴ地区再生計画では、複合的な建築技術による特徴的な提案がなされた。全ての構造的要素をレンガ貼りの外壁に預けることにより、公共アパート、商業施設が入る内部空間は解放され、なめらかに連続するボリュームと共に、新たな空間配置が可能となった。



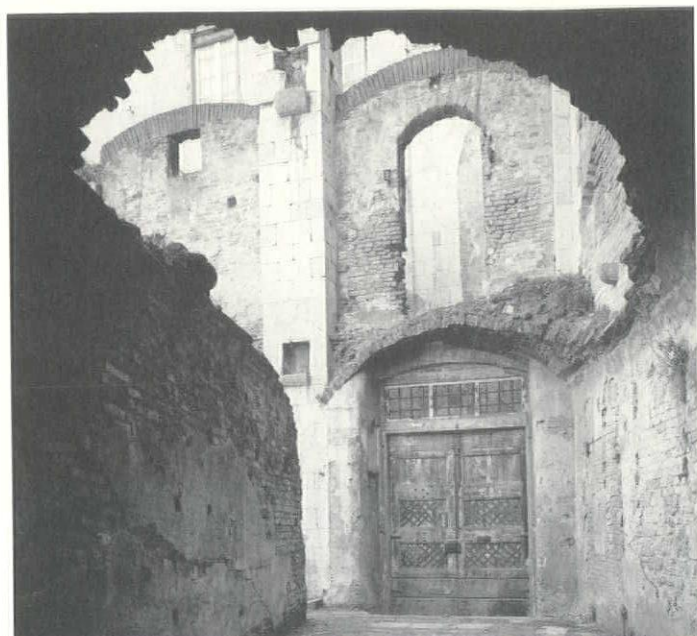
全体配置図。1. サンミケーレ・イン・ボルゴ聖堂 2. ヴェルディ劇場



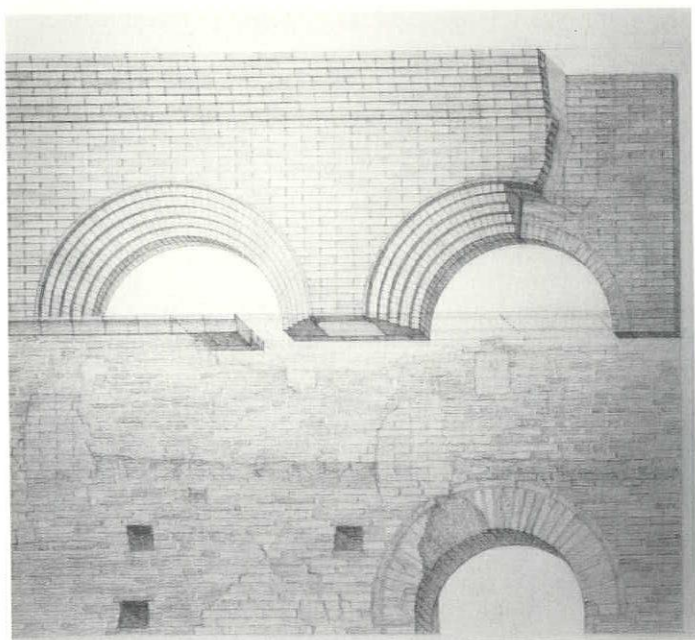
平面図



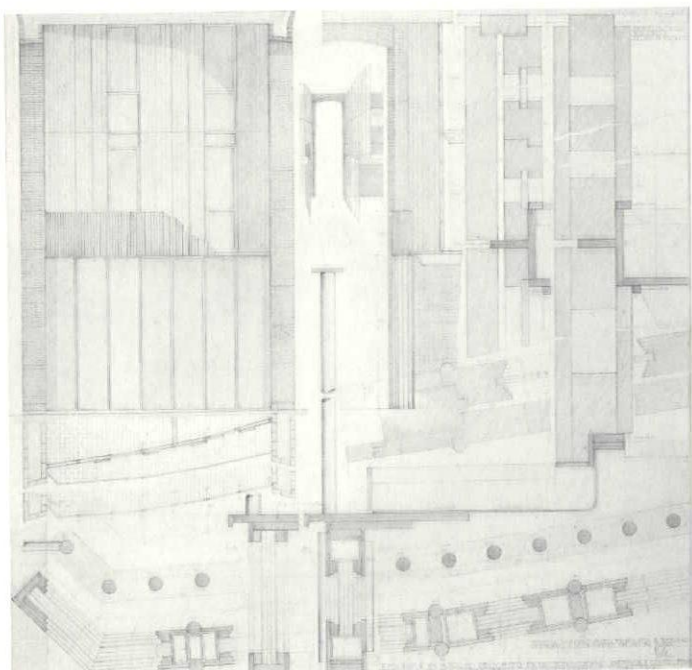
模型写真。聖堂背部での都市組織の補完



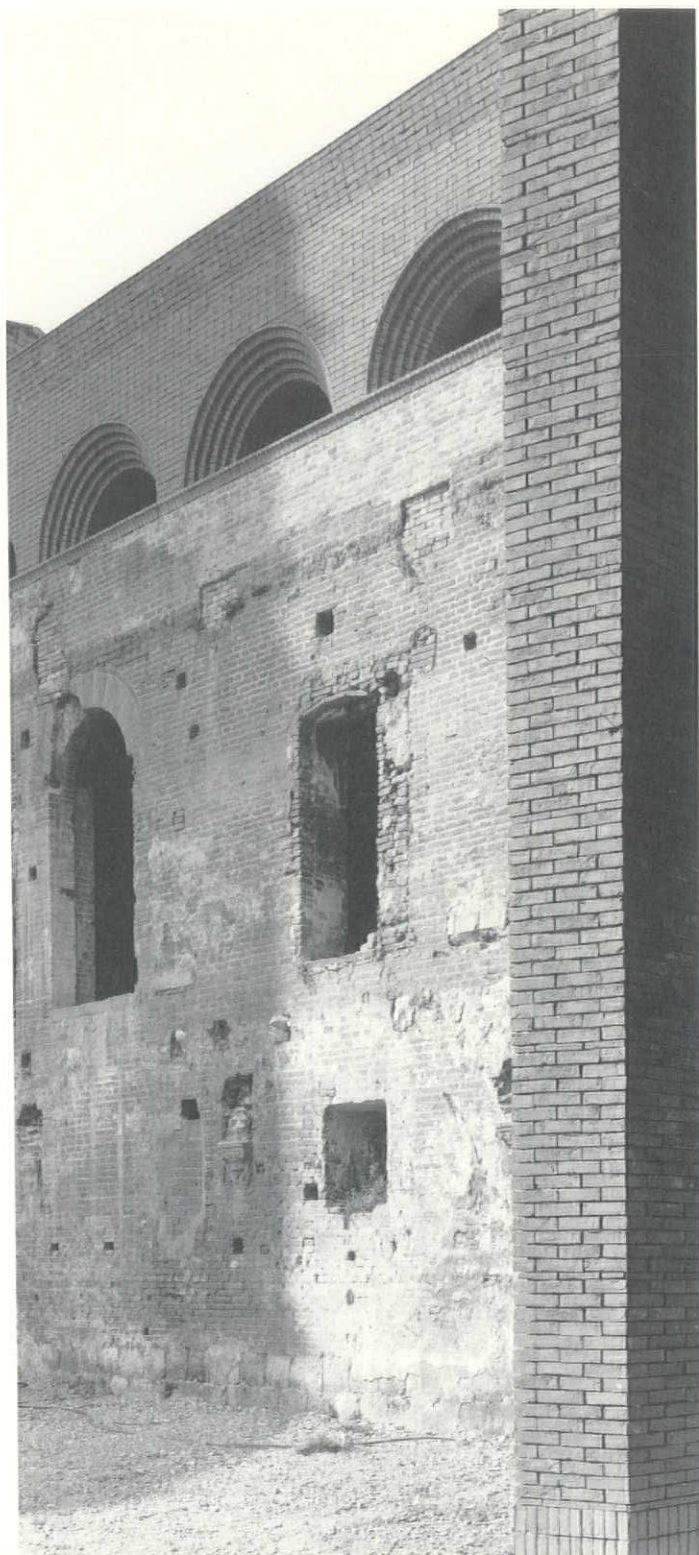
敷地内に残された中世の遺構（レストウロ前）



アーチ詳細。既存のレンガ壁と新造のアーチとの対比



入口廻り詳細図



既存の壁体と上部に付加されたアーチ

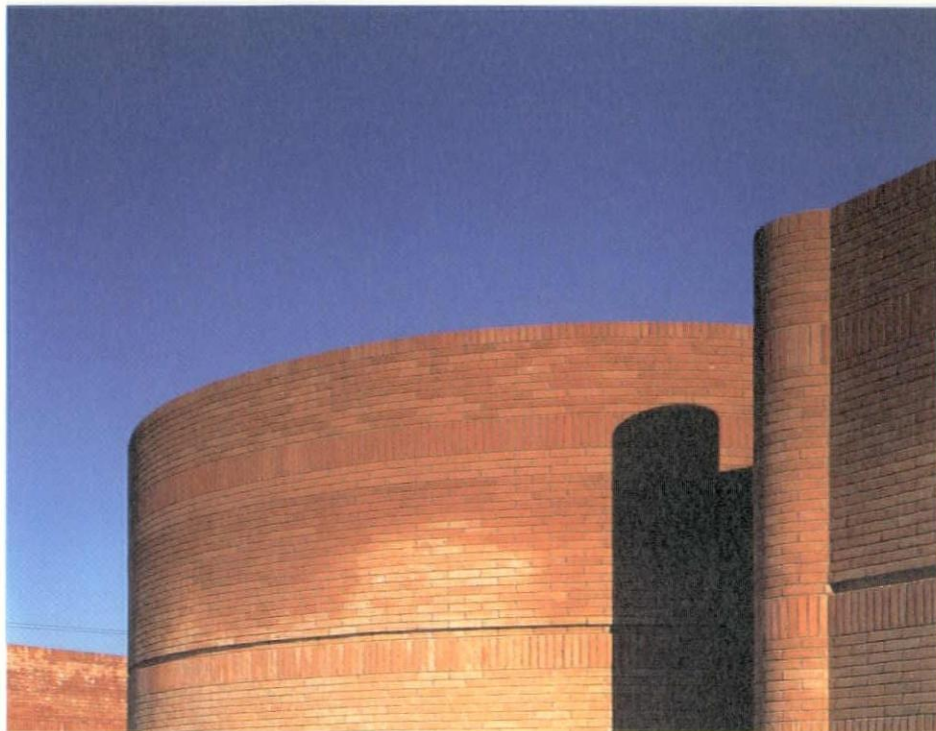
サン・ピエロ・ア・グラードの公共墓地拡張計画

Addition to the cemetery of S. Piero a Grado, 1983-85

サン・ピエロの新墓地は、トンボロ（トスカナの海辺の森林地帯）内の松林の中にある、平坦な農業風景の中に挿入された。既存の公共墓地の北部につくられた建築は、壁体を基本とする構成によって特徴づけられる。レンガ造の大きく湾曲した外壁——その円弧は古い農道をなぞったものである——は低層のボリュームを内部に抱き、周辺の農村、並木道、既存建築らがつくる繊細なバランスと自然に共存する。建物はレンガの長い湾曲した壁と共に、特殊な性質を示す「埋葬の場」として、ごく自然に平野から現れ出たように見える。

壁体でつくられる初源的な形態の構成によって、瞑想的な空間の創出が意図された。湾曲した長い外壁と明確な対比を見せる直線的に配置されたレンガのマスは、納骨堂にあてられている。大理石貼りの納骨所は5層に重ねられ、鉄とガラスの屋根をもつ連続した内部通路に面する。

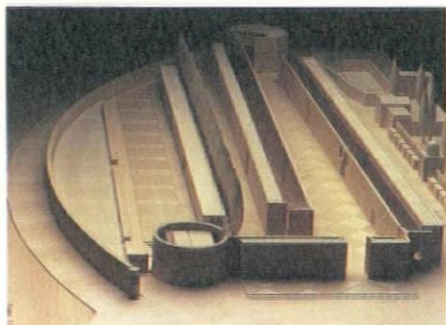
複合的な建築イメージを支える形態として、多種多様なレンガ壁が注意深く試みられた。湾曲した外壁は、近接するロマネスク様式のサン・ピエロ聖堂（これも手作りのレンガによる建物である）と対話しつつ、微妙な変化をもつ優雅な仕上げを見せる。壁体上層の突出するコーニス、尖った糸杉が生える周辺環境の中で、水平線を強調する。



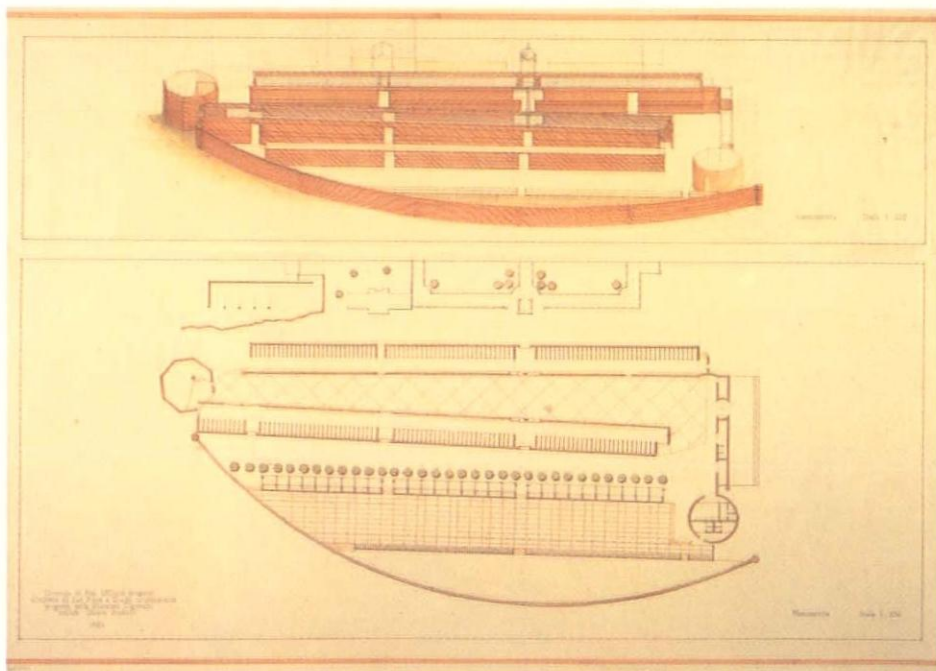
外壁詳細



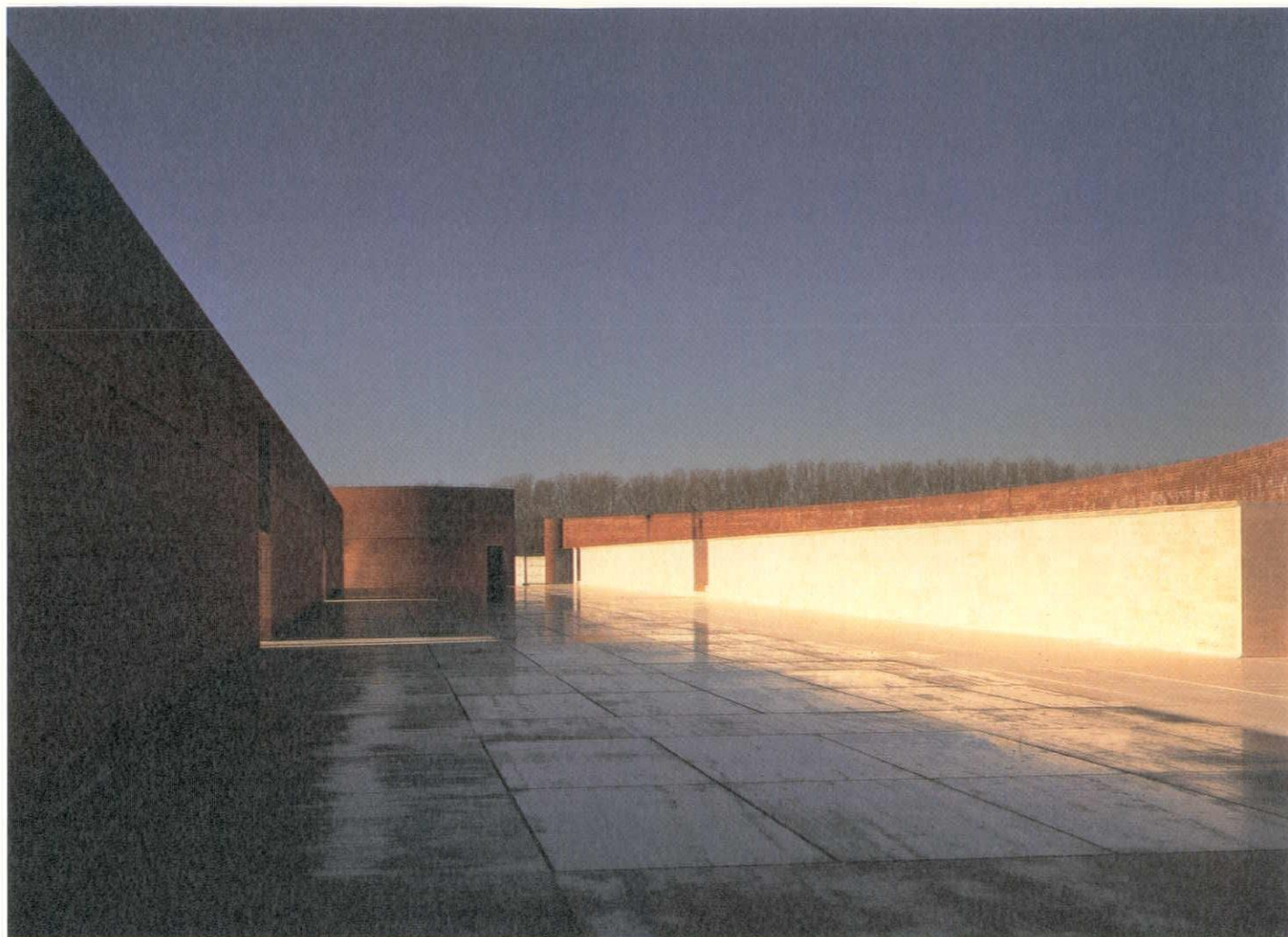
建物外観。平坦な農業風景に挿入された、湾曲したレンガの壁



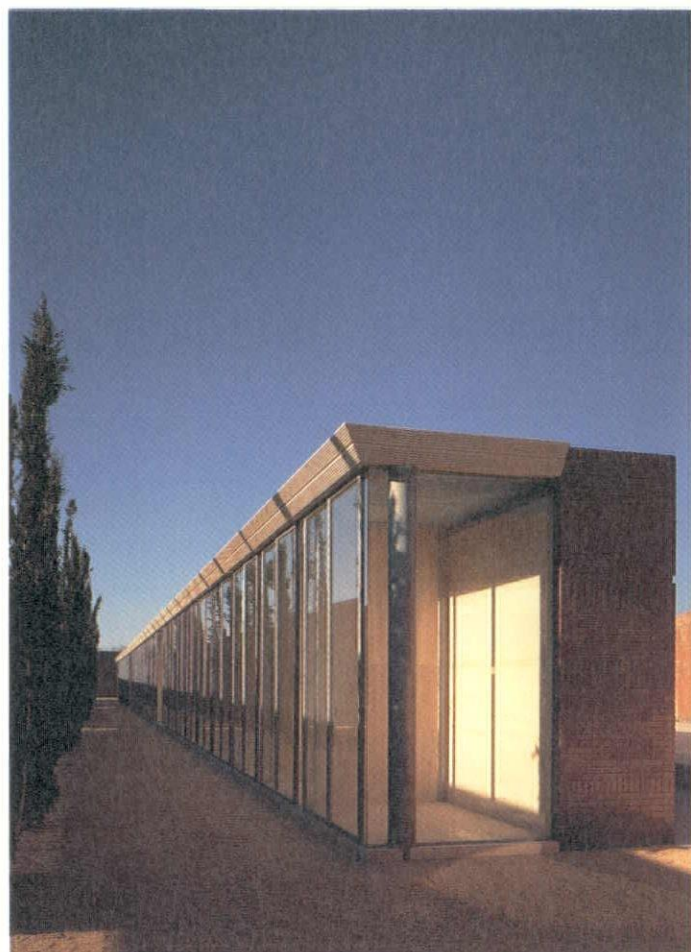
模型写真



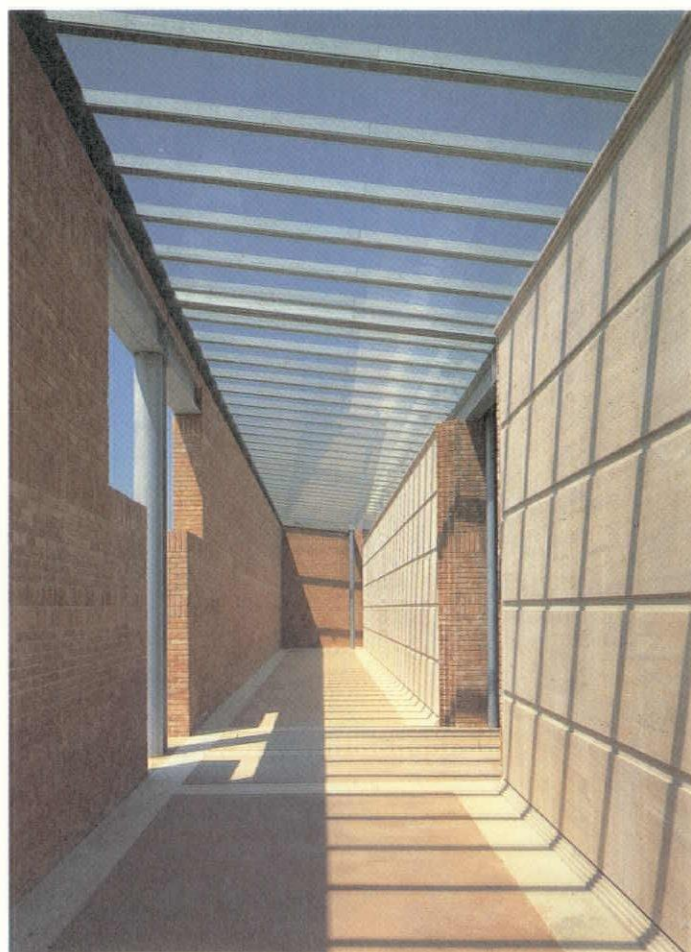
アクソメ図、平面図



埋葬区画。レンガとトラバーチンの静謐な広場



家族用礼拝堂



建物内観。5層に積み重なった納骨所と透明ガラス屋根の通路

チザネッロの集合住宅

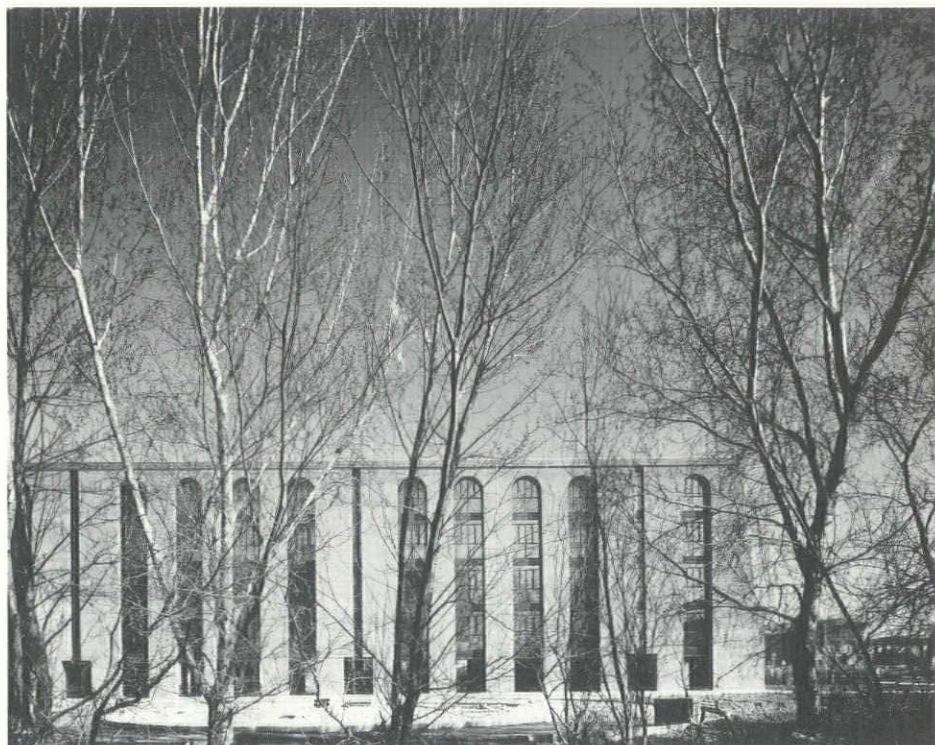
Housing project at Cisanello, 1985-88

ピサの歴史的な中心地区とその郊外との狭間、確実に規定できない地区に建てられた市営集合住宅は、都市のふたつの地域を結ぶ道路から容易に識別される。建築の明快さは、周辺の同質な住居建築全てに共通するバルコニーを欠いた、一定の高さの直方体という、形態の非常に簡潔さに因るものである。この直方体は、半円アーチを冠に頂いた細長いリズムミカルな開口群を備えた、ほとんど同一の長い明快な立面をもつ。

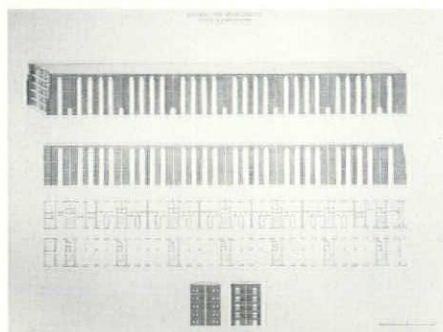
突起、モールディングの無い、一定なリズムをきざむ大アーチの列をもつ壁体は、この集合住宅に、ピサ郊外に残る古い水道橋、また都市とその郊外との境界を定める標識としてのイメージを与える。

レンガ壁の強固で、耐久性のあるイメージは、「空」と「密」の繰り返しによって弱められている。狭く高いアーチ内の空間には、住居の全ての開口が集中する。各々の住居には大アーチに面して2つの小さなガラスのロτζィアが置かれ、外部環境に向かって開くアクセス空間として機能する。レンガの角柱は、コンクリート造の構造体と各種設備を内包している。

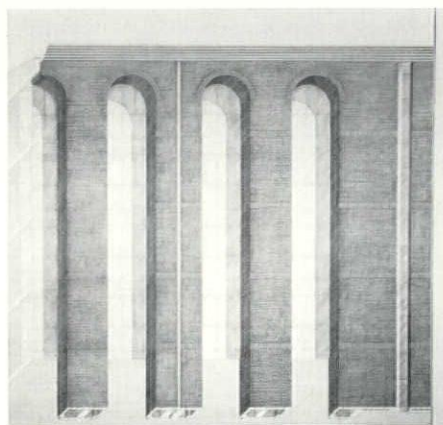
この集合住宅は、厳粛で清浄な都市的背景を提示する。それは偶然性の外におかれ、また日々の生活の痕跡を吸収するにもかかわらず、建設当初からの魅力と形態的力強さを失わない。



連続するレンガのアーチ群はかつての水道橋を彷彿とさせる

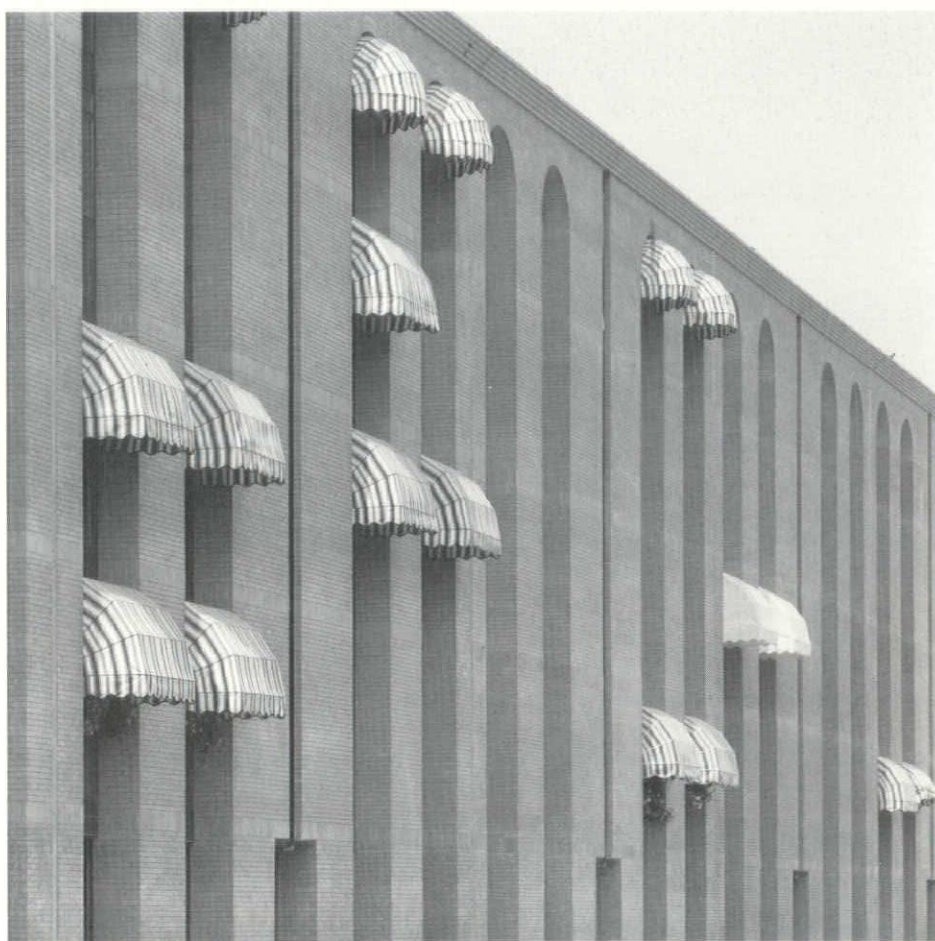


アクソメ図、立面図、平面図

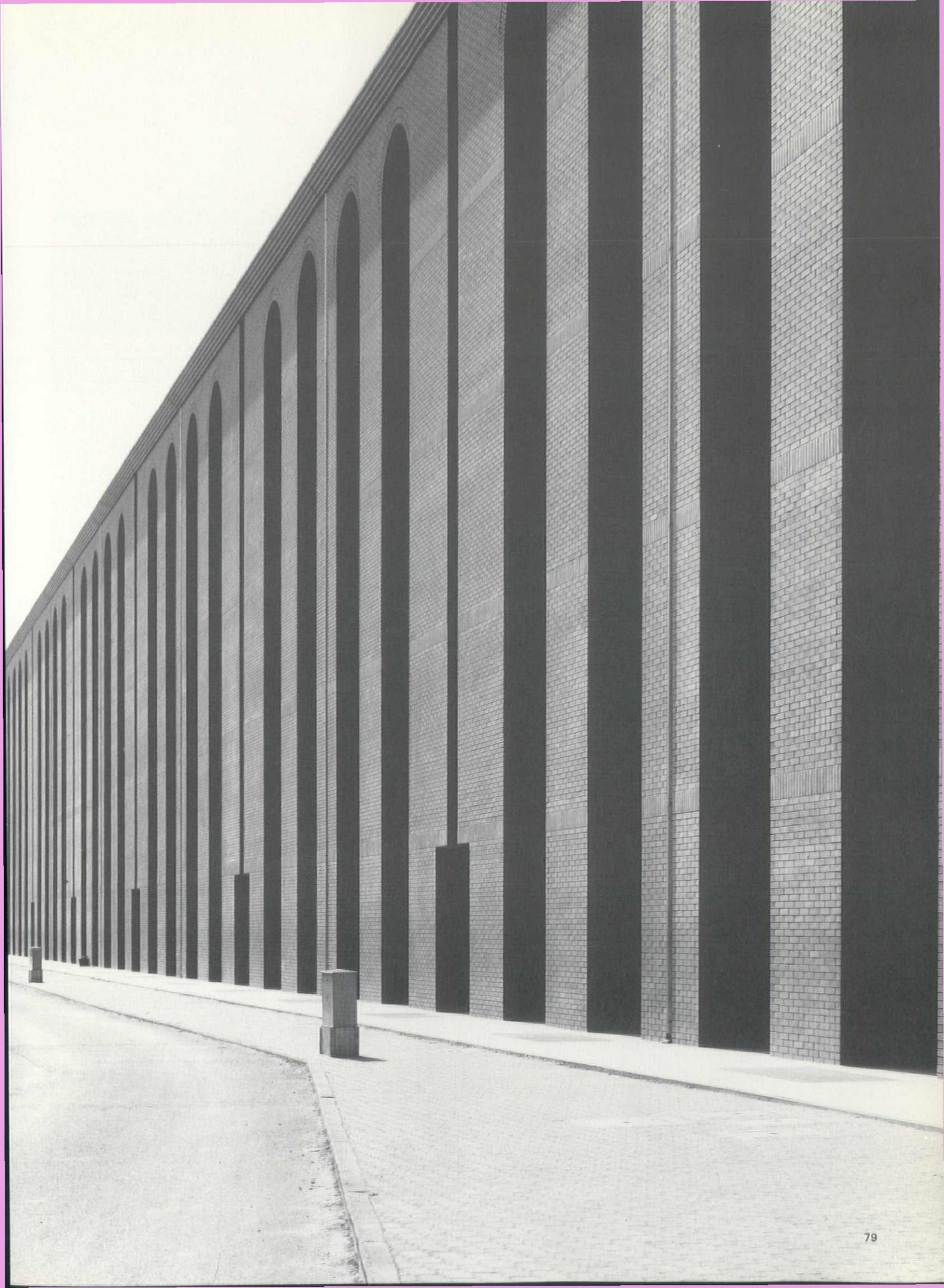


ファサード詳細図

SD9705
78



建物外観。大アーチのスリットから日除けテントがのぞく



ヴェルディ劇場のレストアウロ

Restoration of Teatro G. Verdi, 1986-90

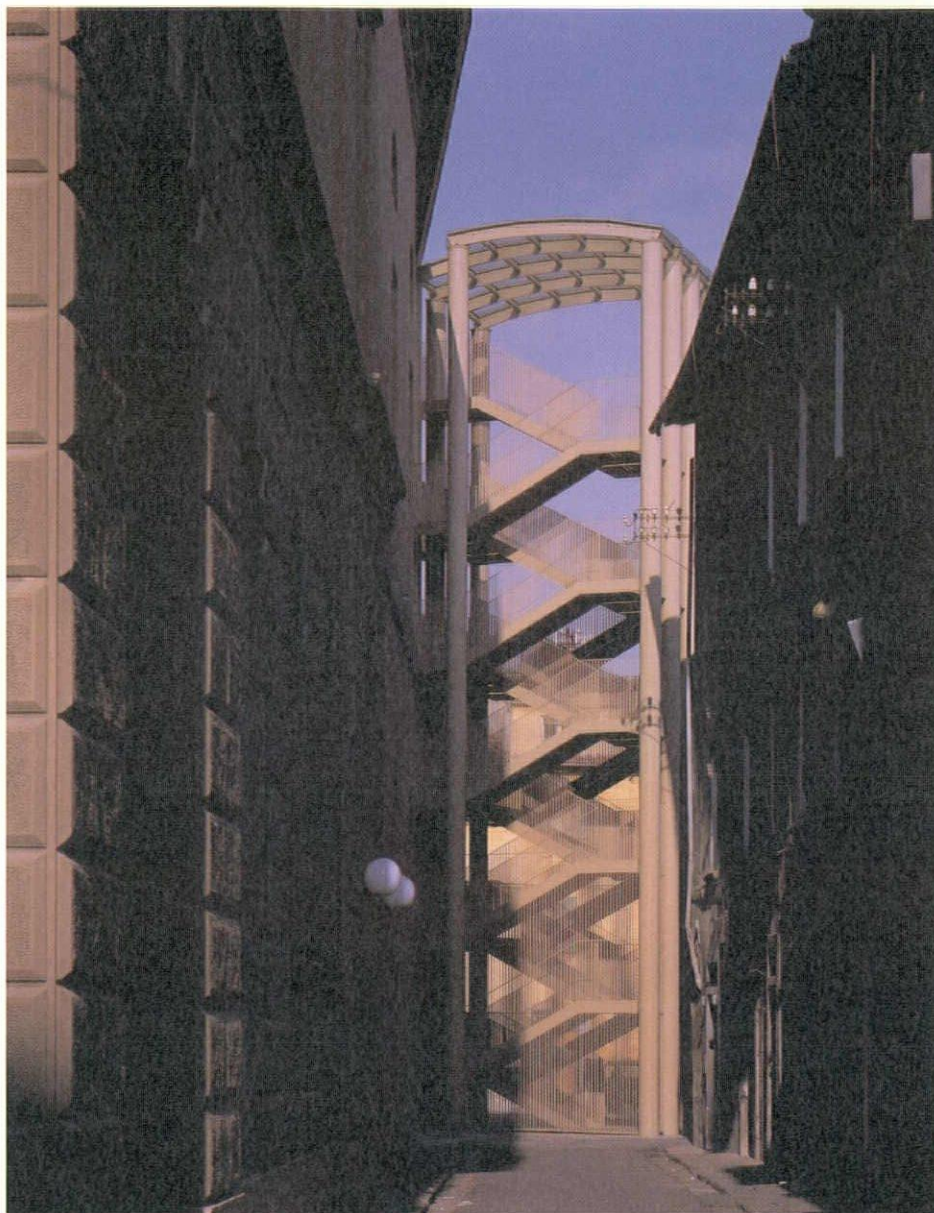
ヴェルディ劇場は建築家アンドレア・スカラにより、いくつかの中世期の街区の破壊を伴いつつ、ピサの歴史的な中心地区に1865～1867年のわずかな期間で建設された。劇場の状態はここ50年の間に、無計画な部分的改修・全体的なメンテナンスの欠如によって悪化し、一方で諸設備の旧式化と避難器具の不備(特に非常用階段)は、劇場の利用を危険なものとしていた。

このような状態に始まり、レストアウロ計画はふたつの主要目的を追求した。ひとつは歴史的建造物の構成的特質の保存(特殊な材料など)、もうひとつは現在の火災法規にのっとりた避難設備の整備と、建築的・設備的な面における改善である。

レストアウロはオリジナルの材料と、劇場の本来の雰囲気重視し、これらの保存を積極的に行った。木造の水平材・屋根の複雑な構造は、エポキシ樹脂と鋼材により補強され、化粧天井と一体化した梁の大部分が再生された。また数千㎡に及ぶ近年の装飾漆喰ははぎ取られ、適切な色彩に修復された。全ての装飾要素、劇場の内装、床面処理(レンガ、大理石、大理石モザイク床)が修復され、内部空間はかつての姿を取り戻した。

安全基準面における向上(6つの階段と外部階段の新設)と、機能面の整備(観客用のサービス施設、オフィス、役者用楽屋の新造)は、設計活動の大半を占めた。歴史的な劇場に挿入された新たな建築的要素は、あえて過去の様式を模倣せず、厳密に現代的なデザインをとった。こうして外部階段は鉄とガラスのアーチ屋根をもつ、10本の円柱による金属の塔として実現した。また、劇場の異なった区画の仕切りには、オリジナルの空間構造を視覚的に改変しないガラスの隔壁が設けられた。

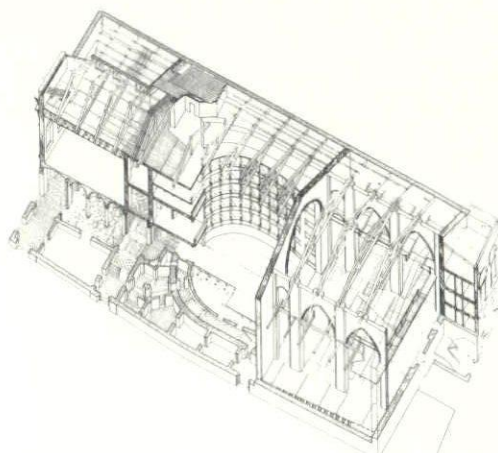
レストアウロ計画における最も重要な改造は、今まで使われていなかった広大な屋根裏空間のフレキシブルな区画(オフィス、大稽古場)としての利用である。木造の屋根トラスと観客席の大ヴォールトの構造体を背景とした特徴的な空間は、劇場の構造を正確に理解するのに役立つ、非常に魅力的な空間となった。



ベッカリア通りの奥に位置する外部階段



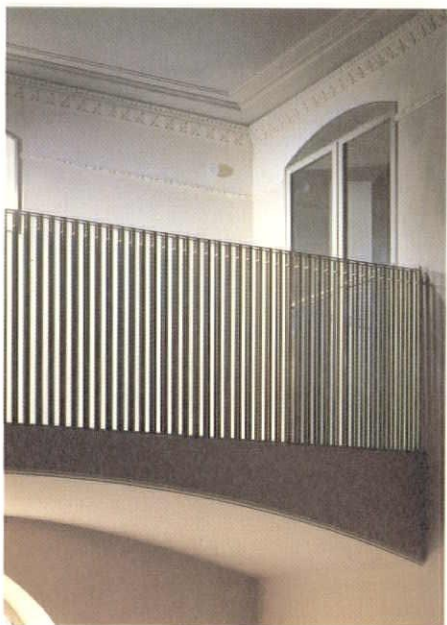
レストアウロ後の劇場ファサード
SD9705
80



内観アクトメ (レストアウロ前)



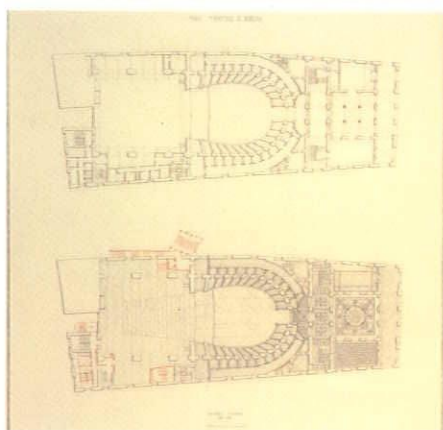
外部階段地上部分



階段踊り場詳細



出演者用入口とバー・カウンター



平面図（上：レスタウロ前の地上階平面。下：レスタウロ後。赤色部分は新たに付加された要素）



劇場内観（観客席）



小屋裏階のオフィス。屋根を切り取ってつくられた採光用中庭

ムーティ邸

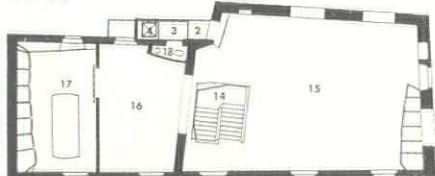
Casa Muti, 1995

建築的に非常に興味深くも、荒廃の進んだピサの歴史的中心地区の心臓部、青物市場の建つヴェットヴァリエ広場のすぐ近くに、この住宅は位置する。

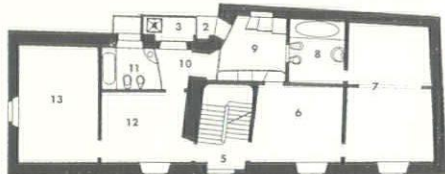
ムーティ邸は、角地に建つ12世紀の塔を出発点として形成された、細長く、幅の狭い5階建て（最上階は小屋裏部屋）の建物である。この建築複合体は数世紀間に渡り、基本的な構造を変化させることなく、多くの改造・増築を被ってきた。当初の塔の側面には約1世紀後、中世ピサの典型的な住居類型である塔状住居（カーサ・トッレ）が増築された。塔状住居の特徴的な構造である石造の角柱とレンガのアーチは、現在のファサード内に明瞭に識別される。

レストアウロによって、この建物は一家族用の住居兼スタジオに改築された。地上階には食料品店が、2階にはアパートメントが入る。数世紀に渡って堆積した歴史的な層は繊細さと細心の注意をもって、公平に取り去られ、建物自身にその形成の歴史を語らせることが意図された。

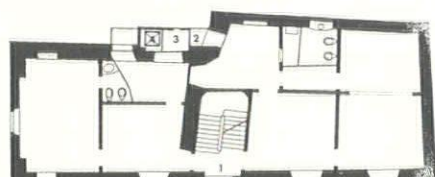
都市の連続性に敬意を払いながらも、都市形成過程を再構成し、建物に残された多くの歴史的痕跡を提示するために、最小限の改築が行われた。しかし同時に、レストアウロされたこの歴史的建造物には、わずかながらもはっきりと我々の時代の印が刻まれている。



4階平面図（居住階）



3階平面図（アパート）

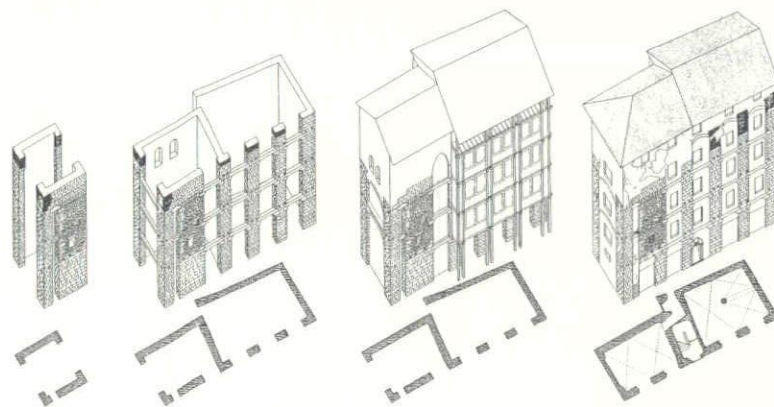


2階平面図（スタジオ）S=1:350

- | | |
|-----------|-------------------|
| 1: スタジオ入口 | 10: 更衣室 |
| 2: バルコニー | 11: 子供用浴室 |
| 3: リフト入口 | 12: 子供用居間 |
| 4: リフト | 13: 子供部屋 |
| 5: 居住階入口 | 14: 小屋裏階との連絡用新造階段 |
| 6: 夫婦用居間 | 15: 居間 |
| 7: 夫婦用寝室 | 16: 食事室 |
| 8: 夫婦用浴室 | 17: 台所 |
| 9: クローゼット | 18: WC |



建物外観。外壁を覆っていた漆喰は取り去られ、中世の構造体が露出された



建物の形成過程

1. 12世紀に起源をもつ角地に建てられた塔 2. 約1世紀後、当初の塔に3つの塔状住居が増築される 3. 木造の張り出しバルコニーが取り付けられた17、18世紀当時の塔状住居。より後世になって、上部に最上階が設けられる。 4. 建物のレストアウロ前の状態は、基本的にそのまま保存された。窓の開口は18世紀末における内部の部屋割りに一致する（最上階の閉鎖と内部空間化もこの時期のものである）。老朽化した床はヴォールトによって再建された。



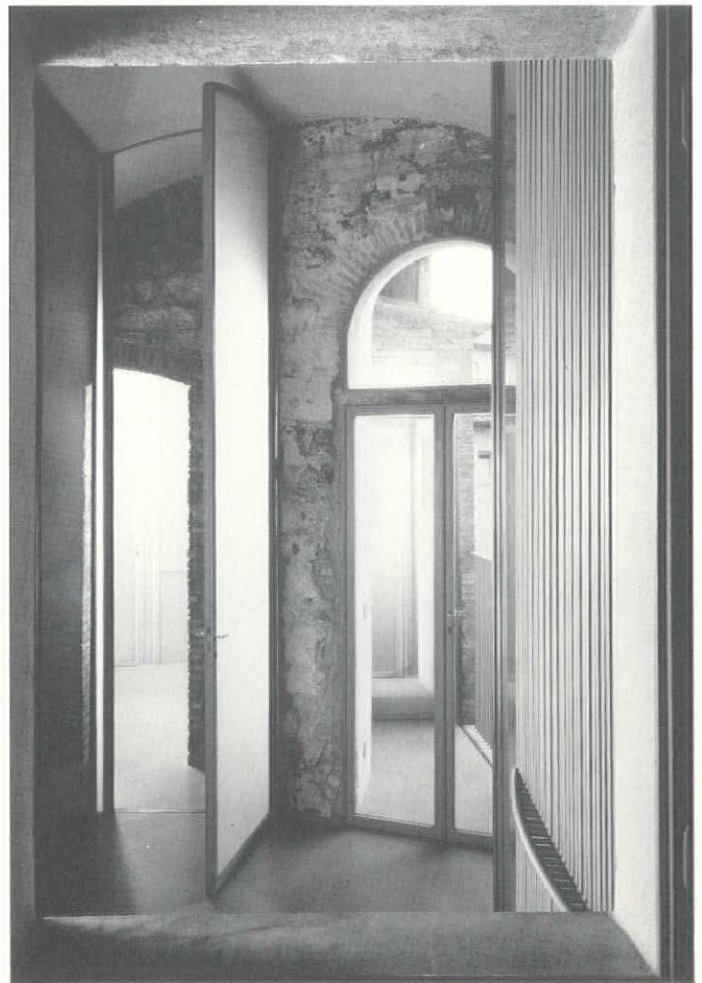
居間（小屋裏階）を食事室より見る



居間の隅に設けられた、木・真鍮製枠のガラスのロジア

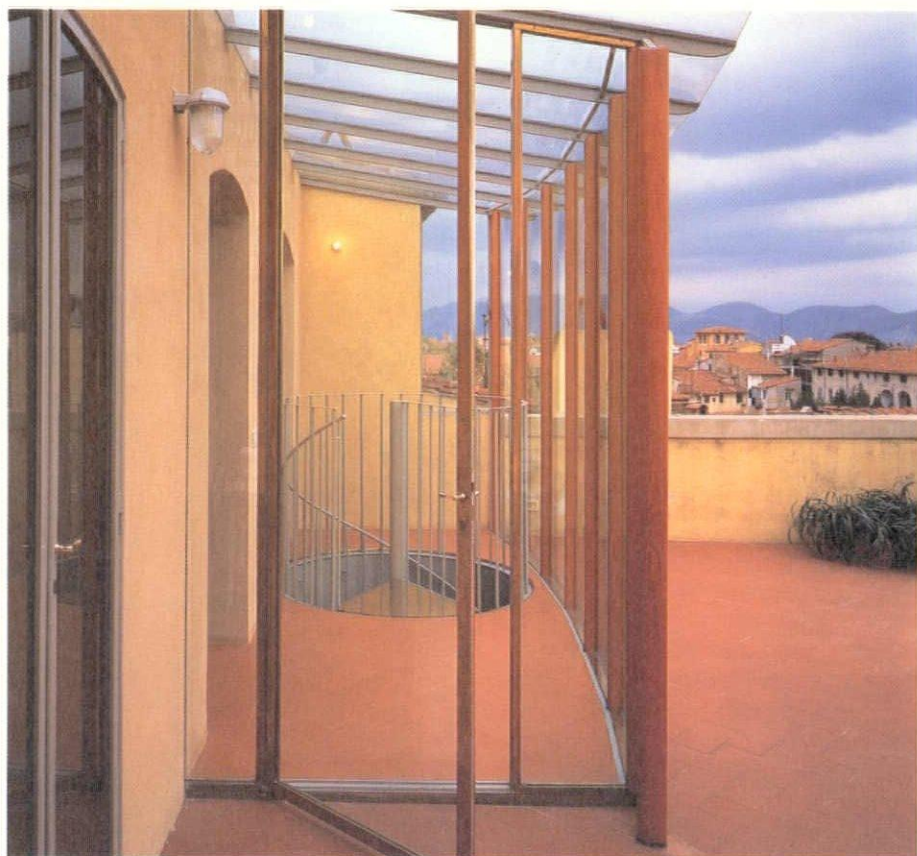


子供部屋：修復されたフレスコ画と石積みみの壁との対比

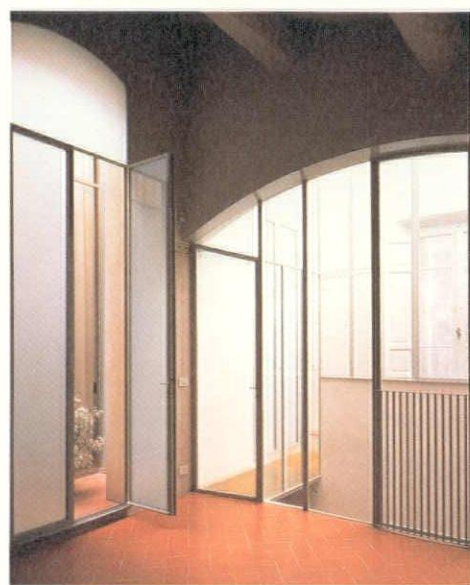


夫婦用浴室から見たクローゼットとバルコニー

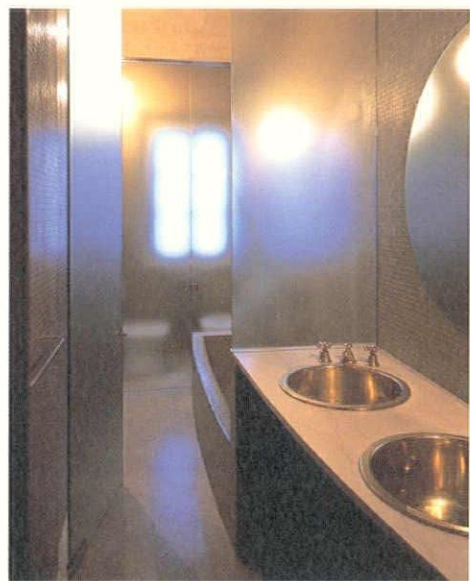
ピエロッティ邸
Casa Pierotti, 1995



住宅A：屋上テラス上のロτζア



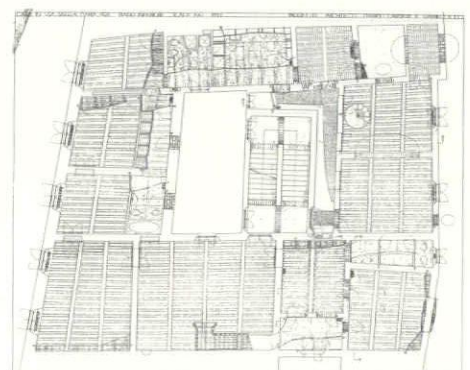
住宅B：小屋裏階の二室から吹き抜け、小中庭を見る



住宅B：浴室



住宅A：台所 ガラスのパーテーションによる空間分割
SD9705
84



主要階平面図

施主は、アルノ川から大聖堂に至るサンタ・マリア通りに位置するルネサンス期の建物に、近々結婚する息子たちのための2世帯住宅を要望した。不幸にもこのアパートメントは今世紀始めに改築され、数多くのオリジナルの特質を失っていた。

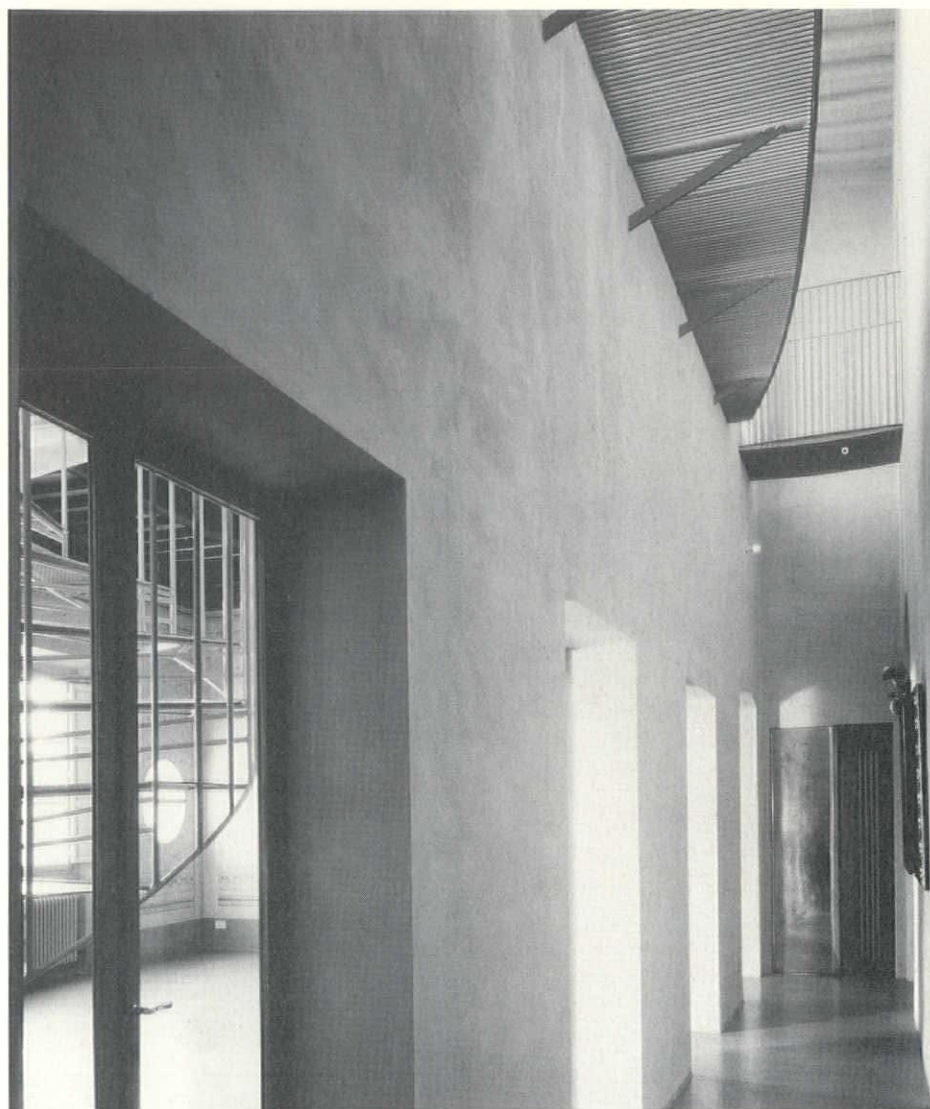
レストアウロはオリジナルな壁体、床、空間の積極的な保存を意図した。これらの要素は前世紀の室内装飾の再発見を伴いつつ、慎重に修復された。新しい配置計画によって、ひとつは小屋裏の2層にわたる、異なる大きさの2世帯住居がつくり出された。

2軒の内、大きい方(住宅A)は建物中央部の中庭に面した一連の部屋によってつくられた。オリジナルの空間構成を保持しつつ、既存廊下の一部を含む、中庭に面したC型の長い動線が設けられた。

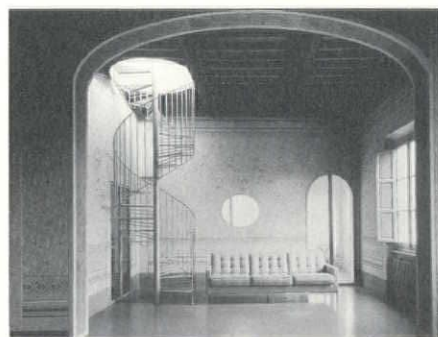
扉、窓枠等のパーティションの特徴を異化することにより、様々な空間の分離が計られた。台所の仕切壁は鉄製の枠にはまった透明ガラスによる。食器棚は、浴室内の仕切と同じく、鉄と真鍮の枠にはまったエッチングガラスによる。床仕上げと作業台は磨き白大理石である。これに連続する寝室には、僅かに湾曲する断面をもつ糸杉の大きな扉による特徴的な収納が設けられた。収納内部の構造は、同時に透明ガラスの棚を支持する円形断面の圧延鋼による。湾曲した扉はまた、異なる部屋のドアとしても使われた。

既存スラブの撤去により、居間と食事室に面する吹き抜け空間が生まれた。吹き抜け上部に設けられた鉄製の軽やかなキャットウォークは、屋上テラスと書斎をつなぐ。主要階と上階との連絡は、居間に設けられた鉄と真鍮の螺旋階段によってまかなわれる。この螺旋階段はテラス上の、鉄・木・真鍮の枠でつくられたガラスのロジアに通じる。

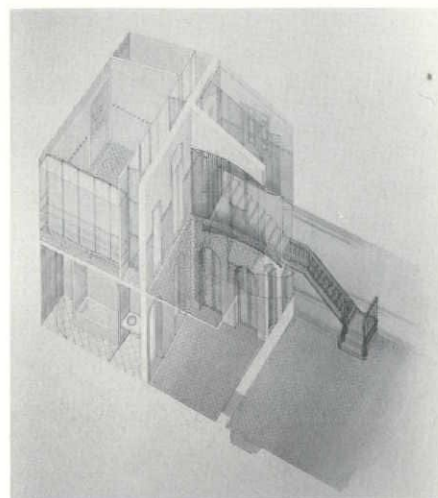
ふたつの住居の内、より小さくシンプルな方(住宅B)は、直線的に連続する4部屋で構成される。これらの部屋は、当初の様式によって修復され、古典的な2重の木造扉で連結される。ルネサンス様式の木造階段は1930年代につくられたもので、広い居間と小屋裏階とを結ぶ。小屋裏階は小さな中庭と、台所上部と階段の一部を含む吹き抜けに面した3部屋で構成される。開口に乏しいこの住宅において、採光用の中庭とこれに面したガラスのパーティションは、室内に透明感をもたらす。



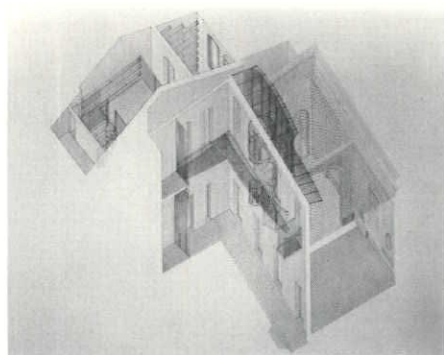
住宅A：入口廊下 吹き抜け空間に面した居間



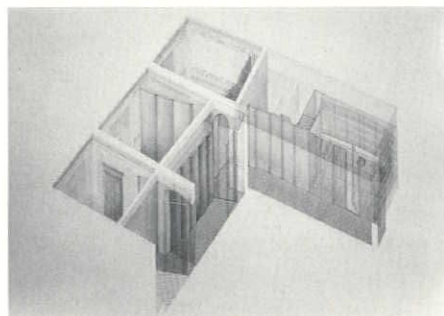
住宅A：居間



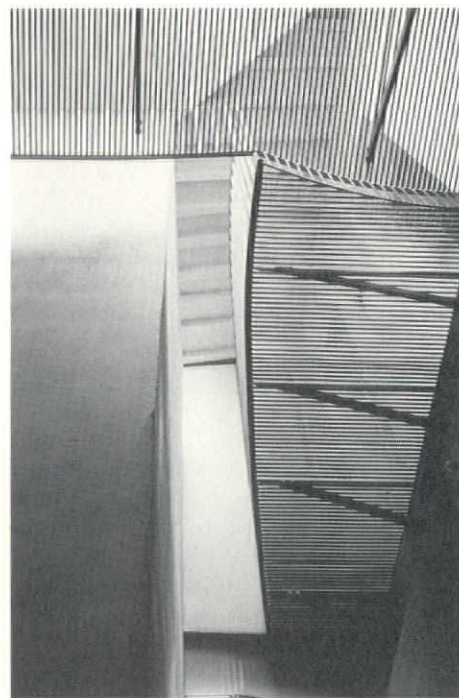
アクソメ図 住宅B：小屋裏階を含む空間構成



アクソメ図 住宅A：吹き抜け部分



アクソメ図 住宅A：台所・寝室部分



住宅A：吹き抜け上部のキャットウォーク見上げ詳細

ヴィルゴ計画

VIRGO project, 1996-

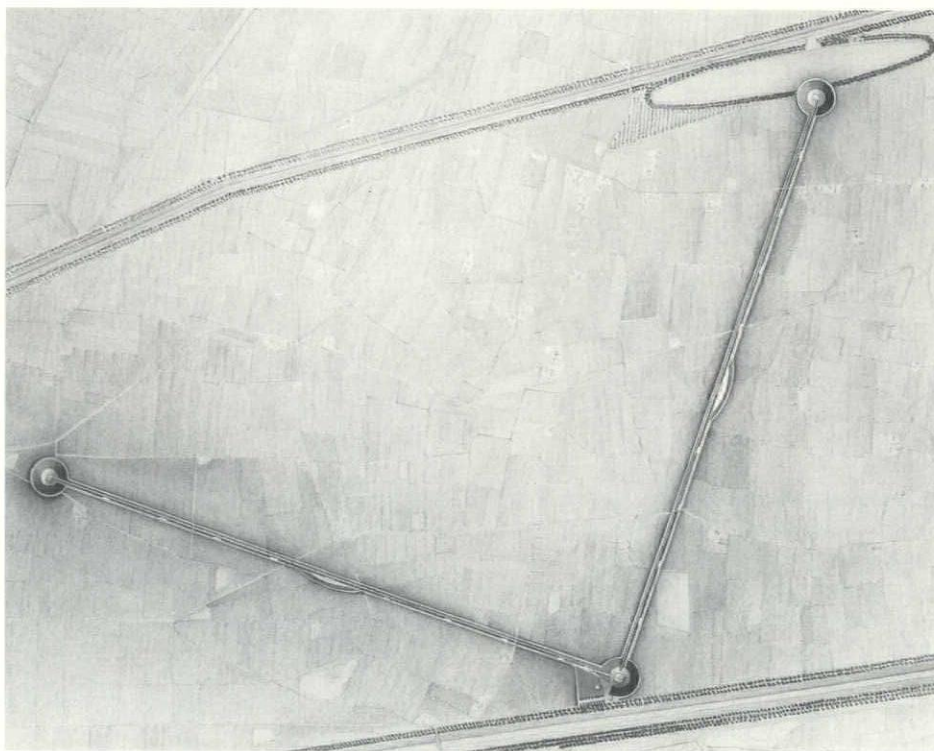
ヴィルゴ計画はイタリア国立核物理学研究所とフランス国立科学研究所が共同で行う、史上初めての重力波検出実験である。この計画は、重力場が引き起こす空間の変形と「ゆがみ」を調査し、加速状態にある物質によって引き起こされる重力場の変動を測定するものである。

主要システムは、半地下のトンネル内に設置された2本の直径1.2m、長さ3kmの直線状の水平なチューブによって構成される。チューブは直角に交わる端部を共有する。チューブの接続部には精密な光学測定用機器の入った、直径2m、高さ12mの7本のシリンダーが置かれる。1本の同様なシリンダーがチューブの各端部に配される。この装置は、長高度真空状態下におかれたチューブ内を伝わる2本の光線の干渉信号の差異を測定する。例外的な重力波は、空間を変形しつつ、干渉信号の特徴的な変動をもたらす。

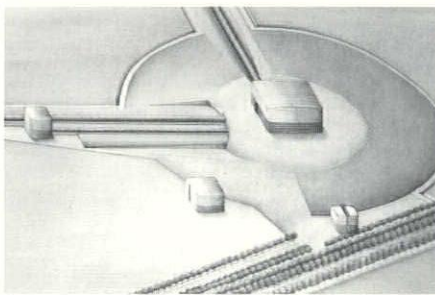
建築計画は、周辺環境に与える影響を最小限とすることを目的とした。6棟の建物と3本の長大なトンネル、これに伴う付属施設群の建設にはまた、都市計画的な作業が要求された。ピサ郊外に求められた敷地の選択には、実験装置に悪影響を与える地震・環境から来る微振動を避けるべく、特別の注意が払われた。

建築システムは非常にシンプルなもので、建物の基礎・構造に使われるコンクリートと、今回特に設計製造された外装用のアルミ製パネルとの2つの要素で構成される。パネルには風に対する抗力を増し、かつ振動を押さえるためのリブがつけられる。大きさも、構造も異なる全ての建造物は、2面が軽く湾曲し角が丸められた、共通の矩形平面をもつ。

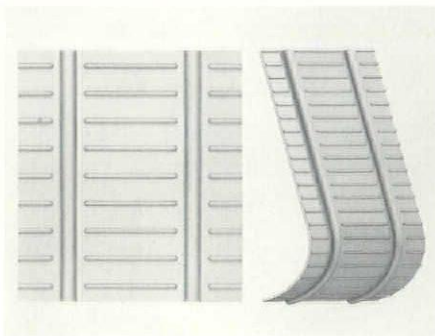
2本の腕の交点に建つ中央棟は、コンクリート基礎の上に連結された逆V字形トラス構造による。構造体は、外部をリブ付きアルミパネル、内部をサンドイッチパネルで覆われる。パネル間の中空層は空調設備によって保護される。主要な空間は、コンクリートの基礎の上に直交軸上に置かれた7本のシリンダーによって占められる。西側に突起した可動開口部は、巨大な設備用バルブを収容する。各付属施設は、中央棟と同様のアルミパネルの外装をもつ。2層のオフィス棟は小さな講堂を持ち、中央の吹き抜け廊下を中心に構成される。温度調整センター、電気室は1棟にまとめられた。これらの付属施設は振動を避けるため、中央棟から確実な距離をとって配置された。実験装置搬出入時における重機の操作を考慮して、中央棟と2本の腕の端部の実験棟周辺には円形の盛り土が計画された。土はコンクリートの基礎と2本のトンネルの接合部を覆う。西側の腕に平行な、長さ約150mの矩形断面をもつ付属トンネルは、モード・クリーナーセンターに接続する。



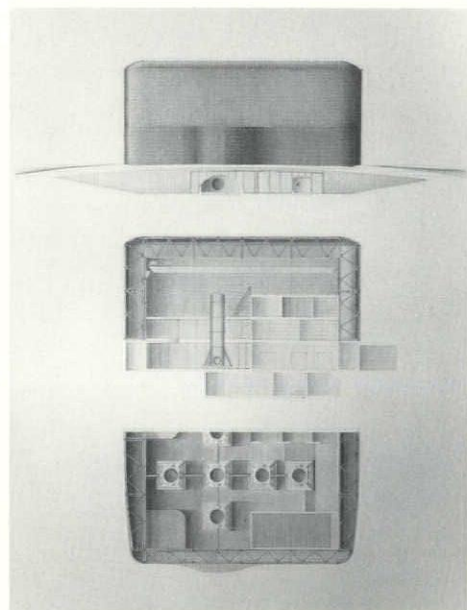
配置図



全体アイソメ図。直角に交わる長さ3kmの2本のトンネル



外装用アルミパネル詳細



中央棟：立面図、断面図、平面図

過去と現代が対話するイタリアの都市づくり

陣内秀信

長靴の形をした国土の北から南まで、各地に個性豊かな歴史都市がちりばめられたイタリア。だが、最近のこの国では、かつてほど保存(*conservazione*)という言葉が聞かなくなったように思う。今や、魅力ある古い建物や街を保存するのは当たり前で、それを現代のセンスでどう蘇らせ、想像力豊かに活用するかが最大のテーマとなっているからだ。

古代以来の歴史的に積層したふ厚いストックが、現代の生活空間として生かされる。レストアウロ(*restauro*)という修復・再生を意味する言葉が建築のレベルのみか、都市レベルで用いられるし、取り戻す・蘇らせるという意味のリクーペロ(*recupero*)が、近頃よく使われる。

それを象徴するデータがある。昨年、イタリアでの建設活動の全体において、既存の建物の修復・改造が新築を初めて上回ったというのだ。古くて人気のある街であるほど、建築家の仕事の多くは、レストアウロということになる。イタリア人の天賦のデザイン・センスが、古い建築や都市の再生に向けられるのだから、歴史が重層する空間が魅力的に蘇り、過去と現代あるいは近未来が対話する創造性に富んだ空間が実現するのも当然だろう。

とはいえ、ここまで来るには、彼らの粘り強い努力があった。ちょっと前のイタリアといえば、急速な近代化、経済発展のひずみが一気に噴出し、ストやテロ、インフレの話題ばかりで、評判がよくなかった。だが、それは後から考えると、ポスト工業化社会という次のステージに至るための、産みの苦しみを体験していた時期だったといえる。

建築デザインにしても、都市計画にしても、1960年代からの試行錯誤の歩みが着実に成果をあげ、「過去」と「現代」を共存させるいかにもイタリア的な方向が、80年代に明確な姿を見せてきた。こうして、アメリカ型の大量生産、大量消費の価値観を脱し、その土地の個性、歴史や文化の蓄積にこだわり、人間の感性にぴたりと合った質の高い生活環境をつくる。そんな建築と都市のストラテジーが、イタリアではすっかり定着してきたようだ。

こういった歴史都市の保存・再生におけるパイオニアは、何といてもボローニャだった。1970年代の前半、郊外に公的な住宅を供

給する代わりに、歴史地区の古いタウンハウスを修復・再生し、住民に提供して成功した。文化的・歴史的価値に加え、住むための空間として歴史地区を高く評価したのだ。

イタリアでは、前近代に形成された城壁の内側の歴史地区を「チェントロ・ストリコ」という。都市全体の中で最も象徴的かつ魅力的なゾーンだ。ボローニャをはじめとする先駆的な都市の経験が大いに生かされ、イタリア各地で、「チェントロ・ストリコ」が保存され、生活空間として積極的に再生され始めた。

都市づくりにおいて後進的だった南イタリアの最近の動きも注目される。古代ギリシャ以来の歴史が重層し、難しい都市問題を抱えるナポリも、チェントロ・ストリコの再生に向けてようやく重い腰を上げつつある。歴史地区の荒廃、スラム化に悩んでいたシチリアのシラクーザでは、蘇った古いセンターに市民が再び集まり、カテドラル前の広場から海辺へ、夕方の散歩を楽しむ習慣が復活してきた。バシリカータ地方の洞窟都市、マテーラでは、戦後、見捨てられ、空っぽになっていた歴史地区(サッシ)の洞窟住居群を再生し、3千人の住民を近い将来戻すことを計画している。

歴史的ストックを活かす発想は、古い都心部に限ったことではない。田園の中に点在する農場の建物が、アグリトゥリズムの発想のもと、次々と修復・再生され、ゆったり、のんびり旅情を楽しみたい人々の間で人気を集めている。先進的なトスカナ地方から始まったこうした動きは、今や南イタリアでも活発だ。

歴史の中で形成された都市・地域の空間や風景のコンテクストを読み、ストックを生かして個性的な環境づくりを行う動きは、イタリアの主流になりつつある。1985年に成立したガラッソ法により、各州は地域の景観計画を策定することを義務づけられた。都市の周辺に広がる田園、そしてその中に点在する集落や歴史的建造物が形づくる風景全体への関心が高まっているのだ。

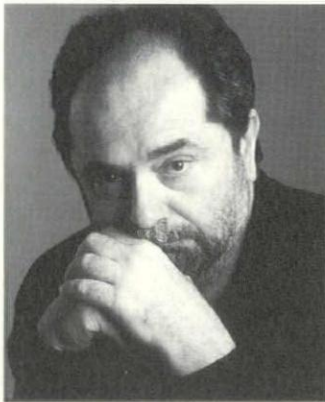
チェントロ・ストリコのすぐ外に近代初期(19世紀後半～20世紀初頭)につくられた町並みも、優れたストックとして注目されている。また、ジェノヴァやナポリなどの港周辺では、

古い倉庫、工場が産業考古学的な遺産として修復・再生の対象となり、それらを生かした地域の再構成への動きが見られる。ヴェネツィアでは煉瓦造のビール工場が市営住宅に生まれ変わって話題を呼んだ。アイデア次第で、ストックの活用はいかようにも可能だということを示している。

そして先進地、中北イタリアの各都市では、チェントロ・ストリコの魅力が近年、ますます高まってきた。広い範囲に歩行者空間を実現し、街路、広場などの歴史性をもった公共空間を現代的なセンスで演出して、街を歩く楽しみを生み出している。イタリアで今、アーバン・デザインに熱い眼差しが向けられているというのが、面白い。

このように、歴史的なストックとしての建築と都市空間の中から豊かな可能性を引き出し、過去と現代が対話する魅力ある生活の場をつくり出すことが、イタリアの建築家にとっての最大の仕事となっているのだ。

●じんないひでのぶ/建築史、法政大学教授



マッシモ・カルマッシ

1943年イタリア、ピサに生まれる。1970年にフィレンツェ大学建築学部卒業後、ピサを中心に設計活動を行う。1974年にピサ市の都市設計局を設立、局長として歴史的都市の実測調査、都市基本計画、歴史的建造物の保存・再生など、数々の計画事業をすすめる。1990年より夫人の建築家ガブリエラ・イオリと協働を始める。設計活動の傍ら、1987年から1991年の間、レッチョ・カラブリア、トリノ、シラクサーザ等イタリア各地、またアメリカ・シラキューズ大学などの海外の建築学部で客員教授を務める。現在ヴェネツィア、フェラーラ大学建築学部客員教授。

Photo Credit :

マリオ・チャンピ Mario Ciampi p.73~85

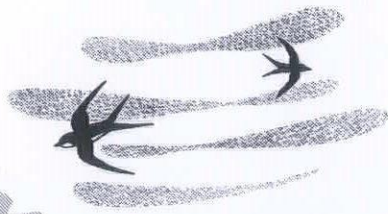
パオロ・デ・ピエトリ Paolo De Pietri p.76 左上,
p.78 右下

編集・翻訳協力 :

黒田泰介

空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元気である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ピュイ、ピュイ。
澄みわたった空気に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。
額に汗をにじませながら、
一步一步標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと
梢で声を
張り上げているのは
クロツグミだろうか。

樹齢は数百年に
及ぶだろう、
ブナの巨木を見上げると、



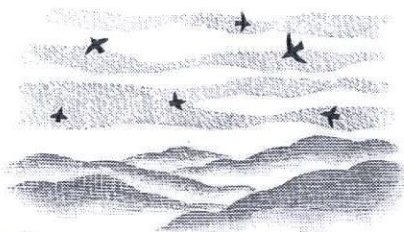
夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで
季節の深まりを知る。
山の秋は短い。

頂から麓へ向かって
早くも赤や黄に色づきはじめた
林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



例えば、エゾビタキ。

ヒラリヒラリと木の葉のように

舞いながら

フライ&キャッチを繰り返す

この鳥が姿を消す頃、

あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

秋

休日。ちょっと早起きして
近くの山に足を運んでみた。
枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサッガサッという音が

林全体に響き渡る。

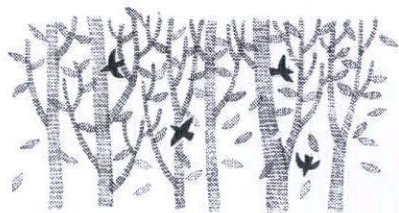
見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151 代 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

icc

INTERCOMMUNICATION CENTER

OPENING SERIES

デジタル技術の進展は、
人々の「コミュニケーション」の様式を
根底から変えつつあります。

NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]は
「コミュニケーション」というテーマを軸に、
科学技術と芸術文化の対話を促進し、
豊かな未来社会を
構想していくことを目指した
ミュージアムです。

展示概要

企画展示

オープニング展覧会:

海市—もうひとつのユートピア

会期: 1997年4月19日[土]—7月13日[日]

本展は磯崎新が21世紀のユートピア都市を構想し、
具現化するための実験モデルとして、企画・提案する展覧会です。
詳細は<http://www.ntticc.or.jp/special/utopia/>をご参照下さい。

常設展示

国内外の10組の作家によるメディア・アート、テクノロジー・アート作品、
無音室やヴァーチャル・リアリティ空間を使った作品など、
従来のミュージアムにはない環境を使った体感型の作品を展示します。
作家: 岩井俊雄(日本)、カール・シムズ(アメリカ)、三上晴子(日本)、
ウルリケ・ガブリエル(ドイツ)、グレゴリー・バーサミアン(アメリカ)、
ダムタイプ(日本)、ヘリ・ドノ(インドネシア)、クリスタ・ソムラー
(オーストリア)+ロラン・ミニョー(フランス)、
延綿正之+松本泰章(日本)、アグネス・ヘグドゥシュ(ハンガリー)+
ジェフリー・ショー(オーストラリア)+ペルント・リンターマン(ドイツ)

ワークショップ

OPEN STUDIO 岩井俊雄展

—そのメディアアートの軌跡

会期: 1997年4月19日[土]—6月22日[日]

映像と音と人々を結び付ける独自のインターフェイスによって、
新しい視聴覚世界を生み出し続ける岩井俊雄のメディア・アートの
軌跡を、初期から現在までの作品によってたどります。

シアター

吉原悠博ビデオワークス

会期: 1997年4月19日[土]—7月13日[日]

上映日時: 会期中の毎週金・土・日曜日 午後5時—6時

昨年磯崎新と共に、アメリカでレジデンスした際の
ドキュメンタリー・ビデオを中心に、
彼の新作を含む3作品を上映いたします。

オープニング特別企画

オープニングパフォーマンス オーディオ・バレリーナ

日時: 4月18日[金]午後2時—、4月19日[土]午後7時—

会場: 東京オペラシティ ガレリア(入場無料)
サンブラーや小型のスピーカーなどを取りつけた衣装を着て、
公共の場でその異化作用を試みるパフォーマンスです。
われわれの日常にあふれる「ノイズ」の意味を
ユーモラスに問いかけます。

ICCオープニング記念出版

マルチメディア社会と変容する文化

NTT出版より発売中 定価: 本体2200円+税

1996年10月に開催されたIC'96国際シンポジウムの全記録。

パネリスト 浅田彰のマーヴィン・ミンスキー、ロイ・アスコット、磯崎新、
蓮實重彦、ジェフリー・ショーらの発言のほか、
世界のクリエイターたちのインタビューも収録しています。

ICCオープニング展覧会
磯崎新企画

kaishi/
hăishi

海

主催:

NTT
インターコミュニケーション・
センター[ICC]

企画:

磯崎新

顧問:

浅田彰 月尾嘉男

制作:

磯崎新アトリエ

協賛(敬称略・50音順):

オートデスク株式会社

清水建設株式会社

日本シリコングラフィックス・クレイ株式会社

会場:

NTTインターコミュニケーション・
センター[ICC] ギャラリーA

〒163-14 東京都新宿区西新宿3-20-2

東京オペラシティタワー4階

想像力の未来を予告するミュージアム

NTTインターコミュニケーション・センター

4月19日オープン

浮上する 近未来都市 創造への 4つの ワークショップ

本展はICCのオープニングにあたり、21世紀のユートピア都市を構想し、具体化するための実験モデルとして、建築家磯崎新が企画・提案する展覧会です。
 磯崎新は、近代社会を支えた唯一の普遍性、単線的な進歩垂直の序列性などの原理に根本的な疑問を発し、新たなユートピアを創造するため、「inter(間・相・交)」というキーワードをもとに本展を構成しました。
 具体的には、マカオ沖の南シナ海上に彼によつて構想されている「海市」をその基本モデルとし、さらに以下の四つのモデル(模型+CG)の展示によつて、新たなユートピア創造の可能性を探ります。

もうひとつのユートピア The Mirage City

Another Utopia 会期: 1997年4月19日[土] - 7月13日[日]

プロトタイプ

すでに磯崎新によって提案されているプランであり、中国の文化的遺産(客家・四合院・甕民など)を建築プランとして変換しています。1996年のヴェネツィア建築ビエンナーレで発表されたプランを基礎としたものです。

シングネチャーズ

世界中の数十名の著名建築家の実作プランを、コラージュすることにより実現されます。18世紀の建築家バロネージの遺した壮大な都市プラン「カンボ・マルツィオ」を下敷きに、海市の地割りをし、個々のプランを無作為に埋め込み、会期中、各建築家と調整を行いながら都市を形成していきます。

ゲスト・ツアーズ

会期中、12人のデジタル・アーキテクト(建築家・アーティストほか)に週替りでゲストとして来場してもらい、観客の方々と共同でプランを造っていきます。こうして、海市は各ゲスト間で「連歌」風に変化してゆきます。これは海市の歴史を3ヶ月に凝縮したシミュレーションです。

●ゲスト: 入江浩一/吉松秀樹/古谷誠章/岡崎乾二郎/丸山洋志/渡辺真理/小林克弘/鶴沢隆/田中純/川原正/エリザベス・ティラー+リカルド・スコフィティオ/アレハンドロ・ザエラ・ボロ(予定・要予約)

●会期中の毎週土曜日(午後4時より、ゲストによるギャラリートークを行います(予定))

インターネット

主にインターネット等を介した、世界中の観客からのメッセージによって予知できないプランを試みます。本展覧会のためのホームページのさまざまな場所に設けられたアンケートの回答の集積によって、まさに不特定多数の匿名的なプランが形成されています。これは自然発生的なインターネットの生成プロセスを参照したものです。

本展は、会期中に多種多様な他者の関わりの中から、そのプランが決定されていくという、ユートピア創造の「プロセス」展示の実験場(ワークショップ)となる予定です。ICCのギャラリーは、さまざまな人たちの、さまざまな方法による「海市=ユートピア都市」の建築アトリエとなります。

現在、インターネットを介したメッセージによるプランづくりが進行しています。ぜひ、皆さんのメッセージを下記までお寄せください。また、会期中の各プランの進行状況は、ホームページ上でもご覧になれます。

e-mail:utopia@nttice.or.jp

利用のご案内

開館時間: 午前10時~午後6時
 金曜日のみ午後9時まで(入館は閉館の30分前まで)

休館日: 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日)
 ただし4月21日(月)は開館

入場料: 一般800円、大学生・高校生600円、
 中学生・小学生400円(税込)
 (常設展の入場料を含む。
 会期中何度でも「海市」展および
 「岩井俊雄」展に入場できます。)

NTTインターコミュニケーション・センター(ICC)

〒163-14 東京都新宿区西新宿3-20-2
 東京オペラシティタワー 4階



交通案内: 京王新線初台駅から徒歩3分

お問い合わせ: Tel: 03-0120-144199

e-mail: query@nttice.or.jp

URL: <http://www.nttice.or.jp/>



NTT

ひろがるマルチメディア

クレーン再生電話ボックス

瀬戸内海の古くからの港町に住吉浜という由緒ある荷揚げ場がある。この荷揚げ場には江戸時代に整備された石造の「がんぎ」という階段状の港湾施設の一部がいまでも残っている。「がんぎ」はこの町のかつての港湾都市としての繁栄の遺構である。隣接している海の神を祭る住吉神社とともにこの場所をこの町の特別な記憶の存在するところになっている。この「がんぎ」の陸側には問屋街が発達しており、土蔵が建ち並んでいたが今やその面影を残すものも少なくなってしまった。問屋街は郊外の流通団地に移転した。自動車交通路の発達と四国と本州を結ぶ架橋は古い港の機能を相対的に引き下げてしまうことになった。しかしいまでも船着き場として使われているこの荷揚げ場に、戦後つくられた鋼鉄トラス組のクレーンと木造の操作室があった。使われなくなってかなりの歳月がすぎているため、廃棄された粗大ゴミのようにこの場所に建っていた。このクレーンを撤去する話もちあがった時に、市民グループから保存の要望がだされた。

文化財でもない近代のしかも小さな産業遺構を保存したいという気持ちが市民グループからもちあがったことは、都市の記憶として大切なものが、アカデミックな文化的価値のある建物だけではないことを示している。日常の中ですでに風景化されたなんでもないささいなもの、そこに存在していたという時間がつくりだす存在意義のようなものがあるということを我々に教えてくれる。この町には伝統的な建物で国宝や重要文化財に指定されているものもいくつかある。これらは都市の記憶のスター的存在であるが、それだけではなく、スターでない存在も都市の重要な要素であることは、記憶の場としての都市にさらなる考察を加えなくてはならないだろう。

この建物の保存方法の相談を市民グループから受けたときに、そのまま保存しても文化的意味をもつものではないから、やがてふたたびゴミのような存在になってしまうことを危惧した。なにか新しい都市施設として生き返らせるしか方法はないと考えた。新しいプログラムが書きこまれなくてはならない。古い記憶が新しい機能をもつようにすることである。しかも日常的な施設として。ちょうど

操作室内部には人間一人が作業する場所をのこしてモーターがすえ付けられている。電話をするには十分な空間があった。海が見える電話室になるので操作室を電話ボックスとして再生する提案をまとめた。その計画がクレーンの所有者と電話会社に受け入れられた。ちょうど近くには対岸の島へのフェリーボートの発着場があり、電話が必要でもある。

ゴミから輝く小さな宝石のようなものをつくるのがデザインの目的となった。このクレーンと操作室は産業構築物すべてと同じく機能という目的のためにデザインされている。ここでは近代建築が目標とした機能と形態は完全に一致している。クレーン本体が鉄骨トラス構造の支持部とアームによってつくられ、操作室が木造の軸組と木製建具、スレート屋根、ガラスといった素材によってつくられているのも建設当時の最も合理的で経済的な解決がなされた結果である。ガラス面が多いのも操作室から見える作業範囲を広く確保するためであり、屋根の傾斜もそのことを考慮して方向を決めている。機能そのものを解決するデザインはその時代の材料、経済状態、技術レベルを反映する。そのために今ではどことなくつかしい感じがするのは、この施設がまだ豊富に工業材料を使えなかった頃の日本でつくられたからだろう。ここでは美は問われていない。また機能がつくり出すかっこ良さも問われていない。しかし乏しい時代であったがゆえのある種のデザインの素直さと端正さがこの建物には存在していた。

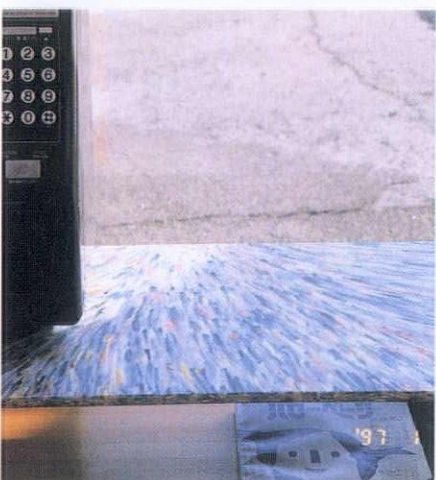
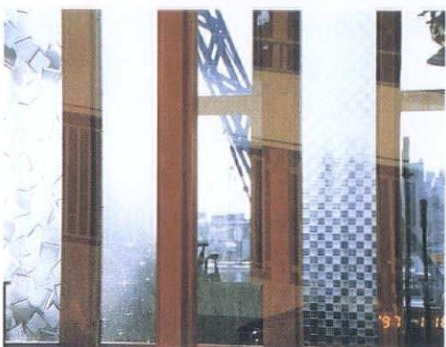
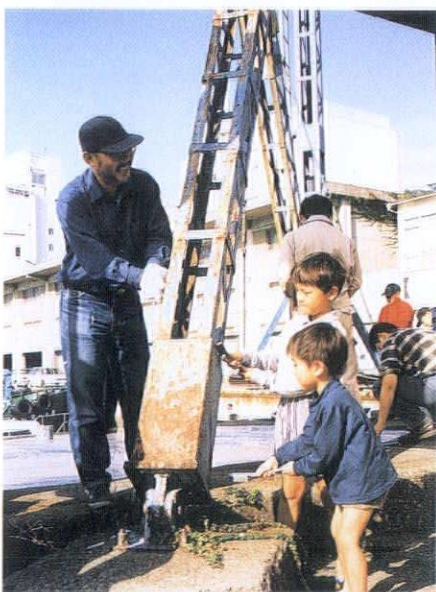
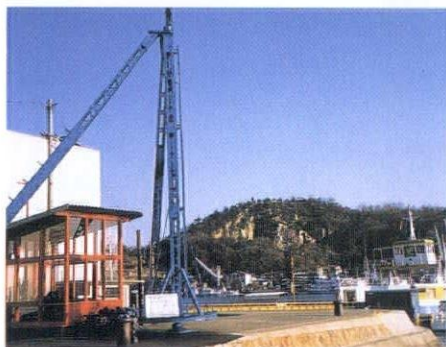
プログラムが変更されるにあたってこの建物に付け加えられたのは、操作室内のクレーン巻き上げモーターを撤去せずにそのままにしておくことが決まったため、電話室となるスペースとの間に間仕切り壁をつくることであつた。この間仕切りは木製方立に型板ガラスをはめ込むことにした。型板ガラスは廃番になってもう使われることもなく倉庫に眠っていたものをガラス屋さんへ選択してもらった。今では見ることの少なくなった流行おくれの型板ガラスはかえって新鮮なガラス面の間仕切りをつくった。

電話機の設置台には切りはなしになっていたH型鋼を足として組み立てた上に、プラスチックボトルのチップを加熱圧縮してつくられ

たプラスチックリサイクル合板を使った。床はモルタルに石こうをうめこんですべり止めとした。外側は屋根のスレートを交替し、木造軸組と建具は赤いペイントを塗った。

産業廃棄物のリサイクルが方法としてデザインの主題となった。海のそばにある赤い電話室は今、この町の日常の中でだれでも使える施設として新しい生命をもち始めた。ノスタルジーだけではない記憶の存り様としてこの建物の方法が、建築のリサイクルとしてさらに広がってゆけば、これからの都市の記憶の日常としての存在方法として未来を切り開いていくかもしれない。クレーン本体のペイントは市民グループのボランティアでおこなわれた。この時の彼等のうれしそうな様子は都市をつくるのは本来そこに住み生きる人間たちのよろこびであることを我々に教えてくれた。

●岡河 貢／建築家



写真提供：尾道ビサンゼセッション



自然を征服しようとは思いません・自然と調和させるだけです

空気調和の 三建設備工業株式会社

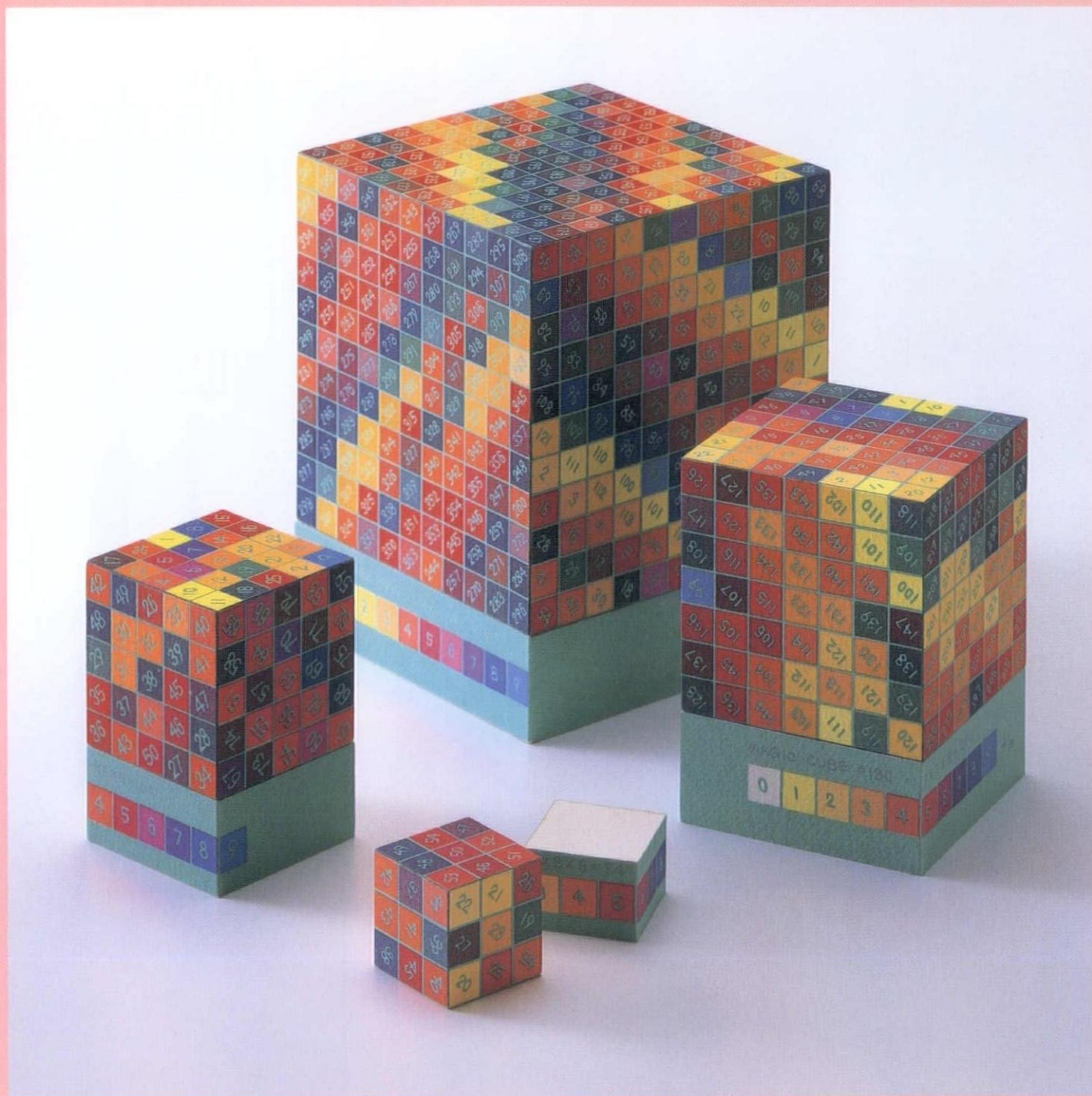
本 社 東京都中央区日本橋蛸股町1丁目35番8号
☎(03)3667-3431(大代)

支 店 北海道・東北・横浜・名古屋・大阪・中国・九州



戸村 浩

COLOR MAGIC CUBE



動的なエネルギーを奥底に秘め、数字の配列による平面意識の起点ともなった魔方陣。その古色蒼然とした方陣が、色彩を与えられたことにより、見事な連続模様へと変容した。魔方陣図形をパターンとして、その性質を浮かび上がらせることが出来たのである。

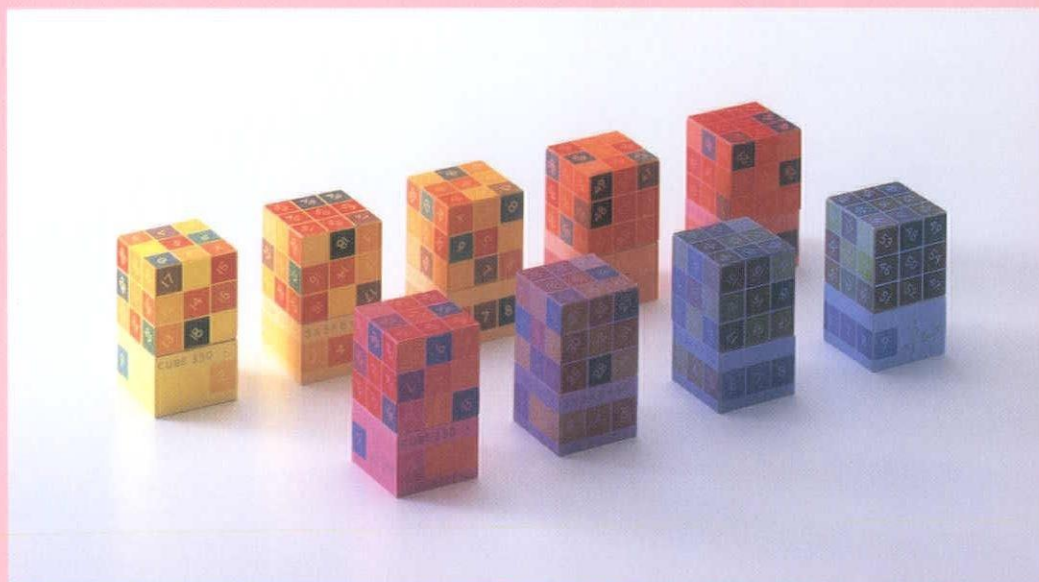
そして、サイコロは最小の魔方陣であることの発見により、立ち上げられたMAGIC CUBEも、色彩を得て再びここに輝いた。

パターンが深く研究され、広い興味を持たれるようになったのは、そう昔のことではない。連続模様や幾何学的パターンは、あらゆる創

作活動には欠かすことの出来ない関心事である。しかし、それらは一般常識の域を出るものではなかった。ところが、最近、パソコンの普及により、数学者やディレタントが、図形を容易に描き広範囲に取り扱うことが出来るようになった。にわかに図形とパターンに対する研究が盛んになって、新たな発展が期待されているのである。

これらのCOLOR MAGIC CUBEは、魔方陣と色彩との出会いによって多様にパターン化した、新しくもあり、また古き化石的な魔方陣の立体版画作品である。

●とむら・ひろし／造形美術家



May I Help You?

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 配電工事担当
架空配電設備
地中配電設備

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 電力工事担当
発・変電設備
架空送電設備
地中送電設備

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 情報通信(広域)工事担当
CATV設備
移動体無線通信設備
光通信設備

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 情報通信設備(構内)担当
データ通信設備
統合ネットワーク設備
LAN設備 構内映像設備

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 内装設備担当
システム天井
OAフロア インテリア内装
小規模建築

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 空調・衛生設備担当
空調調和設備
給排水・衛生設備
クリーンルーム設備
公害処理設備

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 一般電気設備担当
ビル電気設備
工場電気設備
施設電気設備

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 計装設備担当
ビル計装設備
工場計装設備
パワープラント計装設備

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 国際事業担当
アジアエリア
太平洋エリア
中近東エリア
他海外ネットワーク

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん エネルギー有効利用
システム担当
地域冷暖房設備
コージェネレーション設備
氷蓄熱空調設備

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 防災・防犯設備担当
自動火災報知設備
避難誘導設備
防犯設備

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん 新エネルギー
システム担当
太陽光発電設備
燃料電池発電設備

Kinden
CORPORATION
代表取締役 きんでん ファシリティ・
マネジメント担当
設備診断
設備改善提案
リニューアブル・メンテナンス

きんでんがお手伝いできることは結構多い。

私たちの事業分野にご注目ください。すでにご存じの人もいらっしゃるでしょうか？

おや、こんなこともやっていたのかという人もいらっしゃるはずです。

きんでんは、「情報」「エネルギー」「環境」をテーマに技術領域を拡張

これらの技術を有機的に結合させることで新たな価値を創造する

総合設備エンジニアリング事業を展開しています。

そのなかで生まれたのがこれらの事業です。その多彩さは

きんでんが現代の都市や社会が求めるニーズにフレキシブルに対応している証と言えるでしょう。

今日の都市をより豊かにするために、明日の社会をさらに創造的にするために。

私たちきんでんが、いろいろとお手伝いしていきたいと思ひます。

いろいろな技術が集まって、きんでんです。

株式会社 **きんでん**

本 店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 〒531

東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 〒141

注目を浴び始めた「SOHO」というライフスタイルが、大組織偏重だった日本社会に揺さぶりをかける。彼らがつくり出したヴァーチャル・ソサエティは、新しい力としてリアルワールドにシフトする。それは、次世代都市構造へのメガインパクトになり得るか。ネットワークによる集団単位と空間単位の再構築が、今まさに始まろうとしている。それは都市の風景さえ変えてゆくだろう。

CYBERTALK: 電子メディアのフロンティア

vol. 5

SOHOのメガインパクト!

『SOHO原宿』に見るパラレルワールド

価値観の崩壊と再構築に向けて

日本の産業構造や都市構造が大きなパラダイムシフトの時期を迎えてしまっているのは、行政や銀行などといった強固だったはずの既成概念と組織が崩れて行く最近の報道によっていや応なしに明らかになっている。都市の集団単位が一気に組み替えられることをリアルに予感させたのが、1997年のはじまりだった。

今回、その端的な現象として「SOHO」という、今や社会現象にまでなろうとしているワードを取り上げてみる。「SOHO」とは、Small Office / Home Officeの略。簡単に言ってしまうとフリーランサーのワークスタイルのことだ。

今まで、大企業(大組織)偏重日本型社会構造の下、マイノリティであると誤解されていた彼らは、インターネットというツールを媒体にして、ヴァーチャル・ソサエティをつくり上げようとしている。そして、「ヴァーチャル(仮想)」であるはずのその集団単位は、極めて具体的な動きとして現実の産業構造や都市構造を動かす力となってリアルワールドにシフトしている。それはまさに、リアルワールドの上にこのヴァーチャルワールドが覆いかぶさるような、もしくは、パラレルワールドを形成するかのような動きだ。

例えば、僕らが見慣れた原宿で、今その行動が起こされようとしている。今回、SOHOというライフスタイル、価値観を通して、ネットワークによる空間単位と集団単位の再構築の姿をレポートしてみたい。

SOHOのメガインパクト

SOHOはマイノリティではない。実際、アメリカでは、SOHO現象として、その大きなうねりは、インターネット／イントラネットなどの急激な普及に歩調をあわせるように産業界を席卷している。一時落ち込んだようにも見えたアメリカ経済を立て直したのも、アップルやゲートウェイといったガレージSOHOに象徴されるベンチャー企業のソーホーズなのだ。

数字がそれらの現象を物語っている。ニューヨークのリサーチ会社IDCの調べによると、1995年にフルタイムで在宅ビジネスに従事していた個人事業者は1300万人、パートタイムの在宅事業者が1400万人、会社と自宅のパソコンネットワークを結んで在宅勤務するビジネスマンが、800万人。そして、納税報告などから推計すると、在宅事業者は4600万人以上を数えられる。この数字は3人に1人が在宅勤務であ

Presented by

馬場正尊

1968年生まれ。早稲田大学大学院石山研究室修了。現在、[A]-associats.にて雑誌[A]出版。博報堂にて都市、地域、企業の空間に関するプロジェクトに関わる。

ることを示している。この数字はSOHOの「HO」だけの数であり、自宅外の「SO」の個人事業主やベンチャー企業を数えるとその総数は5000万人を超えると見られている。^{*1}

SOHOはもともと、情報技術先端市場での急成長ユーザー層を指す言葉として登場したと言われ、その購買力が、大企業の購買層よりスケールの大きい需要部門に育ってきたこと、また、1996年春には、IBM社が「SOHO市場獲得宣言」を打ち出したことによりその存在がさらにクローズアップされるようになった。今やSOHO市場向けテレワーク関連商品は急成長市場となり、その影響は通信だけにとどまらず、金融、不動産、保険、教育、流通、政府行政、メディア各界へと急速に波紋が広がっている。アメリカでは既に経済の主導権が大企業から個人事業者の集積へと移行していると言ってよい。

もちろん、このような大きな市場構造やライフスタイルの変化のうねりは、インターネット同様、ビッグウェーブとなって日本に押し寄せている。そして、その台頭こそが、日本における都市構造変革への大きな潜在力となり得るのだ。

SOHO-JAPAN

日本の状況を見てみよう。

現在、日本には組織を持たないフリーランサーやクリエイター、ベンチャーたちなどの知的専門職種小事業者(カタカナ文字系のSOHO)は全国推定600万人いるといわれている。そのような意味では、建築アトリエ派のオフィスも、もちろんSOHOである。これは事業・労働者の10%を占め、他の未組織小事業者(50人以下)の製造業、サービス業、在宅主婦労働者、中高年労働者を加えると2700万人規模とさえ予測されている。

その中でも情報系SOHOの多くは「在宅勤務」もしくは小人数のリモートオフィスで仕事をしており、インターネットに代表される情報通信機器に依存した「テレワーク」という先進国で増大しつつある「脱・組織化」労働環境に置かれている。実際、郵政省によると、日本のテレワーク人口は大企業だけで2000年に300万人、2010年には1300万人になると予測し(なぜかSOHOへの予測はない)、96年に郵政、労働両省と大手民間で「テレワーク推進会議」を発足、など行政も在宅勤務に対しては目を向け始めている。もちろん、民間でもSOHO市場向けテレワーク関連商品は最重視テーマである。

しかし、戦後50年、日本にはSOHOを育成してゆく社会的土壌に乏

ギルドジャパンの姿

【ギルドジャパンとは】

- 名称：ギルドジャパン／全国自由事業協同組合準備委員会
(事務局代表：河西保夫、96年設立)
- 参加：賛同社数300社
- 地区：全国区域（海外邦人SOHO、在日外国人SOHO等も参加）
- メンバー資格：原則として100人以下のSOHO事業者
- 参加方法：出資金1口1万円、法人5万円より（認可後）
現状は月会費1000円、法人5000円
- 運営：組合員に選出された理事会と事務局、サポーター機関
- 関連省庁：通産省、中小企業庁、郵政省、労働省、全国自治体
- インターネット：<http://www.mca.or.jp/~guild>
- SOHOメーリングリスト：soho@ijnet.or.jp

600万人のSOHOエージェント！ギルド設立へ！

For Small Office & HomeOffice 電子組合／情報生協

Power to the Peoples!

指輪をもたない全ての自由事業者、スタッフの皆さんへ
こんなとき、政府公認600万人のギルドがあれば！

ギルドジャパンの活動に共感された方は入会が可能です。

TURN ON! POWERFUL SOHO!

ギルドジャパン／全国自由事業協同組合準備委員会
事務局：(株) クラブハウス 担当/倉田、河西
〒150 東京都渋谷区神宮前6-17-15 落合原宿ビル8F
TEL03-5467-7211/FAX03-5467-3661
E-Mail: guild@mca.or.jp
<http://www.mca.or.jp/~guild>

以上、ギルドジャパンの設立案内パンフレットより抜粋

GUILD JAPAN

ギルドは話題のソーホー(Small Office & Home Office)
600万人のエージェント設立を提案します。



■延べ50万人のオーガニック・フリー・マーケットが読者副都心に出現！
東京ベイ・グローバル・マーケット



「Dの食卓」の飯野賢治と映画音楽界の巨匠「ピアノレッスン」のマイケル・ナイマンによるハリウッドを超えた未知のインタラクティブ・ムービーへの挑戦！



●クリエイターズ・パソコン通信「LOOK!」マルチメディア・アイドル・グランプリ受賞でデビューした原田志乃(17)がギルドで活躍。リコーCMでは菅原宏の幻想小説のVRヒロインに。朝日出版の処女写真集(12月発売)では派遣力メラマンが熟考！

ギルドってなんだ？
ぐんぐんギルドが理解できる！
ギルドとんでも電子書簡集

New!
待望のSOHO関係者向けのメーリングリスト開設！

SOHOメーリングリスト入会案内はこちら！

New!
[SOHOのためのクロス・ネット伝言板]登場！

コラボレーション・データ共有掲示板として仮想会社活動に最適！
マスターは、コラボレーション・ワーク倶楽部の鬼塚氏です。

GUILD SPECIAL! SOHO LINK15

New!

- 待望のSOHO関係者向けのメーリングリスト開設！
- SOHO向け無料メーリングマガジンNEWS登場！
- ギルドジャパン発！SOHO NEWS
- ギルド、NMF、コラボレーション・ワーク倶楽部、他共同のSOHO用メッセージ掲示板開設！
- オールラウンドなSOHOビレッジオープン！
- 話題のSOHO向けマーケティング・エージェント iMi ネットワーク登録ガイド
- どうしても自分の会社を作りたい人のためのABC
- 独立して自分の店を持ちたい
- 人気のカナ文字系フリーランサー65業種入門！
- フランチャイズで独立したい
- いちおう試してみよう！独立準備断書
- ウェブサイトへのアクセス数を増やす極意を伝授
- 仮想企業のインターネット利用事例
- SOHOに向く職業って何だろう？
- 在宅ワーク(テレワークSOHO)として独立するため営業戦略

SOHO'S NEWS
ソーホーズニュース

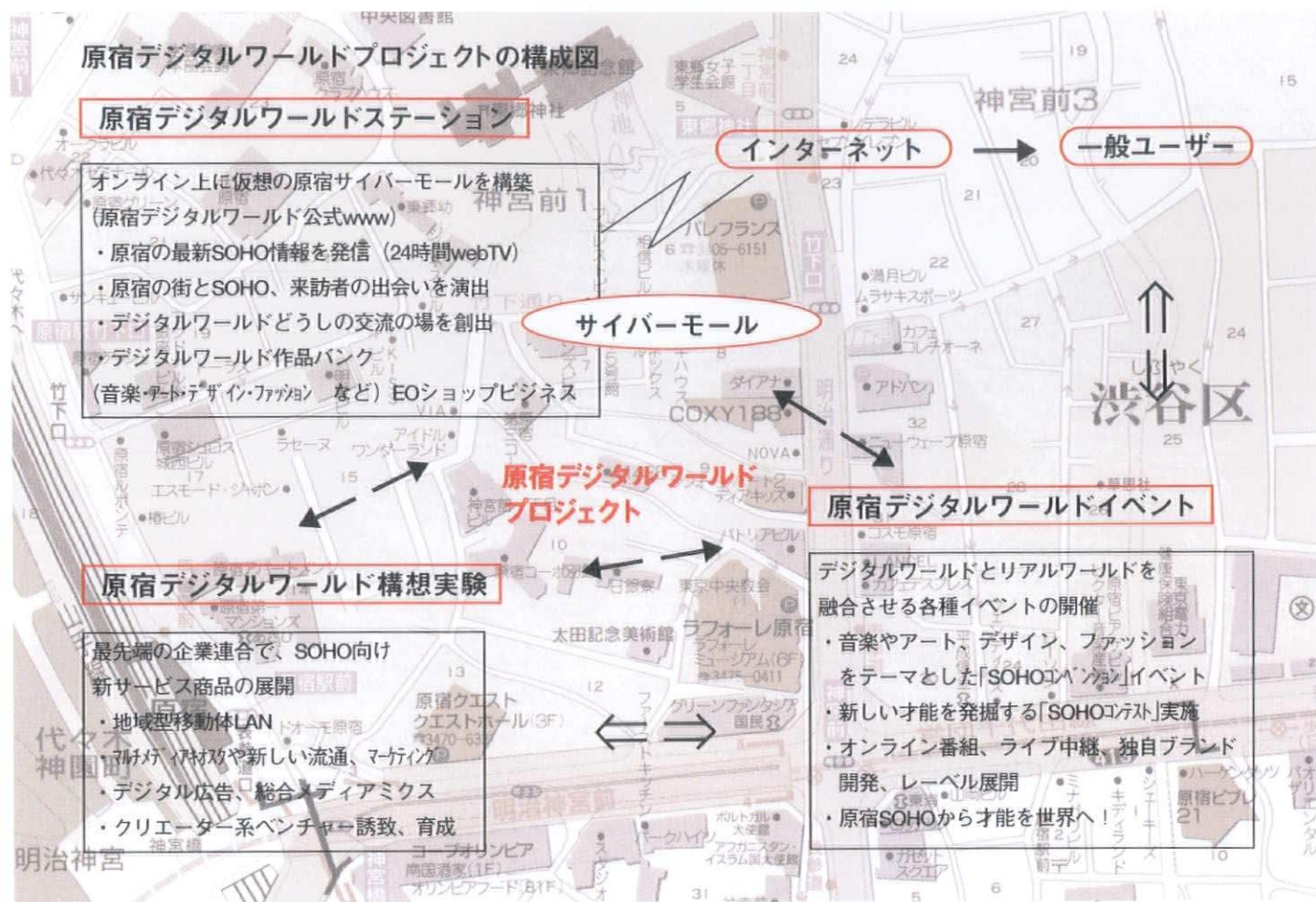
■ギルドの「SOHO NEWS」では、業界関係者の最新リンク・ニュースを受け付けています。URLアドレスと100字以内のリードを添えてMLしてください。URLアドレスがないものでも面白いか、SOHOにとって有益であれば受け付け致します。

New! 岡田斗司夫のおたくウィークリー、プレ刊2号がリリース！
今回は、岡田斗司夫編集長以下5名のスタッフが、おたく関係のニュースをアット・ランダムに切りまくる「ニュース・エディション」版！お勧めは、「とんでも本の世界」「とんでも本の逆襲」などのベストセラーを出したと学会の唐澤保一が紹介するとんでもの世界。UFOコンタクトから、とんでも健康法から、その手の世界では今話題沸騰の「波動理論」まで、縁切丁寧にその経緯絶頂の面白さを解説している。勿論、エヴァンゲリオンをはじめとしたアニメネタ、ゲームネタなども充実。
<http://www.netcity.or.jp/Tide.html>

New! ギルド、SOHO向けエージェント(情報生協) iMi ネットワークと提携は確！
株式会社ドゥ・ハウスと富士通との協同事業 iMi ネットワークは、
・エージェント技術を活用して
・ニフティ200万人インターネット数100万人から
・登録条件に納得した生活者に iMi のメンバーに登録をしてもらい
・企業のマーケティング連が、自由に電子メールDMを発信できる(有償)
・メールを受けて返信した生活者メンバーには、ポイント制で「報酬」を支払う
というマーケティングサービス。96年末時点ですでに1万人が無料登録をすすめているらしい。
E-Mail IMIO203@niftyserve.or.jp NIFTY-Serve: GO IMI
Internet: <http://iminet.ext.fujitsu.co.jp/imis/>

New! SOHO向け無料メーリングマガジンNEWS登場！
「インターネットビジネスの成立のためには最低月間10,000ヒットが必要」など、SOHOのためのビジネス情報を送る無料メーリングマガジンが登場。「ギルドメンバーさんはいつでも情報配信可能ですので、いつでもご提案ください。NEWSの読者は現在約1900名ですが、SOHO情報に関しては驚くほどレスポンスが高いです」とは、NEWSの井坂氏の弁。
<http://www.jnews.com>

ギルド・ジャパンのホームページ



「デジタルワールドステーション (サイバーモール)」/「デジタルワールドイベント」/「デジタルワールド実験」の3つで構成。現実の原宿でのイベント中継などを行い、サイバー空間とのイベントとも連携しリアル/ヴァーチャル双方からの集客 (またはアクセス) を

図る。実際の原宿訪問者に対して、携帯端末や店頭端末を通してリアルタイム情報を提供、など数々のサービスが複合的に展開される。既存のリアル原宿の構造の上にヴァーチャル原宿が覆い被さる。新しい原宿のパラレルワールド。

原宿デジタルワールド「SOHO原宿」での実験

より身近なところから、ネットワークによる街の構造の再編が試みられようとしている。

原宿デジタルワールド「SOHO原宿」は、前述したギルドジャパンが大手総研の協力を受けて仕掛ける、「原宿」というリアルな街をフィールドにしたサイバーモールの実験である。

現在、商店街のサイバーモール化は、様々な地域で行われてはいる。しかし、その主な機能と目的は、サイバーモール上のオンラインショッピングであり、実際、大きな売り上げを期待するのは難しい。

一方、富士通の「ハビタット」や、「キュリオシティ」などに代表されるような、大手商社、通信系や大手家電メーカーをはじめとした巨大資本によってつくられた全くの別世界をウォークスルー型で展開するヴァーチャルモールも乱立しているが、そのどれもが、地域色や企業色などが出にくく、現実世界との接点が高い。その分、その世界に入り込んで、予想外にその世界のなかにコミットしていかない、というどこか物足りない感覚は、体験した人間が多少なりとも抱いた感想ではないだろうか。

この「原宿デジタルワールド」の大きな特長は、原宿というリアルな街とデジタルで構築される街とが、互いに関連し合い、互助組織としても機能し、

共同口座を持ち、しかも原宿に遊びに来た人々までもが、デジタル原宿の通行人にいつのまにかになってしまったりしていることだ。そこで行われようとしているのは、単にモノの売り買いや情報交換ばかりではなく、より社会的な活動である。ここでは、ヴァーチャル空間はリアル原宿のために、逆にリアル原宿はヴァーチャル空間のためにある。互いに捕完し合っているようだ。そこに大きな意味がある。ギルドジャパンのトライアルを原宿地域限定でやってみようというのがこの実験の意図らしい。

原宿は、全国でも有数のSOHOがひしめきあっている地区である。ここで言う、SOHOは、デザイナーやクリエイターから、ショップや飲食店まで、スモールオフィスなどすべてを含んだ業態を網羅している。「原宿デジタルワールド」は、原宿の8商店会750店舗と手を組み、3月から本格的に始動している。

原宿デジタルワールドの事業構成は3つ。サイバーモールから情報発信を行う「デジタルワールドステーション」、実際の街とインターネット上で行う「デジタルワールドイベント」、街頭端末や店頭端末を使って原宿地域のマルチメディア化を図る「デジタルワールド構築実験」である。これら3事業は密接に関連する。たとえば、デジカメを使って撮影した自分の頭の画像を即座にモールに掲載し、待ち合

わせや出会いのきっかけにするという (いかにも原宿っぽい)。この仕掛けの面白いところは、現実の原宿をウロウロしている自分と同時に、自分の頭をもったアバターが、現実とパラレルにヴァーチャル原宿のなかをウロウロ歩き回っているのだ。このパラレルワールドの奇妙さは、携帯端末の駆使によってさらに助長されるだろう。リアル原宿を歩くあなたは、携帯端末で、ヴァーチャル原宿にジャックインすることによってリアルタイムの情報を収集できると同時に、自分の存在をヴァーチャル原宿のなかにジャックインというかたちでデータとして足跡を残してゆくわけだ。

この文章を書きながら、ヴァーチャルとリアルが入り乱れて混乱してしまいそうな感覚になってしまっているけれど、今後うまくいけば、このような愉快な混乱が原宿をめぐるパラレルワールドで展開されることになるだろう。ここで、構想されようとしている世界では、現実とヴァーチャルが錯乱する瞬間がいくつかある。この世界のなかでは、デジタルワールドで起こっていることを、リアルワールドで確認する。もしくは、その逆。そのパラレルワールドの中での個人は、どちらから自分をたどっていてもよいのだ。

パラレルワールド・原宿では、ネットワーク化したSOHOによる、都市空間の概念への揺さぶりが、まさに始まろうとしている。

しく、特にクリエイター系職種の大半は未だ職業としても事業者としても公的に認知されていない場合が多かった。(上記のテレワーク事業からもなぜかSOHOは除外されているのが今のところの現状)*2

実はそのことが非常に大きな問題で、徹底的な実績主義と事なかれ主義の日本の行政には業者登録という資格審査があり、SOHOのような小さい組織や個人はまずそれに通らない。日本の行政の仕事は大企業にしか落ちないようにできている。さらに、現在SOHOの払う租税は約8兆円にものぼるにもかかわらず、公的投資はほとんど行われていない(農協などの農家の組織体にはあれだけの税金が積み込まれているというのに)。簡単に言えば、クリエイティブ系のSOHOは行政的には職業と見なされていないわけだ。状況から追ってゆくとそういうふうになっている。これこそが、日本の芸術や文化が育ち得ない最大の環境要因であると言え、僕は個人的に思っている。このため、クリエイターの道を諦めた人がどれだけいるだろうか(芸術誌でこそ、このあたりを糾弾してゆくべきだ、と僕は思う。余談ですが……)。これらからも分かるように、今まで、バラバラの存在であり、それゆえに社会的に認知されにくい状況であった。すなわち公的投資や受注、各種の保障などが受けにくかった＝マネーが滞りがちだったSOHOがネットワークを武器に組織化され(例えば、農協のように)エスタブリッシュされることによって、都市のマネーフローは大変動を起こすことになるだろう。具体的に言えば、土地本位制度のなか大組織に集中投下されていた資本が、SOHOに向けて分散してゆくということだ。この土地本位制度崩壊が都市空間や建築空間に与える大きさは、はかりしれない。それは都市の風景さえ変えてゆくだろう。

マネーフローの変化は経済構造を変え→組織(集団単位)の変化→空間単位(ビルディングタイプ)の変化→都市風景の変化へと連鎖的な構造変革を誘発する。端的に言えば、建築自体からヒエラルキーが感じ取れるいかにも大企業ビルディングタイプで構成された都市風景ではなく、よりデジタルメッシュ状に分散された都市が形成されることになる。その時、丸ノ内や西新宿に象徴される風景は確実に変化を余儀なくされるだろう。日本社会におけるソーホーズによるメガインパクトは、これから2000年という節目を超えて行くこのタイミングで加速しつつある。条件は、すでに整っている。企業のリストラクチャリングによる人材の流動化。インターネット/イントラネット。組織のスリム化によるアウトソーシングの増強。市場のグローバル化などなど。そしてなによりも我々の生活に対する価値観の変化である。組織オリエンティドな発想は、もはや僕たちの世代にはない。

ギルド・ジャパンというヴァーチャル・ソサエティ

ここで、昨年動きはじめ注目をあつめている、ある「仮想企業体」を紹介したい。600万人にものぼると見られる、上記のように増えてゆく全国のフリーランサーや在宅起業家をインターネットで結び、法人(事業共同組合)を目指そうとする動きが起こっている。その立ち上げ人であり、現在ギルドジャパンの事務局を取り仕切るのが河西氏だ。

その機能と運用形態の概略は、

●行政と交流のないSOHOのための「公的支援情報のインターネット公開とユニバーサルサービスの統合」を主な目的とし、テレワーカーが全国から、何時でも、誰でも、自由にアクセスできる電子ネットワーク空間のパブリックな「ヴァーチャル政府電子コミュニティ」機能を持たせる。

●すでに存在する政府・自治体・特殊法人系ホームページ(自治体系セクター、医療、電信、保険、交通、学校、税務、住宅、金融等のユニバ

ーサルサービスも含む)をリンクし、民間のSOHO向け各種サービス(海外300万番組、日本語30,000番組から「あいまい条件検索」可能なもの)を統合リンクしたモールとする。

●運営は自主的に行われ、公団がそれをサポートする。運用に必要なハード、回線、建物等は、公団が支給する物を使用し、過剰投資は避ける。

●暫定利用のバリエーションの一部として、希望するSOHOの会社活動プロフィール情報や、各種エラーページを掲載、リンクし、相互交流が自由にできる環境をつくる。当初、認知を得るまで10,000社程度まで無料掲載とする。――抜粋――*3

(ギルドジャパンの活動と構造についてはp98を参照)

このインターネットを媒体としたヴァーチャル・ソサエティは、インターネットというツールの登場によって初めてなし得るものである。個人の小さな集積がいつの間にかに巨大な仮想の組織となり、そしてそれが「力(power)」となる。このパワーシフトこそが、ネットワークがリアルワールドにもたらすメガインパクトである、と僕は思う。ギルドジャパンの狙いは、ネットワークによる経済構造(=都市構造)の変革にある。

ギルドジャパンでは、このネット上の組織を企業や大手労組に入っていない働き手がだれでも利用できる互助組織「全国自由事業共同組合」に発展させ、通産省と認可への話し合いを始めた。ヴァーチャルな組織が自己成長をとげ、現実の社会の上にシフトしてゆく。そんな様子を、ギルドジャパンは見せてくれている。ネットワークによる空間単位と集団単位の再構築は確実に始まっている。

*1.「SOHO仕事術」/伊藤友太郎・佐々木直彦著・PHP研究所参照

*2. 以上、CLUBHOUSE代表/GUILDJAPAN事務局 河西保夫氏のレポート参照

*3. 以上、CLUBHOUSE代表/GUILDJAPAN事務局 河西保夫氏のレポート参照

NEXT NETWORK

田園都市とデジタルネットワーク社会

Presented by
石原弘明

建築様式などの上部構造は、常に経済や生産などの下部構造によって変革を起こす。物に制約を与えない仮想現実が、現実世界にどのような影響を与えるのか興味のあるところだが、今回のレポートからはその萌芽がはっきりと感じとられた。SOHOは、経済活動のパラレルワールドとともにコンピュータ・ネットワークとフィジカルな空間単位を規定するキーワードとしても今後重要な位置を占めてゆく。ネットワークに空間がついて行けない状況が起きないよう、この変化に対してクリエイティヴに対応してゆきたいものである。

さて、問題はデジタル・ネットワークによってどのような経済変革が起き、どのように空間を変えてゆくのか、ということである。次回は歴史を紐解き、都市計画の祖である田園都市を通してこの可能性について考えてみたい。

連載内容について御意見下さい。また、こんなネタよりもっと面白い話があるんだ、と思った方もぜひ御一報下さい。お便りはファックスか電子メールで。

fax:03-5561-2565 e-mail: sd3@in.aix.or.jp SD編集部連載サイバートーク係宛

隔月連載

ポーランドのドイツアヴァンギャルド

構成=長谷川 章

第1回

ハンス・ペルツィヒの工場建築／長谷川 章

ブルーノ・タウトの幻の田園都市／マンフレッド・シュパイデル

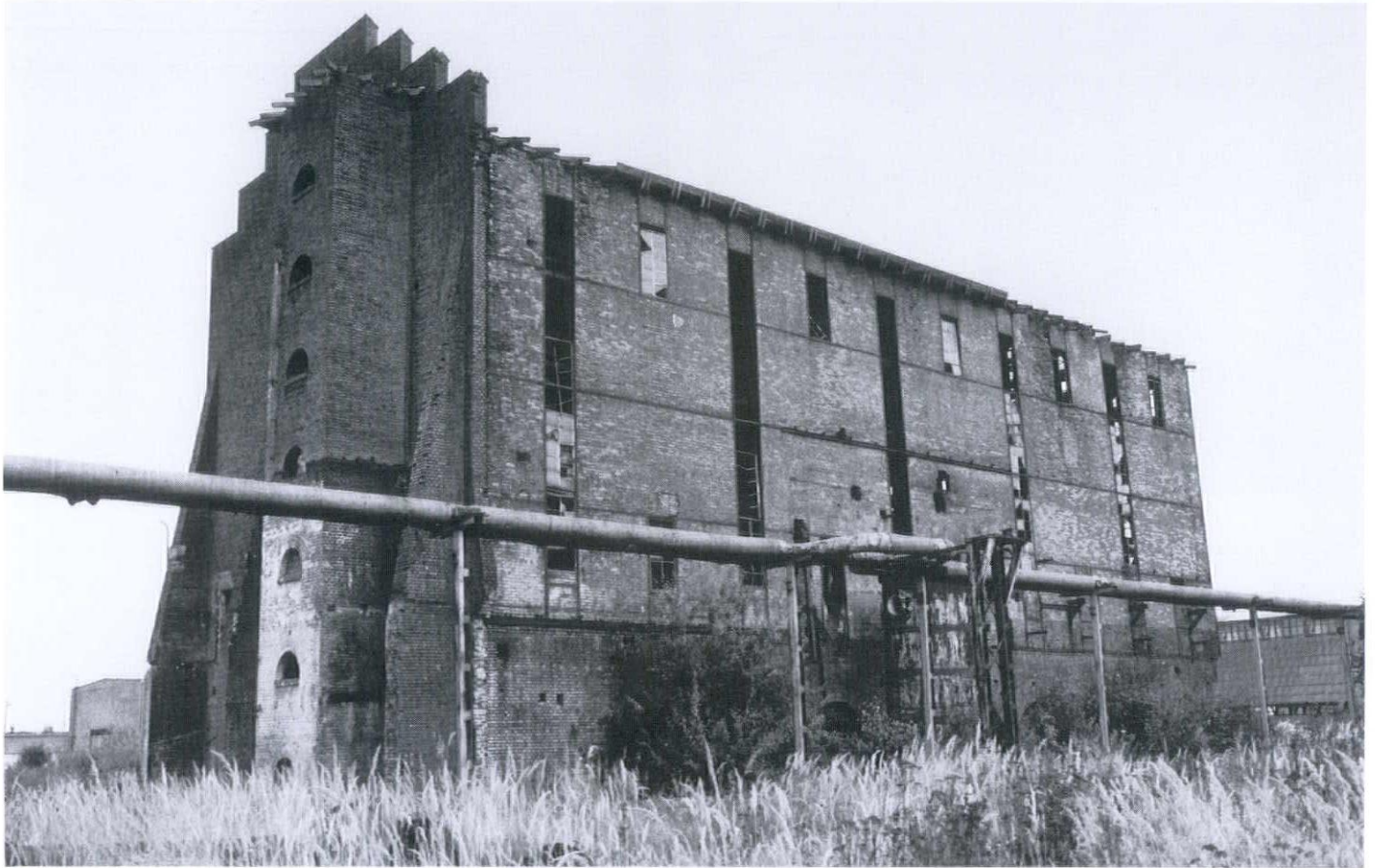


図-1 〈ルーバンの化学工場〉(1912年) この工場では硫酸が生産された

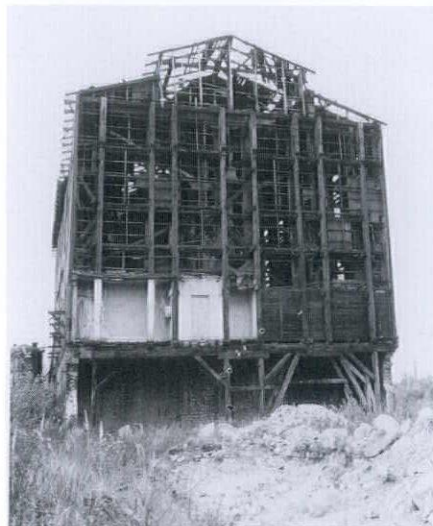


図-2 〈ルーバンの化学工場〉解体された工場

ドイツでは遅れて始まった産業革命が、期せずして20世紀初頭の近代建築の時代と重なった。それまでの建築はどの用途にせよ歴史様式の外套をまとっていたが、工場建築の分野においてより純粋に追求され、様々な新しい素材や技術や表現の競う場を提供したのである。

このH.ペルツィヒの〈ルーバンの化学工場〉(1912年)はこうした工場建築の代表例であり、当時のP.ペーレンスの〈AEGのタービン工場〉(1910年)やW.グロピウスの〈ファグスの靴工場〉(1911年)と同列に位置付けられる。しかし煉瓦を多用したその外観には北ドイツ特有の雰囲気漂い、伝統と近代の融合された境地をここに見出すことができる。



図-3 〈ルーバンの化学工場〉高さ20mほどのこの建築は木造であった



図-4 〈ルーバンの化学工場〉発電棟はガラスと煉瓦のカーテンウォールとなっている

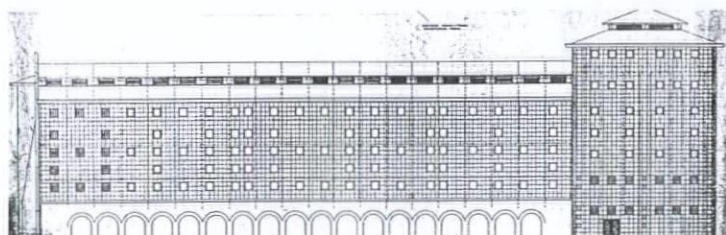


図-5 〈ルーバンの化学工場〉立面図左側端部のみが現存している（出展：「Hans Poelzig」Julius Posener＝著、Vieweg刊、81頁）



図-6 〈ルーバンの化学工場〉妻壁部分は煉瓦積層構造となっている

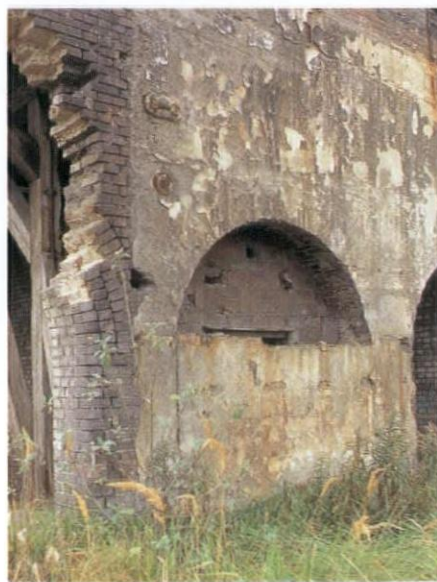


図-7 〈ルーバンの化学工場〉基壇は煉瓦によるアーチが連続する

この〈ルーバンの化学工場〉の特徴は木構造であるということだ。高さ20mに達する木造建築の技術自体はハンプルルクの民家で19世紀より養われていた。しかし注目すべきは外側へ持ち出された梁に固定された、スチールフレームと煉瓦のカーテンウォールである。これは彼の設計した〈ポゼーンの給水塔〉（1911年）の外壁にも採用されていた。

ペルツィヒの建築ではロマネスク調の半円アーチがよく認められるが、この作品も例外ではない。特に基壇部分を構成する煉瓦の連続アーチは60mに達し、ローマの水道橋を彷彿とさせる。またこの工場の妻壁の階段室部分ではその窓によって彫りの深い表現が追求され、その威風堂々たる外観には世俗の建築を超越したものが感じられる。



図-8 〈ルーパンの化学工場〉過燐酸が生産された棟。段状の妻壁が特徴的だ

もう1棟の工場にも共通するベルツィヒの特徴的なデザインは段状の煉瓦の妻壁である。これは中世の北ドイツの煉瓦ゴシック建築に典型的なモチーフである。この伝統的な素材や形態の引用は、ドイツ表現主義の建築全体に認められる特徴である。パウハウスを典型とする近代建築の流れに迎合しなかった北ドイツの建築家達は独自の作風を築き上げた。



図-9 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉クライスト通り23A番地の玄関の煉瓦模様の詳細

B.タウトがカトヴィッツに設計したこのジードルンクでは開口部のデザインへの執着が認められる。それは単なる壁面の装飾に過ぎないのであるが、歴史様式を脱却して自由なデザインの域に達している。特に中庭に面した玄関部分の外壁では、3層に渡り大きなアーチと格子状のラインで構成されたパライオ風の巨大なルネサンス装飾が人目を引く。

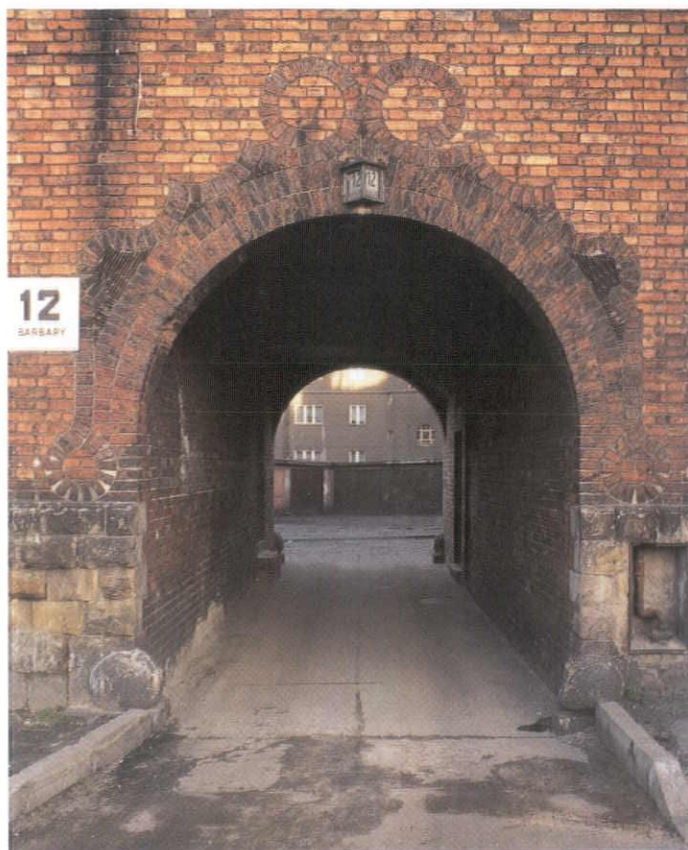


図-10 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉ヴランゲル通り12番地の住棟を貫く中庭への通路の入口。門型のアーチ煉瓦による模様貼りが施されている

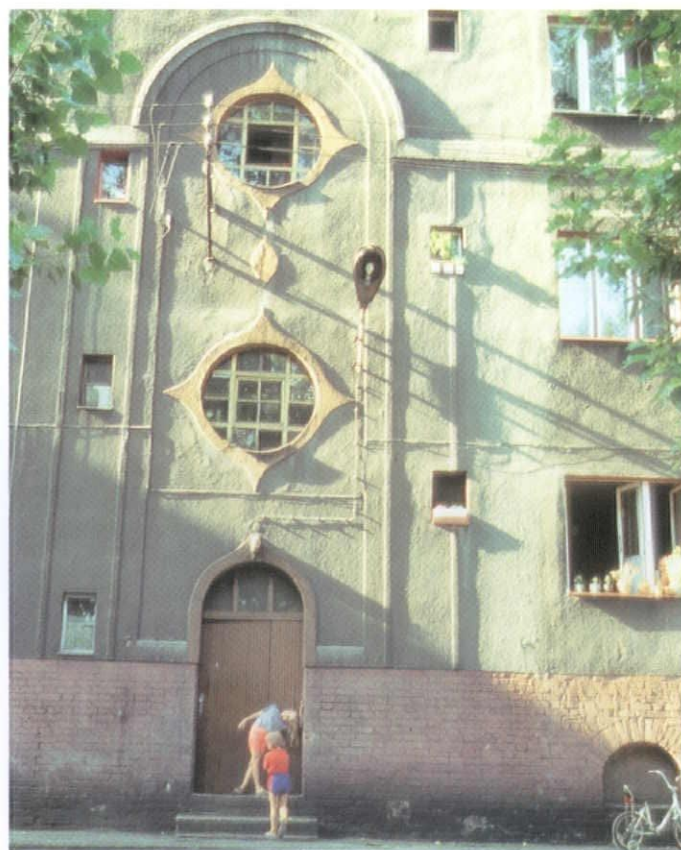


図-11 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉南側の住棟の中庭側のファサード。階段室部分

ドイツ近代の空白地帯

これまでドイツ近代建築の研究を進めてきたがどうしても埋め切れない空白の時空に遭遇することがあった。当時のドイツを代表するような建築家達の経歴がすっぱり抜けていたり、あるいは代表作品の最近の写真が無くどの資料にも数十年前の竣工時の同じ写真が使われていたり、あるいは作品自体がドイツに無く、最近確認されたという情報もないものなど状況は様々であれ隔靴搔痒の感はいかんともしがたいものであった。

中でもドイツとの国境が目まぐるしく変化した隣国ポーランドとは常に微妙な状況が継続し、それが近代建築の運命的な歴史を生み出した。ドイツ東部のシレジア地方と呼ばれる領域がその問題の地域なのだ。こことポーランド北部の旧ケーニヒスベルク（現カリニングラード）周辺は歴史的には1922年までプロシア領に属していたが、第一次世界大戦敗戦にともなう、ポーランドの東部がロシアに占領されるのと引き換えるようにポーランド領となった。そして後にナチスが占領した1938～45年を経て再びポーランド領となった地域である [図-12]。この第一次大戦までのプロシア領に属していた頃、この地域では近代建築運動が最も活発であったのだが、その全てを残したままポーランド領に移管された。その後一時ナチスに占領されたものの近代アヴァンギャルド芸術が評価されることなどありえなかった。結果としてシレジア地方はドイツ近代建築のタイムカプセルとなって現在に至っているのである。

中心都市ブレスラウ

ところがこのシレジア地方の中心都市であるブレスラウこそ当時の近代建築で最も注目されていた都市のひとつであった。そこで活躍した中心的建築家こそハンス・ペルツィヒであったのだ。このオーデル河上流に位置するブレスラウにはドイツ芸術の向上を担うべく1781年に設立されたブレスラウ芸術アカデミーがあり、H.ペルツィヒ、A.エンデル、O.モルが歴代の学長を務めていた。彼等のもとにはO.シュレンマーやM.ラインハルトが活躍し、M.ペルクやH.シャロウンが建築を造っていった。こうしたアカデミーの活躍を手本にW.グロピウスはバウハウスを設立したのであり、さらにヴァイセンホフと同規模ながら、より地域風土に根差したものとして企画された近代建築の実験住宅展であるWUWAジードルンクが現在も残っている。しかしこうしたシレジア地方における前衛的な近代建築の歴史的事実は、戦後西側の歴史に取り上げられることはなかった。

今回、現地調査によって、ブレスラウをはじめとする街が生きた近代建築の博物館であることが判ってきた。E.メンデルゾーンやM.ペルクの作品が当時のまま佇んでいるのである。こうした近代建築の遺産を整理して、ドイツ近代のアヴァンギャルド達がシレジア地方でどのような活動をしていたのかできるだけ具体的に明らかにしてみたいと思う。さらにこれまでの西側からの視線を相対化し近代史を見直す契機となればと考えている。



図-12 1938～45年当時のポーランド領と現在の国境線 (作図=長谷川)

ペルツィヒのポーゼンの近代建築

シレジア地方の中心都市ブレスラウの芸術アカデミーで校長を務めていたペルツィヒはこの地方に多くの作品を残した。ブレスラウに次いで大作を残したのは、シレジア地方に隣接するポーゼン（現、ボズナン）という街である。ここにペルツィヒが1911年に設計したこのメッセのパヴィリオンである〈上部シレジアの塔〉（通称ポーゼンの給水塔、1991年）がある。当時はエキゾチックな外観が主流のパヴィリオンにあって工業建築を土台としたデザインはショッキングなものであり、注目を浴びた。火災焼失した上部を除き基壇部分のホールは現在でも使われている。現在上部には天を突くような塔が付され、今も街のシンボルとなっている。

また、ポーゼン郊外の街ルーバン（現ルボンニュ）にはペルツィヒが設計した大規模な化学工場があり、数年前に一部解体されたものの現在も残っている。当時のまま廃墟と化した棟もあるが、改修され現在も稼働中である。驚くべきことはその構造が木造であったことだ。さらに外壁が煉瓦による非構造材のカーテンウォールであったことである。

タウトのジードルンク

またこのシレジア地方東部にあるカトヴィツの街ではブルーノ・タウトの設計したジードルンクが再発見された。それに関してはアーヘン工科大学のマフレッド・シュパイデル教授による報告をここに掲載する。

●はせがわ・あきら／東京造形大学助教授

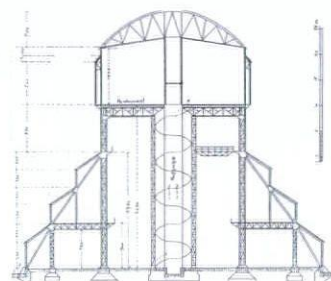


図-13 〈ポーゼンの給水塔〉(1911年)の断面図
[出展:『Hans Poelzig』Julius Posener=著、Vieweg刊、86頁]



図-14 〈ポーゼンの給水塔〉竣工当時の航空写真。周辺には何もなくて森が広がる



図-15 〈ポーゼンの給水塔〉現在の姿。火災の後胴体部分と頂部は失われた。基壇部分は現在もメッセのパヴィリオンとして使われている

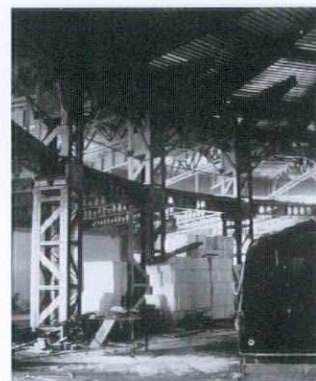


図-16 〈ポーゼンの給水塔〉現在の改装中の内部。構造体は当時のままである

ブルーノ・タウトの幻の田園都市

ポーランドのカトヴィッツに建設された労働者コロニー

マンフレッド・シュパイデル 編訳 = 長谷川 章



図-17 旧プロイセン時代のシレジア地方の位置 (1918-38年)

見慣れない図面

B.タウトの息子ハインリヒの所有するブルーノのスケッチや図面や水彩画のコレクションの中に、ファサードのエスキースと思われる2枚の青焼きの図面が含まれていた。これは何の建築か不明のままであった。確かにそこには「B.T.」のサインがあり、日付を見ると「3.VII」および「11.VII 1915」となっていた [図

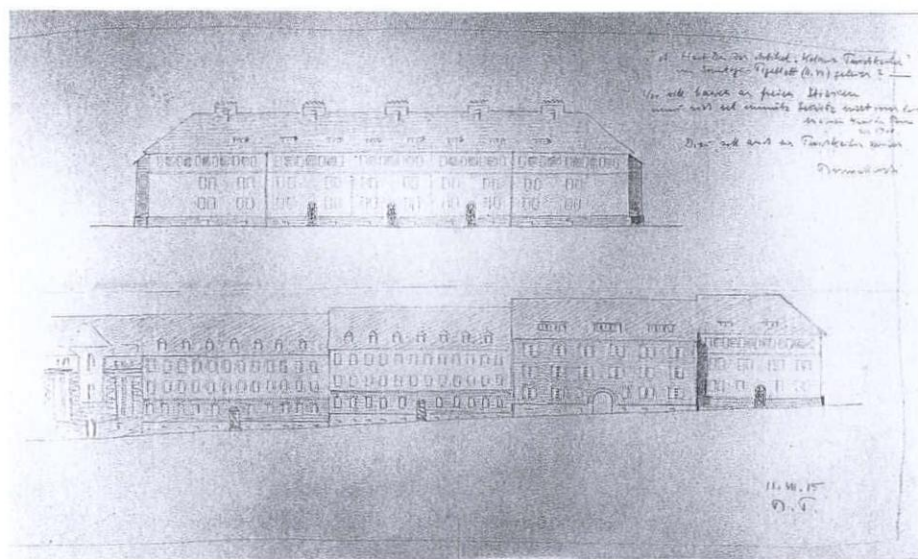


図-18



図-19

-18]。そのスケッチには幾棟かの連続するファサードが描かれている。しかしこの建築は一体何なのであろうか。敷地に関する情報と言えば「この敷地はいつの時代も空き地のままであった」とスケッチの脇に記されているだけであった。それは公園や丘を指しているのだろうか。手掛かりがないかと捜し始めた。

これに関する最初の資料が、ベルリン芸術アカデミーに保存されているのが判った。それはタウトがカトヴィッツから出した手紙である。カトヴィッツとは現在のポーランド領の上部シレジア地方に属し、クラクフに近い炭鉱を産業とした都市である。そしてその日付は1915年6月19日となっていた。

そしてとある夏の日に、私はポーランドのカトヴィッツの街を訪れた。しかしこの街の

ブルーノ・タウトの活動は現在のポーランド領にまでおよんでいたが、これまでそれに関する資料は見発されていなかった。しかし、新たな資料をもとに調査研究を行った結果、幻のジードルンクの姿が明らかにされた。シュパイデル教授が調査したこのカトヴィッツという街は上部シレジア地方東部に位置した街である [図-17]。その街にタウトの3つのジードルンクが確認された。ひとつはカトヴィッツの中央駅に近い市街地で一街区をなし、ひとつは鉄道沿線沿いに列状に建てられた低層住宅群であり、もうひとつは市の南部に計画された大規模な田園都市であった [図-19]。(長谷川)

どこに計画されたのか全く不明なのである。終日街を歩き通した。夕暮れも迫った時に西陽を浴びた建物の前を通り過ぎた。ほとんどその前を通り過ぎようとしていた建物こそタウトの建築であったのだ。翌朝こうしてタウトの集合住宅は確認された。すでに50年の歳月を経ており、灰白色の漆喰の外壁に均等に窓が穿たれたこの建築やその設計者の素姓を知る人はカトヴィッツには誰もいなかった。あのスケッチのとおり建物には建設されていることが確認された。しかし建物全体の保存状態は非常に良好であった [図-20]。

早速カトヴィッツ市の建築記録保管所を訪ね、そこで100分の1の平面図を含めた全設計図を発見することができた。図面の設計事務所印の上にはタウトのサインが確認された。この設計事務所とは「ブルーナー・タウト & ホフマン、アーキテクト」である。しかしこの建築はB.タウト個人に依頼されたものであったために、これまでの様々な調査の時にも発見されずに今日に至ったのである。

こうしてこの建築がホーエンローエ会社のオーハイム炭鉱のための労働者住宅であることが判明した。1924年までこのホーエンローエ・エーリング太公の本社はベルリンのウンターデンリンデン54、55番地にあった。そもそもこの会社の発祥地である南ドイツのシュヴェービッシュ地方ではなく、上部シレジア地方で5ヶ所ほど石炭や錫の鉱山を19世紀以来開発してきたのだ¹⁾。

図-18 (ヴランゲル通りの集合住宅)、ファサードのスケッチ、ブルーノ・タウト、青写真、420mm×730mm、日付1915年7月11日、ハインリヒ・タウト記録保管所蔵。このスケッチはハインリヒの元に残された2枚の内の1枚である。上の立面図は南側の住棟部分であり、下の立面図は西側の住棟部分である。坂道の勾配に従って各住棟が段状にずれているのわかる

図-19 3つのジードルンクの配置図。1915年当時の市街地図にモンタージュしたもの。作図: Jörg Hibbeler
1. (ヴランゲル通り (現バルバライ通り) の集合住宅) (1916-19年)
2. (ツァレンツァーハルデ (現ザレスカ=ハルダ) の連続住宅)
3. (田園都市計画) (1916-16年) ブルーノ・タウトがカトヴィッツの街に計画したオーハイム炭鉱のための3つの労働者住宅

図-20 (ヴランゲル通りの集合住宅) ヴランゲル通りに面する外観。左端の住棟は1907年の既存建築で中央玄関の張り出し部分が3層に渡っている。それに続く右側部分がタウトの設計した8番地と10番地の住棟部分。坂道に従って段状にずれているのわかる
写真=Stark



図-20

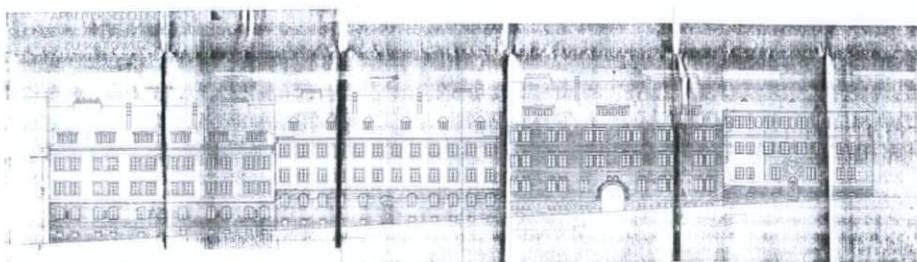


図-21 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉、立面図、サイン：ブルーノ・タウト、青写真、日付1915年9月4日、カトヴィツ市記録保管所蔵
ヴランゲル通りに面したファサードは長さ100mにおよぶ。左から住棟8番地、住棟10番地、住棟12番地が並ぶ。右端の勾配屋根のある住棟は南側の住棟の妻壁部分

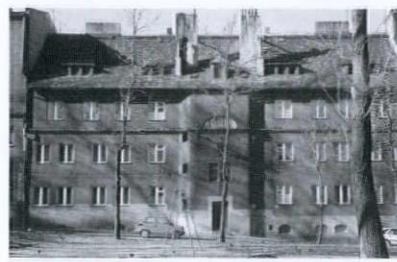


図-22 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉 ヴランゲル通り10番地の住棟の中庭側の外観。トイレを含む階段室の壁が湾曲して突出している 写真=Stark

1. ヴランゲル通りの集合住宅

カトヴィツの中央駅南側のほど近いところにこの〈ヴランゲル通りの集合住宅〉は建っている。全体は中庭を囲むように総周250mの長さで3階建てのファサードを持ち、総数102戸の労働者のコロニーとなっている[図-23]。当時の物資が不足した第一次大戦の時代にあつては大規模な建築であつた。

西側の住棟

その第1期工事はヴランゲル(現バルバライ)通りに面する西側の41戸の集合住宅である。長さ100mにおよぶファサードが接する道路は傾斜しているため、建物もそれにならって段状に少しずつ高くなっている。この道路に沿った長いファサードは分節されることによってそれぞれが個別の独立した表情をもつこととなった。左から8番地、10番地、12番地の3棟の住棟に分節されている[図21、24]。この3つの住棟は、1916年6月までに躯体が完成し、1916年末あるいは1917年初頭に竣工した。さらに他の住棟の工事も進められたが、1918年1月に工事は一時中断し、終戦の半年後の1919年5月には内装に取り掛かり11月には東側のクライスト(現グロヴァキエゴ)通りに面する住棟への入居も可能となった。

さらに南側の住棟も1920年5月に入居できるまでに完成した。しかし外壁の漆喰の工事は1920年まで続いたのである。こうしてこの大きなプロジェクトは最悪の状況下で工事が進められ、大きく遅延しながらも実現されたのであった。

タウトがこの集合住宅を設計したのは1915年の8月から9月初旬にかけてである。外観は簡素でどれも皆よく似かよった雰囲気だ。規模は奥行き11.5mで通りに沿って長く連続している。4戸の住戸がひとつの階投を共有している。内2戸は表通り側、残り2戸が中庭側に面している。台所には直接ふたつの部屋がつながり、それを分ける廊下や小部屋は無い。各部屋はほぼ5m×5mの正方形で、一戸は60~70㎡とゆったりした規模となっている。トイレは階段の踊り場わきに仕つらえてある。風呂場や洗濯室は見あたらない。台所には窓がひとつ、他のふたつの部屋にはそれぞれふたつの窓が設けられている。表通りに面する外壁や中庭に面する外壁には独立した窓が均等間隔に設けられている。窓は部分的には2個が一組になっているところがある。また窓の大きさはどれも同じで幅1m、高さ1.45mであつた[図-22、25]*2。

しかし最初の2枚のスケッチをより厳密に眺めてみると、そこにははっきりとした芸術的な意図を読み取ることができる。

ヴランゲル通り8番地の住棟の左側に隣接する既存の建物は、バロック風に中央玄関の張り出しの部分が3階まで連続しており、外壁面が一体となっている。この既存の建築の入口のデザインのモチーフはメタモルフォーゼされて、タウトの設計した住棟の入口に取り入れられている。また左から2番目の10番地の住棟では基壇の煉瓦仕上げの壁部分の背が高く作られているため、全体として閉鎖的に見える。つまり上部の漆喰仕上げの壁の部分とはほぼ同じ面積となってしまう。さらに3番目の12番地の住棟では、窓はふたつの窓が一体化された大きめのものとなっており、その窓の配列された煉瓦の壁面が大きく全面に広がっている。その窓の配列の持つリズムは住区の角を構成する南側の住棟のファサードへと連続している。

この12番地の住棟で注目したいのは、この西側のヴランゲル通りから中庭を通り抜けて反対側である東側のクライスト通りへ抜けるための直交路が当初から計画されていたことである。そのためこの12番地の住棟には門型のアーチ状のトンネルが設けられている。こ

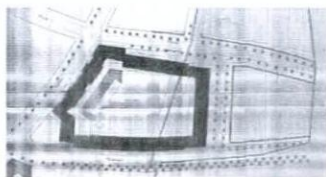


図-23 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉、配置図、青写真、カトヴィツ市記録保管所蔵
一街区が中庭を囲むように構成されている。北側(図中左側)のサイドリッツ通りに面する住棟は既存(1907年)のもの。また既存の10番通りを中庭の通路として残し、街区割の編成を変えて、南側に計画道路10番通りが計画されているのがわかる



図-24 住棟の配列と通り名称 (作図=長谷川)

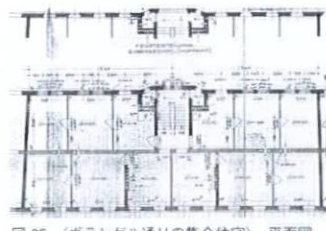


図-25 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉、平面図
サイン：ブルーノ・タウト、青写真、日付1915年8月28日、カトヴィツ市記録保管所蔵
ヴランゲル通り10番地の住棟の2階および3階部分の平面図。奥行き11.5mで通りに沿って細長く配列されている。外壁の窓は均等間隔に穿たれている。背骨の様に中央に厚い構造壁がみえる。また階段室の踊り場にはトイレが設けられているのがわかる



図-26 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉 ヴランゲル通り12番地の住棟を貫く中庭への通路の入口門型のアーチによって1階の窓の配列が乱されている 写真=Stark

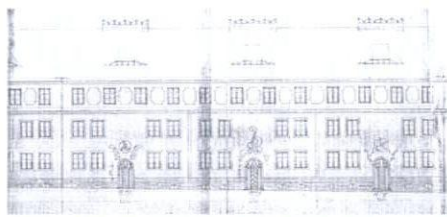


図-27 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉、立面図、青写真、カトヴィッツ市記録保管所蔵
計画道路10番通りに面する南側住棟の中央部分の立面図。2階と3階の間にボーダーが設けられ3階部分の壁は屋根と一体化されたデザインとなっている。また1、2階の壁面の玄関上部には螺旋状の燃え上がるような模様が描かれている



図-28 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉、立面図、カトヴィッツ市記録保管所蔵
計画道路10番通りに面する南側住棟の東側部分の立面図と、それに連続する妻側の東側の立面図を並列させたもの。東側の玄関上部の壁面には大胆な模様が描かれている

のような住街区では、通路が貫くことによって住戸は通りにも中庭にも面することとなり、こうして中庭は半公共的空間となっている[図-26、29]。この中庭の扱い方に、10年後のタウトが馬蹄型のジードルンクにみせた構成がすでに認められるというのは、言い過ぎであろうか。馬蹄型のジードルンクでは、玄関のようなデザインの導入路によって面と線、量塊と空間が相互に彫塑的な貫入が行われ、建物の連続が解けていくさまを見ることができ

南側の住棟

今日においても純粋に建築的であり魅力的なのは南側の住棟の1、2階の漆喰仕上げの壁面における窓の配列のデザインであろう[図-27]。この住棟の1・2階のファサード部分は窓がふたつ1組で配列されて、全体としてシンメトリーを成している。

一方3階の壁面は屋根と一体化されたデザインとして考えられ全体として大きな軒下の帯状の装飾となっている。即ち、2階と3階の境界には漆喰の帯があって縁が切られており、入口を構成している1、2階の壁面とは切り離されている。この3階部分の壁面には、やはり同じ大きさの窓が配列されており、壁

面をリズムカルに分節している。そしてシンメトリーを構成している両端部に設けられた勾配屋根に、吸い込まれるようにこの窓の配列は終わっている。

また段状の屋根と壁の連なりに沿って、軒飾りの漆喰のボーダーも設けられている。段のずれる場面ではこのボーダーは途切れずに、そのまま垂直に連続している。そうすることによって段のズレがより強調されると同時に、この幾棟かに分節されたファサードを一体化するのに役立っている。

さてこの3階の窓の配列の構成は1、2階の窓の配列に符合させているのだが、しかし角に近い部分ではこの漆喰の壁は何の枠取りもなく無窓の壁として解放されてコーナーを回り込んでそれぞれ東側と西側へ連続している[図-28、30]。この南側の住棟は正面性を形成するように、両側の妻壁に当たる東西の側壁は道路境界線からセットバックしている。このセットバックしている妻壁の1、2階の壁面には玄関の入口部分を挟むように左右の窓が装飾的に配列されており、そのユーゲントシュティールの装飾もあいまって王冠のような印象さえ受ける。この南側のファサードには3個所の玄関が設けられているが、その玄関周辺にも螺旋状のモチーフを用いた燃え

上がるような模様が描かれている[図-11、28]。

またこの南棟の中庭側のファサードは注目に値する。特に階段室部分の3層にわたる部分では、装飾壁面全体が他の両側の壁面より前面に出されている。そして直線とアーチが交互になってバラディアンモチーフの巨大なルネサンス装飾を形成しており、人目を引かずにはおかない。そのデザインがあたかも労働者のための「バロックの城」であるかのように意図されていることが判る。たとえその城の最上階が、部屋がふたつしかないちっぽけな住戸であったとしても。

以上のようにこの〈ヴランゲル通りの集合住宅〉においてタウトは建築の外観を窓の配列によって分節してみせた。それはすでに1909年にジューメンスの〈エッターハウス〉における中心的テーマであったが、さらに扉上部の装飾的な王冠状のデザインによってアクセントが加えられている。これはゴシック建築の装飾のように、おそらく扁平な壁面を破碎するためのもののなのだろう。そしてその装飾は同時に、マグデブルクの色彩都市へ至る道程の前段階であったといえよう。

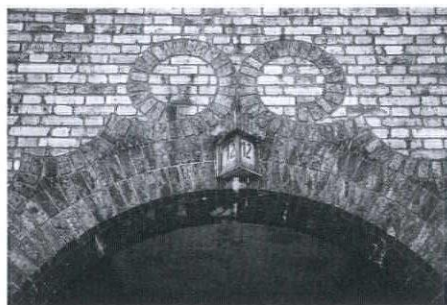


図-29 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉 ヴランゲル通り12番地の住棟を貫く中庭への通路の入口門型のアーチの煉瓦貼りの詳細写真=Stark



図-30 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉 計画道路10番通りに面した南棟の東側角の外観 写真=Stark



図-31 〈ヴランゲル通りの集合住宅〉 ヴランゲル通り8番地の住棟の玄関周辺の壁の煉瓦模様 写真=Stark

2. ツァレンツァー＝ハルデの連続住宅

1919/20年の『ヴァスマート・モナツヘフテ・フュア・バオクンスト』誌の中でタウトは次のように記した「ツァレンツァー＝ハルデの住宅はすべて計画的に建設された。どの住戸も1階建てでありその屋根はあたかもこの大地をおおっているかのようだ」。ハインリヒのもとで発見されたジードルンクのスケッチとは別に、タウトはこのカトヴィッツの街に更に小規模ながら別のジードルンクを設計していたのである。それはオーハイム炭鉱のすぐそばで、線路の土手沿いに1918年頃建設されたが、竣工は1920年を待たねばならなかった³。こうして72戸の〈ツァレンツァー＝ハルデの連続住宅〉は戦後になってようやく入居できるようになったために経済的な効果は少なかったようだ。

1930年頃撮られた1枚の写真が残されているが、ここではオーハイム炭鉱の重厚な工場群の前でこの住宅群があたかも真珠のネックレスのように見える [図-33]。また1921年に増築された小屋を伴った塀が野原から分かつように貼り巡らしているのがよく判る。1914年の〈レフォルム〉の住宅と比較すると、ツァレンツァー＝ハルデの建築はその全体の形態が流れるようでリズムカルである。段状に上っていく屋根やコウモリ型の屋根裏部屋の窓は躍動感に満ちており、全体が簡素ながらエレガントな印象を受ける [図-34、35]。しかし写真から判断する限り、タウトが最後まで監理していなかったのではないと思われる。よって本に発表されることもなかった。

3. 幻の田園都市

タウトは1914年8月に初めてカトヴィッツの

街を訪れている⁴。2回目は1915年6月中旬である。それは市街化された敷地での大規模な田園都市の計画の打ち合わせのためである。タウトは1915年末から1916年にかけてこのカトヴィッツの街に大ジードルンクの計画を立てていた。彼にとってもこのカトヴィッツ南部の都市再開発の仕事は大きなプロジェクトであり、当時の仕事が少なかった事務所にとっても救済となった。そして1919/20年の『ヴァスマート・モナツヘフテ・フュア・バオクンスト』誌に、戦前の〈田園都市ファルケンベルク〉と〈レフォルム〉とともに「3つのジードルンク」という表題のもとで、このカトヴィッツの計画が発表されていたのだ。その敷地はふたつにくびれながら市の南部のオーハイム炭鉱の東側に広がっている。ともにホーエンローエ会社の所有地である。くびれた北側が6.5haの広さで、そこに600戸の都市型ジードルンクを、また南側の敷地は36haの広さがあり、ここには1200戸の田園型のジードルンクが計画されるという大規模なものであった。こうした中で、オーハイム炭鉱のために計画された市内の〈ヴランゲル通りの集合住宅〉とこの〈ツァレンツァー＝ハルデの連続住宅〉はあくまでこの大ジードルンクの「モデル」として建設されたのではないかと思われるのだ。つまりここでは都市型のジードルンクを郊外型の列状住宅に結び付けたプランニングをしており、やがてこの手法は1925年のブリッツの馬蹄型ジードルンクへのモチーフとなる。しかしこの大きな計画が実施に移されることはなかった。

そもそも第一次世界大戦を経て敗戦国となったドイツでは社会的情勢が一変してしまった。

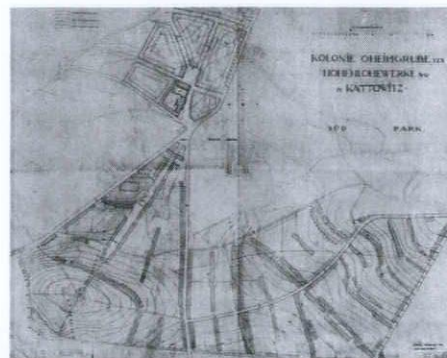


図-32 〈田園都市計画〉の配置図
敷地はくびれており、北側3.6haの敷地には都市型のジードルンクが600戸、また南側36haの敷地には田園都市型のジードルンクが1200戸計画されていた

群衆の暴動が多発した上部シレジア地方の工業都市を訪れることなど、1919年以降ははっきり言って勧められるものではなかった。まして建築の仕事など順調に事が運ぶような状況ではなかった。やがて1922年には、このカトヴィッツを含めたシレジア地方はポーランド領となってしまふ。そしてホーエンローエ会社の施設はタウトの建築とともにポーランドに移管され歴史の中に埋もれてしまったのである。

●Manfred Speidel/アーヘン工科大学教授

注：

- * 1 Hohenlohe in Oberschlesien. Fürsten-Bauern-Bergleute. Haus der Heimat des Landes Baden-Württemberg
- * 2 ファサードが芸術的表現に贅をつくしているのに比べて、平面図を見ると形式的なプランニングに留まっている。特に住街区の角に当たる住棟では中央の構造壁によって大きな制約を受けている。しかしこうした形式的な平面構成の為、厚さ70mmの間仕切壁は、例えばふたつの窓の間へと移すことは可能で柔軟性に富む。またトイレの付設された階段室では、その外壁が流れるような魅力的な処理がしてあるとも、やはりこうした形式的な処理が認められる。興味深いのは、中庭へ通り抜けるトンネル部分のアーチ上部に納められた階段で、かなり無理をしていることが伺える。
- * 3 Kopalnia Wujek (オーハイム炭鉱) 西側のUl. Przekopowa 通り
- * 4 ベルリン芸術アカデミーの記録



図-33 〈ツァレンツァー＝ハルデの連続住宅〉1930年頃、カトヴィッツのシレジア博物館所蔵オーハイム炭鉱の工場を背景に、この住宅群があたかも真珠のネックレスのように見える 写真＝M.Steckel



図-34 〈ツァレンツァー＝ハルデの連続住宅〉ブジェコバーヴァ通りからの外観。屋根面が大きく強調されて大地を覆っているかのようだ



図-35 〈ツァレンツァー＝ハルデの連続住宅〉ブジェコバーヴァ通りからの外観。屋根の連なる全体の形態が流れるようでリズムカルである 写真＝M.Steckel

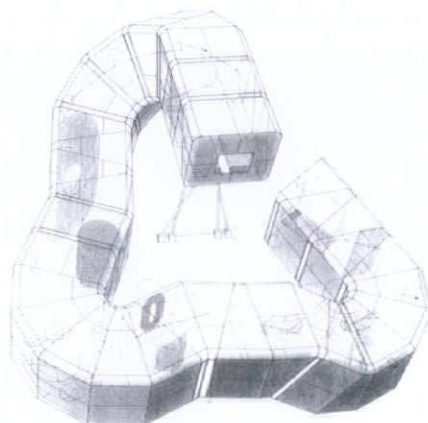
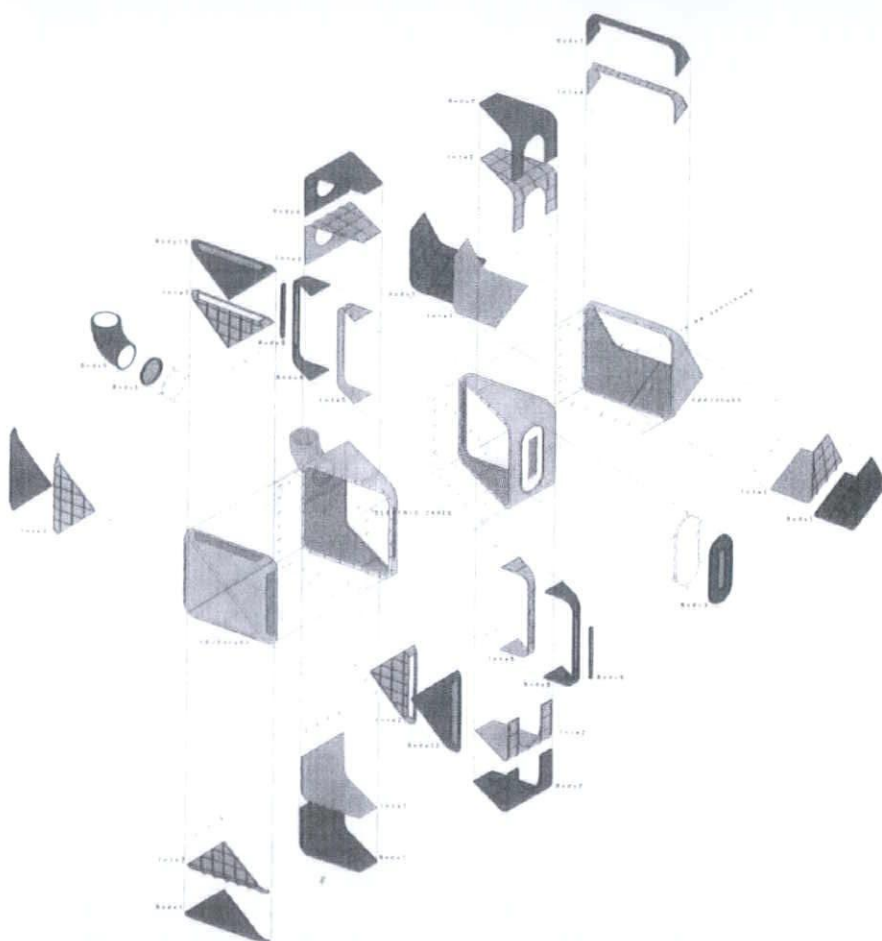
第2回リビングデザイン賞「自分で組み立てられる家」 グランプリ案：「TUBE-HOUSE」

リビングデザインセンターOZONE・リビングデザイン賞実行委員会が主催する「リビングデザイン賞」。これは、'95年度より開始され生活者の住まいや暮らしの夢をかたちにするコンペである。その第2回は「自分で組み立てられる家」というユニークなテーマが設定され、254応募案の中から選ばれたグランプリ受賞案をここに紹介する。なお、審査員は、柏木博、内田繁、沢田知子、キャサリン・フィンドレイ、大橋渉の各氏。

幼いころスキのトンネルや土管の中に、自分たちの秘密のアジトを作った。そんな感覚で自分たちで組み立てられる家を提案しようとした私たちは考えた。この製品の特徴は、全てのパーツが人の力で運搬でき、そのパーツで構成される単純な形態の1ユニットの組み合わせにより、購入者自ら形を決めプランニングでき、そして施工することが出来ることである。したがってどんな自然の地形の土地でも、それを破壊することなく、建設することが可能である。

購入者には始めに1/100スケールのモデリングキットが届き、ブロックパズル感覚で自分だけの家を決めてもらうシステムである。本体ボディの他、ワープトンネルパーツやインテリアパーツ、設備パーツも各種カラーバリエーションを含め取り揃えている。子供が増えたり、2世帯住居からの変更も、ユニットの交換や追加により気軽に行える柔軟さは、単純なシステム故の利点であろう。

●松永英伸+棚橋国年彦+金子友美



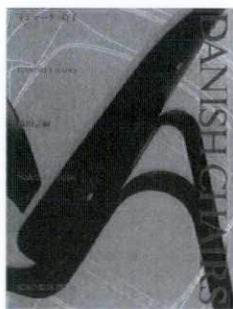
『デンマークの椅子』

織田憲嗣＝著

304×225mm 224頁

The World Chair's Chronological Table付

光琳社 5000円



評者＝

羽原肅郎

良心的にデザインされ、製作された椅子の教科書

「デンマークの椅子」とは、誠実で、そして、品質の高い特徴をもった木と、わずかな、革や籐(紙を縫ったもの)の紐で出来た椅子、戦後のモダン・デザインの中で最も暖かいものを感じさせるものではないだろうか。そして、それらは、使用者によって磨かれ、時には飾られ、その家族のあるいは家のアイコンとまで、なるものもあるのである。そんな椅子の本が美しくできあがった。

まず、「デンマーク——近代の椅子デザインの背景」と題して、村上太佳子氏が、「はじめに」「デンマーク家具の特質」「デンニッシュデザイン」「デザインの背後に流れるもの」「それまでのデンニッシュデザイン」「デンマークの近代デザインの誕生」「デンマークの若きデザイナーたち」「家具工業組合展示会」「デン・パーマネンテ」「デンマーク近代家具デザインと日本」「終わりに」を書かれ、デンマークの椅子や家具が、何故にこの様なものになったかを、理由づけられている。

続いて、年代順に60数名の作家とその作品100数十脚が紹介されている。ところどころにカラー版による紹介があり、それが実に心地よい臨場感を味あわせてくれる。椅子紹介の基本レイアウトは1頁に細い2本の罫線を上下にしてデザイナーと椅子の名前、データがあり、正面、側面、背面の写真が図面の様に配置され、その下に大きく、その椅子の最も美しい、あるいは典型的なアングルの、いづれもバックをとばした、しかしわずかな影を残す写真でおさめられている。その左または右の余白に著者の簡単な解説があり、短文にもかかわらず実に適切なる、見どころ、エピソード等が述べられている。筆者は、本書118頁のH. ウエグナーによるダイニング・チェアを30年以上使用しているが、機能といい常に従順であり、形態といい実に気持ち良く

感謝している。読者はこの本を買って、まず、どれが自分に合うかを知り、実物に接し、実物から教えられる素晴らしさ、有難さを知るべきであろう。その前調べの本として恰好の本である。また家具専攻の学生等の教材書としても。

美しい本である。デザインの専門の本なのに、デザインの良い本が少ないわが国の本の中にあって、これはデザインを意識した、久しぶりに感心した本である。しかし、ディテールに凝り過ぎて、それが自然な、ナチュラルの素朴な美しさに、小さな荒れ(または焦り)を感じさせる。それは、均整がとれて、なお美しい肌をした美人が、厚化粧をし、手入れを行い過ぎて、却って肌が荒れているような有様である。その厚化粧とは、解説等の文章の組み方(タイポグラフィ)のことである。誌面が少ないのに本質でないタイポグラフィのことを言うのはどうかと思うが、デザインの好きな一読者の声として聞いていただきたい。文字と文字、文字と約物の間が必要以上に詰まっている。いわゆる詰め打ちがしてあるのである。これは、もうずいぶん前からデザイナーの間では流行のようになって、字詰めをしないとデザイナーではないとまで、言っている人もいる。しかし、本書でも散見される様に「・」中グロの前後の間隔よりも、句読点の「。」マルの後の間隔の方が狭く小さくなっている文字組には、どうしても納得できないのである。筆者としては「。」の後の間隔は、どの字間よりも広くとるべきであると、考える。コンピュータが発達している今日、最も適切なる文字のボディの確立を希望するものである。

●はばら・しゅくろう／明星大学教授

Metropolitan Library

5月の評者＝
高島直之

「文化退国、日本。」の装丁は、白地に赤い太陽、黒文字乗せ。「退」の字だけがシロヌキという、目を覆いたくなるカバー・デザインだが、多分1970年代調レトロが狙い。それはともかく、この書名も、かつて、保守派の論客タレントが自著に付けるような、世論に逆らう「一刀両断」風。出版元は、コンピュータ・ソフトの会社であるが、今後デジタル・メディア文化を推進する側からの、故意の「アナログ」風タイトルというわけなのだろう。

内容は「マルチ・メディアと未来文化」といったものの。取り上げたのは、鼎談形式(一部ゲストを招く)という、軽い読み物スタイルに魅かれたためだが、類書とは違った角度からのアプローチがある。紀田順一郎、荒俣宏、柏木博の3名が、1994年から95年にかけて、欧米メディア観察旅行をし、各地で、また帰国後に座談を行なったものの再構成。とくに荒

俣宏のしゃべりが面白い。

マルチ・メディアと一言でいうが、その「近未来」の実相を言い当てられる人はなかなかいない。彼らが強調するのは、ワイヤレス(電波)と電話(回線)が、基本的に今後のメディア構造を決定づけていくという点である。電話はかつて、たんにメッセージを伝える機械にすぎなかったが、現在では、電話回線を通じてコンピュータがつながりあっている。元来、そういった機能を備えていたにもかかわらず、現代のこうした事態をはっきり予測できた人は少なかった。本書の面白いところは、実際に各地の科学実験博物館などに赴いて体験し、足元をのぞき、そこから「メディアの進化」とはどういったものかが論じられる点である。

決して、人を驚かすようなバラ色の未来を描いているわけではなく、正直なオジサンたちの、まじめ

『ピーター・ライス自伝
——あるエンジニアの夢みたこと』

ピーター・ライス＝著

岡部憲明＝監訳

太田佳代子・瀧口範子＝訳

A5判 240頁



評者＝
渡辺邦夫

壮絶な創作意欲を終生堅持した エンジニアの控えめの口マンを語 る自伝書

はじめてピーター・ライスに接する読者は、戸惑うに違いない。いまの社会の仕組みでは一般には構造エンジニアという職能の存在さえ知らないし、もしそういう職業があることを知っていても、多くの場合構造エンジニアの主要な役割は建築家の提示したプランを構造計算することだと誤解している。これはわが国だけでなく、ヨーロッパでも米国でも経済発展急速な中国でも世界中の建築界にいえることだ。

ピーター・ライスのような「構造家」は、難解な解析もするしこまごまとした構造計算もする。しかし、それと並行して広い領域での活動を通して構造設計を展開してゆく。本書では解析とか計算については全くふれておらず、それ以外の重要な活動、思考内容を記述してあるから、誤解に基づく先入観のある読者は、ピーターが何を言っているのかわからなくなってしまうのだ。しかもテーマを設定すると彼は問題の解決とその目的に到達するために全力投球で突進し、全責任を自ら果たす。これも現在のように組織化された社会体制の中では理解に苦しむ。この男はエンジニアのくせに自分の個性に立脚したデザイン主張を何故これほどまでに推し進めるのだろうか、と。

この本には刺激的な図や写真が豊富だがそれに見とれていないで、どうか本文を熟読して頂きたい。エンジニアが本来、進むべき方向、やり遂げるべき社会的役割が見事に描かれている。

ピーター・ライスはもの凄い勢いで人生を駆け抜けた。1935年アイルランドに生まれ1992年ロンドンで57歳の生涯を閉じる、その短い活動期間のなかで130を超え13カ国にまたがる建築に参画し構造設計を成し遂げ、その一つ一つが世界の建築界に大きなインパクトを与え続けるという離れ業をやったエン

ジニアだ。この本で紹介されている設計例は彼の活動のごく一部でしかない。それでも、シドニーのオペラハウスに始まり、パリのボンビドゥセンター(ボブール)、ヒューストンのメニル美術館、テフロン膜の数々の作品、IBM巡回パヴィリオン、ラ・ヴィレットのガラスボックス、ロンドンのロイズ、セヴィリアの未来パヴィリオン、それにフィアット社の新型乗用車の開発、ピーターがエンジニアとしての神髄を発揮したフルムーン・シアター、これらいずれもがその竣工とともに僕たちに深刻な衝撃を与えた作品群だ。

ピーターがこの本の中で明確に主張しているように、素材の探究、それにディテールのあり方が建築を決定づける。「人々の反応を左右するのはディテールである。人々が建物のスケールや暖かみを感じとれるのはディテールで決まる」

写真や図版でピーターの作品を見てもこの言葉の真実性を知ることはできない。実際に彼の作品の空間に浸り、自分の目で見て、手で触り、ゆったりと歩くと、はじめて彼の言っている意味が理解できるのだ。

ピーターがその多忙なスケジュールを消化し、なおかつ独創的アイデアを醸成する魔法を生前に聞いたことがある。彼は飛行機の中に小型の製図板を持ち込み、自分の移動時間こそ本物のアイデアを練るときなのですよ、と教えてくれた。

この本の翻訳をされた太田佳代子さん、瀧口範子さんに敬意を表したい。この本を読んでいると、すぐそこにピーターが立っていて僕たちに彼特有の誠実で熱心な語り口で話しかけられているような錯覚に陥る。見事な翻訳と監訳した岡部憲明さんのピーターに対する深い敬愛によるものなのであろう。心から拍手を送りたい。

●わたなべ・くにお／構造家

な議論になっている。

『ふすま』は、「襖」の経師、表具師の職人とその息子の共著書。一般的に、大工、左官、塗装、鉄筋、石工の各職人 についての著述をみることがあっても、襖についてのそれは少ない。向井一太郎は、吉田五十八、村野藤吾、谷口吉郎、そして石間工務店の石間桂造、水澤工務店の水澤文次郎らと出会い、建物の表具を手掛けた。しかし、思えば筆者の場合、襖や障子のない生活になって久しい。襖であるべきものが、単なる引き戸になっていたりして、事実上、視界から消えてしまっている。考えると、襖への意識化が起きるのは、歌舞伎を観るときぐらいであり、そう言いきってしまったも今はもう「キザ」とは言われないほど、縁遠くなっている。歌舞伎の空間は、定型化しているからこそ強く意識されるのだが、その舞台正面の「奥」の空間は、つねに何事

かが起こり得る可能性を秘めている。向井周太郎は、「襖」は衣偏に奥と書くことから、ここに「奥を包む」との意があり、さらに「ふすところ」、つまり「伏す」「臥す」とつながながら考察を行ない、様々な角度から襖の文化を論じていく。また第2章の聞き取り対話も、この職能の奥深さと、工匠の消長を印象づけるものとしてある。

建築が「工匠」たちによって作られていた時代から、いかにして洋風建築を取り入れ、近代化していったかを、各職人の立場に沿って明らかにしていく「職人たちの西洋建築」は、後半に、請負業と建築家の誕生を置くことで、日本近代独特の歴史が掘り出されている。どんな建築家に会っても、皆に「起業家」的センスを感じるのには、単に工学的発想の持ち主ということではなく、近代に産業化していきながらも、職人の知恵が細々とだが確実に引き継がれ

ているからだ、本書を読んでからはじめて理解できた。

『文化退国、日本。』

紀田順一郎・荒俣宏・柏木博＝著

ジャストシステム 1500円

『ふすま』(住まい学大系081)

向井一太郎・向井周太郎＝著

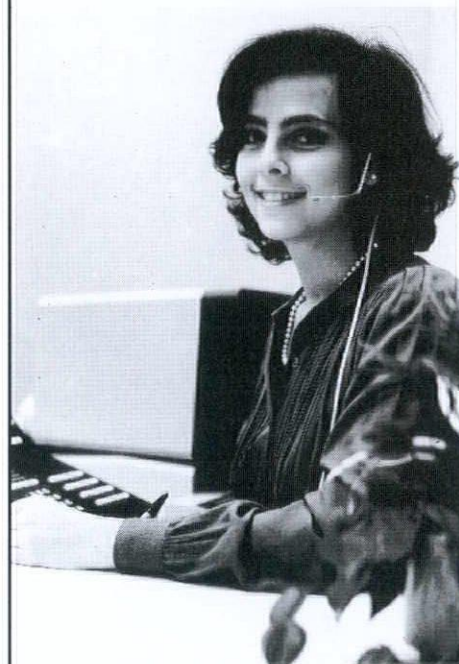
住まいの図書館出版局 2575円

『職人たちの西洋建築』(講談社選書メチエ95)

初田亨＝著

講談社 1500円

情報とエネルギーの ネットワークをつくる 日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、「私達の住む地球をまあるくつなぐ」。日立電線は、いま、快適で豊かな暮らしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界でひとつの大きな役割を担っているもの——それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 東京(03)3216-1616

新刊紹介

『建築空間シミュレーション』

オスカー・リエラ・オジェダ+ルーカス・H・グェッラ＝著
西森陸雄＝監修
A4変形判 200頁
グラフィック社 9515円

本書は、コンピュータを制作のツールとして駆使し、世界規模で活躍する設計事務所のプロジェクトを制作過程から紹介。またコルビュジエなど巨匠のアンビルド建築を再現するなど、意欲的な一冊。建築家のエッセイ等を収録したCD-ROM付。



『道具と手仕事』

村松貞次郎＝著
B6判 280頁
岩波書店 3090円

建築史の第一人者である著者が失われつつある職人技の世界を道具を通して描く。そこには鋸や鉋などの誕生や変遷を辿り、さまざまなエピソードを挿入して読ませるだけでなく、それらのモノを慈しむ「やわらかいものへの視点」という著者の哲学が見え隠れしている。



『現代の住宅——七つの町づくり設計』

大野勝彦＝著
A5判 218頁
丸善 2300円

著者は、ユニット構法による部品化住宅のシステム開発で「セキスイハイムI」に携わり、その延長線上で、地域住宅計画——町づくりに参画している。本書では、著者が手がけた7つの「町づくり設計」の手順、方法を具体的に紹介し、21世紀に向けた都市づくりを考える。



お知らせ

「パリ・都市の誌学」村井 修写真展

会期：1997年5月16日(金)～5月30日(金)
10:00～19:00(日曜日は休館)
会場：グランパークホール
東京都港区芝浦3-4-1 グランパークプラザビル4F
問い合わせ：STUDIO MURAI
Tel：03-3381-2497 Fax：03-3381-2062

建築史学会賞選考結果発表

受賞者：佐藤彰(愛知教育大学)「Building in Britain, the Origin of a Modern Industry」、初田 亨(工学院大学)「東京の繁華街を中心とした近代建築史・都市史に関する一連の研究」
選考委員：飯田喜四郎(愛知工業大学)、陣内秀信(法政大学)、高橋康夫(京都大学)、永井規男(関西大学)、西和夫(神奈川大学)
問い合わせ：東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻建築史研究室気付け建築史学会 担当/鈴木博之
Tel：03-3812-2111(内)6184

日本建築学会大賞・学会賞受賞者発表

日本建築学会大賞(2件)
耐震工学ならびに基礎工学の研究と発展に対する貢献：大崎順彦
建築と都市の統合的把握に基づく一連の設計活動・社会的活動・建築教育における功績：大谷幸夫
日本建築学会賞
論文(10件)：井上一朗、大濱嘉彦、加藤信介、中島正愛、野口 博、萩島 哲、舟橋國男、鈴井修一、源栄正人、吉田銅市
作品(4件)：登米町伝統芸能伝承館/隈 研吾、千葉市立打瀬小学校/小嶋一浩・工藤和美・小泉雅生・堀場 弘(以上シーラカンズ)、佐木島プロジェクト/鈴木了二、愛知県児童文化センター/仙田 満・藤川壽男
問い合わせ：社団法人 日本建築学会
東京都港区芝浦5-26-20 Tel：03-3456-2051

SD4月号お詫びと訂正
SD97年4月号で誤りがありました。お詫びいたします。以下の通り訂正いたします。
p28：上段タイトル中の著者名「Diller and Ricardo Scofidio」→「Masaki Fujihata」、p40：左段上から12行目「だろろう。」→「だろろ。」、p43：岡正明略歴の上から4行目「経済学科」→「経営学科」、p76：右段下から12行目「した大きな手落ちがある」といわざるを得ない。→「した大ききなどが、人間に基本的な意味を与えている。ディメンジョンやスケールは、身体抜きでは決してわからない。だとすれば、そうした問題を抜きにして、知識の問題を考えることには、極めて本質的かつ重大な手落ちがあるといわざるを得ない。」、p78：中段上から24行目「メンタル・zzzzスペース理論」→「メンタル・スペース理論」、p79：左段上から36行目から47行目まで「alpha」→「α」、p80：「beta」→「β」、p81：「omega」→「ω」、p97：右段下から2行目「ソニー株式会社・コンピュータサイエンス研究所」→「ソニー株式会社」

■堀井義博

今現在において、学部生くらいの人達にはいみひとつ馴染みが薄いかもしれないが、ともかくもアーキグラムは、かろうじて60年代生まれに属する筆者にとっては、ほとんど無意識の内側にこびりついたトラウマのよう

な出来事であり、今でも振り向けばすぐそこにいるんじゃないかと我が眼を疑ってしまうほど現実味を帯びた存在である。筆者ですらそうなのだから、彼等と時代を共にした世代なら言わずもがなであろう。

アーキグラムのメンバーが、最近になってポツポツと小さな実作を完成させるようにはなったとはいえ、アーキグラムそのものは何も作らなかった。しかしながら、彼等のドローイングに示された建築達が持っているいくつかの共通の特徴——「仮設性」「可変性」「可動性」「交換可能性」——を見る限り、彼等のヴィジョンはほとんど今日の建築の現実そのものとなっている。彼等の描いた「パラダイス」は、タチの悪いクスリのように後になって効いてくるのだ。「悪夢」のようなバッド・トリップ。

skin

鈴木貴紀

ピーター・クックの近著「Primer」*1には「Skin」についての章がある。15年ほど前の「建築を決定する11の概念」*2にはなかった項目である。彼の師であるスミソン夫妻らによる「Team 10 Primer」(1968年)*3の韻を踏んだこのタイトルは、少々教条的になったと思われるクックの「Primer」の章立てを象徴的に反映している。つまり、内容は少し退屈なのだ。しかしその中にある「Skin」にはちょっと気になる響きを感じた。事実、アンビルドで名を売ってきたアーキグラムのメンバーは晩年の日本での実作で、かつての過剰なオブセッションを譲歩・調停させねばならなかったはずだ。だが、現実には淘汰されてそこに残ったものの中で、特筆すべきなのはその「膜性」(=skin)ではなかっただろうか。「膜」について私たちは今、宮川淳の「表面」、谷川渥の「皮膚」など、つまりはドゥルーズの審美的な受取り方に思索を委ねることもできる。問題は、建築家が膜や表面に言及するとき、私達がそのような文学的感受の予期せぬ実体化に遭遇する可能性を秘めていることだ。

ロン・ヘロンの大門町のバス停では民家の隙間にバス停兼用のコミュニケーションスペースという「間口」が挿入されたわけだが、そこに架けられた膜屋根が昼と夜とではその表情が豹変することはあまり知られていない。この計画の焦点のひとつは、単なるバスの「待ち合い」ではなくその背後に隠れて見えない幼稚園へ通り抜けるための勝手口となっている点であるが、夜にその裏手(幼稚園側)から見た光景は悪意すら感じるおどろおどろしさがある。夜間は内部からの光によって膜材の張り合わせの重

海外建築情報リミックス

12Architects #5: Archigram

Staff: 太田浩史(東京大学生産技術研究所助手)、小川次郎(東京工業大学坂本研究室)、西沢立衛(妹島和世建築設計事務所)、堀井義博(ユービーエム)、丸橋浩(アーキベルク)

インターネットに新しい未来を嗅ぎ付ける者もいるかもしれないが、その思想の「裏」には「コミュニティの完全廃除」があるということに気付いているだろうか? このことは、決してポジティブに語られることはないが、おそらくはインターネットという「明るい」ヴィジョンのダークサイドといえるものに違

いない。現在のところ、そうした事態は実際には訪れていないが、インターネットは、その特性を極限的に突き詰めると、あらゆる無数の個人(コミュニティではない)がいきなり全体構造に直結するパラダイムの形成を意味している。際限もなく「私」の並列するこの状態は、同時に、他者が存在しない状況をも意味する。(「他者」ではなく、「他人」は無数に存在するが)。アーキグラムの、あのバッド・トリップをもたすドローイング群が示しているのもそうした世界である。このバッド・トリップをもたす「成分」とは何であるのか?

これを理解するために、「夢にまで見た悪夢」なるものを考えてみよう。「夢にまで見た……」という形容句は、習慣的には「主体にとって望ましく、現実的で、かつ手の届かない」対象に冠せられると考えられて

12Architects #5: Archigram

複部分が透過度の違いによる筋を生み、透過光による色彩の変調のため脳天気なピンクは消え失せ、もはや深い朱色に見える。こうして車の往來の反対側だけに赤いクモの巣模様が隠し絵として現れるが、これは園児の居なくなった闇に向けてのことなのである。

ピーター・クックの花博のフォリーは、公式には「獅子おどし」を建築的に再構築したものという説明がなされたが、私はそれよりもポリカーボネード製の透明な「さしかけ屋根」の表面に流された水が内部の訪問者に投げ掛ける「ぬめる影」に興味を持った。そこを通り抜ける身体にまわりつく感覚は、このフォリーを体験した者に何よりも強い印象を与えたはずだからだ。「漂着するタトゥ」。そんな深沈の皮相がここにはある。ところでこれはダン・グラハムのガラス・シリンドラーに似てはいないか。このハーフミラーの曲壁面で構成された双子円に足を踏み入れると、極端に歪められた半透明の自分の鏡像に包囲される。みじろぎひとつで増幅したスピードでそれが自分の周りを旋回し、それから一切逃れられなくなるのだ。それはもはや鏡像という現象であることをやめて遊離した運動表面となり、身体の内傍を充溢させるのだ。仕組みは違うがフォリーとの事態の同質性を感じる。ここまできて私達が今「Skin」と言う時、もはやそれはフィジカルではない何物かに転化している。意識の定着面としての膜。現象それ自身に向かうほど、その媒介項の顕現を強く感じる何物かである。クックやヘロンについては過去の栄光に敬意を表するために、むしろ日本での実作は失敗に終わったと片づけるのが流儀とさえなっているけれども、私が見て取った二次的現象には彼らがかつて「スリークネス」と表現したものの変種があり、看過できない美学に立ち会っているように感じるのである。(竹中工務店)

註

*1: 「Primer」, Peter Cook, Academy Editions 1996

*2: 「a+u 8002」

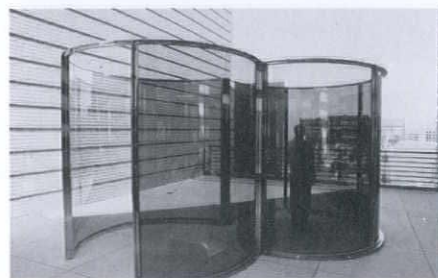
*3: 「チーム10の思想」アリソン・スミソン編、彰国社



(大門町バス停) / ロン・ヘロン設計、筆者撮影



(花博フォリー) / ピーター・クック設計、『SD』9005



(Double Cylinder (Kiss)) / Dan Graham設計、筆者撮影

いるかもしれないが、この形容句が、真にその構造的作用を発揮するのは、「決して望まれてはならず、非現実的で、かつ手が届くほどすぐそこにあるような」ぞっとする対象に対する主観的距離を維持するための効用が期待されるときである。つまり、主体が何らかの対象を「夢にまで見る」ときとは、その対象を、自身の「現実」の領域から「想像」の領域へと押しやろうとする動機に基づいている。主体はそう夢想することによってのみ、自身の「現実」を保護し、それに同一化することができる。対象が決して手に入ることがないという状態にこそ、それを夢想することの意味があり、また、対象それ自身の崇高な地位を保存する働きがあるのだ(おとぎ話によく出てくる「手に入るや否や木の葉に変わる金銀財宝」や「満腹になるや否や泥だと気付く豪華な食事」というモチーフは、このように理解されねばならない)。

アーキグラムに特徴的なコラージュは、ほとんど常に人物が「こちら」を向いている。それはヒッチコックの『白い恐怖』の1シーン——無数の巨大な目玉がこちらを見つめている(ダリがデザインした)のように「閉鎖的」だ。これらはともに、主体が対象にまなざしを向けるためというよりは、主体を見つめ返すために用意されている。ここでは、主体は絵を見つめることなく、「絵から見られている」。画面に用意されたサイケデリックな衣裳や文字、あるいは目線は、その画面を見る我々自身の分散したヴィジョン(=欲望)を代理、補足している。この画面において、主体は自身の欲望の囚われ人となり、外部との交通の

機会を失ってしまう。ヴィム・ヴェンダースの『夢の果てまでも』でモチーフとなっていた「夢中毒」のごとき、密室的インテリアの中を彷徨うしかないのだ。この「夢中毒」こそ、「夢にまで見た悪夢」そのものの学名である。アーキグラムのコラージュやドローイングによって示される空間は、密室的内観図がどこまでも続いていく、いわば外部なき内部世界を展開する。「正常な」建築家達が、自身の「夢」を擁護するために「現実」へと逃避するとすれば、自身の「現実」を「夢」と同一化させるべく、あらゆる手続きを飛び越えるアーキグラムによるこの態度は、『近代主義の夢』のヒステリー化に他ならない。

もし手に入るなら、ピーター・クックの『建築：行動と計画』(美術出版社)を一読されることをお勧めする。この本には「骨組み」というものがない。彼等の提示したプロジェクト同様に、不気味で突出した部分が延々とどこまでも連なっているだけだ。まるで、耳の中で鳴り響いて内部から主体を崩壊させる、あの「幻聴的な『声』」のように。

(CXPI1276@niftyserve.or.jp)

12Architects #5: Archigram

アーキグラムとアメリカン白昼夢

手塚貴晴+手塚由比

イギリスの大国幻想が次々と打ち破られる一方、アメリカン・ドリームを謳歌した1950年代に対して、60年代のイギリスは文化文明両面からの巻き返しを図っていた。ビートルズは、アメリカのトップ10への「ブリティッシュ・インヴェイジョン」*1を果たし、「ロンドンではヨーロッパのダイナミックな文化の中心」*2へと脱皮を遂げるのである。イギリスでは「あともう少しで新たな社会の突破口が開かれるという感覚」*3の時代精神"zeitgeist"が蔓延し、50年代のアメリカに対するコンプレックスを一気に解消しようとする進取の気概が知識階級を彩っていた。64年には労働党が「技術革命の白熱」*4をスローガンに13年ぶりに保守党から政権を奪回する。「63年の党大会で行われたウィルソンの『科学革命』演説は、社会主義の新しい目標を技術革新による高度成長に据えた」*5。66年には北海油田が発見され、イギリス経済はさらに安定する。イギリスは技術革新と自由な文化を掲げて若返ろうとしていた。

アーキグラムは、まさしくこの時代精神を追い風に64年から66年にかけて最盛期を迎える。虫のような巨大都市が歩き回る〈ウォーキング・シティ〉や、メガストラクチャーの中に全ての都市機能をカセットの様に差し込んでメガロポリスを形成しようとしたピーター・クックの〈プラグ・イン・シティ〉のような、工業技術への楽観的信仰を露わにするアーキグラムに対する現在の我々のイメージは、ほとんどこの短い期間に形成されたといえる。アーキグラムの夢は早くも1960年代後半には急速に

収束へと向かう。後にビートルズのジョン・レノンがこの時代を「中産階級の白昼夢」*6と呼んだように、アーキグラムもアメリカンドリームの陽炎であり、その本体が消え失せれば音もなく空中に掻き消えていったのである。63年のケネディの暗殺を境にアメリカの自由なカルチャーは急速に下降線を辿り始める。66年にロンドンではベトナム戦争反対運動が巻き起こる。本来理想社会を築くはずの近代技術は、アーキグラムのメンバーの理想とは裏腹に、ベトナム戦争を支え、平和を打ち砕く道具として使われるのである。67年に遂にピーター・クックは機械の力が人間を圧倒してしまうのではないかという危機感を抱くに至る*7。69年に発表され、〈Logplug Rokplug〉はアーキグラムの近代技術を信奉してきた立場とベトナムで繰り広げられる現実との狭間で生じる葛藤の表れに他ならない。配線や機械といったメカニカルな部分は丸太や石といった自然物の中に隠され、テレビ画面のみが顔を出す。さながら苦い薬を砂糖で覆った糖衣錠である。70年のアーキグラム9の〈LAWUN〉では遂にテレビ画面さえもが姿を消し、すべての機械は姿を消してしまう。アーキグラムの白昼夢は、71年のボンビドゥーセンターの設計競技を目前にして、止揚に終わったのである。

註

*1: 『ビートルズと60年代』、イアン・マクドナルド=著、キネマ旬報社、1996年、p.24

*2: 『A Guide to Archigram』、Academy Editions、1994年、p.44

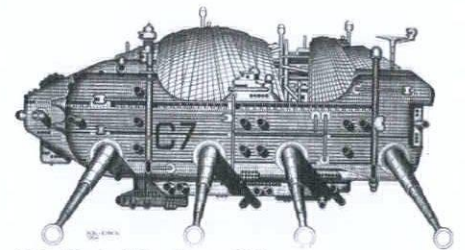
*3: 『ibid』、p.14

*4: 『イギリス近代史』、村岡健治+川北稔=著、ミネルヴァ書房、1986年、p.274

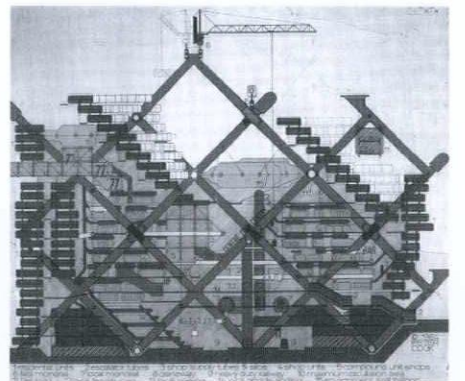
*5: 『概説イギリス史』、青山吉信+今井宏=著、有斐閣、1982年、p.249

*6: 『ibid』、イアン・マクドナルド、p.10

*7: 『ibid』、Academy Group Ltd、p.202

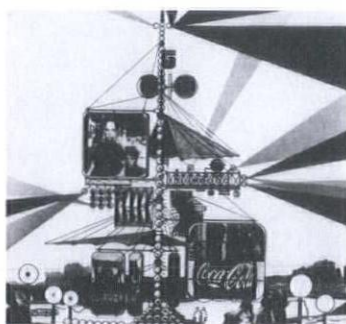


〈Cities Moving〉/ Ron Herron, 1964



〈Plug-in City〉/ Peter Cook, 1964

図版出典: Collection Monographie "ARCHIGRAM", Centre Georges Pompidou



〈Instant City: self-destruct Environ-Pole 1969〉/
Ron Herron

"Instant City"という文言が、私にはいつも"City can be instantly born."と読めて、何かとても明るい歌のように響いている。それはどうも"City"という言葉がアーキグラムの作品の中で最後まで特別な位置を占め続けているためらしく、少なくとも人が集まることへの全幅の信頼が表明されているような、そういった透明な明るさを感じている。建築とは言えば、描かれているのはただただ不定形のテントと、バルーンや電設装置など、言ってみれば非実在を示す頼りないものたちなのに、地方都市に飛来してきて場を瞬間的に活性化させるこの"City"の万能性だけが、なぜか自明のものとして前提されている。

ゆえに〈Instant City〉には惹かれている。世界中を歩き回るあの巨大な都市に比べ、実体を失い、全くの観念と化してしまったこの見えない都市の方が、彼らの思いをより明確に示していると思うから。この印象は同じ頃の"it's a..."に関しても持っていて、そこではコンテンツを奪われた抜け殻のような建物が、裏返って無限の可能性を獲得し

ているということが、それこそ詩として歌われている。目の前の実際の建築を、もはや"it"としか呼べないロン・ヘロンの吃語さえ、やはりどこか透明で、純化された響きを持ってはいないか。

都市とは現象だ、そして建築とは装置なのだと、そういう理解がアーキグラムの興奮を支えていたのだと言っても間違いではないだろう。マクルーハンが「メディアこそが世界を変える」と喧伝し、磯崎新が「物理的実体としての都市などそもそもなかったのだ」と呟いたあの頃に、社会の状況そのものを、または環境工学的な建築の外部そのものを、いかに建築の主題として定立するかという問題意識が彼らの作業の出発点であったのだと思う。それは建築の他律性を巡る議論でもあって、現象に自らを投企し続けるという、そんな姿の建築像が「装置」の概念を拡張することで目されたのだとも言えるだろう(この辺りの議論はバンハムによってすでに用意されてもいたけれども)。つまり私が思うのは、巻頭の堀井氏が述べるように、もしもアーキグラムが我々の初期設定にすでに折り込まれているのなら、重要なのは「現象」と「装置」という概念の所在であって、その扱いの軌跡こそが振り返られるべきだということなのだ。

「装置」の概念が仮に了承されたとしても、「現象」とは曖昧に過ぎるかもしれない。ひとつの理解は建築が動きまわたり、状態の生成・消滅に直接参加するというような、いわば建築の能動性を示した現象概念だけれども、彼らが次第に収斂していったのは、むしろ受動

12Architects #5: Archigram

ロン・ヘロンの亡霊(社会主義者の追憶)

ジン・ヨハネス

3年前にもなるのか。私はロンドンのAAスクールで師事していたロン・ヘロンの葬儀にビデオをもって参上した。葬儀にもかかわらずジーンズ姿等、皆さまざまだが格好だった。ほとんどが残されたアーキグラム、友人、教え子達で構成された。欧米の葬儀は身体を焼かない! キリスト教においては「復活の日」に再び地上に蘇るという聖書の記述を体験しようとする。その日、そんな生身の身体のままロンの棺が幽霊と錯覚するぐらい近距離で安置され、その傍らでピーター・クックが回想の辞を述べる小さな集会が行われた。私は同僚のハイテク・インド人達と莓味の宇宙食を食べていた。カトリックのイースターの「教会のシンボル入りウエハス」よりは断然ましだ! ネクタイをしていたのはバルフォア(当時学長)だけだ!?

晩年の日本の〈富山まちのかお〉で、日本の設計・施工業者並びにそれらを全て監理しているコーディネーターは、なぜロンのディテールを無視したのか。これはイギリス側からすると、日本側の明らかな失態を意味する。私はこのような体質を批判する。ロンは社会主義者なのだから、絶対権力者の下位システムとして全ての日本人が彼に仕えるか、彼の発言が社会的粘膜によって自動的に形成されていくか、その思想に迫らなくては! しかし現実には六角鬼丈の「よかちん(芸大の伝統的舞踏。これを富山でも披露した説がある)」である。イギリス社会主義理念と日本土着的民族現代舞踏はあまりに対極ではなかったか? これが理由でロンは死んだ! ?という噂もあるほどだが、真相は彼しか今となっては語

れない……。

話は変わってロンの死の直後、イギリス新聞4、5社の報道を入手したのだが、「アーキグラムは日本へ派生し開花した」という一方的な評論報道に対して、「果たしてそうだろうか?」と私は思う。日本の家電製品のチープ・アンド・グッドデザインを「パウハウスだ」と言い切る欧米特有の武骨さと同質だと思うが、カプセル・ホテルやユニット・バスは実際派生(模倣)したとしても、回転寿司までが彼等の影響だとは言えないだろう。しかし、よくよく考えて見ると、社会主義アーキグラムとは、「思想的にある方向性を示すことで、後は連鎖して変遷する事象」という記号としても存在している。つまり、「ドローイングだけ! 実現するの?」というレベルではなく、遥かにそれ以上がすでに欧米では評価されていることに気付くべきだ。そうでないと国際的視野で日本はアーキグラムだと認識されている指摘に我々自身が無頓着となる。CIAマーケティングの日本人論に依然関与できない日本人……。それがいい!

最後に作品の詳細について述べる。アーキグラム巡回展での追加出品の動向を観よ!

〈Walking City〉は、実は「間仕切りなし2LDKユニット」構成だった? 〈Instant City〉は、実はドローイングだけではなかった。ルーの飛行船構造模型を観よ! 〈Living Pod〉の移動家具はシステム・キッチンではなく、自動調理ロボだった! 〈Logplug and Rokplug〉の、「樹木の切り株にネットワーク(インターネット)・プラグ端末埋め込み」の原寸模型の出現は、もはや〈Living Pod〉を超えた!

そんなウィーンの巡回展オープニング会場で歓喜するロンを、私は観ていた。より鮮明なハイパー・フューチャー、それが実現されたのを認識した。次々と放出されたドローイングはマルチ・ウィンドウのようだ。まさかマルチ・メディアの予告さえもアーキグラムという記号は含むというのか? マル

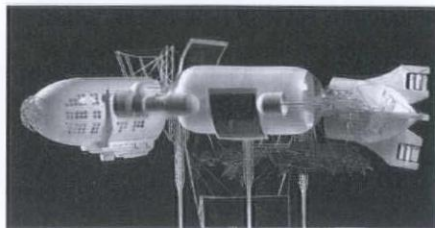
チ・メディアで民主主義も社会主義も変革してしまえ! 振り返るとロンだけがいらない。

(Gin Johannes Studio)

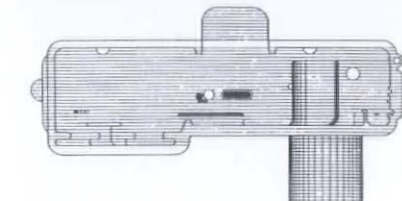
図版出典: Collection Monographie "ARCHIGRAM", Centre Georges Pompidou
"Archigram", Birkhauser Verlag Baseal, 1991



〈Rokplug, Logplug〉/ David Green, 1969



〈Instant City〉/ Ron Herron, 1970



〈Gasket homes〉/ Ron Herron, 1965

性を前提として「待たれる」ような現象であって、まさに「Instant City」の、インフラ装置としての「City」の上に瞬間的に立ち現れる「City」こそがこれにあたる。この場合、前提とされるのは建築そのもののより、そこに生じるアクティビティや様相の方こそが重要な認識対象だという理解であるから、ますます彼らの建築は透明性を志向して、まだ見ぬ「City」を待ち続けるのだ。

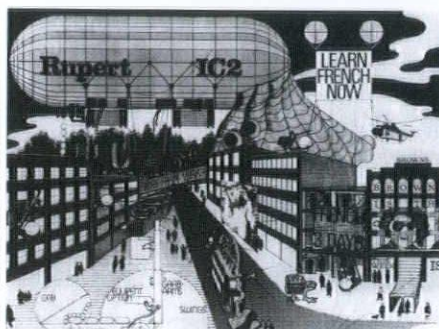
さて「現象」は時間概念に依拠しているから、それはいつでも私達の前に投げ出されていて、ゆえに彼らの作業は今日的でもある。そもそも先にも触れた通り、現象—装置という関係図式自体が投企の概念を経由して、私達が世界に参与するひとつの方法を提示しているのであるから、実際にはアーキグラムの以前も以後も、現象の導入をもって建築の完成をみるという考えは広く様々に見出されるだろう。例えばそれは伊東豊雄の建築論で、彼がまさに「Instant City」を例に引き、これは東京だと述べながら、形態の溶融と現象の表出へと向かっていくその方向には、装置としての建築像の臨界点が表示されていると私には思える。しかし見過ごしてならないのは、現象—装置の関係図式の中には「経験」という相が前提として挿入されていることで、この場合決まって知覚と身体の問題が、避けて通れぬ重要課題として浮上する。もちろんそういう人の登場の仕方は、私はどこか気になるのだけれども。

少なくともアーキグラムに関して言えるのは、彼らが持った「City」という名の現象は、いつも移ろい、姿を変えて、経験されるものとい

うよりも、ただただ待たれる気配として描かれる。それはやはりどこかで耳にした歌のようで、つかもうと思っても届かない。しかし待たための装置があるのだから、きっとそれは降誕するのだと、彼らは絶句しながらも待っているのだ。それが私には明るく響いている。

(ota@cc.iis.u-tokyo.ac.jp)

図版出典: "Archigram", Birkhauser Verlag Baseel, 1991



(Instant City Airship: visit to a small town 1970) / Peter Cook

次回予告 #6: Enric Miralles

12Architects #5: Archigram

穴あきグラム

柳瀬弘典

〜Jラップ大作戦♥の巻〜

チャオ! みんなオゲンコ? コレ原稿(笑)

モノコの広さは放送大学なみ

フトコロの深さは曙なみ

よござんすABC(アベシ)わかってる ひとまず

歌います マス書く 耳カス オッス

いきましよう まいて まいて もう

いきなぐらいのパンク・ビートにのせたPR

トテレッテ テレレレレ アーアアアってぐらいの

まわりの人間がボカーンとおきざりに

されるぐらいの「新しいウチだし」がたまらない

コラージュ・シティ!!

拝啓、拝復、アーキグラム

そんなアナタは キング・オブ・キングス

男の中のオト・コ♥

(セリフ)

僕はコラージュが好きで好きでたまらないんだけど、

アーキグラムはもっと好き!! だって建築が

スクラップ・ボードになることを教えてくれたから

建築って結構いろんなものが

貼り付けられるんだよね♥

そうアーキグラムが教えてくれた

だからアーキグラムが好き!!

ハイイわかった? わかりません!!

わかりま千円? 二千円?

分からんがわりに小さな発見!!

普段着で等身大のキテレツなアナ・タ♥

そんなアナタはスーパーヒーロー・パワフルマン!!

アカレンジャーことビーター・クック

やっぱり生まれながらに立ち位置は真ん中?

役割的にはとっかかりでしょ?

超タカいジョウタイからそくぞに

ふいちょうソフトなあたり 変幻自在のスタイル

つつこんで つつこんで ベリー・スタイル!!

B・O・K・Eボケつつこみ

N・O・R・Iのりつつこみ

いやほんまにな(どないや)

かなわんな(なにがや)

うまいこというな(チケケチケダー)

おもしろいな(ハッハー)

ドドッカ ドドカテゴリっと

もうどうなっちゃうの? ってぐらいの

理由なしで太く 短い

すらっと流せない過程がとにかく好き!!

(マニア・サイコ アカカン?)

とはいいながらも! My Me 右から左へ

抜けてく感じ

発酵するほどのマンネリズムがダメかと思えば

そうともいえないフトコロの深さは曙なみ!!

拝啓、拝復、アーキグラム

そんなアナタはキング・オブ・キングス

男の中のオト・コ♥

問題と答え Q and A Next センテンス

訳して歌え 舌先格闘あどりぶランド!!

Q: ワタシを メチャクチャに してっー!!

A: うーんでも、キミってけっこうハードだよ♥

だって叩いても、叩いても、壊れないんだもん

キミって もしかして…

あの伝説のオリハルコンで できてるの?

Q: チャーンス! 見て見てっ本当のワタシを見て!

A: うーんでも、キミが欲しいのって

理由じゃなくて口実だろ!!

無限のイイわけと 完璧なイノセント

拝啓、拝復、アーキグラム

そんなアナタは キング・オブ・キングス

男の中のオト・コ♥

サンキュウ ありがと ベリーマッチョ!!

(芝浦工業大学毛井研究室)

パーソナリティ紹介



ロボリン
ヤングで普段着のみんな、
僕らのレディオ聞いているか
〜。エブリタイム・ハイテ
ンションでとんちゃって、
のっちゃって回っちゃって
てるそこのキミ!! 僕らの
毒舌ハミング千本ノックに
チューニングを合わせろ
よ!! (なんちゃってX100
回)

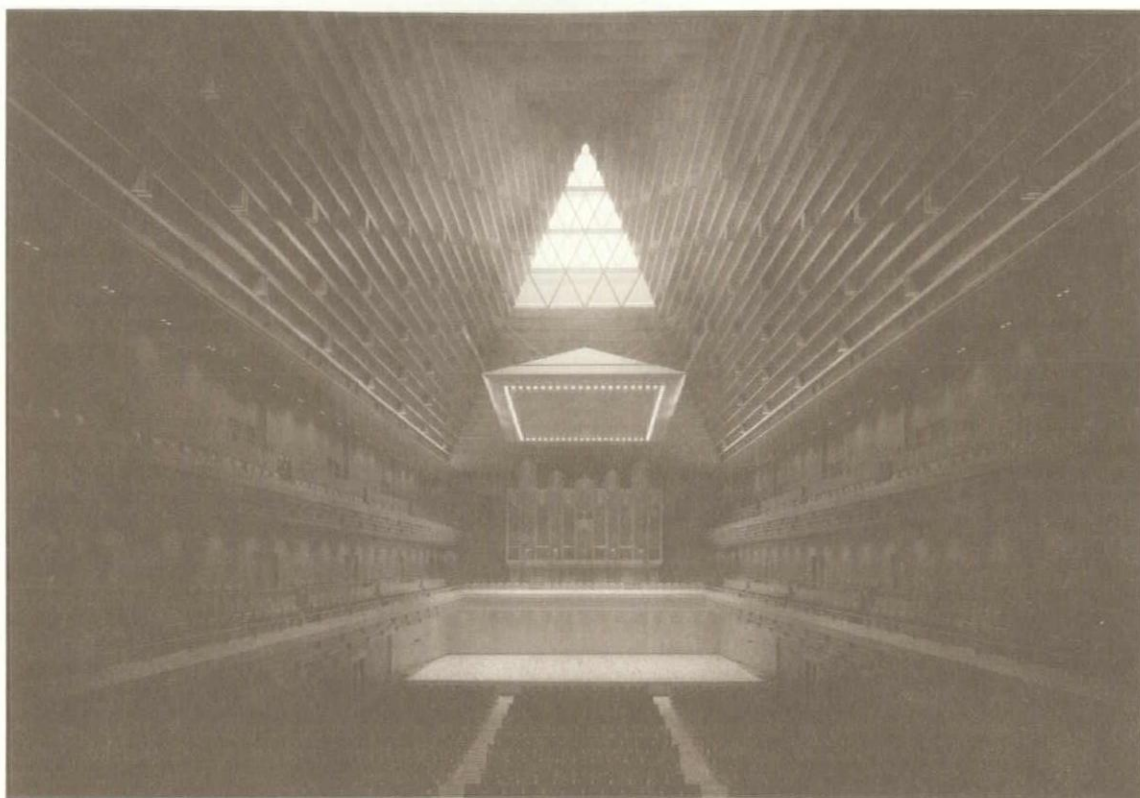


ブーリン
チャオ、元気? ブーリン
はめちゃんこ元気! ドモ♥
窓辺のマargaret・ブー
リンやでー。よくGalに
「メガネとったほうが男前
や」って言われんやけど自
分らはどう思う?
ブーリンはけっこう「イケテ
ル」と思ってるやけど……。



3ちゃん
ハイイ(ちょっとテレビみ)
みんな僕の声わかる? ロボ
リンと出会ったのは、僕が
「晴!! 時々!」 サンスプラ
ッシュ」という本格派レガ
エ番組の公開録音をやった
時、一番前で。
熱心に踊ってましたねー。

図版出典: "Archigram", Birkhauser Verlag Baseel, 1991



東京オペラシティ・コンサートホール／写真＝村井 修

9706

特集

柳澤孝彦の劇場空間

日本の大規模公共施設の国際コンペとして多くの注目を集め、その完成が待たれた新国立劇場が竣工した。設計者である柳澤孝彦氏は、すでに美術館・ホールなどの多くの公共施設の設計を手掛けその高い完成度で知られる。本特集では、同氏の近年の劇場・ホール建築の空間とそれを構成するエレメントに焦点をあて紹介する。

[作品]

新国立劇場、東京オペラシティ、三鷹市芸術文化センター、桶川市民ホール

[空間構成エレメント]

光、素材、地勢、音響などのキーワードのもと各建築空間を解析する。

[文]

長友宗重、小倉善明、本杉省三、川村純一

[対談]

川向正人×柳澤孝彦

[写真]

村井 修、他

装飾を排したフォルムデザイン——スウェーデンのグッドデザイン展より

日常生活に根差して生まれた、質素な簡潔さと機能性を重視したスウェーデン・デザインを紹介する。

短期隔月連載：建築家・デザイナー版「グループワークの様態」1／伊藤公文、他

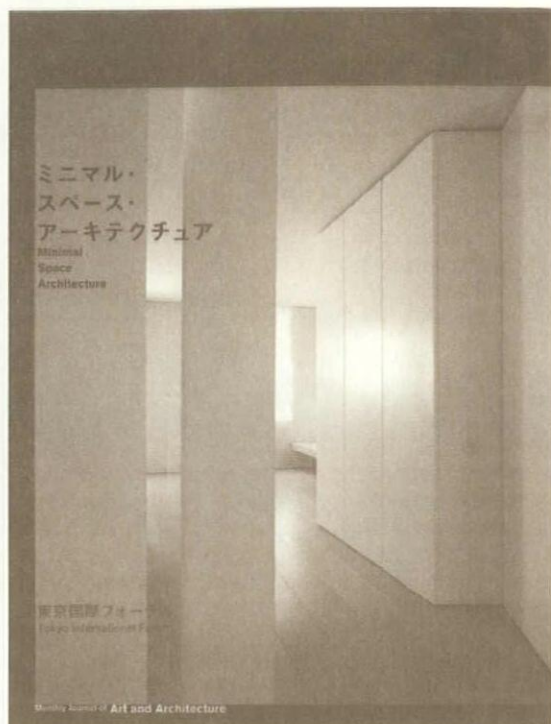
連載：トムの時空形象学20／戸村浩

連載：サイバートーク：電子メディアのフロンティア6 エンバイロメント／馬場正尊

海外建築情報リミックス：12 Architects #6「エンリック・ミラーレス」

SD

バックナンバー



9703

特集

ミニマル・スペース・アーキテクチャ

過剰な装飾や多様なマテリアルの使用を避け、むしろミニマルでシンプルな表現をめざす建築家達がいる。それらの洗練された形態は、現代建築の中において非常に魅力的かつ刺激的である。本特集では、マテリアルやディテールの極限化を視野に入れた若手建築家達の思考と作品を紹介する。

【作品紹介+インタビュー建築家】

ジョン・ポーソン、小川晋一、岸 和郎、石田敏明

(インタビューア: 丸山洋志)

【文】

丸山洋志、櫻井義夫、松畑 強、柿沼敏江、大島哲蔵

特集2

東京国際フォーラム

国際コンペによる大型公共施設プロジェクトとして話題を集め完成した東京国際フォーラム。本特集では、この公共施設を、アート作品も設置された最新の写真と共に、ガラス棟、ホール、展示場、大窓などの主要部分のデザイン・プロセスを、スケッチ・模型・図面・工事写真を用いて紹介する。

【文】 椎名政夫、柳澤孝彦、樋口正一郎、佐藤尚巳

【写真】 堀内広治

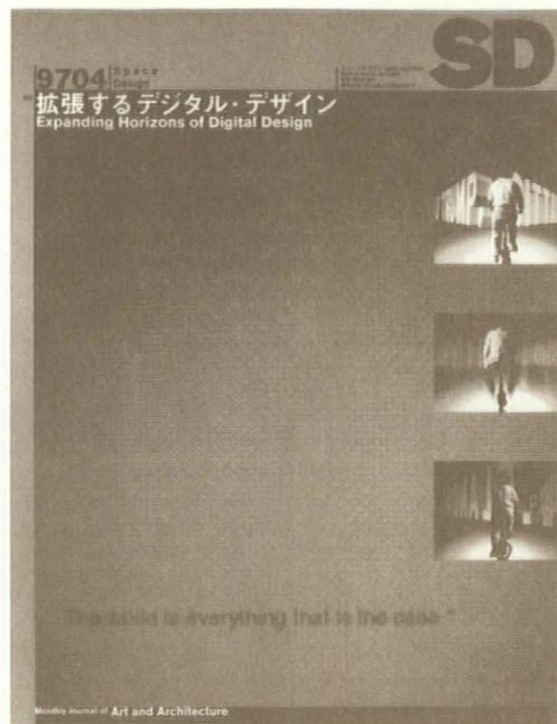
連載: トムの時空形象学18/戸村 浩

連載: 照明探偵団・連続実践講座レポート最終回/LPA

連載: サイバートーク: 電子メディアのフロンティア 3. 電子的身体拡張/仲 隆介

海外建築情報リミックス: 12 Architects #3「Adriaan Geuze/West 8」

定価=1,988円/本体1,893円



9704

特集

拡張するデジタル・デザイン

コンピュータとネットワーク技術が、建築・都市の新しい環境を造り出そうとしている。いったいどのような環境が生まれようとしているのか。そしてその環境をいかにデザインすべきか。机上論ではない、現実を開始されたプロジェクト群を紹介。

第1章サイバースペースの概念(コンセプト)

1. 電子メディアへ拡張する都市論の25の扉: 田島則行/2. サイバースペースの存在を問うプロジェクト: J. ショウ、藤嶋正樹、M. ノヴァック、他/3. 空間概念の歴史と情報空間: M. ベネディクト

第2章記述される建築・都市

1. 建築・都市モデルを生成するアルゴリズム: J. フレーザー、渡辺 誠、他/2. 身体性を伴った知識が生み出すデザイン: 入江経一/A. シュナイダー、久保田晃弘、他

第3章電子メディアへ拡張する都市

1. ヴァーチャル・ソサエティと現実空間の拡張: 北野宏明、他/2. ミュージアム・ビルディングタイプの再編成: 坂村 健、奥出直人、他/3. コラボレーション・デザインのフレーム: 両角光男、他/4. 加速する脱近代都市の生成: 磯崎新アトリエ、他/5. コード化による都市の拡張: 米田雅子

第4章デザイン・スキルの拡張

佐々木睦朗構造計画研究所、(株)遠藤照明、シーラカンス、プラスワン、プランテック、他

【論文】 山口重之、桂 英史

【鼎談】 浜田邦裕+濱野慶彦+岡 正明

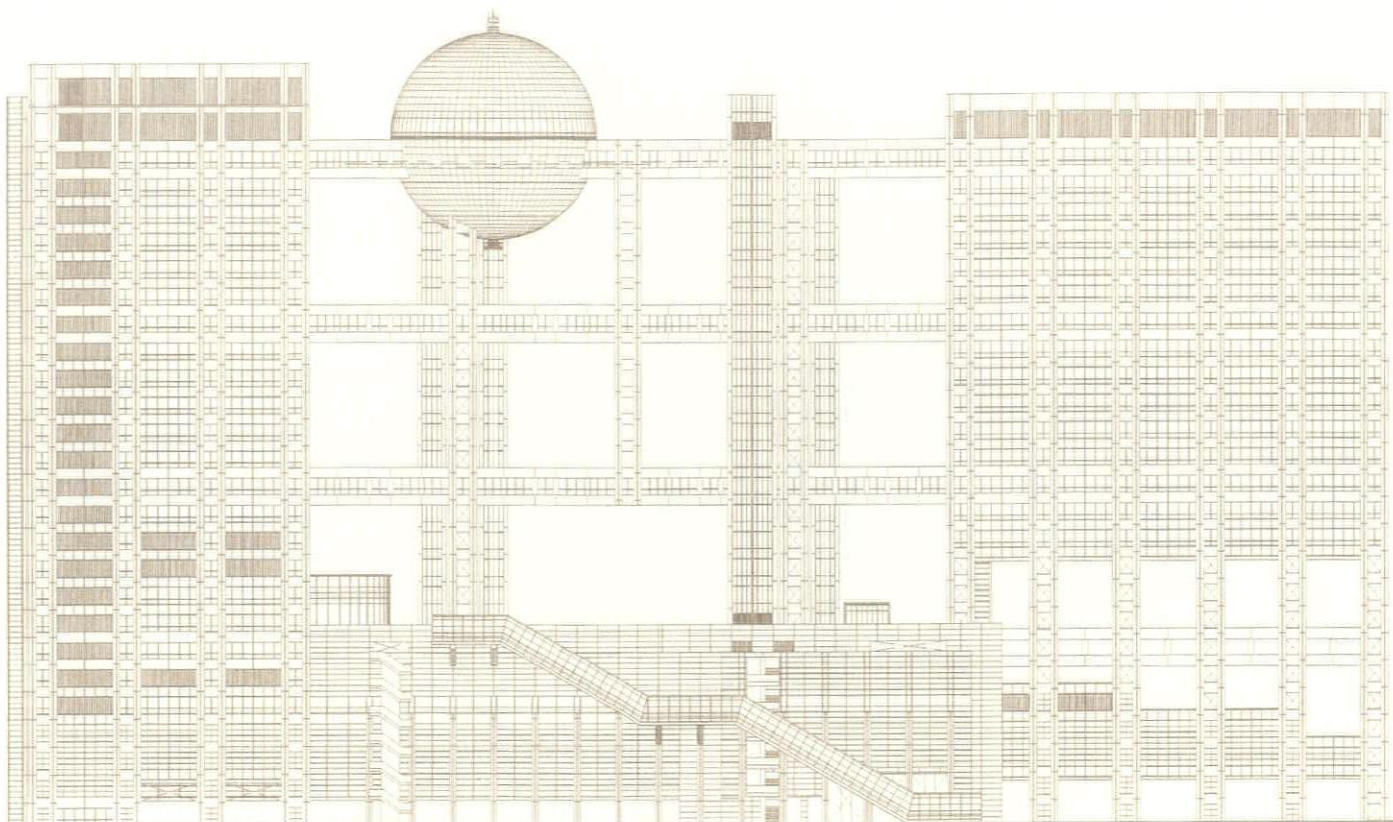
【対談】 岡 正明+藤本純一

連載: トムの時空形象学19/戸村 浩

連載: サイバートーク: 電子メディアのフロンティア 4. 変貌する境界——電子的身体拡張/小林 敦

海外建築情報リミックス: 12 Architects #4「伊東豊雄」

特別定価=3,059円/本体2,913円



SD別冊29

フジテレビ本社ビルの記録

「高度情報化社会の大規模複合建築の原点を求めて」

判型・体裁：A4判変形・並製

総頁：168頁

定価：3500円

好評発売中

臨海副都心台場地区に建設されたフジテレビ本社ビル（設計：丹下健三・都市・建築設計研究所）は、豊かな人間性と文化性を取り込んだ創造的な空間を、都心部地域では得られない恵まれた環境の中で実現している。それはまた次世代のオフィスビルとしての最新の機能と、躍動感溢れる美しさを備えている一方で、放送を中核としたさまざまなメディアの受信・発信基地として高度な安全性と最先端の通信技術を有する。

本別冊では、さまざまな角度からフジテレビ本社ビルを紹介するが、その中には、全体構成の詳細な検討過程、新しい構造システム、最新のスタジオの詳細、直径32mの球体のリフトアップ工法などが含まれる。

建築の設計、施工に携わる人はもちろん、新しい建築技術に興味を持つ人、都市の将来像、放送施設やオフィスビルの未来像に関心のある人などにとっても興味のある内容。

目次抜粋

〔プロセス編〕

臨海副都心事業とプロジェクトの始まり
基本設計から実施設計までのスタディ

〔コンセプト編〕

オフィス計画

スタジオ計画

構造計画

設備計画

防災計画

外構計画

〔デザイン編〕

基準階外装

球体外装

シースルーエスカレーター

1階シアター

展望室

大会議室

V4スタジオ

V9報道スタジオ・オフィス

DAVスタジオ

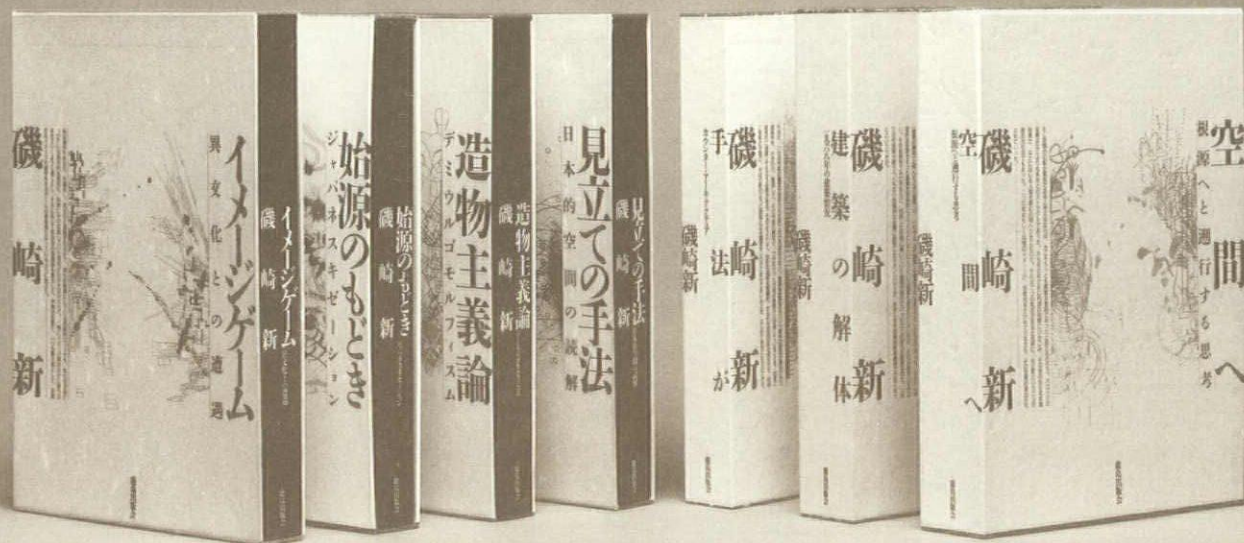
試写室

ラジオ・スタジオ

〔施工編〕

SD

磯崎新の本



■既刊

見立ての手法 — 日本的空間の読解

A5判338頁・本体3,400円

めざましい設計活動を展開する国際的建築家・磯崎新の最新建築評論集。本巻は、日本人建築家の作家論、あるいは都市論・庭園論をとおして、日本的空間または日本文化を論じたユニークな評論集である。

イメージゲーム — 異文化との遭遇

A5判306頁・本体3,400円

今この世界がイメージだけで浮遊する決定不能の場となり、私たちのすべてのデザイン行為がイメージをもてあそぶゲームの様相を呈しているという状況認識をもつ著者が、海外の建築状況と日本を架橋する。

始源のもどき — ジャパネスキゼーション

A5判320頁・本体3,800円

伊勢の式年遷宮に秘められた謎を説きあかす「イセ論」をはじめ、日本の建築文化の近代化の過程にくりかえし現れる和様化を論じる「和様論」など、グローヴァルな日本文化論を展開する力作。

造物主義論 — デミウルゴモルフィズム

A5判320頁・本体3,800円

《建築》とは何か?という根源的な問いを自らに投げかけ、ティマイオスからニーチェにいたる多様なテーマで織りなす建築論の一大ページェント。《建築》の現在を問い、未来を展望する磯崎新の話題作。

■新刊

〈表示価格は税抜です〉

空間へ — 根源へと遡行する思考

A5判520頁・本体4,600円

磯崎新の建築家としての出発点を決定づけた「プロセスプランニング論」「見えない都市」など1960-70年代の空間論・都市論32編を収録した処女論集。四半世紀を経た今でも新鮮さを失っていない。

建築の解体 — 1968年の建築情況

A5判440頁・本体4,200円

1968年の時点で、のちのポストモダンの到来を予告した衝撃の書。ホライン、アーキグラム、ムーア、プライス、アレグザンダー、ヴェンチュリ、スーパースタジオ/アーキズームらを論ずる。あらためて磯崎の慧眼ぶりに脱帽!

手法が — カウンター・アーキテクチャ

A5判356頁・本体3,800円

建築家・磯崎新の「近代建築との絶縁宣言」としてさまざまな手法の駆使によるメディアの生成を論じた「手法論」のほか「模型論」「住居論」「反建築的ノート」など、著者の1970年代の軌跡の集大成。

世界のリーディング・アーキテクトとして国際的に活躍がめざましい著者の好評シリーズ。既刊4冊も順調に版を重ねている。新刊3冊は1970年前半に刊行されたものの復刻版で、磯崎の初期の思考をまとめたもの。四半世紀を経たいま読みかえてみても新鮮さを失っていないばかりか、初めて接する若い読者にも深い共感を与えるだろう。



※表示価格には消費税は含まれておりません。

デザインのモダニズム

P.グリーンハルジュ 中山修一他訳 A5・¥4,200

都市景観と造形の未来

樋口正一郎著 A5・¥2,900

建築家のためのランドスケープ設計資料集

豊田幸夫著 B5・¥4,500

阪神大震災に見る木造住宅と地震

坂本 功監修 B5・¥6,500

建築の世界—意味と場所

C.ノルベルグ=シュルツ 前川道郎, 前田忠直共訳 B4変・¥8,700

建築の形態言語—デザイン・計算・認知について

W.ミッチェル 長倉威彦訳 B5・¥6,200

建築理論の創造—環境デザインにおける行動科学の役割

J.ラング 高橋鷹志監訳, 今井ゆかり訳 A5・¥6,300

白い机①:若い時—アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想

G.シルツ 田中雅美, 田中智子共訳 A4変・¥9,500

白い机②:モダン・タイムス—アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い

G.シルツ 田中雅美, 田中智子共訳 A4変・¥14,300

評伝ミース・ファン・デル・ローエ

F.シュルツ 澤村 明訳 B5・¥8,900

ガウディー—芸術的・宗教的ヴィジョン

R.デシャルヌ 池原義郎他共訳 B4変・¥14,800

ル・コルビュジエの建築—その形態分析

ジェフリー・ペイカー 中田節子訳 B5・¥6,500

ル・コルビュジエ—理念と形態

W.J.R.カーティス 中村研一訳 B5・¥8,200

知られざるフランク・ロイド・ライト

E.ターフェル 谷川正己, 谷川睦子共訳 B5・¥5,700

ルイス・カーン研究—建築へのオデュッセイア

前田忠直著 A5・¥3,400

ルイス・カーン 光と空間

ウルス・ビュッティカー 富岡義人, 熊谷逸子共訳 B5・¥4,200

世界の高齢者住宅—プライバシーと自立の実現

J.D.ホグランド 湯川利和, 延藤安弘共訳 A5・¥3,400

仕組まれた意匠—京都空間の研究

川崎 清他共著 A5・¥4,200

ハウジング・デザイン—理論と実践

I.コフーン他 湯川利和監訳 B5・¥11,700

驚異の工匠たち—知られざる建築の博物誌

B.ルドフスキー 渡辺武信訳 A5・¥3,800

人工楽園—19世紀の温室とウインターガーデン

S.コッペルカム 堀内正昭訳 A4変・¥17,800

建築美論の歩み

井上充夫著 A5・¥4,400

アメリカの機械時代—1918~1941年

R.G.ウィルソン他 永田 喬訳 A4・¥13,000

城下町の近代都市づくり

佐藤 滋著 A5・¥4,200

新世紀末都市—The 100 Mile City

D.スジック 植野 糾訳 A5・¥5,700

都市の文化

L.マンフォード 生田 勉訳 A5・¥6,300

楽園のデザイン—イスラムの庭園文化

J.ブルックス 神谷武夫訳 A5・¥5,500

庭園の詩学

C.W.ムーア他 有岡 孝訳 A5・¥4,700

庭の意味論

M.フランシス他 佐々木葉二, 吉田鐵也共訳 A5・¥4,600

記憶に残る場所

ドンリン・リンドン他 有岡 孝訳 A5・¥4,400

アースワークの地平—環境芸術から都市空間まで

J.パーズレイ 三谷 徹訳 B5・¥7,600

移ろいの風景論—五感・ことば・天気

小林 享著 A5・¥3,800

劇場—舞台芸術のための建築計画と設計

ロデリック・ハム 劇場技術研究会訳 B5・¥6,200

スウェーデンの住環境計画

スヴェン・ティーベイ 外山 義訳 A5・¥4,500

地域防災計画の実務

京都大学防災研究所編 A5判 256頁 定価(本体3,800円+税)

地域防災計画に盛るべき具体的課題について、土木工学を中心としたハードと危機管理・情報・システムなどのソフトの両面から総合的に解説された実務書。地方自治体等の防災担当者へ今後の防災計画のあり方を示唆する。

〈主要目次〉

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 第1章 わが国における地域防災計画の沿革 | 第7章 災害対応システム |
| 第2章 地域防災計画の現状とその問題点 | 第8章 応急仮設住宅 |
| 第3章 地震災害 | 第9章 災害情報システム |
| 第4章 地盤災害 | 第10章 危機管理と総合防災システム |
| 第5章 土砂災害 | 付 録 地域防災計画地震対策編 |
| 第6章 津波・高波・洪水氾濫災害 | (静岡県/神戸市) |

実務者が書き下ろした待望の必読書!

都市・建築防災シリーズ

《全5巻》 各巻A5判

鹿島 都市防災研究会 編著

セット価格 15,200円+税(分売可)

第1巻 大地震と都市災害

144頁 定価(本体2,600円+税)

第2巻 建築物の地震被害

216頁 定価(本体3,400円+税)

第3巻 耐震診断と補強・補修

186頁 定価(本体3,100円+税)

第4巻 制震・免震技術

194頁 定価(本体3,200円+税)

第5巻 地震防災と安全都市

178頁 定価(本体2,900円+税)

阪神大震災に見る木造住宅と地震

坂本 功監修

B5判 176頁 定価(本体6,500円+税)

阪神大震災では木造住宅の被害が多数でた。大学の研究者が現地入りして実地に調査した被害事例を、約1000点にのぼる写真と的確なコメントにより紹介。木造建築を手懸ける設計者・工務店に耐震性の教訓として最適。(カラー写真64頁)

〈目次〉

- 第1章 兵庫県南部地震と建築物の被害の概要
第2章 建物各部の被害/伝統的住宅の被害/やや古い住宅の被害/新しい住宅の被害/民家型住宅の被害・淡路島の被害/狭小間口・ミニ開発住宅の被害/地盤と木造住宅の被害/蟻害・腐朽と木造住宅の被害/集合住宅の被害/木造3階建て住宅の被害/増築建物の被害/2×4住宅の被害/混構造住宅の被害/プレファブ住宅の被害
第3章 被害と建築年代/地域的被害の分析/壁量、偏心と被害/地震で倒れない住宅を建てるために



9601 The Architects' Record in the Pursuit of Urban Design: Introduces government's urban projects which are coordinated by architects in Japan: Kumamoto Artpolis by Arata Isozaki, Creative Town Okayama by Shin'ichi Ogawa, Nagasaki Urban Renaissance and Shiroishi Media Polis by Hideto Horiike. Text: Riichi Miyake, Naoyuki Kuniyoshi, etc. ¥2,854



9609 The Heyday of the Modern House in Denmark: Introduces Danish modern houses of the '50s and '60s: Summer Residence of Niels Bohr, Vilhelm Wohlert; Soholm I, Arne Jacobsen; Kingo Houses, Jom Utzon; etc. text: L.B.Jorgensen, Riichi Miyake, etc. **Yemen: Mountaintop Villages and Tower Houses:** Photo+Text: Ashikawa Research Institute ¥1,988



9602 Italian Rationalism: The contemporary meaning of Italian Rationalism. Introduce six Italian architects: Franco Stella, Uberto Siola, Antonio Monestiroli, Arduino Cantafora, Marino Narpozzi, Nicola Di Battista. Works: House in Thiene, Hotel in Via S.Allende, Design for Spreeinsel, Polyptych of Ravenna, The New Cemetery in Fiesse D'Artico, etc.. ¥1,988



9610 Light and Space in the Middle Ages: Romanesque Architecture of Central and Southern France: Introduces Romanesque church and monastery. Abbaye du Thoronet, Abbaye St-Martine de Canigou, etc. Photo: Koji Horiuchi, text: Shuji Hanyu, etc. **Studies of Two Cities:** text: Yoichi Iijima, Minoru Tanokura **Ninety-seven Chairs:** text and photo: The Poor Boys Enterprise ¥1,988



9603 Contemporary Asia Series 2: A Panorama of Architecture in Vietnam: Architecture and Vietnamese City: Hanoi, Hue, Hoi An, The Champa Ruins in South-Central Vietnam, Ho Chi Minh. Themes: Dwellings of Vietnam's Minority Peoples, Vietnam's Industrial Parks, Contemporary Architecture Today. Text: Y.Shigeeda, S.Nakazawa, S.Muramatsu, etc.. ¥2,548



9611 Akira Kuryu: Introduces the works crystalizing the fine collaboration supported by his outstanding direction. Okazaki Art and Historical Museum, Core Yamakuni, Patrie+Kiyosato Museum of Photographic Art, Uemura Naomi Memorial Museum, Carnival Showcase, etc. text: Yoichi Iijima, etc. **Project pour La Chapelle de St. Vigor de Meux Par Takubo-3** ¥2,548



9604 Transformation of Ground and Light: Australian Architecture 1788-: Shows how Australian architecture has changed since the arrival of first settlers in 1788. Texts and photos: Tokyo Metropolitan University, Kobayashi Lab. **Next Generation in New York: Smith-Miller + Howkinson and Joel Sanders:** Latest works by New York architects. ¥1,988



9612 SD Review 1996: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants : Justus Pysall and Peter Ruge, Masami Takahashi, Nagisa Kidosaki & Associates. **From the Recent Works of Jun Itami: Chapel of Stone, Chapel of Wood and Chapel of Earth.** ¥1,988



9605 Architecture of Diversity and Harmony: Recent Works of von Gerkan, Marg and Partner: They are known for the winning of competition many times. Introducing their '90's works including competition designs. Texts: Masahiko Yamashita, Klaus-Dieter Weiss **The Sea and Architecture: Suzuki Ryoji's Latest Work:** Sagishima Project 'Ring', House in Sagishima. ¥1,988



9701 Shoji Yoh: 12 Calisthenics for Architecture: Introduces major works demonstrating the "calisthenics" prescribed for architecture under twelve categories. Uchino Community Center for Seniors and Children, Sundial, Welfare Facility for Seniors, Glass House with Breathing Grating, etc. ¥3,059



9606 111 Chairs Designed by Architects: Reintroducing 111 chairs designed by overseas architects from 19 century to now. Architects: Adolf Loos, Charles Rennie Mackintosh, Antonio Gaudi, Otto Wagner, Eiel Saarinen, Walter Gropius, El Lissitzky, Erik Gunnar Asplund, Le Corbusier, Mies van Der Rohe, Bruno Taut, Charles Eames, Carlo Scarpa, Aldo Rossi, etc. ¥3,059



9702 Frameworks and Space for Wood: Twenty-five examples of architecture in Japan and Around the world featuring the beauties of wood as architectural material. **The New Generation of Architects Exciting Asia:** Looks at architecture and metropolises in Asia and how they will look in the future. ¥1,988



9607 The Architecture of Kameki Tsuchiura: A Reappreciation: Reintroduce Kameki Tsuchiura's works before and after world war II. Works: Tsuchiura House I and II, Tokuda Building, Hosaka Clinic, etc. **Multi-unit Housing by the Kenchiku Design Studio:** Introduce the idea of housing which Kenchiku Design Studio have kept showing new FH HOYA-II project. ¥1,988



9703 Minimal Space Architecture: Introduces simple architecture we call 'minimal': John Pawson (John Pawson House, Jigsaw), Shinichi Ogawa (Glass House), Waro Kishi (House in Nipponbashi), Toshiaki Isida (NOS House). Text: Hiroshi Maruyama, Tsuyoshi Matsuhata, etc. **Tokyo International Forum:** Photo: Koji Horiuchi. ¥1,988



9608 Michael Hopkins and Partners: Introduce the important works by M. Hopkins and Partners. Hopkins House, The Inland Revenue Centre, Bracken House, Schlumberger Cambridge Research Centre, David Mellor Offices and Showroom, New Parliamentary Building, etc. **Visiting Dreams of Light and Space: Donald Judd's and Walter De Maria:** Text: Fumio Nanjo ¥2,447



9704 Expanding Horizons of Digital Design: introduces projects creating new environment of architecture and city with computer and network technology. Texts: Noriyuki Tajima, Sigeyuki Yamaguchi, Eisi Katsura, Michael Benedikt, Masaki Hujihata, Akihiro Kubota, Ken Sakamura, Naohito Okude, Mitsuo Morozumi, etc. ¥3,059

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. SD endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of SD is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

カーペット

カーペット

東リ株式会社



東リ㈱では、カーペットの新製品11品種を含むロールカーペット51品種383色(ニードルパンチカーペットおよび人工芝含む)と昨年発売されたパネルカーペット2品種16色を収録した総合見本帳を発行した。

特長

- ①マンションを中心とするレジデンシャル市場向け商品を充実した。リズラン、エストレア、アンピデンは、中級品マンション向け4,500円/m²上代の新製品3品種18色新発売。
- ②SEK加工(抗菌防臭加工)品の充実。防ダニ加工品の充実。消臭加工品の追加。
- ③ホテル客室・廊下向け柄物タフトを充実した。シャサヌ、パピヨン、ラインハルトは、新製品3品種18色。エルクラブ、トリアックなど既存品の大幅な柄改廃。最大6色柄出し可能なタフト機、カラーテック使用の新製品、テクスランド。
- ④ニュージーランド羊毛公社がキャンペーン展開中の商品のウールサイザルクックを投入した。植物繊維サイザル麻使いのカーペットにヒントを得た、新感覚のウールカーペットである、サイザルツイル、エトウィール800。サイザルツイルは96年度ニュージーランド羊毛公社賞において、第1位を受賞。

東リ株式会社 営業企画部
兵庫県伊丹市東有岡5番125号
〒664 Tel 06-494-6605

塗料

アロナ

大日本塗料株式会社



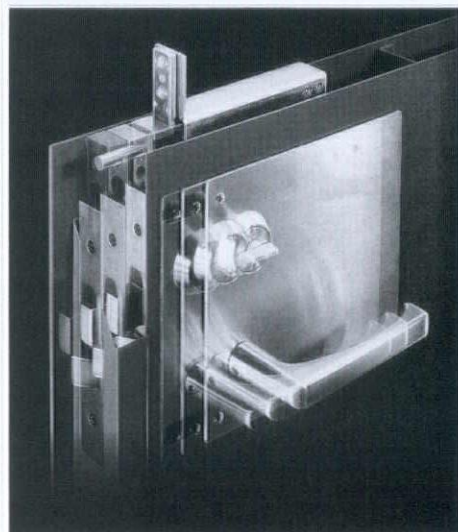
大日本塗料㈱では、水性さび止め塗料で、調色が可能、しかも塗装後わずか2時間(20℃)で上塗りができる常温架橋形建築用万能水性さび止め塗料アロナを開発、新発売した。近年環境保護の一環として地方自治体や塗料ユーザーではVOC削減の気運が高まりつつあり、塗装現場でも水系塗料の使用ニーズが高まっている。さらにビル建設では、建築中の鉄骨露出部の美観向上のため、さび止め塗料を上塗りと同系色とするためのカラー化、および下塗から上塗までの塗装工程が1日で完結するように作業時間の短縮が求められている。同社が開発した常温硬化形で速乾性の水性さび止め塗料アロナは、このニーズにマッチしている。アロナの開発は、同社が既に発売済みの一液反応硬化形水系上塗り塗料、DNTビューレタンやDNTビューアクリルとの組合せにより、下塗から上塗まで一貫した水系塗装システムとして、1 Day 2 Coatを実現し、新築塗装だけでなく塗替えも最適である。同社の得意とする建築用塗料分野がさらに充実した。用途は、建屋鉄骨、架台、看板、手摺、鉄扉、門扉、シャッター、軽量鉄骨など。常備色は、ホワイト、クリーム、赤さび色、淡彩色。

大日本塗料株式会社
大阪市此花区西九条6丁目1番124号
〒554 Tel 06-466-6661

震災対応ドア

必開戸

新日軽株式会社



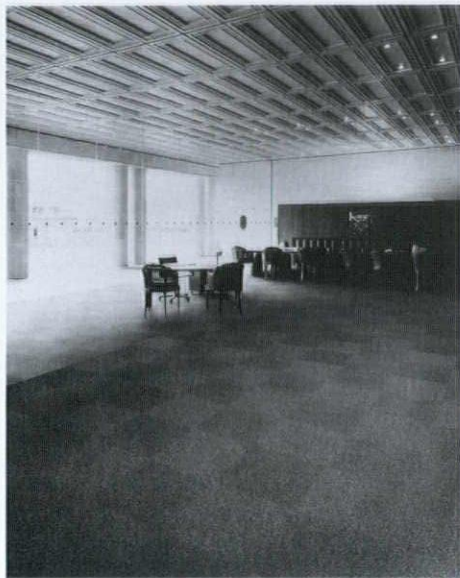
新日軽㈱では、マンション・集合住宅などの玄関ドア・病院・事務所ビルなどの出入口を対象にした、震災対応スチールドア、必開戸を新発売した。地震(震度5程度)の揺れを感知すると伝達機構が作動し、施錠状態のまま錠前が本体ごと瞬時に扉内に後退し、ロックが枠から外れ錠前が解錠状態となる。この状態で、室内の人は扉を押し開くだけで、確実に室外へ脱出・避難できる。さらに、扉の小口(戸先・上部の2方向)にテーパー形状を採用し、震度6程度の揺れが続くと、開口部(枠・扉)に作用する変位力を利用し、扉がせり出す開力に変換する。また、大地震時は扉が自動的に2~3cm室外にせり出され、同様に扉を押し開くだけで確実に室外へ脱出できる。作動後の錠前は、確実に通常時の状態に復帰する。また外出時の地震に備えて、室内の選択スイッチにより必開戸と一般戸の使い分けができ、留守中の地震発生時に扉が開いたままになることを防ぐ。防犯対策として、室外から錠前が見えない構造(扉の外側立ち上がり形状)を採用した安心設計。ロングヒンジ採用により、意匠性と耐久性の向上を図った。気密・防音対策として、扉の戸先と上部にスチール製の化粧カバーを標準装備。重量ドア、軽量ドアの2タイプを用意。

新日軽株式会社 ビル建材事業本部
東京都江東区木場2丁目7番23号
〒135 Tel 03-3820-2340

●
タイルカーペット

タイルカーペット

●
東リ株式会社



東リ株式会社では、タイルカーペットの新製品発売、色改廃並びに規格変更を行った。これにより、東リタイルカーペット新製品構成は19品種238色展開（SGカーペット除く）となった。

特長

- ①タイルカーペットの決定版GA-100は、現行57色をさらに増強し60色へ、カットパイルカーペットのスタンダード品GA-230に4色増色し合計20色。
- ②ローコスト原着ポリプロピレン製商品GA-400を30色展開で新発売。オフィス家具とのコーディネート性を追及した、原着ナイロン製GA-9000を新発売。
- ③ゴルフ場、ホテルなどの空間に、上品で深みのある高目付のナイロンカットパイルGA-600を新発売。
- ④タイルカーペットに防ダニ加工を採用GA-7000。
- ⑤高齢者福祉施設向けSEK加工商品（抗菌・防臭加工品）4品目に加え、原着ナイロン製を投入した。
- ⑥建設省「生活福祉空間ガイドライン」の発表に伴い、視覚障害者用タイルカーペット（SGカーペット）の規格変更および常備在庫化を図る。
- ⑦二重床や塩ビ系床材の上に施工する際に接着剤の塗布が不要な裏面接着剤塗布タイプをGA-100の定番色より6色採用、常備在庫化した。

東リ株式会社 営業企画部
兵庫県伊丹市東有岡5番125号
〒664 Tel 06-494-6605

●
塗料

ビルデックグリーン

●
大日本塗料株式会社



大日本塗料株式会社では、「環境に優しい」塗料という時代要請に応える弱溶剤形NAD（非水エマルジョン）塗料分野で、従来の「低臭タイプ」より更に一歩踏み込んだ「微臭タイプ」のアクリル樹脂系NAD塗料、ビルデックグリーンを新発売した。

特長

- ①塗装中に臭いが感じないのはもちろん、塗装後の翌日にも臭気が残らないため、塗装室内がすぐ使用できる。
- ②店舗、病院、レストランなど臭いに格別敏感な場所でも、塗装の翌日には使用可能で、改装などに伴う営業ロスが最小限にとどまる。
- ③非水エマルジョン塗料の優れた作業性を有し、水性エマルジョンと同等の作業性である。
- ④耐水性、耐アルカリ性、耐候性など塗膜性能を有し、内外部用塗料である。
- ⑤防かび、シミ、ヤニ止め効果がある。

商品構成

- ・白および各色 4kg, 16kg
- ・原色（6色） 4kg
- ・シンナー 専用シンナー

大日本塗料株式会社
大阪市此花区西九条6丁目1番124号
〒554 Tel 06-466-6661

●
エクステリア照明

省エネ型門灯 フットライト

●
新日軽株式会社



新日軽株式会社では、省エネルギー住宅に相応しい門灯として、インバータ方式による電球形蛍光灯タイプの門灯を、また、バリアフリー住宅のアプローチとして最適なフットライトを新発売した。

特長（門灯）

- ①インバータ式点灯回路（交流電流を高周波に変えて蛍光灯を点灯する）である。
- ②電球形蛍光灯なので、白熱電球の約6倍の寿命があり、消費電力は同じ明るさの白熱電球の約1/4である。
- ③普通の蛍光灯と違い50Hz/60Hz地域の区別がない。
- ④9Wという低Wで電球40W相当の明るさが得られる。
- ⑤スイッチONで即時に点灯する。
- ⑥門柱などと組合せができるK12型とポール灯として使用できるP20型がある。

特長（フットライト）

- ①庭まわりや階段での、夜間歩行を補助する。
- ②F4型は、上部ガードにより、足元を効果的に照らし出し、まぶしさ・ぎらつきをカットしたタイプ。F5型は、階段を昇る人の目にまぶしさが飛び込まないように光を斜めにカットしたタイプと場所に合わせた、照射方向の異なる2種類を用意している。

新日軽株式会社 エクステリア事業本部
東京都江東区本場2丁目7番23号
〒135 Tel 03-3820-2552

TOSHIBA



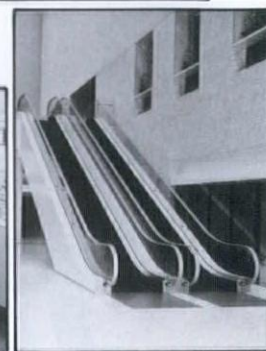
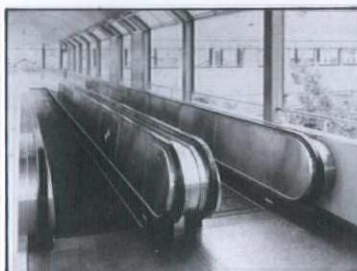
乗る人の気持ちを考える。 そこから始まる技術、 すすめています。

21世紀を生きる、私たちの子供たち、その
また子供たちが安心して利用できるエレベ
ーター・エスカレーターづくりを。

そのために東芝が理想としている技術をひ
と言でいえば、それは、技術を感じさせない
技術こそ、私たちの理想です。

人やモノを運ぶタテの輸送機関から、人の
気持ちを考えたアメニティ空間へ。

私たち東芝は、21世紀を見すえた都市環境
づくりに取り組んでいます。



東芝エレベーター・エスカレーター

株式会社 **東芝** 昇降機事業部

本社 〒105-01 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) TEL(03)3457-4613

地震は玄関ドアを直撃する。



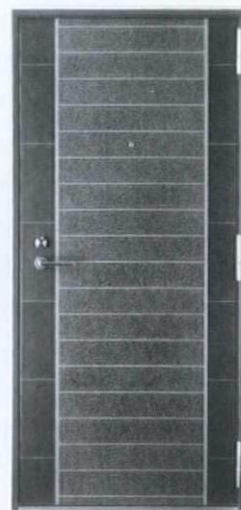
(突然おそう地震)

中高層集合住宅等では、地震は玄関ドア枠にゆがみを与えます。枠の変形や傾きが生じると、開閉に必要な扉とのクリアランスがなくなり、緊急時の迅速な避難に支障をきたします。建築基準法施行令第82条2項では、地震力によって各階に生ずる水平方向の層間変位の高さに対する割合が、間仕切りやドアなど非構造部材に関しては120分の1以内と規定されています。つまり、それだけの変異が生じても開閉のできるものが、ドアにも要求されているのです。三和の耐震ドア「フレキード」は、地震に対する機能を備え、毎日の生活に安心をお届けします。

三和の耐震ドア

フレキード

鋼製軽量ドア・鋼製重量ドア



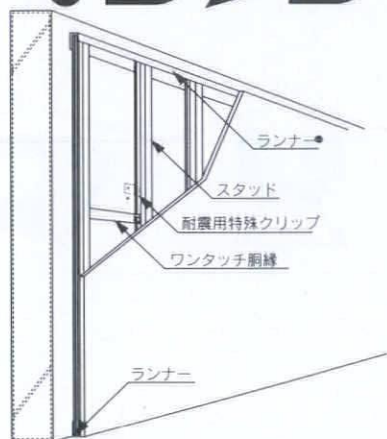
●詳しくはカタログをご参照ください。

三和シャッター工業株式会社

本社 〒163-04 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル52階 ☎03(3346)3011(代表)

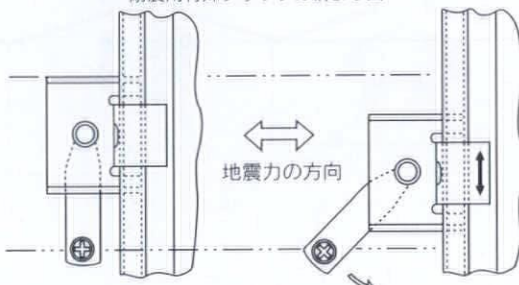
地震に強い!! 層間変位1/60に対応 マンテン® ジシンサク™ 30 地震策 PAT.P

耐震用鋼製壁下地材



耐震用特殊クリップを採用

耐震用特殊クリップの納まり図



通常の状態

地震力が加わった状態
耐震用特殊クリップはスタッドを
(レール代わりにして)上下運動する

避難通路(階段室、エレベーターホール、廊下)には耐震壁が必要です。

【特長】

1. 壁厚の仕上り寸法が小さいので(30mm)、室内空間を有効に活用できます。
2. 外壁からの振動に左右されない「耐震用特殊クリップ」採用により、地震の振動による内壁面の損傷を防ぎます。
3. 壁の高さは3,500mmまで可能です。

鋼製天井下地材 ネールロック システム
鋼製間仕切り材 エコニースタッド パーティション システム

考 誠意・熱意・創意で生きる
株式会社 マンテン®

本 社 〒556 大阪市浪速区日本橋東1-10-6 TEL(06) 644-2151
東京支店 〒136 東京都江東区亀戸 2-3-17 TEL(03) 3683-6151
札幌 TEL(011) 783-8661 横浜 TEL(045) 451-6245
名古屋 TEL(052) 661-9511 高岡 TEL(0766) 24-5506
福岡 TEL(092) 611-2180 台湾 TEL(001886) 2-719-9526

N 日章工業株式会社

- 本 社 〒101 東京都千代田区内神田 3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000
- 大 阪 支 店 〒541 大阪市中央区高麗橋 2-4-6 (大正不動産ビル 6 階) ☎06-201-5704
- 仙台営業所 〒980 仙台市青葉区中央 3-2-27 (日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所OAシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施 設 商 品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備

自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサ
ファクシミリ
オフィスコンピューター

ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建 設 商 品

クローラークレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

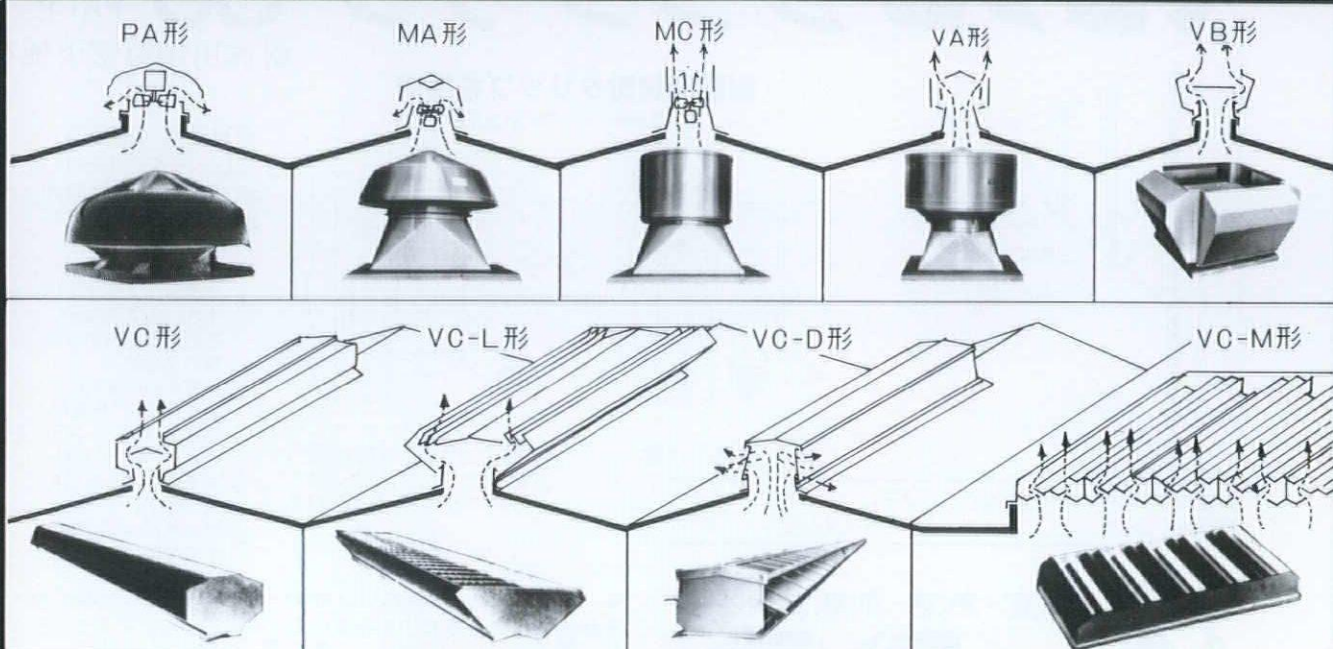
建 材 商 品

AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア

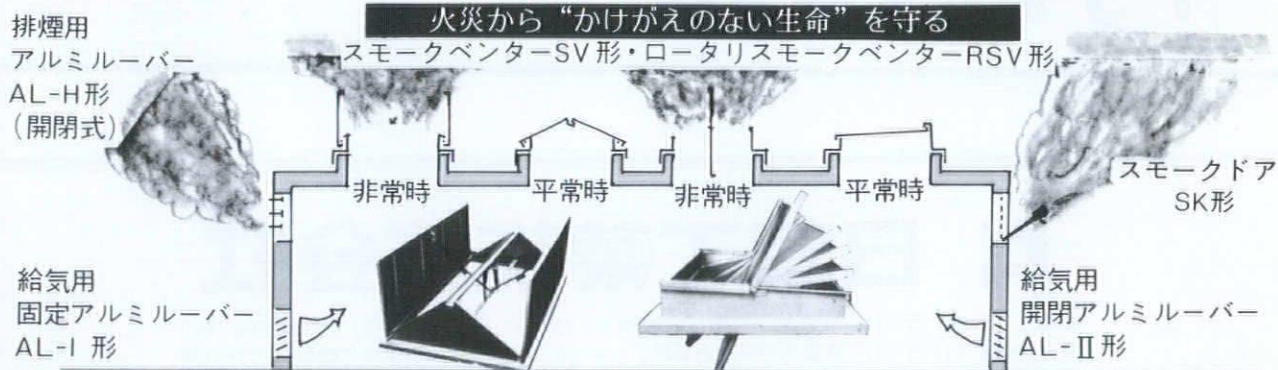
坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

強制換気・自然換気装置

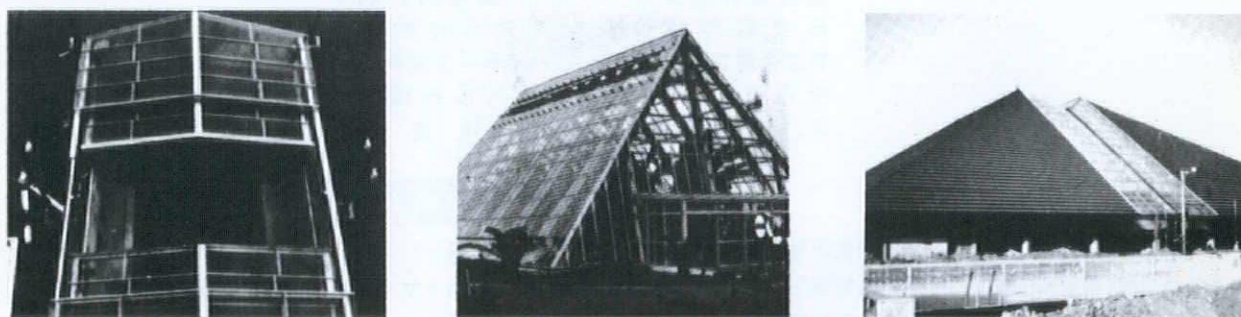


排煙・ルーバー装置



“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト

採光装置



株式会社 坂 本 商 会

本 社	東京都中央区日本橋2-16-12(江戸ニビル)	〒103 電話	東京 (03)3271-5591 (代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270 電話	松戸 (0473)87-6595 (代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270 電話	松戸 (0473)87-3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131 電話	東京 (03)3619-2221 (代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご
用命下さい(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX03(3818)1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247代

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

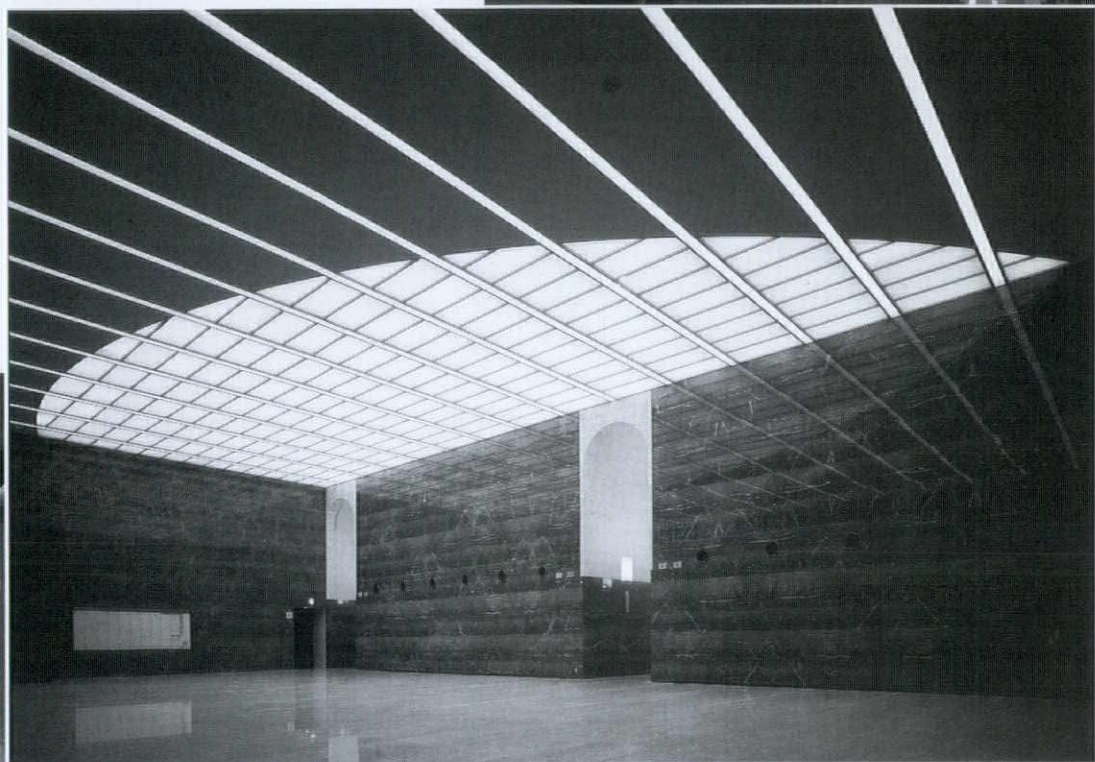
名古屋センタービル052 (221) 7641代

オ	大崎電気工業株	A1
カ	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
	株関電工	A12
キ	株きんでん	96
サ	三機工業株	61
	三建設備工業株	93
	三和シャッター工業株	A16
	株坂本商会	A18
シ	新菱冷熱工業株	89
タ	大興物産株	A8
	大栄電気株	A10
	ダイタン株	A10
ト	東洋熱工業株	64
	東光電気工事株	A11
	株東芝	A15
ニ	日新工業株	A3
	株西原衛生工業所	A9
	日章工業株	A17
	日本電信電話株	90・91
ヒ	株日立製作所	表4
	日立電線株	112
ホ	ホテルイースト21東京	A7
マ	松下電器産業株	A2
	株マンテン	A17
ヤ	山田照明株	A20
リ	リリカラ株	表2
ロ	ロンシール工業株	表3

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。

人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



東京オペラシティビル（東京）



山田照明株式会社

本 社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12	TEL 03-3253-5161	横浜支社/ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1	TEL 045-311-1731
仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 11-11 (ANDOBIL)	TEL 022-267-1630	大阪支社/ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23	TEL 06-643-3421
福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30	TEL 092-282-7635	名古屋営業所 〒460 名古屋市中区 5-16-14	TEL 052-252-5161
北関東営業所 〒370 高崎市上中居町 51-1	TEL 0273-26-4111	静岡営業所 〒420 静岡市西草深 23-9	TEL 054-247-0811
鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14	TEL 0992-58-0031	宇都宮出張所 〒1802 宇都宮市海道町 818-2-1002	TEL 0286-60-1381
		札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水七条 2-61	TEL 011-811-2215
		広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34	TEL 082-293-6119
		長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27	TEL 0262-43-8420